

岩手県文化財調査報告書第53集

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書  
— IV —  
(柳田館遺跡)

昭和 55 年 3 月

岩手県教育委員会  
日本道路公団

# 東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— IV —

(柳田館遺跡)



青磁輪花皿（原寸3号罐出土）

## 序

地域開発に伴う交通網等の整備事業は、現代社会の進歩発展から生じる必然的な要請であり、県内においても、このような建設事業が多く計画・実施されております。

しかしながら、これらと関連してくる埋蔵文化財は、私たちの祖先が長い歴史の中で、々々と培い育て上げてきた貴重な文化遺産であり、その保存をはかり、活用を考え、新たな文化創造の糧としていくことも、現代に生きる私たちの責務であります。

国土開発計画に基づいて建設される東北縦貫自動車道は、産業・経済開発の大動脈として各方面からの期待をになって、県内を南北に縦貫してつくられる大規模な建設工事であり、一関・盛岡間がすでに供用され、現在は更に秋田・青森県境へと工事が進められております。この建設工事の施行に關係した一関・西根インター間99遺跡について、日本道路公団仙台建設局からの委託をうけ、岩手県教育委員会が調査主体となって、昭和47年度から53年度までの7年間にわたって発掘調査を実施し、その整理作業と報告書の作成を昭和53年度から4か年計画で現在実施しております。

本書は東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第4分冊目として「柳田館」遺跡を収録しております。当遺跡は中世から近世にかかる大規模な館跡であり、調査の結果、空堀・溝・土塁・石垣・櫓列等が検出され、造成された平場からは数多くの掘立柱建物等が確認され、出土した遺物も豊富であり、館の実態を把握する上に多くの成果を得ることができました。

この報告書が、記録保存の成果として社会教育や学術研究の場に役立つことを切望いたしております。

ここに、調査について御援助・御協力をいただいた地元教育委員会はじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和55年3月

岩手県教育委員会

教育長 新里 益

## 例

## 看

1. 本書東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書第IV分冊（柳田館遺跡）として、岩手県紫波郡紫波町片寄字中平54番地ほかに所在する柳田館遺跡について作成したものである。
2. 発掘調査は日本道路公団より委託をうけ、岩手県教育委員会が主体となり、昭和50年4月14日～同年12月20日、昭和51年4月1日～同年7月23日の2次に渡って実施した。主として石川長喜、昆野靖、島隆が佐藤章夫、高橋義介、中川重紀、村上弘の補助を得て担当し、斎川司男がこれを総括した。また、紫波町教育委員会をはじめ、地元の方々の多大なご協力をいただいた。
3. 発掘調査および資料については、次の方々からご指導、ご助言を賜わった。（敬称略）

板橋 源（岩手大学名誉教授）	草間俊一（岩手大学教授）
佐藤 巧（東北大学教授）	佐藤正雄（前紫波第二中学校校長）
司東真雄（岩手県文化財審議委員）	田中喜多美（岩手県文化財審議委員）
林 謙作（北海道大学助教授）	
4. 出土遺物の鑑定・分析・保存処理については、次の方々からご指導、ご協力を賜わった。（敬称略）

桂 秀策（岩手医科大学教授）	兼松重任（岩手大学教授）
粉川昭平（大阪市立大学教授）	佐藤二郎（岩手県立杜陵高等学校教諭）
佐藤敏也（元農林省農林技官）	鶴田勝彦（宮城県古川工業高等学校教諭）
樹崎彰一（名古屋大学教授）	長谷部泰爾（東京国立博物館東洋課課長）
林屋晴三（東京国立博物館考古課課長）	本堂好一（北七市立博物館学芸員）
増澤文武（元興寺文化財研究所研究室長）	見上晋一（岩手大学助教授）
村上城夫（東北歴史資料館技師）	吉田栄一（岩手大学助教授）
岩手県工業試験場	日本アイソートープ協会
5. 本書に掲載する地形図は承認を得て建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を複製使用し、本遺跡の地形図および遺構図は第10系座標によるものである。また、七賢柱状図は日本道路公団及びフジタ工業株式会社作成によるものである。
6. 本書の執筆・編集は石川長喜、昆野靖が担当し、挿図および写真図版については隨時佐藤章夫、村上弘、川村容子、佐々木信子、佐藤卓苗、高橋生子、藤原周子、山崎かず子の協力を得て作成した。空中写真はアジア航測株式会社の撮影によるものである。  
尚、本文の執筆は第5章の9、14、15、18、20、21、第6章の2を石川長喜、他を昆野靖が分担している。

## 目

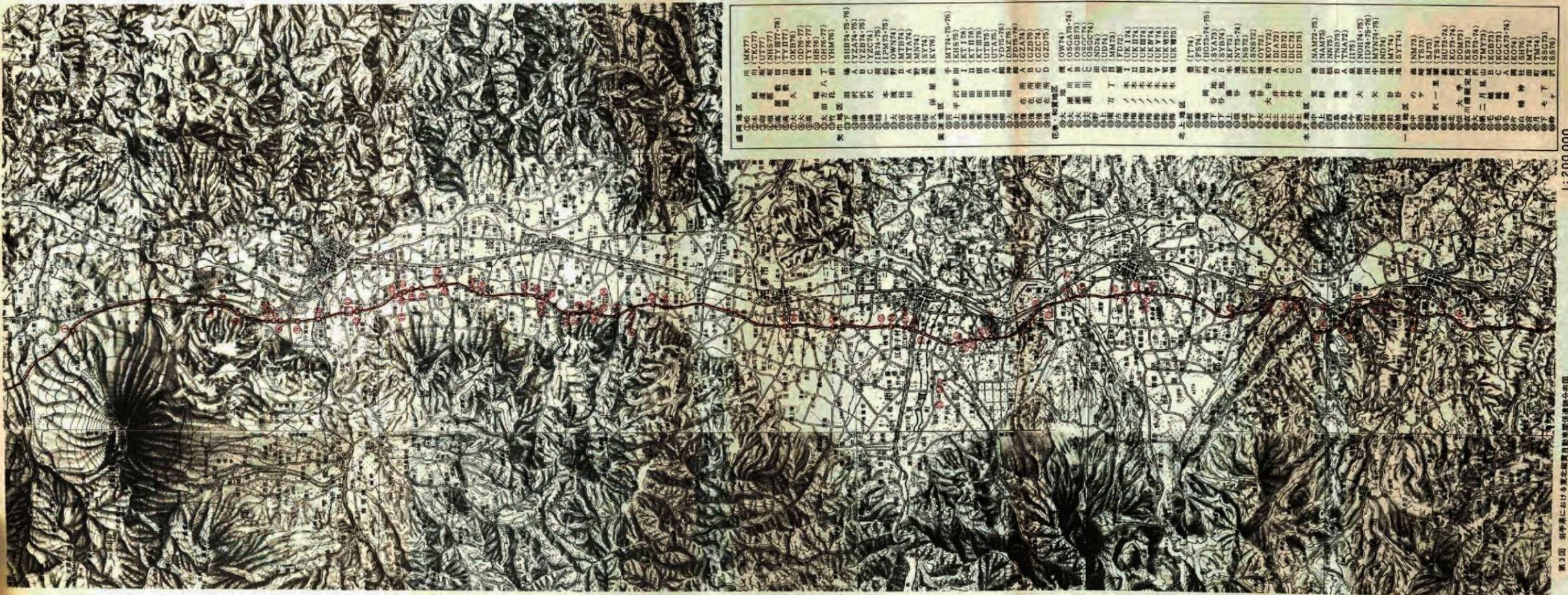
序・例言	
第1章 遺跡の立地と環境	5
1 位置と立地	5
2 周辺の城館遺跡	7
3 文獻上の城館址と柳田館	10
第2章 遺跡の現状と調査	16
1 遺跡の地籍	16
2 遺跡の現状	17
3 調査と方法	22
第3章 墓塚と遺物	29
1 Iの郭南辺	29
2 Iの郭東辺	35
3 IIの郭東辺	46
4 IIの郭北辺	59
5 IIIの郭北辺	64
6 IIIの郭内	65
7 IIIの郭南辺	80
第4章 I、IIの郭の遺構と遺物	98
1 Iの郭	98
2 IIの郭	105
第5章 IIIの郭の遺構と遺物	137
1 III-1削平地	137
2 III-2削平地	147
3 III-3削平地	170
4 III-4削平地	171
5 III-5削平地	185
6 III-6削平地	197
7 III-7削平地	208
8 III-8削平地	218
9 III-9削平地	218
10 III-10削平地	238
11 III-11削平地	258
12 III-12削平地	272
13 III-13削平地	285

## 次

14 III-14削平地	301
15 III-15削平地	320
16 III-16削平地	351
17 III-17削平地	368
18 III-18削平地	378
19 III-19削平地	412
20 III-20削平地	415
21 III-21削平地	417
22 III-22削平地	424
23 III-23削平地	426
第6章 まとめ	427
1 遺構について	427
2 遺物について	440
3 むすび	456
付 章 遺物の分析と鑑定	457
1 陶磁器の胎土及び釉薬の分析	457
2 鉄器と鉄製品の分析	460
3 人骨の鑑定	475
4 獣骨の鑑定	479
5 年代測定	480
写真図版	
遺跡の遠景	図版 1
墓塚	4
削平地	20
建物遺構	32
焼土遺構	34
土塁	36
門跡	37
墓塚	38
绳文時代の土塁	40
遺物	42

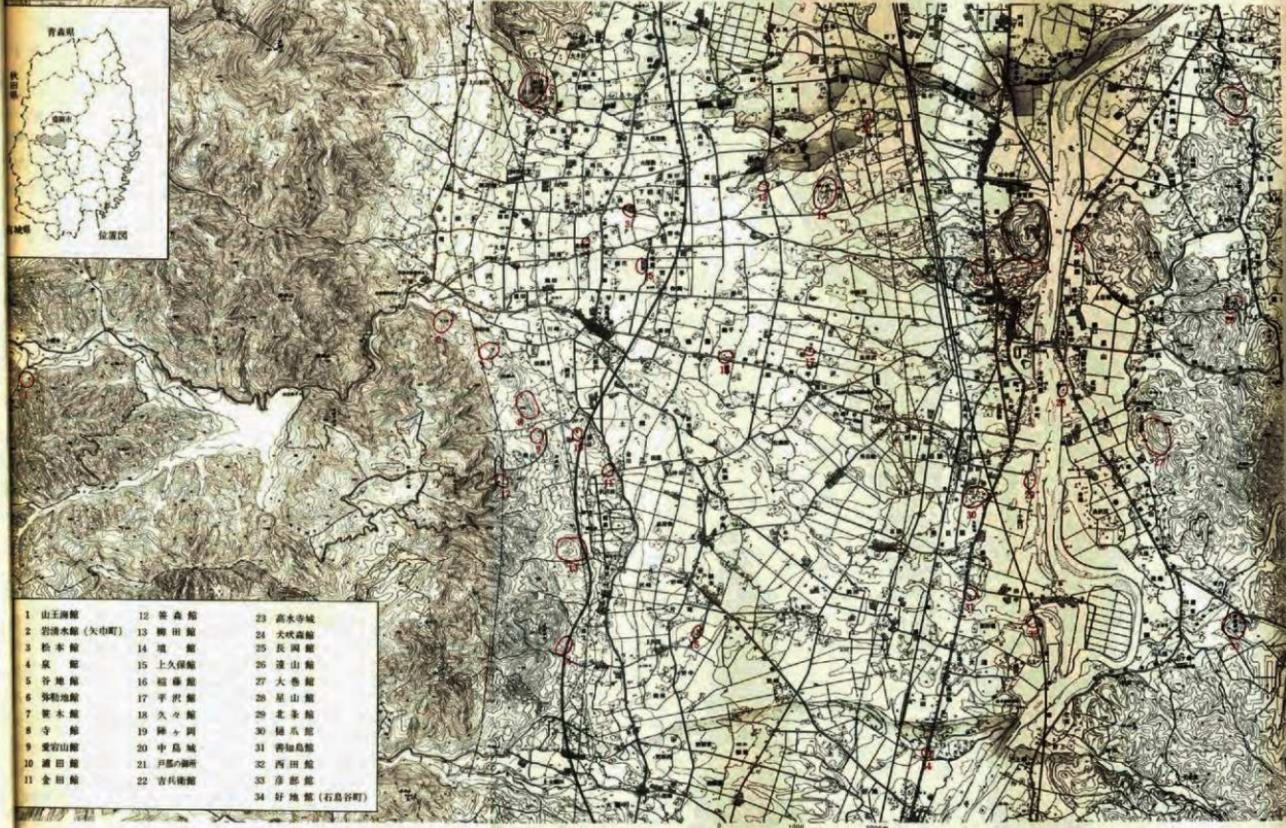
## 東北総貿易自動車道関係調査遺跡一覧

地名	市町村名	No.	道路名	調査年度	地名	市町村名	No.	道路名	調査年度
盛	西根町	1	松川	52	和賀		51	梅ノ木	V 49
	流域	2	木川	52			52	梅ノ木	VI 50
	村	3	坂坂	52			53	梅ノ木	VI 50
	根	4	坂	52	北上市	54	豊岡	豊岡	49
	高	5	坂	52・53			55	藤崎	豊岡
	高	6	坂	52	江釣子村	56	下谷	谷	48・49・50
	高	7	坂	51		57	谷	谷	48
	大	8	坂	51・52		58	地	地	49
	人	9	坂	51・52		59	森谷	森谷	48
	市	10	坂	51	北上市	60	成下	成下	48・49
	盛岡市	11	坂	51・52		61	谷	谷	47
	竹	12	坂	51		62	大井	大井	47
矢	都南村	13	下湯	49・50・51	A上		63	大井	47
	湯	14	湯	49・50	B上		64	井戸	47
	沢	15	沢	49・50	C上		65	井戸	47
	沢	16	湯	49			66	井戸	47
	沢	17	湯	49・50			67	井戸	48
	沢	18	湯	48・50			68	井戸	50
	沢	19	大宮	49	金ヶ崎町	69	荒瀬	荒瀬	47・50
	宮	20	宮	49		70	中西	中西	50
	宮	21	宮	49		71	西鳥	西鳥	50
	南	22	南	49		72	鳥	鳥	50
	桜	23	桜	49		73	今西	今西	47
	久	24	久	51		74	石	石	50
紫	紫波町	25	高	49・51	水沢市	75	大	大	49・50
	高	26	平	50		76	石	石	50
	高	27	沢	53		77	南	南	50
	高	28	田	53		78	西	西	49
	高	29	田	53		79	前	前	50
	高	30	田	50		80	谷	谷	49
	高	31	田	50	沢町	81	の	の	48
	高	32	田	50・51		82	泊	泊	48
	高	33	柳	50		83	新	新	48
	高	34	大	50・51		84	沢	沢	49
	高	35	塙	49	衣川村	85	東	東	48・49
	高	36	塙	51		86	北	北	48・49
波	波	37	後	49		87	大	大	48
	波	38	後	50		88	門	門	48
	波	39	後	49	草泉町	89	手	手	48・49
	波	40	後	48・49		90	提	提	48
	波	41	後	48		91	定	定	48
	波	42	後	48		92	沢	沢	48
	波	43	後	48		93	見	見	48・49
	波	44	後	49		94	山	山	49
	波	45	後	48		95	B	B	51
	波	46	後	47		96	C	C	49
	波	47	後	49		97	A	A	49
	波	48	後	49		98	國	國	49
	波	49	後	49		99	社	社	48
花	花巻町	50	後	49		100	川	川	51
	花巻市	51	後	49					
	花巻市	52	後	49					
	花巻市	53	後	49					
	花巻市	54	後	49					
	花巻市	55	後	49					
	花巻市	56	後	49					
	花巻市	57	後	49					
	花巻市	58	後	49					
	花巻市	59	後	49					
	花巻市	60	後	49					
	花巻市	61	後	49					



四 桃子系における東北地区の品種分布圖

1:200,000



第4図 柳田館周辺の城壁遺跡位置図

# 第1章 遺跡の立地と環境

## 1. 位置と立地

### (1) 位置 (第4図)

遺跡は紫波郡紫波町片寄字中平に位置する。国土地理院発行の5万分の1地形図盛岡15号によれば、南図幅縁より5.8cm、西図幅縁より18.1cmの地点である。

昭和30年の町村合併により旧志和村より紫波町へ編入され、紫波町南西部にあたる。南に神賀郡石鳥谷町、西は岩手郡下石町に接している。東北本線日詰駅より西方7kmである。遺跡の東方0.7kmには県道盛岡・藤根線が南北し、これより猿倉林道が分岐して遺跡南辺へ通じている。

標高218～174mの緩やかな東斜面をなし、遺跡の現状は針葉樹を主とする山林である。

### (2) 地形と地質 (第5図)

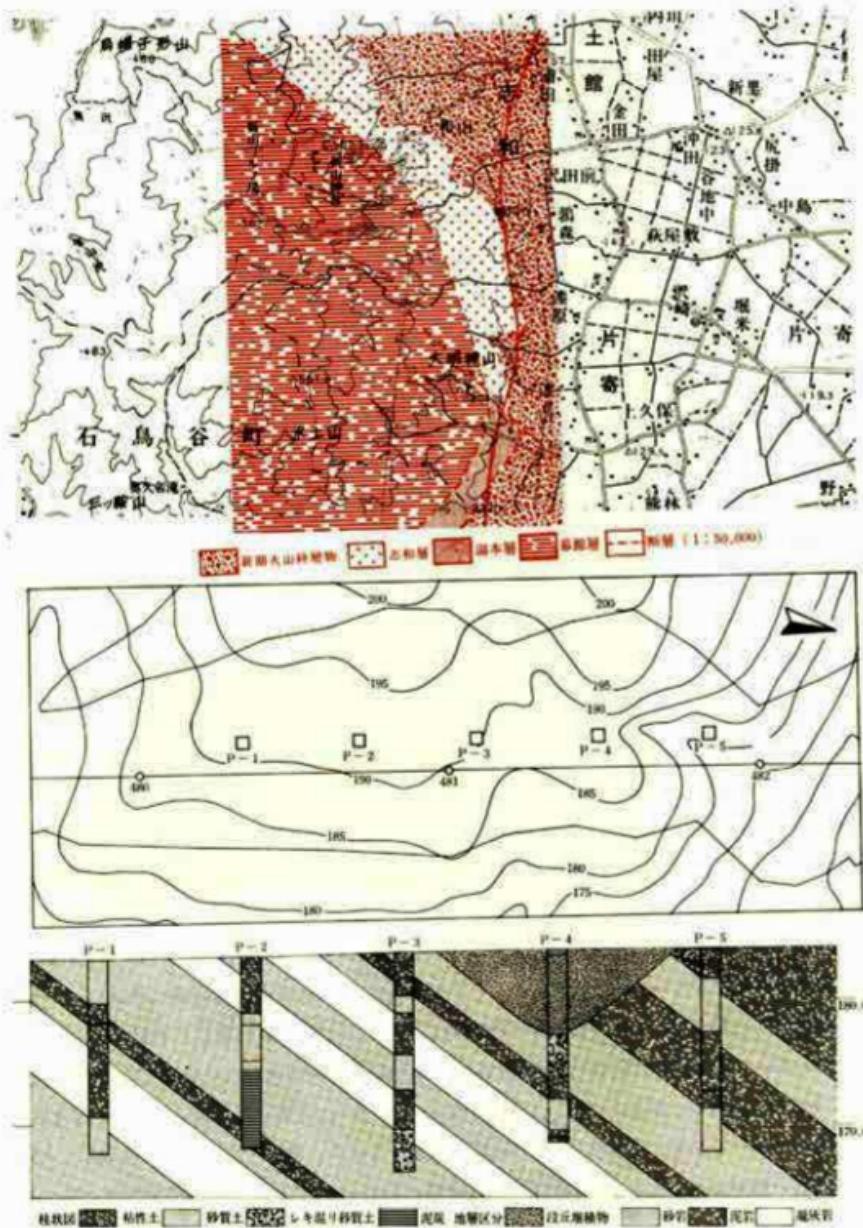
紫波町の西部は滻名川上流あたり、東根山(928.4m)、須賀倉山(940.9m)をはじめ第3系の山地が連なっている。山地東縁は断層線とみられ、高位の石鳥谷段丘に接している。滻名川以南の山麓では南北に緩斜面が連続し、東側にはこれに平行して丘陵列が走る。丘陵間は東流する小谷によって孤立する丘陵が形成されている。遺跡はこの東縁の標高200m前後の丘陵に占地し、弥勒地館、横木館、寺館(源勝寺館)、墳館等が南北に連なり、柳田館遺跡はほぼその中央部にあたる。これより東方の北上河岸に達する6～8kmには主として中・低位段丘が発達している。

山地東縁の地質は緑色凝灰角礫岩がもっとも広く分布し、滻名川以南では石英安山岩、輝石安山岩が発達している。遺跡の占地する東辺では志和層が南北に分布し、下位の第3紀中新世の湯本層とは断層によって接している。第4紀更新世の志和層は数枚の亜炭を挟む軟弱な疊岩、砂岩、シルト岩、凝灰岩によって形成され、全般的に凝灰質である。柳田館遺跡においては、(1)砂岩(大半は未固結の凝灰質砂であり、ところにより砾を含む)(2)泥岩(上部層は風化が著しく粘土化している。粘土化する部分は黄褐色を呈する)(3)凝灰岩(浮石質凝灰岩～砂質凝灰岩と層相の変化が著しい。浮石は軟質である)が互層状に堆積し、表層部の風化が著しい。

遺跡付近の走向については、既に金子史朗氏によって「小丘が南北に並び、地層は5～10°東へ傾斜しているが、小丘の西側には凹地列があり、(中略)臨崖寺西南の沢では粘土層がN25°E、55°Eを示し、上流では垂直となる」と指摘されている。また、道路公園作成資料によれば志和層の走向はN-S方向、傾斜は60～80°東が一般的であるが、遺跡北辺の熊戸沢を境にして60～80°西の傾斜に変わっている。遺跡の調査区域ではN15～20°W、30～50°Eの走向傾斜を示す。

### (3) 集落と寺社

遺跡付近の集落は弧状に湾曲する段丘東辺に沿ってほぼ南北に発達し、主に県道以西の高位



### 第5図 地質図及び地質推定断面図

段丘に形成され、西方は山王海幹線水路に重複する古道「安倍道」<sup>(17)</sup>以東に限られている。この間東西1kmに及び、更に両道に沿って三分される。遺跡の北東より大沢汎、中平、鶴森、大明神と連なり、古町や下野の屋号は安倍道沿いに伝えられている。

寺社は集落と同様南北に分布し、遺跡北東に片照山願円寺（1558～70年開基）があり、これに南接して蓬来山願里寺（1507年開基）が共に安倍道に面している。更に願里寺付近には「じょうへん寺」の庵寺が伝えられている。また、これより南東0.5kmには懇念山称名寺（1682年開基）<sup>(18)</sup>が県道寄りに位置する。

神社では熊野神社、太子堂、黄金堂をはじめ、小祠が南北に連なり、段丘に沿って集中している。

集落に伝えられる柳田館遺跡に直接関連する資料には「中野館、吉兵衛館、南館、北館、柳」等の地名を除いて伝えられるものはない。僅かに願円寺北の「沢田」集落に伝えられる大神楽があり、その由緒には享保7年（1722）頃吉兵衛館討伐のため源某が田植踊りや神楽を寺々において演じさせたが、その余興として踊った神楽が狂言であったため、士気は大いに鼓舞されて吉兵衛館を攻略できたとされるものである。

注(1) 「岩手県北上平野西縁を限る上平断層の地形」富田芳郎『地理学評論』24（1951）

(2) 「新波郡誌」岩手県教育会紫波郡部会（1925）

(3) 「断層地形論考」辻村太郎（1942）

(4) (6) 「東北縦貫自動車道工事連続地中壁・アンカー動体観測結果報告書」日本道路公团（1976）

(5) 「盛岡断層群に就いて」金子史朗『地理学評論』28（1955）

(7) 「東北の古道安倍道」山田安彦『空からみた歴史叢書』（1977）

「紫波町史」上巻 紫波町（1977）

(8) (9) (10) 「岩手のお祭り」テレビ岩手（1975）

前掲(2) (7)

(10) 紫波町在住 沢田喜栄氏譲

## 2. 周辺の城館遺跡（第4図、第1表）

柳田館遺跡を含む紫波地方の城館は明確な遺構の判明していないものを含めて71遺跡を数える。伝承される館址や文献に記される館城については比定できない例があり、今後さらに増加する遺跡数ではある。環濠屋敷等を含む広義の城館を紫波町に限ってみると、次表の45遺跡であるが、伝えられる館名には赤川館（赤部）、蝦夷館（赤部）、高間館（遠山字西野々）、山館（上松本）等があげられ、斯波氏時代の確定できない城館も少ないものと推定される。

紫波地方における城館の分布は東西山地に少なく、沖積平野を俯瞰できる山地東縁および北上河岸に近い丘陵に比較的多く、交通の要衝に占地している。町内においては、(1)西方の山地東縁を中心とする西部の10遺跡、(2)これより北上河岸にかかる主として中・低位段丘に立地する中央部の18遺跡、(3)東部の丘陵や山地に分布する北上河東の16遺跡に大別される。

西部の遺跡には弥勒地館、寺館（源勝寺館）、柳田館に代表され、後背山地を有する丘陵上に

あり、東方への眺望が開かれている。南北の小河谷によって孤立する丘陵を利用して堀切をはじめ周囲を配し、東斜面に沿って梯郭状の削平地を形成する中規模以下の城館が多い。3館のうち寺館については中島を配する庭園跡が認められる源勝寺跡に北接しており、直接的な関連を有するものとみられる。また、新山神社東方の山麓には旧道安倍道が南北しており、単郭の一部にはこの時期にあたる城館が含まれている可能性がある。金田館では土師器や須恵器が出土し、付近には鎌倉時代中期以降の建碑とみられる14基の古碑の存在が知られている。<sup>16)</sup>

滝名川上流に位置する山王海館は陥籠比類ない山中にあり、峡谷に沿う山道以外に平野への道はない隠れ城としての機能が強く、やや例外的な館跡である。

中央部では陣ヶ岡、吉兵衛館、高水寺城のはか、櫛爪館以南の館跡を除き、中・低位段丘に立地する遺跡が多く、一部は河岸低地にあって水上交通路に利する船城が含まれ、立地上ではさらに細分され得る。残丘状の城山には紫波地方最大の高水寺城が位置し、南西の高位段丘には一連の古兵衛館、戸部の御所跡が続いている。高水寺城は北上川右岸にあって対峙する犬吠森館と相俟って河岸低地はもっとも狭少となり、水陸交通の要衝をなしている。流域を一望ができる頂部には本丸、その南に二の丸、若殿屋敷、東に右京屋敷、姫御殿跡等のはか、大手口の内門跡が知られ、郭には段状の削平地が認められる。山腹より山裾にかけては二重堀、三重堀が確認され、数回の変遷があるものとみられる。また、城下には二日町を中心とする小市街地を形成し、家庭の居住が推定されている。

中・低位段丘に立地する館跡には既に水田化して遺構を確認できないものが多いが、比較的小規模であり、堀切状の堀を有する居館跡が多い。また、河岸低地の筋内館、北条館、星山館等も同様であり、前者では星塚が河岸に続いている。

北上河東には北上川沖積地に面する長岡館、大巻館、赤沢川中流の赤沢館、佐比内川中流の佐比内館等やや規模の大きい平山城が多く、丘陵上に立地している。堀切を配するほか、二重堀、三重堀が認められ、堅固な防禦施設と共に郭には西部の城館と同様に段状の削平地が形成されている。その分布はやや規模の大きい複郭ではほぼ2.7~3.3km前後に配する例が認められる。また、佐比内館に古館、高水寺城に犬吠森館、畠の沢館に星川館等河岸に対峙する占地が知られている。後者では犬吠森館を除いては鉢巻状の星塚が遺存する小規模な単郭である。

概略する城館遺跡は遺構の判明しないものが多く、斐・庵城時期の明らかでない遺跡が大部分であり、相互の関連をみい出しえないが、やや規模の大きい東西山地及び城辺に分布する城館には堅固な防禦施設が認められ、段状に形成される削平地を有する例が多い。また、これに近接する単郭は陣場や本城と相俟って有機的な軍事施設として構築されている可能性が強く、立地上いざれも中世にかかる築城と推定される。中・低位段丘にあっては古代の城郭に中世以後の城館が混在し、現状では埋没状況による以外に識別は認め難い。共に複合している遺跡も

第1表 紫波町における城館遺跡

名 称	所 在 地	標高・北高 東西川高さ	規 格	造 構・造 物	現 状	寺 社	備 考
赤坂館	赤坂字赤坂	232 92	300×250	壁塁・郭	山林	水城神社	
愛宕山館	上巻字和山	222 32	180×180	"	"	愛宕山神社	
鬼籠	宮手字泉屋敷	143 2	120×90	"	宅地		
船島館	船島字御用	127 3	210×120		船場・墓地		
大吹森館	大吹森字沼端	134 35	200×250	壁塁・郭	神社・墓地	餘森神社	
牛の頭館	牛の頭内字牛の頭	115 10	200×120	"	墓地	八幡宮	
浦井館	上巻字浦井	162 17	120×100	壁塁	神社境内	新山神社	
善知鳥館	曲田字善知鳥	101 6	250×150	壁塁・櫓跡(1か)	船場・宅地	城鳥神社	町指定史跡
上久保館	片寄字上久保	119 2	120×150	"	宅地・墓地	八幡宮	
江柳館	江柳字大志田	160 25	200×150	"	山林	山神社	
大卷館	大巻字花立	168 58	400×400	" 25	"		町指定史跡
加賀館	志沢字加賀屋	177 27	250×300		船場	岩動神社	
金田館	土舎字金田	145 10	110×150	" 145 145	"	野野神社	
古兵衛館	二日町向山	145 23	500×400	" 55 · 門跡	"		
久々坂	宮手字久々坂	123 1	150×120	" "	山林	荒神	
久々坂	日町字古館	180 84	550×700	" 壁塁跡(2か)	公園・山林		町指定史跡
日暮の堀	日暮字度々久原	132 7	150×100	壁塁	山林		
笛木館	上巻字竹動跡	200 36	150×150	" 井 1	墓地		
筑森館	上巻字筑森	351 52	250×250	"	山林		
佐比内館	佐比内字神田	175 45	250×250	"	"	野野神社	町指定史跡
陣ヶ岡	宮手字陣岡	136 13	360×400	"	墓地	峰神社	"
太糸館(白玉庭)	土館字白清水	330 30	100×100	"	山林	山祇神社	
村田館	志沢字清水袋	184 24	150×150		墓地		
守屋(四傳寺)	上巻字閑沢	185 18	200×250	壁塁・郭	山林	源勝寺跡	角場寺跡町指定史跡
達山館	達山字新田	198 68	200×200	"	"	六種宮	
橋内館	橋内字橋内	105 10	100×120	"	宅地		
中島城	中島	111 2		櫓跡跡	墓地・水田		
長岡館	東長岡字船	163 33	400×350	壁塁・郭	田地	愛宕神社	
西田館	大湖字西田	104 12	150×100	"	山林	大石城跡	
北川館(鬼越館)	北川字鬼越	223 63	210×300	"	山林	不動寺	
鬼越館(西越館)	鬼越字鬼越	142 35	300×300	"	墓地		
北河越(鬼越館)	北河越字鬼越	97 2	300×300	堀・櫓跡(1か)	宅地・墓地		町指定史跡
小武館	小武字小武	115 0	200×150		墓地	八幡神社	
船久保館	赤坂字船久保	241 41	180×180	壁塁	山林		
古館	佐比内字古館	170 20	200×200	"	"		
"	大巻字上山	104 4	100×120		墓地		
猪籠	片寄字猪立	200 35	200×250	壁塁	山林		
北条館	北条字城内	98 6	180×250	"	墓地・宅地	日光神社(2か)	
星山館	星山字御用村	95 3	100×100		墓地		
星明館	北村字星川	150 15	100×100	壁塁	山林		
松本館	下板木字下合	136 1	100×100	"	神社・山地	野野神社	
的場館	赤坂字的場	150 20	150×120		墓地		
外動地館	上巻字竹動地	235 55	200×200	壁塁・陶器窯	山林	不動寺跡跡	
谷地館	宮手字谷地	135 0	100×120	壁塁	"		
柳原(上)寺城	片寄字中平	218 58	400×300	" 壁塁跡(2か)	山林	八幡宮	町指定史跡

少なくないものとみられる。

過去の発掘調査によって明らかになる遺跡には、善知鳥館、比爪館、高水寺城、西田館、墳館の5遺跡がある。前二者はそれぞれ安倍氏時代の城柵、樋爪氏時代の居館と推定され、比爪館については重複する堅立柱建物、板列等が検出され、土師器、須恵器が出土している。また、高水寺城にあっては三次に渡る部分調査が行なわれ、堅立柱建物や園池が明らかとなり、土師器、須恵器のほか、曲物、北宋錢、将棋駒、基石等各種の遺物が出土している。古代より近世に至る複合遺跡とみられるものである。

- (注) ① 岩手県紫波町善知鳥館発掘調査報告書：紫波町教育委員会（1964）  
「史跡史譜」第16号：奥羽史談会（1965）  
「紫波町史」前掲  
「探訪日本の城」（小学館）（1977）  
「南都諸城の研究」沼船愛一（1977）  
「日本城跡全集」人物往来社（1967）  
「比爪跡発掘調査報告書」紫波町教育委員会（1974）  
「埋蔵文化財地図」岩手県教育委員会（1974）  
② 「長徳寺文書」紫波町彦部近城山長徳寺所蔵  
③ 「紫波郡誌」前掲  
④～⑥ 「紫波町史」前掲  
⑦ 「岩手県紫波町善知鳥館発掘調査報告書」前掲  
⑧ 「比爪跡発掘調査報告書」前掲  
⑨ 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」IV：岩手県教育委員会（1980）  
⑩ 「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」III：岩手県教育委員会（1980）  
⑪ 紫波町教育委員会保管 未報告

### 3. 文献上の城館址と柳田館

#### (1) 紫波の城館（第2表）

紫波地方における城館は、北上川中流にあって志波城や徳川城の古代城柵が知られているが前九年の役や後三年の役前後の城柵については明らかでない。旧記によって藩政期に至る城館を観察できるのは平泉藤原氏時代以後である。

紫波町においては城館主の不明なものと含めて次表の26館が判明する。しかし、築城や継承について記録される城館は皆無である。大別して(1)樋爪氏時代1館、(2)河村氏及び斯波氏時代20館、(3)南部氏時代の城館10館となる。南部氏時代の城館は旧斯波氏時代の踏襲や改修等が推定され、主として斯波氏の興亡を中心として盛衰しているといえる。

樋爪氏時代には藤原清衡の子清綱の樋爪館居住が初見である。樋爪氏が主に紫波地方の砂金支配によって分家しているとみられる点では更に一族の居館が推定され、太田冠者師衡が矢巾

町不動に、新山冠者經衡が片寄新田に住居しているとみられる。種爪氏は平泉藤原氏と共に源  
 輝朝の攻略によって滅亡し、居館は鎌倉軍が陣ヶ岡着陣以前に焼失しているが、投降以後後衛  
 が本領安堵をうけて二代に渡る日詰居住が知られる。  
 (23)

鎌倉幕府の支配に至って紫波郡の北上河東は御家人河村秀清によって領知される。大巻館に  
 権る河村氏は以後南北朝にあってもっとも繁衍し、河東の大部分を所領している。河村秀基の  
 代には佐比内館への移住が伝えられ、宗家は南北朝末期に没落している。一族には大壹生、手  
 代森、長岡、柄内、江柄、大春の各氏があって後年斯波氏の家臣として知られている。共に河  
 東の地頭として世襲しているとみられ、居館は河村氏時代の築城にかかるものとみられる。  
 (24)

一方河西には鎌倉時代の中頃足利尊氏の一族が下向し、建武2年(1335)には斯波家長が奥  
 州管領として斯波館に拠っている。これより河村、斯波氏の併立抗争が展開されることとな  
 る。斯波氏の居城高水寺城は高水寺の一角にあって呼称されるものであるが、「志和軍戦記」に  
 (25)  
 は「志和の城と申すは前に北上川とて大川なり。後は深瀬にて竜王も居住する程の大堤、要害

第2表 紫波町における城館

No.	名 称	所在地	城 館	主	存続年代	備考
1	赤司館	大巻	赤司義政(斯波御守)(男)	赤司義原	文亀2年(1362)	墨守建立
2	赤司館	赤司	赤司氏(斯波氏家臣)			
3	種 爪 館	種 爪	種 爪 大秋(斯波氏家父)		~天正16年(1588)	
4	大秋森館	大秋森	大秋森 実民郎(斯波氏家臣)			
5	喜知見館(古宅)	南口			安信氏時代	
6	河 村 館	河 村	河 村 大元(斯波氏家臣)			
7	片 寄 館 (中野館、吉兵衛館)	片 寄	中野吉兵衛、中野康実	大正20年(1931)	~慶長17年(1612)	
8	河村館(大巻館)	大巻	河村秀清		文治5年	
9	吉 兵 館	吉 兵			元龜2年(1571)	
10	吉 兵 衛 館	吉 兵	高田吉兵衛(斯波氏女婿)		~天正14年(1587)	
11	高 水 寺 城	高 水	斯波家主・政直	建武2年(1335)~天正19年(1591)		
	那山城		那山城主		~寛文7年(1697)	
12	丹那御子内(御子内)	丹	丹那家主		~天正16年(1588)	
13	佐比内館(持守森)	佐比内	河村秀清、または河村秀清	至徳元年(1384)		
			河村吉助、斯波氏家臣	天正元年		
14	仲 ト 間	水 分	仲根義、義家、勝賴朝		~文治5年(1189)	
			水野義直	天正16年(1588)		
15	太郎崎(山上御殿)	山上	山上太郎(斯波氏家臣)		~慶長5年(1600)	
16	今 館(浮舟寺跡)	今 館			宝德3年(1451)	墨守
17	越 口 館	越 口	越口氏		慶長年間	
18	柄 内 館	柄 内	柄内氏			
			柄内義盛(斯波氏家臣)	天正年間		
19	中 月 城	中 月	中月安時(?)	"		
20	長 月 館	長 月	長月八石(家門)	"	天正16年(1588)	
			木部直幸	天正20年(1592)		
21	赤志館(撫養院)	赤 志	赤志氏(斯波氏家臣)		~天正16年(1588)	
22	比 手 館	比 手	比 手 清頼(赤志清衡男)		文治3年(1185)	
			比 手 清衡			
23	平 氷 館	平 氷	平 氷 大六(斯波氏家臣のち南郷氏相)		~天正2年(1573)	
24	北 日 館	北 日	北 日 氏、または日高氏(斯波氏家臣)		~天正20年(1592)	
25	早 口 館	早 口	早 口 義重(斯波氏家臣)			
26	松 本 館	下 松 本	松 本 清清(家衡)	"		
27	谷 成 館	谷 下		"		

堅固の城にて飛鳥飛越し兼ねる程の居城なり。山城に55丈余りの高さなり。」と記される。斯波氏は室町政権の確立と共に降盛を極め、河東の河村一族を従えて紫波郡66郷を封じている。<sup>(1)</sup> 郡西の諸子には岩清水、荒田、細川、永井、德田、見前、稻藤、室岡、太田、矢羽々、星川、飯岡、中島、小屋敷、山上海、宮手、川村、鶴沢の各氏があり、紫波町のほか矢巾町、都南村、<sup>(2)</sup> 隆盛時には牛石町に及ぶ居館が知られている。後期に至っては三「南部氏の積極的な南進政策が展開され、紫波郡北部における抗争が激化し、大永元年（1521）～元龜2年（1571）にかけてしばしば紛争が惹起している。一時は高田吉兵衛の斯波氏入姓等によって小康状態を保つものの家臣岩清水右京の反乱を契機に天正16年（1588）南部信直の攻略によって3世紀余りに渡る斯波氏時代が終焉する。斯波氏時代末期における居館は館持家臣25氏によって知られ、うち紫波町においては江柄、柄内、長岡、山上海、稻藤の5館があり、斯波氏に離反した家臣には大巻、中島氏等がある。<sup>(3)</sup> 斯波氏家臣の大部分は南部氏に帰順して本領安堵をうけており、その多くは旧館に拠るものとみられる。もっとも興亡の著しい段階である。

斯波氏の滅亡と共に紫波郡は南部氏に加増される。この期における城館は天正20年（1592）の「南部大膳太夫分国之内諸城破却共書上之事」に記され、48城のうち郡内には片寄、比爪、見前、長岡、乙部の5城があり、片寄、長岡の2城を除いて破却とされている。これ以後の新たな築城は認められず、僅かに高水寺城が郡山城として改修されているにすぎない。郡山城は寛文7年（1667）に至って廃城となり、地方統治は漸次代官制に移行し、南部氏時代の城館は改廢段階にあたるといえる。

- 注(1) 「吾妻鏡」「国史大系」所収（1970） 「岩手縣管轄地誌」岩手県（1876）  
「岩手縣土誌」岩手県教育会（1940） 「岩手縣史」岩手県（1961）  
「奥羽永慶軍記」土「戦国史料叢書」所収（1917） 「奥南落葉集」岩手県立図書館所蔵  
「奥南旧指録」「南部源書」所収（1972） 「奥南盛風記」同図書館所蔵  
「川村家の記録」川村草一（1963） 「系譜考」同図書館所蔵  
「参考詰家系図」同図書館所蔵 「城跡をたずねて」岩手日報（1957）  
「志和軍戦記」前掲「南部源書」所収 「紫波郡記」前掲  
「紫波町史」前掲 「大日本地名辞書」吉田東伍（1970）  
「長徳寺文書」前掲 「天正南部日記」国史研究会（1917）  
「橋内与兵衛と其の親族系譜伝」南沢隆典（1971） 「都南村誌」都南村（1974）  
「内略」岩手県文化財愛護協会（1973） 「南泊秘事記」同図書館所蔵  
「南部古史記」同図書館所蔵 「南部根元記」前掲「南部源書」所収  
「南部史要」菊地悟郎（1911） 「南部諸城の研究」前掲  
「日本城郭全集」日本城郭協会（1960） 「日本城郭全集」前掲  
「八戸藩史料」前田利見編（1929） 「彦根村郷土誌」彦根地区公民館（1965）  
「開拓遺事」、「祐清私記」前掲「南部源書」所収 「見前村誌」見前小学校（1935）
- 注(2) 「紫波町史」前掲
- 注(3) 「吾妻鏡」前掲
- 注(4) 「奥南旧指録」、「南部根元記」前掲
- 注(5) 「奥相秘鑑」、「南部記伝」前掲「紫波郡誌」所収
- 注(6) 「奥南旧指録」、「奥南盛風記」、「祐清私記」前掲

注(7) 「岩手県史」前掲

注(8) 「奥南落穂集」前掲

注(9) 「南田秘事記」前掲

注(10) 「奥南盛風記」、「聞老遺事」前掲

## (2) 柳田館の記録

柳田館は從来「古兵衛館」<sup>注(1)</sup>、あるいは「中野館」と仮称され、柳田館の名称は所有者の屋号によって「柳田」<sup>注(2)</sup>所有の館跡として呼称されるものである。旧片寄村を含む柳田館について管見できる史料は極めて少ない。古くは藤原氏時代に樋爪氏の支配下にいると推定されるものの明らかでなく、「片寄」の初見は斯波氏時代末期に至ってからである。

「志和軍戦記」によれば、斯波安芸守が元亀3年（1572）志和・岩手郡境奉行である飯岡庄太郎を攻略する飯岡館戦争に際して、片寄文作が一騎当千の軍士として名を連ね、更に片寄吉三郎による飯岡の城焼失の経過が記されている。また、志和馬場の八幡宮は斯波御所の家臣片寄吉三郎鎮守であり、山城の岩清水八幡宮を移して建立すると伝えられている。しかし、他の旧記には全く片寄氏の存在はしられず、同書が戦記物語である点で真偽は明らかでない。また、現在の志和八幡宮の由緒にも片寄氏の名を留めてはいない。<sup>注(3)</sup>

次いで「南部根元記」によると、斯波氏没落の直接の契機となる天正16年（1588）の岩清水右京の反乱に際し、右京の兄岩清水肥後守義長が岩清水館に敗れ、「片寄に知りたる者」を頼つて落ちている。同様の記載は「奥南旧指錄」<sup>注(4)</sup>の斯波御所没落の事にもみられるが、斯波氏家臣中には南部氏に出仕する家臣を含めて片寄氏の名は認められず、居館の存在は記録上明らかではない。しかし、義長を隠匿できる有力者の居住がしられ、斯波氏と何らかの関係にあったものと推定される。<sup>注(5)</sup>

天正19年（1591）志和（紫波）郡は南部信直の支配となるが、斯波氏攻略の功勞によって中野康実は片寄村を含む三千石を所領している。「参考諸家系図」によれば片寄村今崎城に在城し、郡治を掌中すると記される。天正20年（1592）の諸城書上では「片寄 山城 破 中野修理持分」と記され、同状に南部信直の重臣8名中に中野修理直康の名を連ねている。文禄3年（1594）4月には片寄城において城主中野康実は従弟九郎隠岐連伊によって刃傷を受けて落命し、康実の次男正康は中野家二代目となり、南部氏重臣の三家に列している。「長徳寺文書」によれば、康実落命の前後を「下屋敷片寄村へ諸用之事在て二・三夜被成御座候所（中略）九」「より来る隠岐を申市人者亂心にて康実殿を指殺し畢。行年42歳にて逝去。同9日御死骸郡中山野館御屋敷へ移し奉」とあり、前述の郡治掌中は城代として郡中山野館に拠っているものと解される。慶長17年（1612）に至って正康が郡山城に転住し、以後片寄城の名を認めないが、慶長末期までは存続しているものとみられる。この間、中野氏二代に渡っては、九戸の乱における先導や盛岡築城の奉行に名を連ね、慶長5年（1600）の岩崎一揆には四番隊侍大将として5騎を含む

70名を従えて出陣し、郡山城移住間もない同19年（1614）の大坂冬の陣には86名の従兵を伴っていることがしられる。しかし、聚・庵城や家臣の転住等についての記録は認められず、転住に伴う破却についても明らかではない。

寛文4年（1664）片寄村は南部藩分割に伴って八戸藩の飛地となる。寛文2年（1662）～明和6年（1769）の年代記によれば、御立林山守25中に「中野館 太郎右衛門 美濃屋七郎兵衛 寺田惣助 仁右衛門」が記され、八戸領下にあっては庵城であることが知られる。

注1) 「奥羽史譜」前編

(2) 「因藏異変資料年代記」源立株各所歴

(3) 「南部叢書」前編

(4) 「紫波郡の神社史」佐藤正雄（1978）

(5) (6) 「南部叢書」所取前掲

(7) 中野氏系図

中野氏 本名九郎氏 九郎右衛門仲九郎

直康 始メ直康夷 初九郎右衛門 中高田吉兵衛後中野修理一

八戸側馬守信長女

幼ニシテ 晴政公ニ仕フ 殊遇ヲ得クリ 育子物ニ開基ノ命ヲ蒙リテ志和ニ出奔ス 斯波民部太輔義真ニ仕テ其女婿トナル 依テ同郡高田村ニ采色ヲ得テ高田吉兵衛ト改ム

信直公天正14年間ニ得テ二子ニ居ル命ニ依テ岩手郡不來方、莊中野城ヲ守ル 東西中野ヲ隣テ食邑トス 是テ於テ中野修理ト改ム 不來方城代福上宮内秀宗ト相並テ斯波氏ニ謀ル制度ヲ任セツル 同16年直康ノ謀略ニ依テ斯波氏滅亡ス 其他悉ク公城ニ属ス 告是直康ノ功也 故ニ其報賞トシテ 同郡片寄村高田村ニ千五百石加賜ス 前ニ合計二千五百石也 移テ片寄村今崎城ニ居ル且都中ノ制限ヲ掌ル 同19年兄九郎右衛門飯盛ノ時心ヲ頗テ奉行ス 故ニ聯結レス九戸城中ノ案内ヲ知ルノ以テ上方諸藩ノ御導クナシ又人數配り攻口ヲ定メ大功有 九戸役敗テ後賞ヲ賜フトイヘトモ因縁シテ 命ヲ拂セス 是ヲ以テ終身寵遇致ヘスト云 文禄3年4月4日夜今崎城ニ於テ從弟九郎隠岐ト聞談數刻ニ及テ隠岐既ニ刀ヲ抜テ直実ヲ刺ス 其故ヲ知ラス 時ニ二男想吉正康即座ニ隠岐ヲ討テ之ヲ殺ス 直康死セスト繼モ其孫シ即日之ヲ誅フ

公大ニ驚且難情モ印古ヲ賜フテ悲感シテム 其嘆惜セシシテ同日死42 林庵知公淨定門 国郡長岸寺

妻 斯波民部太輔義貞女

康伸 高田秀七 別系

斯波氏

直正 始メ正康 想吉 虎丸 吉兵衛

信直公ノ時幼ニシテ御近習ヲ勤ム 賀智領タルヘキノ命有 文禄元年12月15日福岡城御本丸ノ殿上元服久 甲子利正公御子ヲ賜テ正康ト号ス 後又直字ヲ賜フテ今ノ名ニ改ム 時二年13也 同3年4月4日父ニ從テ片寄村ニ在 九戸隠岐ノ変ニ即時ニ仇ヲ討テ之ヲ殺ス 時ニ年19也 世人之ヲ称美ス 同6日父直康死後公謝到ル 正康異村兄高田秀七康伸ト父ノ喪前ニ之ヲ抜ケ 其文ニ曰

不思議之仕合不及中盤 然其養生軒要候 モシ何處候トモ子息上黒心元有間敷亦七事足又ヨキヤウニ可杜無間少モ休敷有間敷候

4月6日 御墨印 以上  
中野とのハ

正康兄ヘ譲テ曰 我東面諸領タルヘルキノ命有兄君ニハ今無様ノ人生 是後年別様ノ賜フハキノ公文也 依テ此公文ハ兄君ニテ頼ルヘキトナ是ヲ授ケ 是公文高田氏ノ家ニ伝ク 同5月末タ忌明サラヌシテ 兄弟福岡ニ召サリ 遣地ノ内三千石ヲ正康ニ 五百石ヲ康仲ニ賜フ

利直公慶長5年出羽越上御陣ニ私兵ヲ率テ之ニ從フ 同年冬和資藤吉崎御陣 同6年3月同御陣ニテ軍功アリ 同14年 岩手郡中野村 志和郡施田村 高田村 津志田村 八百三十石五斗六升八合タ 志和郡肥爪村片寄村ニ換賜フ 同10月5日付御墨印アリ 同17年又知行割替アリ 江都肥爪片寄村高水寺村ニ一千石ヲ賜フ 同10月19日付御墨印アリ 同19年10月私兵86人ノ事レテ大坂御陣ノ役ニ從フ 後移テ郡山城ニ居 寛永元年10月15日 郡山城ニ死45 聖山水公庵定門長岸寺

墓北上木秀愛女（以下略）

- (8) 前掲
- (9) 「間表道事」前掲
- (10) 前掲(2)

## 第2章 遺跡の現状と調査

### 1. 遺跡の地籍(第5図)

遺跡に伝えられる地名をもとに明治18年に作成される「陸中国紫波郡片寄村第26地割子中平繪圖」によって地盤を観察してみると、大凡遺構の位置状況が把握されるものである。

「中野館」あるいは「吉兵衛館」は南北をそれぞれ岩の日沢、熊戸沢によって限られ、熊戸沢は更に西辺の一部を画している。東辺は「安倍道」によって境され、東西400m、南北300mの規模を有している。南西にあたる頂部「南館」へ達する登り道は安倍道より分岐し、やや北偏に曲折して進み、「北館」南東辺で樹形状に屈曲して西進している。また、南東より岩の日沢に沿って山道が続き、この登り口付近は「嶺」と伝えられている。

「南館」は66-1番地(以下略)、68~73にあたる地割である。東西に66-1、68、73の3区割が並列して長方形をなし、畠地はこれを分筆する形状である。北接する65、68、54-3は「北館」に続く鞍部へかかる斜面となってこれを両するものとみられる。鞍部は登り道を北辺として「南館」に平行する東西の地割が認められ、中央部の66、67は東へ延びて54-2、54-3塊に達して南北に二分される。北辺に沿って畠地となる部分である。

「南館」及び鞍部の東西二辺には、南北方向に平行して延びる小地割が認められる。西辺には117、118、115、119があり、草地の115、119を結ぶ延長線は「北館」西辺の水路にあたる。117は南北をそれぞれ66-1、65西辺に接し、北辺は水路に続く筆塙線をなす。さらに西方には102、118-1、114、116西辺の直線をなす筆塙が認められ、北辺で同水路に達している。また、南辺の102、101、118-1塊は「南館」66-1南辺の延長線上に位置している。

東辺では54-2、54-3があって、南に54-1、73塊より74に及び、「北館」の東辺には55より33に凸曲して共に西辺に対応する地割をなす。「南館」及び「北館」はこの東西両辺によって両される地割であり、南北方向のそれは後述する堤壁に該当するものである。

「北館」は56~64に及ぶ部分である。北西二辺を水路によって限られ、南辺に東西の登り道、東辺では33、56を結ぶ53塊に画されている。南辺に沿って東西方向の畠地が並列し、これに傾くやや方向を異にする56~58は「北館」北東端に張り出す平坦面にあたっている。

「南館」及び「北館」東方では南北辺をそれぞれ延長する道・水路によって画されている。地割はこの道・水路に沿っているが、中央部には南北方向の48~51が認められ、連続する48-1、49は西辺の115、117~119や54-2、54-3に対応するものである。50、51はこれに拡てて地割され、ほぼ東辺を両するものとみられる。しかし、これに平行する47東西界線が更に連続して走る点では同様の関連を有するものと推定される。

「吉兵衛館」は従来「南館」及び「北館」をもって呼称されているが、地籍図によってみると



第6図 横田館跡地範図（「陸中国紫波郡片寄村第26地割字中平絵図甲号」による）

ならば両館の東方に及ぶものとみられる。更に安倍道以東を含む周辺の検討を残しているが、「中野館」は南北2郭及び東方郭の3郭によって構成され、安倍道を東辺としてみると、大凡面積120,000m<sup>2</sup>と推計される複郭である。

注(1) 群岡地方法務局紫波出張所及び紫波町役場所蔵

(2) 「東北の古道安倍道」前掲

## 2. 遺跡の現状 (第1、4、5図 図版1~3)

遺跡の大部分は人工林を含む山林で被われ、特に「北館」や東辺では鳥の繁茂が著しく遺構の確認できない部分が多い。ここでは從来呼称されている「南館」をIの郭、これより北辺にかかる鞍部及び「北館」をIIの郭、両館の東方をIIIの郭と仮称してその概要を記述する。

### (1) Iの郭

遺跡の南西にあたり、北辺の鞍部を挟んでIIの郭に対峙する。郭中もっとも高位にあってほぼ全域を見渡すことができる。南西隅における標高は217.9mである。

Iの郭はいずれも平坦地を形成し、大別して4段の平坦面をなして東西に連なっている。最上段平坦面がもっとも広く、東西75m、南北40m、面積3,000m<sup>2</sup>に及ぶ。これより下降して約600m前後の3平坦地が東接し、東端では鞍部に境して300m<sup>2</sup>の小平坦地が認められる。各平坦地間の比高は1.0~3.0mを有し、東西平坦地間では18mを計る。

最上段の平坦地は南西隅より南辺にかけて東西45mに渡る土壘状の高位地形が残るほかは、切土及び盛土によって形成される平坦地（以下削平地）とみられ、西方の2段削平地及び東半の約2,000m<sup>2</sup>に及ぶ削平地によって構成される。この最大の削平地東縁には巨礫を含む土留状の石列が南北に続き、北東隅では下段の削平地に続く通路が開かれている。また、削平地北辺に沿って南北3m前後の低位部分が認められ、北東隅に達している。その一部は地籍図によって畠地となる部分である。郭中もっとも眺望の開ける東辺中央部にはやや北偏して八幡宮の石祠が安置され、周囲の石積に茶臼片が混在している。

上段削平地の四周は共に37~40°勾配の急傾斜面をなし、比高は南西二方に10~14m、北辺の鞍部に4~5m、東接する2段削平地に3mを計る。

2段削平地は東西12m、南北50mの長方形を呈する。北端に拳大以上の礫が多量に散乱し、鞍部より続く登り道が屈曲して上段削平地に達している。登り道南側にあたる削平地の北西には、高さ1.2mの八幡宮碑が斜面を背に東面している。

3段削平地はこれより1m下降して形成され、更にやや低位となる4段削平地が取り付いている。共に東西12~15m、南北55~60mで東辺にやや広く、東端では東西6m前後の帶郭状をなして内堀に接する。北東に限ってはこれを切って小削平地を形成し、東西の土壁によって鞍

部に境している。

Iの郭の堀塹は南辺より西辺にかけて、内外二重堀と上堀が構築され、更に西辺外方には小規模の堀塹が南北に、北端の熊戸沢に達する。東辺では内堀に続く南北堀をなし、北進してIIの郭を取り込んで熊戸沢に達している。

内堀は南西隅を境に二方に下降し、東西140m、総延長280mを計る。IIIの郭境をなす東辺は熊戸沢に至る延長240mに及んでいる。堀幅は共に6m前後である。上堀は南辺の内堀外方に沿って東西に続き、南西辺に至って分岐する。一方は西方へ直線上に延びて外方の堀塹付近で不明となり、他方は西辺の内堀に沿って鞍部西辺まで確認され、石積が部分的にみられる。基底幅2~3m、高さ1m前後をなし、西辺ではやや低くなる。

外堀は南辺にほぼ平行して東西160mに渡っているが、西辺は土塁に接して直線上に開削され、南北25mで熊戸沢に達している。中央部は海田となる経緯があり、土塁も判然としていない。これより約60m西方に認められる小堀塹は外堀に平行して南北に配され、現状では延長60mまで確認される。堀幅2m、深さ0.5mを計り、平行する土塁も同様である。

そのほかIの郭北辺に沿って鞍部境の東西堀の開削も推定されているが、現状では明確ではない。内堀に画される郭は約5,600m<sup>2</sup>、3郭面積比では21.2%を占めている。

## (2) IIの郭

Iの郭北辺に続く鞍部及び東西に馬の背状に延びる「北館」にあたる郭である。北西部がもっと高く、これより南東の緩斜面をなして鞍部に続く。北西部の標高は214.8mで、鞍部中央部における比高は10m、北東端の削平地では18.5mを計る。西辺より北辺にかけては48前後の勾配を有し、急崖をなして熊戸沢に限られ、東辺は空堀を挟んでIIIの郭に境している。北辺の熊戸沢に33m、IIIの郭に16mの比高を有し、三方視界を遮るものはない。鞍部に続く南面には段状の小削平地が東西に列して北東端へ延びているが、削平地境は判然としていない。

鞍部は対峙する南北両館の中央部にあたり、東西120m、南北40mを計る。東方に広く、西辺でやや狭少となる。全体として東斜面をなし、中央部で南北に2分される削平地が段状に形成される。中央部以西の削平地境には石積が認められるが、畠地として利用されている経過があり、「北館」における削平地と同様改変されている可能性もあげられる。そのほか中央部の削平地北辺には湧水を湛える円形の未掘り井戸が確認されている。

IIの郭への通路は鞍部東辺より直線状に西進し、削平地を迂回してIの郭北斜面にかかる。これより東進して2段削平地に達する登り道があり、東端で南北に分岐している。支道は共に空堀に沿って続き、南はIの郭削平地東辺へ、北は北東端削平地に達している。Iの郭へ迂回して進む登り道は路幅0.60m前後で掌大の砾が露呈し、路肩に石積が散見される。

鞍部に取り付く東端ではIIIの郭より曲折して推定される土橋を渡り、これより鉤形をなして

屈曲している。正面には石垣とみられる石積が認められ、登り道は坂道をなして開口する。

墓塚は南辺を除く三方に配される。西辺より北辺にかけてはⅠの郭西辺より3段塚が熊ヶ沢に接続し、これより熊戸沢は外堀となって東流するほか、北辺の急斜面には二重の墓塚がほぼ東西方向に開削される。草木によって確認できない部分があるが、中央部を境に東西方に下降し、幅2m、深さ2mを計る。土壠はほぼ空堀に沿って続いている。

一方Ⅰの郭より続く東辺の墓塚は、東へ張り出す北東端の削平地を迂回して北辺の熊ヶ沢に達している。鞍部東辺を画する通路以北にあっては流水が絶えず、侵食をうけて小谷をなし、削平地との比高は17mに及んでいる。Ⅲの郭西辺にあたる上塚は、鞍部に至って低平となり、Ⅲの郭北西部に部分的に確認されるのみである。墓塚によって限られるⅡの郭の削平地部分は、東西150m、南北90mを計り、約10,100m<sup>2</sup>を有して面積比は37.7%である。

### (3) Ⅲの郭

Ⅰの郭及びⅡの郭東辺の南北側を西辺として東方へ形成される郭である。四周を墓塚によって囲繞され、段状の削平地によって構成される。東西90m、南北180mであり、北東部を欠くやや不整な扇状を呈する。面積は約11,000m<sup>2</sup>で、3郭中もっとも広い。Ⅰの郭及びⅡの郭東辺に続く東斜面をなし、もっとも高位となる西辺中央部の標高は194mであり、東西端における比高は18m前後である。

段状の削平地は大別して(1)鞍部以北、(2)中央部と(3)南辺の削平地に区分される。Ⅱの郭東方にあたる北辺の削平地はもっとも低位となる削平地である。

鞍部は東面する5段の削平地を形成し、上段2削平地は中央部のそれに比してやや西偏している。東西10m、南北25m前後の長方形をなす。これより以東では小規模な削平地が断続して認められる。鞍部北辺の登り道以北では三方を空堀によって画される3段削平地をなす。2段削平地がもっとも広く、東西13m、南北35mを計る。

中央部の削平地は北辺を鞍部に統く斜面に限られるほか、三方共に空堀によって限られている。東西90m、南北70~100mを計り、面積は約8,100m<sup>2</sup>を有する。Ⅲの郭における面積比74%を占める主要な部分である。東西に段状をなして形成される削平地は、南北80~90mの帯状をなし、1m前後の比高を有して5~6段に渡っている。これを区画する小削平地境は明瞭でない部分が多いが、西辺の上段削平地では東西12m、南北30m前後の削平地が並列し、3段削平地の北辺においては東西9m、南北15mを計る。このほか方向を異にする小削平地が認められるが、共に東面する削平地である。また、最下段削平地の中央部には円形の石井が存する。

南辺の削平地は3条の空堀によって画され、東西の2段削平地によって構成される。東半では緩斜面をなして削平地境は明らかでない。

削平地への通路は鞍部東辺よりやや湾曲して西進し、推定される土橋に至る登り道のほか、

東辺より分岐して中央部の上段削平地に達する支道がある。後者は小削平地を迂回して開かれ、路幅0.6~1.0m前後であるが、中央部斜面では拡幅部分があって、伐採に伴う改変も推定される。また、南辺には斜面巻に沿って西進する通路があり、南東辺より右折して最上段削平地に続く道が開かれている。

IIIの郭の壁塁は既述する西辺の壁塁のほか、北東二辺を画する壁塁及び南辺の3壁塁が認められる。北辺では標記<sup>(1)</sup>に續く急斜面に溝状をなし、東辺に湾曲して続いている。東辺は登り道付近で未確認であるが、ほぼ下段削平地に沿って南北し、南端で東西の直線塁に接続している。

南辺の削平地を画する壁塁は、南東斜面を切って東辺に達する東西塁と更に削平地をおいて外方に湾曲する壁塁である。前者は東辺の空堀に接合して長さ60m、堀幅7~8mを計り、後者は東方ほど不明瞭となり、東西66mまで確認される。また、この2壁塁間にあって南辺削平地を東西に2分する埋没著しい空堀が認められる。南端を外堀に接し、南北方向より鉤形に屈曲して直線塁に平行する堀切である。

IIIの郭の東方については南東部に東西30m、南北60m前後の削平地が認められるほか、小平坦地が観察されるが、東方ほど畑地となる経緯があつて削平地は判然としていない。

### 3. 調査と方法

#### (1) 調査の経過 (第3、6回)

一関・盛岡間ににおける東北新幹線自動車道建設にかかる遺跡については、既刊の報告書に詳述しているが、昭和42~43年の分布調査が実施され、ついで昭和47年の現地確認調査によって調査対象の99遺跡が決定している。しかし、柳田館遺跡についてはいずれの調査によつても確認されず、昭和49年10月に至つて石鳥谷町大瀬川C遺跡の関連調査によって判明し、工事発注後の翌50年3月に調査対象遺跡として登録された遺跡である。

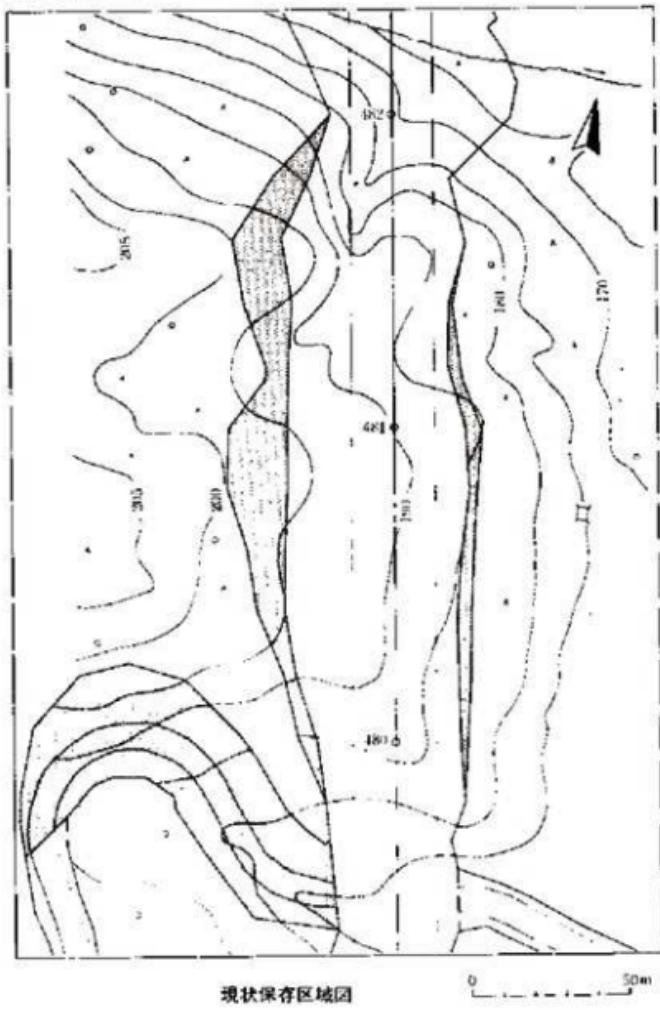
発掘調査は同年4月より調査員、調査補助員含めて4名を編成し、調査期間を同年8月までとして開始する。以下は現状保存対策を含む調査経過の概略である。

昭和50年 4~5月	全城に渡る伐採、刈り払い、拔根作業に 併行して地区割測量及び郭主要部の略測平 面図を作成する。また、柳田館遺跡地形図 作成のため、空中写真撮影を実施する。	道路の全面現状保存について現場担当者 と協議する。
---------------	--	------------------------------

6月	最初の調査工程に従って1~10号橋及び削平地におけるトレーンチ掘のほか、調査区域全域に及ぶ表土除去、道構検出を開始。	現状保存についてや林達夫文部技官の助言を得て道路公団盛岡工事事務所に打診する。既設地盤、迂回用地の確保、不用地の処置、経費等の問題について指摘をうける。
7月	道構検出の結果と共にI~IIの郊、即の郊上段削平地の一部精査を進める。 調査期間の延長を要請し、翌年3月までとする。	課内の意見調整を経て現状保存の方向で文化庁へ協議を申し入れ、道路公団に対し保存対策の検討を要請する。
8月	工事用道路予定地の設定に伴って調査計画を変更し、中軸線以東を調査区域として粗査を開始する。	文化庁・道路公団を含む3者協議において、迂回、隧道、高架、復元一案を提示するが、擁壁構築案が採択され、公団へ細部検討を要請する。また、現状保存区域設定について現地提示を行なう。
9月	削平地における道構精査と平行して空堀に重機を導入して完掘する。 現状削平地に伴う道構について第1次空中写真測量を行なう。	高擁壁構築はアンカーワーク方式とし、西辺のI~IIの郊における保存区域設定に大略合意し、細部については以後の現地協議によることとする。
10月	工事用道路予定地の調査を終了し、第2次空中写真測量を実施する。また、調査期間を再延長し、翌年6月までとする。	南辺の猿倉林道付替道路予定地にかかる道構の現状保存対策を申請し、合せて現地協議を行なう。
11月	工事用道路予定地を除く中軸線以東を完掘し、第3次空中写真測量を行なう。合せて第1次現地説明会を開催し、公開する。 現状保存区域予定地にあたる西辺の一部を埋め戻し、中軸線以西の調査を再開する。	東辺を含む本線内の現状保存区域について現地協議を行なう。 付替道路予定地における道構の現状保存について合意が成り、全面現状保存区域として確定する。
12月	降雨のため、調査を中断する。	
1~3月	調査資料の整理を進める。	保存区域について文化庁・道路公団を含む3者で協議を行なう。
昭和51年 4~6月	調査を再開し、道構検出及び粘土を継続する。空堀の一部は重機の使用によって完掘する。	保存構造を含む保存区域について現地における境界線を設定する。
7月	中軸線以西の第4次空中写真測量を実施し、第2次現地説明会を開催する。 補足調査を含む発掘調査を終了する。	現状保存に伴う設計変更が最終的に確定する。高擁壁の構築は主としてアースウォール工法及びアースアンカーワークとし、施工にあたっては現地確認することとする。

注(1) 「東北県賀白地車道関係埋蔵文化財調査報告書：田 前掲

(2) 昭和51年1月12日付仙越鉱業第16号貼付図



注(3) 「柳田館道路を守るアースウォール工法とアースアンカー工法による山崩工法」フジタ工業株式会社

(1976)

## (2) 調査の方法（第6図）

調査は自動車道建設用地のほか、南辺の猿倉林道付替道路用地に及び、これにかかる全域を調査対象とするが、調査途上において現状保存区域を除外している。調査対象区域はグリッド設定に基く平面発掘を基本としている。

グリッド配置は用地中心杭480+00、480+800の2点によって南北中軸線を設定し、30mを単位にA～Jに、更に3mを小単位としてa～jに細分する。これに直交する東西方向は中軸線を基線として西方へ3、6、9～、東方へ100、103、106～とし、3×3mの最小単位はこの組合せにより北西に位置する交点をもって呼称している。

遺構の名称や遺物の採集にあたってはグリッド名を付して呼称するが、広域に及ぶ遺構については便宜上別称して併用している。郭についてはI～III郭とし、郭における現状削平地についてはこれを冠して仮称し、空堀については1～14号堀としている。

発掘調査は昭和48年作成の「調査の組織と方法」及び「岩手県文化財発掘調査要項」に従つて進められるものであるが、遺跡の現状や調査途上における諸事情によって適宜変更する場合もこれを逸脱することのないように努めている。以下要項によって調査方法を列記することとする。

### 発掘方法

現状で認められる堅壠及び削平地に基づいて直交するトレンチを設定し、層序、遺構及び遺物の状況を把握し、削平地及び堅壠を単位として全面に渡る調査を進めている。堅壠のうち4、8～10号堀においてはトレンチを除いてバックホーショベルK375、ブルドーザーD6Cの併用によって完掘している。

層位の把握は原則として自然層序によっているが、個別の層準は包含される遺物や構成物質の性状によって識別し、色調については主として「新版標準土色帖」を利用している。

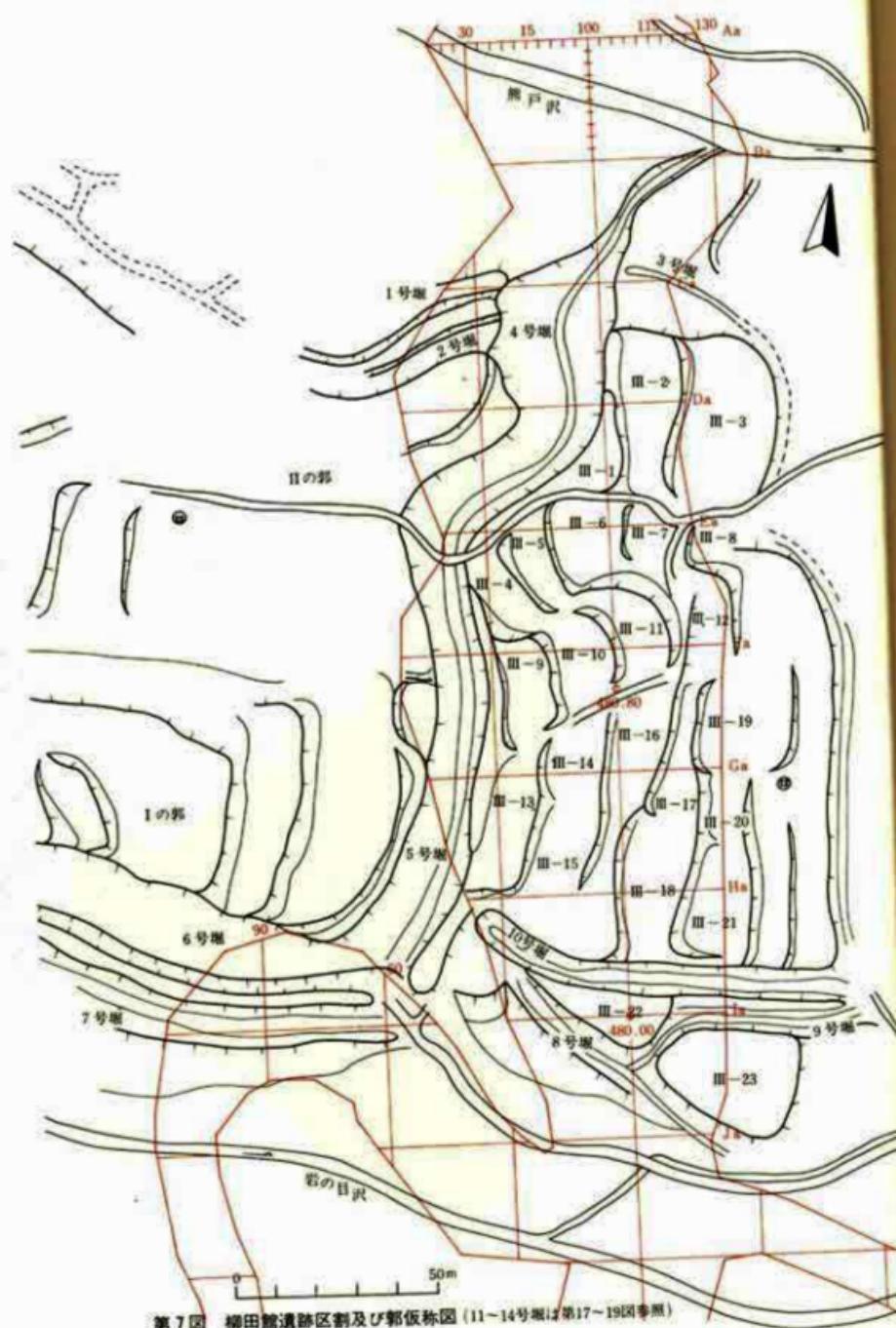
検出される遺構は2分法、4分法をもって精査し、遺構の性格、内部の堆積状況、構造を把握したのち完掘し、必要に応じて断ち割りを行なっている。

### 実測の方法と記録

地形図及び遺構平面図は空中写真測量によって作成し、削平地における遺構については造り方測量を併用している。また、石垣の平・立面図についてはステレオ写真測量によっている。

図幅の縮尺は20分の1を原則とするが、柱穴群等には10分の1、50分の1を適宜併用している。地形図では縮尺500分の1、等高線0.5mとし、遺構全体図はそれぞれ50分の1、0.20mである。

遺構・遺物に関する層位、状況等の観察事項は、実測図及び遺構カードに記入するほか、進行状況、問題点等を調査日誌に記録している。



第7図 柳田館遺跡区割及び郭仮称図 (11~14号坑は第17~19図参照)

写真記録は24×35mm、6×7cm版とし、モノクロ、カラー、リバーサルフィルムを併用する。そのほか周辺の遺跡、地名、伝承、湧泉及び水路、交通路、寺社、民俗については文献資料の収集と平行して行ない、検出される遺構・遺物については、前述の考古学及び関連科学の研究者の指導と助言を得て進めている。

注(1) 奈良県農林水産技術会議事務局監修 (1970)

### (3) 整理

昭和51、52年の1～3月にかけて図面及び遺物の整理を断続的に行なっているが、同52年10月に至って空中写真測量による遺構全体図が完成し、翌53年8月より整理及び報告書作成を継続して進めている。

整理は「整理作業の進め方」、「出土遺物の整理について」<sup>註(2)</sup>を作成し、これに準拠して実施している。以下の項目によって概略する。

#### 図面整理

第1原図は点検、照合、修正して登録し、更に遺構全体図の照合、修正、合成等を経て第2原図を作成する。第2原図の縮尺は50分の1を原則とし、遺構によっては20分の1として図面台帳に記入する。

#### 遺物整理

出土地点を明記し、すべて番号を付して登録する。接合・分類に平行して実測図や撮影を作成し、合せて計測値及び観察事項を遺物台帳に記入する。保存処理を必要とする遺物については適宜これを進め、木製品、鉄製品の一部は元興寺文化財研究所、北上市立博物館の協力を得て処置している。

分析、鑑定については、陶磁器、金属製品、石製品、動・植物遺体、炭化物等について実施している。しかし、保存処理を含めて分析、鑑定を要する遺物はなお少なくない。

#### 写真整理

遺構についてはI～IIIの郭によって大別し、更に堤塹及び削平地によって細別している。遺物は遺構に伴なう遺物のほかは遺物の種類によって分類・記帳している。

なお、報告書の作成にあたっては既刊報告書の「整理について」に準拠するものであるが、<sup>註(2)</sup>調査と同様に諸事情によって必ずしも十分ではない点が多い。

本文の記述に関しては確定できない遺構が含まれるため、以下の点に黙って記述している。

#### 壁塹について

計測にあたっては大旨法面の変換点によっており、幅幅、深さ等については対称をなす低位部分の標高によって求められる計測値である。また、空堀に沿って認められる土壘状の遺構についてはいずれも土塁として扱っている。

### 削平地について

切土及び盛土地形によって造成される削平地（平場）のうち、重複する小削平地は明瞭な削平地境を有しないが、地山切上面や溝道構によって推定される削平地をこれに含めて列記している。

### 掘立柱建物跡について

數棟を除いて岡上復元によるものである。同一検出面における同一掘立柱建物跡（以下建物）の柱穴は①同一直線上に載る ②仮の梁行及び桁行線上に直交する位置にあたる ③重複せず、一定の距離を有する ④掘り方の覆土や底面高等に著しい相違の認められない柱穴によって推定し、短軸方向を梁行とし、長軸方向を桁行とするものである。また、建物規模は両端柱穴の柱頭中心点、または最深点をもって示し、柱間も同様の計測値によって換算値を併記している。

但し、第5章の9、14、15、18においては曲尺0.5尺を単位として柱間寸法を記述し、欄柱の確認できない柱間は直交する交点をもって推計するものである。

柱穴列（以下柱列）については建物の一部とみなされ、豊穴を有する遺構についても建物遺構としてこれを含めて一括している。

表示する柱穴計測表は柱穴状ビットを含めて検出面における掘り方の東西、南北径により、深さは検出面下のそれによって表わしている。検出面及び底面の高さは標高で示し、文中の比高も同様である。また、備考のうち（ ）は柱頭径を示し、覆土中の混入物は焼上粒をb、炭化物粒c、焼石bs、石s、米r、麦ba、粟m、豆pとして記号化している。

### 遺物について

すべて分類に従い、登録番号によって標示している。図示する陶磁器については、小破片が多いため、岡上反転によるものであり、計測値も同様である。

遺物のうち分析、鑑定をいただいた陶磁器、鉄製品及び鐵滓、獸・人骨については<sup>14</sup>Cの測定と共に付篇として掲載している。

そのほか、塙塚及び削平地に從って要約として若干の考察を含めて記述しているが、必ずしも統一される解釈の得られない部分も含まれている。

注(1)(2) 「東北総貿易事務局文化財調査報告書」田前編

### 第3章 墓塚と遺物

#### 1. Iの郭南辺

Iの郭に南接する空隙は東西140mに及び、更に上塙を境して平行する160mの東西塀が配され、現状地形では二重塀と認められる。当初の調査区域は、Iの郭南斜面を含む東西32mに渡る二重塀と上塙のほか、南辺の岩の日沢に続く平坦面を加えて3835m<sup>2</sup>であるが、調査途上で全域が現状保存区域となり、共に試掘溝を完掘せずに終了している。

調査は二重塀に直交する試掘溝を設定し、墓塚が現状で確認されるIの郭2段削平地南辺にあたる東西3m、南北25mのHe102トレンチ、同3段削平地南辺の埋没著しい部分には南北39.2mのHe84トレンチによって進めている。遺構はIの郭に接する6号塚とこれに沿う7号塚及びその間の土塁であり、付属施設等は認められてない。また、7号塚に続く南斜面より岩の日沢に達する平坦地では中央部に限って遺構検出を行なっているが、遺構は認められていない。

遺物は6号塚に出土する陶磁器、鉄製品等若干である。

##### (1) 6号塚(第7、8図 図版9)

西方のHe102トレンチにおいては、Iの郭2段削平地に続く北法面が37勾配をなして下降し、下方では変換点を有して掘り込み面に続き、47.4勾配で底部に達する。底部はV字状を呈し、40.2勾配の南法面に連なる。幅4.40m、深さ2.45mを計り、南北両法面の勾配は92~99°で交点を結ぶ。

覆土は2.17mに及び、砂礫を含む褐色土、黄褐色土の堆積が多い。下層では南法面に沿って傾斜する砂礫層が多く、底部を被う粘土層には雜木の小片に混在して石子片が出土する。中位層では平行する堆積層となり、人頭大以上の礫が混入し、底部はやや北に移行して上昇している。これを被う上層では北法面より黄褐色土、または、褐色土の厚層となり、灰釉陶器、石硯の小破片が検出されている。炭化物の粒子は中・下層に混入して認められる。

東方のHe84トレンチにあっては北法面を37勾配で傾斜し、底部より南法面にかけては疊層を切ってさらに緩やかとなる。尖底状をなす底部はほぼ中央に位置し、下方における法面角度は79.8°を計る。幅5.66m、深さ1.50mであるが、法面の崩壊によって旧状を失っているとみられる。

覆土は3.20mに達する。下層のはゞ平行する堆積層に統一して北法面に沿って傾斜する厚層となり、巨礫を伴う砂礫層が被っている。底部ははゞ中央を上昇し、上層では上層を被う褐色土の厚層である。遺物はこの上層の褐色土に含まれ、特に南法面に沿う8層に多く、陶磁器や炭化米が混入している。また、大部分の堆積層には多少の炭化物粒が混在し、特に中位の北法面に沿って傾斜する15層の粘土薄層に密である。

(2) 7号場 (第7、8図 図版9)

He102トレンチでは幅3.42m、底部幅0.20m、深さ1.49mを計る。法面は上方で42°勾配をなすが、掘り込み面では51~57°勾配、底部は72°である。覆土は1.50mに達し、現状では殆ど平坦をなし、主として粘土質や砂質の自然堆積層である。下層は砂質土が多く、酸化鉄の集積がみられる。上層は風化跡を含む褐色土の厚層が被い、炭化物は第5層以上に含まれる。

東方トレンチにおいては幅3.64m、底部幅0.20m、深さ1.87mを計り、法面勾配50~53.2°、底部は77°となって西方に近似している。覆土は1.92mに及ぶ。下層では地山の黄褐色土の堆積が法面に沿ってみられ、中位層より上層にかけては多量の大小礫を伴う黒褐色腐植土となり、0.60~0.70mの層厚をなす。礫は中央より南にかけて厚く、北法面への傾斜が認められる。

(3) 土壘 (第7、8図 図版9)

He102トレンチでは南北法面を40~42°勾配で削り出し、疊積み、あるいは盛上の痕跡は認められない。変換点によって基底幅3.92m、馬蹄にあたる上面幅0.73m、高さ1.18mを計る。

Hc84トレンチでは西方と同様に盛土は認められず、基底幅3.02m、上面幅0.60m、高さ1.00mである。西方に比して流失部分がやや大きいとみられる。

7号場以南では東方ほど平坦をなし、Hc84トレンチにおいては南北4mの平坦面をおいて斜面に続いているが、土星の痕跡は確認されていない。南斜面は27.6~39°勾配で傾斜し、平坦面に統いて黒褐色土がやや厚く被っている。

(4) 遺物 (第9、10図 第3、4表)

陶磁器、土師器、鉄製品、石製品等合せて24点のほか、炭化米が少量検出される。いずれも小破片であり、図示できるものは少ない。He102トレンチの石製品を除いて中位層以上に認められる遺物である。

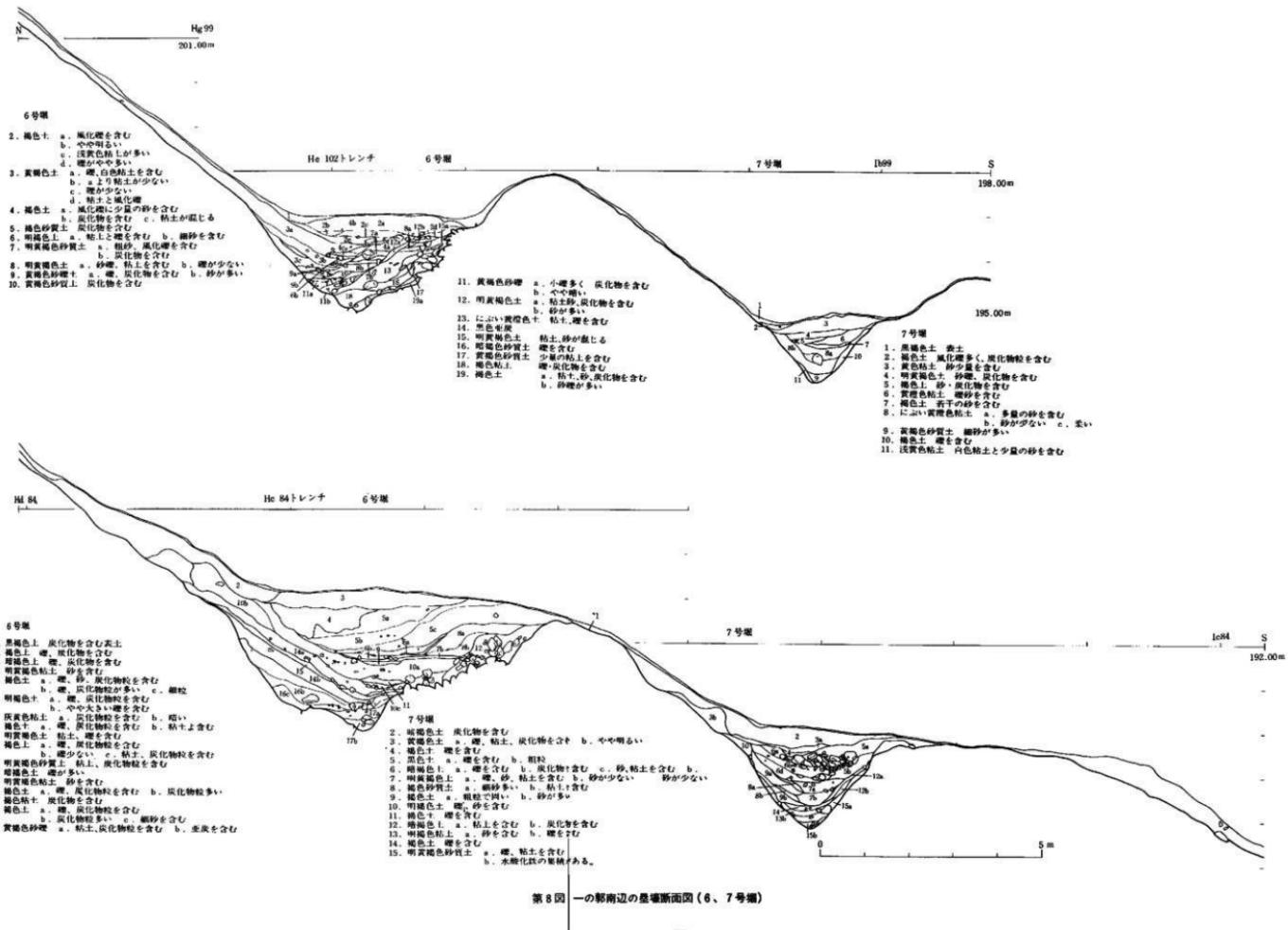
第3表 I の都南辺6号場出土遺物

出土地點	層段	器種	灰釉陶器	素面陶器	土師器	鉄製品	石製品	有機物	植物遺体
He102 トレンチ	1		1				1		無
	2			2			1		
	3				9			1	
He99 トレンチ	4		1			1			無
	5								無
	6						1		
	7								
	8		3	1					
	9								
	10						1		
	all		1	5	1	9	3	2	1

陶磁器 (第9図)

灰釉陶器5点中、4点は皿である。皿の口縁部(373)は僅かに端反りし、体部外面に棱を残す。一様な淡黄緑色をなし、胎土は均質で白色を呈する。推定口径12.0cm、8cm層出土。

底部2点は削り出し高台で器厚の薄い底部が含まれる。(366)は高台内を除いて施釉され、



第8図 一の脛脛辺の骨壊断面図(6、7号標)

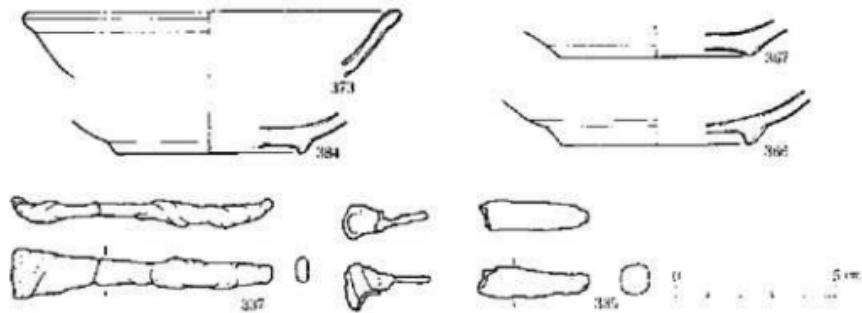
高台脇に厚く豪潤する。推定高台径5.8cm。(367)は高台が低く、粗雑な削り出しである。淡黄緑色釉は全面に及んでいるが(384)と同様に二次加熱をうけて白色となり、胎土も灰褐色である。推定高台径5.8~6.0cm。(384)は1層、他は8b層出土である。そのほか、器厚1.1cm、推定体部径12cmの内面無釉の破片があり、釉調や胎土は皿と同様である。5a層出土。

その他の施釉陶器には甕の体部片3点がある。外面は明褐色、または暗褐色を呈し、内面は無釉で灰色をなす。灰白色の胎土には粗粒が目立つ。器厚1.1~1.8cm、1、8層出土で常滑系とみられる。

染付1点は甕の底部片で、高台端を欠いている。高台脇にやゝ厚い施釉は灰白色をなし、見込みに青灰色の大小2条の圖文を有する。削り出し高台には粗砂の付着が認められ、胎土は緻密でやゝ灰色がかった白色である。高台径3.6cm、3層出土で伊万里系とみられる。

#### 鉄製品(第9図)

折損する釘2点、毛抜きの破片1点である。鉄釘は皆折形とみられ、断面方形をなす。(335)は10a層出土、他は5a層出土である。毛抜き(337)は、一方を折損し、銹化が進行している。現存長8.4cm、抓部の幅1.6cmである。8b層出土。



第9図 1の郭南辺6号塚出土遺物

#### 石製品

1点は茶白の下白受皿片とみられ、内外面共に研磨されて滑らかである。推定外縁径35cm、安山岩製である。He104トレンチ19層出土。他の1点は墨池の認められる小鏡である。裏側はよく研磨され、現存の高さは0.6cmを計る。淡褐色を呈する石質凝灰岩製である。1層出土。

#### 植物遺体(第4表)

炭化米は東方トレンチ7、8層に少量出土し、炭化物粒のもっとも多い15層以下には認められない。7層出土の10例についてみると、1粒の長さは0.42~0.48cm、幅0.24~0.26cmとなり、長幅比は1.71~2.00である。芒を残すものが認められるほか、焼膨れ、割れするもののが含まれる。

そのほか、西方トレンチの底部にみられる雜木片は加工の痕跡は認められないが、空堀開削

当初の伐採樹木の流入堆積とみられる。いずれも小枝状をなし、樹種は明らかでない。

第4表 6号堀出土米計測表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	10010	10011	10012	10013	10014	10015	10016	10017	10018	10019	10020	10021	10022	10023	10024	10025	10026	10027	10028	10029	10030	10031	10032	10033	10034	10035	10036	10037	10038	10039	10040	10041	10042	10043	10044	10045	10046	10047	10048	10049	10050	10051	10052	10053	10054	10055	10056	10057	10058	10059	10060	10061	10062	10063	10064	10065	10066	10067	10068	10069	10070	10071	10072	10073	10074	10075	10076	10077	10078	10079	10080	10081	10082	10083	10084	10085	10086	10087	10088	10089	10090	10091	10092	10093	10094	10095	10096	10097	10098	10099	100100	100101	100102	100103	100104	100105	100106	100107	100108	100109	100110	100111	100112	100113	100114	100115	100116	100117	100118	100119	100120	100121	100122	100123	100124	100125	100126	100127	100128	100129	100130	100131	100132	100133	100134	100135	100136	100137	100138	100139	100140	100141	100142	100143	100144	100145	100146	100147	100148	100149	100150	100151	100152	100153	100154	100155	100156	100157	100158	100159	100160	100161	100162	100163	100164	100165	100166	100167	100168	100169	100170	100171	100172	100173	100174	100175	100176	100177	100178	100179	100180	100181	100182	100183	100184	100185	100186	100187	100188	100189	100190	100191	100192	100193	100194	100195	100196	100197	100198	100199	100200	100201	100202	100203	100204	100205	100206	100207	100208	100209	100210	100211	100212	100213	100214	100215	100216	100217	100218	100219	100220	100221	100222	100223	100224	100225	100226	100227	100228	100229	100230	100231	100232	100233	100234	100235	100236	100237	100238	100239	100240	100241	100242	100243	100244	100245	100246	100247	100248	100249	100250	100251	100252	100253	100254	100255	100256	100257	100258	100259	100260	100261	100262	100263	100264	100265	100266	100267	100268	100269	100270	100271	100272	100273	100274	100275	100276	100277	100278	100279	100280	100281	100282	100283	100284	100285	100286	100287	100288	100289	100290	100291	100292	100293	100294	100295	100296	100297	100298	100299	100300	100301	100302	100303	100304	100305	100306	100307	100308	100309	100310	100311	100312	100313	100314	100315	100316	100317	100318	100319	100320	100321	100322	100323	100324	100325	100326	100327	100328	100329	100330	100331	100332	100333	100334	100335	100336	100337	100338	100339	100340	100341	100342	100343	100344	100345	100346	100347	100348	100349	100350	100351	100352	100353	100354	100355	100356	100357	100358	100359	100360	100361	100362	100363	100364	100365	100366	100367	100368	100369	100370	100371	100372	100373	100374	100375	100376	100377	100378	100379	100380	100381	100382	100383	100384	100385	100386	100387	100388	100389	100390	100391	100392	100393	100394	100395	100396	100397	100398	100399	100400	100401	100402	100403	100404	100405

相互の関連については共に試掘溝によっており、明確に把握しえないが、両堀間が10.03~10.06mを有して平行する配置にあり、Iの郭形成と同時に相前後して開削される壁塚とみなされ、規模や形状、覆土によっては7号堀の先行、あるいは当初より重堀として開削され、以後内堀の改修が行われる等が推定される。

土塁は両堀の開削に伴って形成される地山残存部分であり、共に削り出しに拘って山なりをなす。現状では盛土、あるいは疊積みの痕跡は認められていない。しかし、6号堀においては南法面に沿って礫屑が比較的初期に流入しており、6号堀開削に伴う余土をもって築成している可能性も否定されるものではない。いま法面勾配45°の土塁構築を想定するならば、西方では基底幅3.92mに対し、馬蹄、高さの比率は共に0.80となって勾配が弱く、西方においても南法面の崩壊部分を修正した基底幅3.20mに対してはそれぞれ0.75、0.83となつていずれも流失している可能性が強いといえる。

7号堀に南接する上堀については南北4m前後の平坦面をなす東方では、土塁築成の痕跡は認められていない。開削に伴う余土については6号堀を含めて明らかでないが、IIIの郭南斜面に続く低地に厚層をなす堆積が認められており、あるいはこれに符合するものであろうか。

遺物は合わせて24点余りでいずれも6号堀に限られる。陶磁器には常滑・美濃焼ほか、伊万里が含まれ、釘・毛抜・茶臼等である。共にIの郭削平地に伴う流入遺物と推定され、特に東方では大量の炭化物と共に炭化米が認められる点でIの郭削平地における火災焼失等に起因するものとみられ、更には削平地の変遷や建物施設の存在を推定させるものである。また、炭化米をIの郭東辺削平地出土のそれと同時期の所産をみると、大規模な削平地造成段階には既に開削される6号堀は埋没途上にあり、5号堀出土米によってみると、同様に底部が上昇して移行する段階にあたるといえる。

## 2. Iの郭東辺

Iの郭南西端よりIIの郭北東辺に達し、IIの郭を画する全長240mの南半部分である。北は鞍部東辺よりIIの郭東端の削平地を大きく迂回して熊戸沢に達しているが、記述の都合上、IIIの郭より続く土橋と推定される通路を境にIの郭南辺の6号堀に合流する南140mを5号堀、IIの郭東辺以北を4号堀として扱っている。

Iの郭東辺では中央部下段削平地がやゝ東へ張り出しており、壁塚はこれに沿って中央部を東端として緩やかに西へ湾曲している。現状では湾曲部南側を境にして南北に下降する。南端の6号堀接合地点では0.30m程の段状をなして尚高位であり、北は緩やかに下降し、通路付近では埋没が著しく殆ど平担をなす。空堀に東接する土塁はIIIの郭西端にあたり、5号堀に沿って土橋付近まで約110mに渡っているが、明確でない部分も認められる。

調査区域はIの郭北東辺より鞍部東辺までを西限にして土橋を含む壁塚である。しかし、調

査定上において田の郭西端にあたる土塁の一部を除いて現状保存区域となり、5号壠全域を埋め戻し、更に1.5m前後の盛土を行なっている。

調査は墨塗に直交する南北幅3.0mの試掘溝によって進め、現状でもっとも高位をなすⅠの第東辺に Fj 48トレチ、鞍部東辺に Fa 48トレチを設定する。共にⅢの郭削平地に続くトレチである。更に北端の通路以南21mに渡って、遺構検出をすめているが、土塁及び削平地との関連や推定される土橋についても共に検出途上で判明していない。

検出される5号堀はⅡ表土及び地山を切って開削され、Ⅰの郭南辺の6号堀に共通する点も多い。これに平行する上堀は部分的に隙を含む盛土状をなして認められ、北半には柵列が付設している。上堀および柵列はⅢの郭西辺にあたっているがここに含めて記述し、更に土堤の東に検出される空堀については、11号堀として別項に後述している。

遺物は主として瓦類、板瓦に伴うものであり、土器より出土する遺物は少ない。土橋付近を含めて陶器がもっとも多く、そのほかは鐵製品、石製品、炭化米等若干である。

(1) 5号堤(第11、12图 例版7、8)

FJ48トレンチではⅠの郭削平地に続く西法面は42.5°勾配をなして底部に達し、東法面では36.0°勾配をなしてやや緩やかとなる。壇幅5.62m、深さ1.42mである。底部はやや広く0.60mを計り、トレンチ内では0.10m前後北に傾斜している。共に断面逆台形の諸要素を呈する。

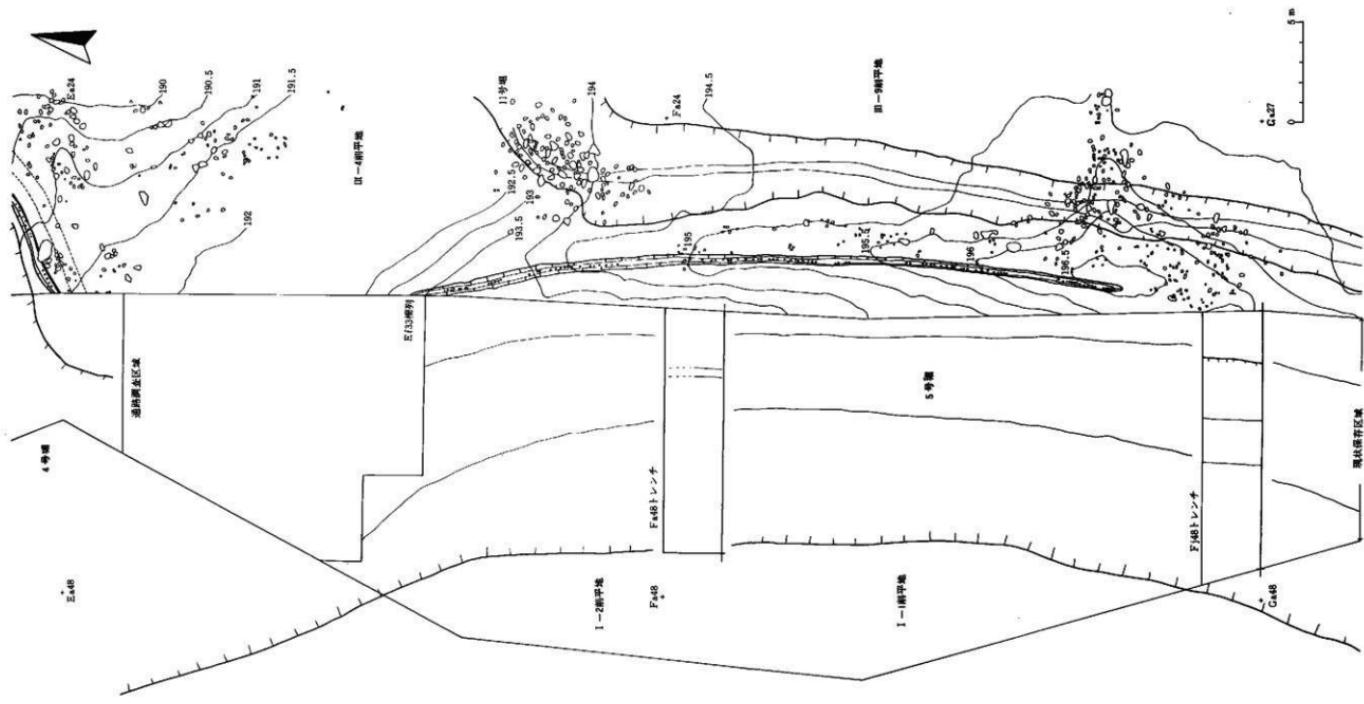
覆土は1.42mを被い、東西法面に沿う堆積が多い。中央部では礫を伴ってレンズ状を呈する。堆積層は大別12層に及び、下層では風化礫や粗砂質の褐色土が底部を被い、東法面では柔い褐色土があつつく延びている。更に東法面には水平堆積する地山酷似の11、12層が認められる。中位層では多量の大小礫を伴う暗褐色土がほぼレンズ状をなし、下層ほど粘性が強い。また、5～7層には炭化物や焼土の微粒が含まれ、特に7層には多量の炭化米が混入している。上層に至っては西法面による暗褐色土の厚層となり、炭化物粒を含む。地山と類似する堆積層は下層のほか、2、4層に部分的に認められる。遺物は7層以上に炭化米が混入し、3層には陶磁器、石製品が集中している。

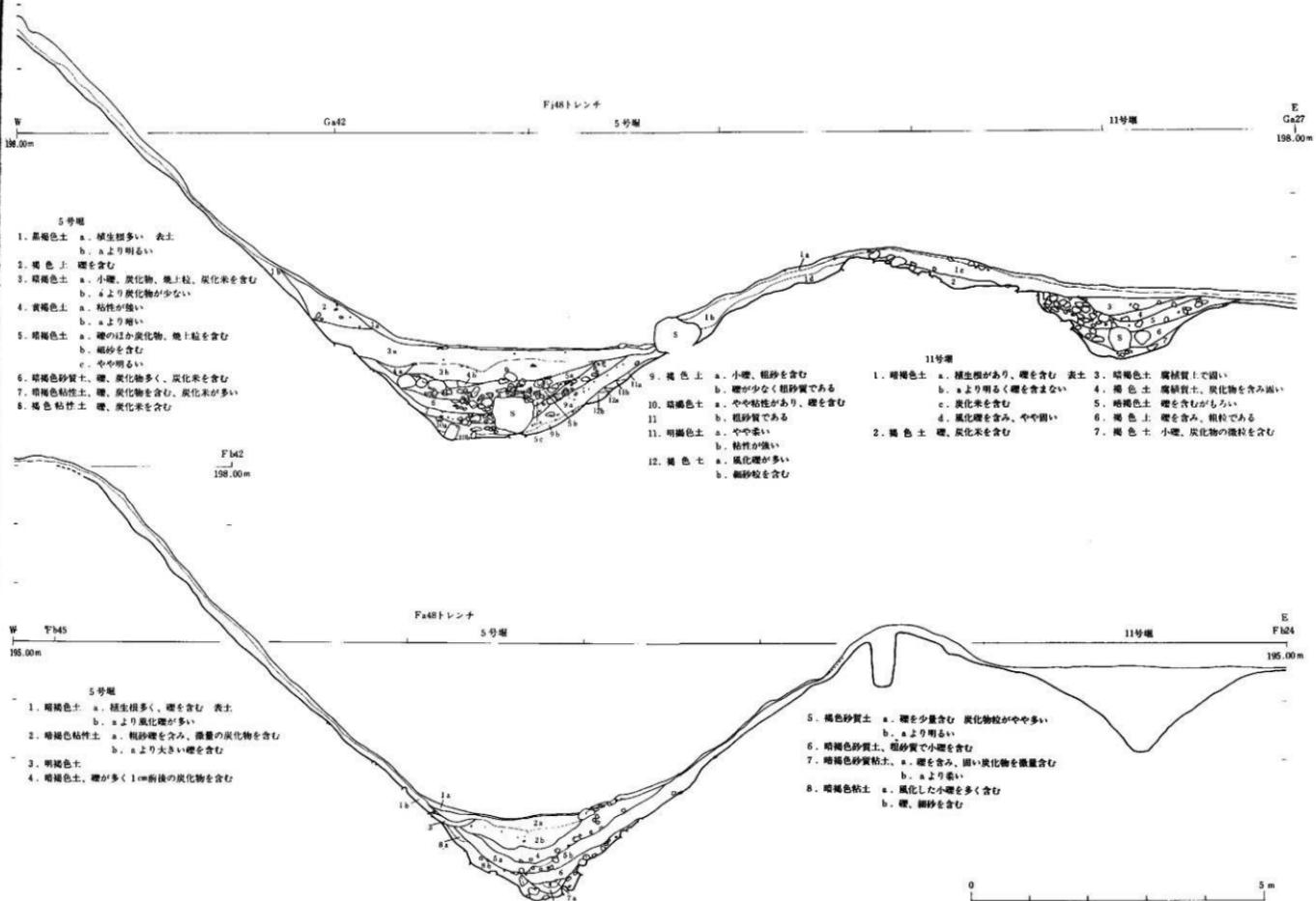
Fa48トレーナにおいては、東西共に40~43°勾配の法面をなして底部に達し、交点では97°である。側幅5.14m、深さ2.25mで、断面は緩やかなV字状を呈する。

覆土は南トレンチと同様に法面に沿う堆積であり、その間にレンズ状の堆積が若干認められる。中位層以下では砾を含んで北へ僅かに傾斜している。下層では砂礫の混入する暗褐色土で、底部ほど粘性が強い。中位層では砾を伴うが、4層には炭化物が多く、FJ 48トレンチの7層に類似している。上層においても粘性のある暗褐色土が厚層をなし、共通する堆積である。遺物は2層に染付片1点が出土している。

通路側部分では軸注頭に沿って大小の腰が多い量に認められているほかは未確認である。

図11 因島東北の地質全図





第12図 Iの郡東辺疊層断面図(5号地)

## (2) 土壘と柵列 (第12図 図版8)

FJ48トレンチでは、東西法面共に緩やかになって判然としていないが、僅かに山なりをなして削り出される。IIIの郭の切土面によっては基底幅4m、高さ0.58mである。上面は地山と同質の風化跡を伴う褐色土が被っている。

遺物は青磁、磁石片が1層に出土し、炭化米が東法面の1～2層に認められる。また、1層には径5×3cmの小塊をなす焼米が検出される。

Fa. 48トレンチにおいては5号堀に40°勾配をなして続く西法面に比し、東法面では著しく緩やかとなる。地山削り出し面に僅かに褐色土が被い、盛土の形跡は明確ではない。

Ef33柵列は土壘のもっとも高位となる中央部以北に地山面で検出される。5号堀に沿って山なりをなす土壘中央よりやゝ西側して布施りをなし、南北35.7mまで確認される。北端は現状保存区域へ続いている。断面U字形の溝幅は0.30～0.50mを計り、深さはFa～Fcにかけて0.80～1.09mに及ぶが、低位となる北端に浅く0.10m前後である。平坦な底部には径0.10m前後をなす円形の打ち込み状ピット99が認められ、溝中央部に0.10～0.20mの間隔を有して配列される部分が多い。

覆土は地山の褐色土に酷似し、部分的に疎を伴ってやゝ締りの強い褐色土である。材の痕跡は底部に認められるほかは一様の褐色土で識別できない。

## (3) 通路 (第2、11図)

IIIの郭よりIIの郭に至る5号堀にかかる部分である。表十下層より多くの小礫を伴い、細砂を含む堅固な暗褐色土の広がりが認められる。5号堀北端においては砂礫の混入が少なく、若干の相違がみられる。また、西端には柱穴状のピットを検出しているが明確ではなく、上橋の構築についても未確認である。遺物は陶器片2点、火縄鉛弾1点である。

## (4) 遺物 (第13図 第5、6表 図版42)

57点余りのうち陶磁器が大半を占め、若干の鉄製品、石製品、炭化米が出土している。通路に接する5号堀北端にやゝ多く、層位的には覆土下層に炭化米が含まれるほかは殆ど厚層をな

第5表 I の郭東辺の墳塚出土遺物

出土地点	層数	行	組	目	種	分	生地	鉄	石	木	瓦	漆	石製品	骨	角	器	類
FJ48トレンチ	2					1											
FJ48トレンチ	1・2	1				4	5										
FJ48トレンチ	5																
土 壁	7～9																
土 壁	1	1	1	2	6			1	1		2		1	1	1	1	
土 壁	2					1											1
通路及び 5号堀北 端	1	1	2	2	(1)				1								
通路及び 5号堀北 端	2		3	4	(1)		1		2		(1)						1
通路及び 5号堀北 端	3				1	2											
通路及び 5号堀北 端	4～5				1												1
計			3	7	20	9	2	5	1	6	4	3					

す上層に集中している。共に小破片で図示できるものは少ない。前表は調査途上における出土破片数である。

#### 青磁（第13図 図版44）

3点共に皿片であり、口縁部2点、底部1点である。口縁部(98)はやゝ薄くなつて外反し、口縁端に丸味を有する輪花皿である。二次加熱によって内外面共に灰白色となり、内面の波状文は明瞭でない。胎土は緻密で灰白色を呈する。推定口径12.0cm、土器出土。(97)は削り出しが滑らかでやゝ丁寧なつくりの底部である。高台内を除いて施釉され、高台脇に薬瘤がみられる。内外面共に薄い灰緑色を呈する。底部内面には花弁の一部が認められる。胎土は灰白色をなし、小さな間隙を有する。推定高台径6.0cm、高台高0.7cm。Fj 48トレンチ3層出土。

#### 白磁（第13図）

7点のうち皿の底部2点、小杯の口縁部1点が含まれる。(80)は高台幅0.5cmでやゝ分厚いが、底、体部共に薄手である。高台端に無釉部分を有するほかは一様な青みのある白色をなし、内外に貫入が走る。胎土には微小な気孔があり、灰白色を呈する。推定高台径6.0cm。(69)は高台内に白砂の付着が著しく、腰部の器厚に厚薄があつてやゝ粗雑である。内外面共に灰白色を呈し、高台脇に僅かに厚い。胎土は灰色がかかるて間隙が認められる。推定高台径5.8cm。

小杯は体部から口縁部にかけて緩やかに外反して端反りをなす。器厚は0.15cmで薄く、釉調は一様の白色で光沢が強い。胎土は緻密で白色である。口徑6.0cm前後と推定される。いずれも5号窯北端1～2層出土である。

#### 染付（第13図 図版44）

20点中碗6点、皿5点が認められる。細片が多く全体の不明なものが大部分であるが、光沢がつよく、焼成の良好な近世後半以降の小片1点が含まれている。

碗の口縁部2点は体部より直行して立ち上がり、口縁端に丸味を有する。1点は内外に淡水色の2条線と外面に繪青の施文があるが、二次加熱をうけて不明瞭である。胎土は共に緻密で白色をなす。推定口徑16cm、土器1層出土。

底部2点のうち(72)は底部および高台を打ち欠いており、外面に打痕が認められる。高台端を除く施釉はやゝ灰白色をなし、高台にかけて淡青色の2条線が廻り、腰部に描画がみられる。底部の器高1.0cm、高台径2.8cm。5号窯北端2層出土。

皿は内側する口縁部1点、体部より外反して端反りする口縁部2点、底部1点である。内側する口縁は薄く引き出されて丸味をもつ。内面には繪青色の施文があり、外面体部に淡水色の細線2条が走る。推定口徑10.0cm、5号窯Fa 48トレンチ2層出土。端反りの口縁部は口縁端に棱を残す小片で、淡水色の発色である。同西法面1層出土。

底部(130)は高台の削り出しも丁寧で安定しているが、高台に沿って亀裂が認められる。高

台端を除く施釉は灰白色をなし、内面は二次加熱によって灰色が強く、質入がみられる。内面は濃淡の藍色で線描され、高台脇に淡青色の細線3条が残っている。胎土は灰白色を呈する。推定高台径7.8cm、5号堀北端5層出土。

#### 灰釉陶器（第13図 図版42）

すべて皿片とみられる。淡黄緑色をなし、内外面に大小の質入が認められ、柔らかい白色の均質な胎土を有する。体部6点には縫を残すものが2点含まれ、二次加熱をうけて白色の斑点状をなし、釉薬のとぶものがある。底部3点は器厚0.45～0.70cmを計り、不整である。底部(208)は全面に淡黄緑色をなし、高台脇に厚く薬溜する。高台内には輪トチンの刺離痕を残す。推定高台径6.7cm、5号堀Fj 48トレンチ3層出土。そのほか高台端を欠く小片があり、内面に花文が認められる。二次加熱によって胎土は赤みがかった灰白色である。通路1層出土。

#### 鉄軸陶器（第13図）

口縁部、底部各1点で、共に茶碗とみられる。口縁部(7)は薄く引きだされて外反する。内外面黒色をなし、口縁端は黒褐色を呈して光沢がやや強い。胎土は灰白色である。推定口径11.0cm、通路北側2層出土。他の1点は高台をほぼ垂直に削り出し、内取りされる底部片である。黒色をなす内面には無数の擦痕が円形に認められる。胎土に気孔が認められ、淡褐色を呈する。推定高台径5.2cm、疊付幅0.6cm、底部の器厚0.5cm。Fa. 48トレンチ北土塁1層出土。

#### その他の陶磁器

片口の口縁部1点、碗の体部片2点、甕の体部片1点、小鉢とみられる口縁部1点がある。片口はやや厚手で、内外面共に乳白色を呈し、柔らかい白色である。また、小鉢は僅かに外反して口縁部に厚く、獨いくびれを有する。内外面青灰色をなし、口縁端は二次加熱をうけて白色化している。共に5号堀1～2層出土である。

#### 須恵器

甕の体部小片1点である。外面にヘラ削り調整痕を残す。胎土は灰色を呈し、粗粒が多い。

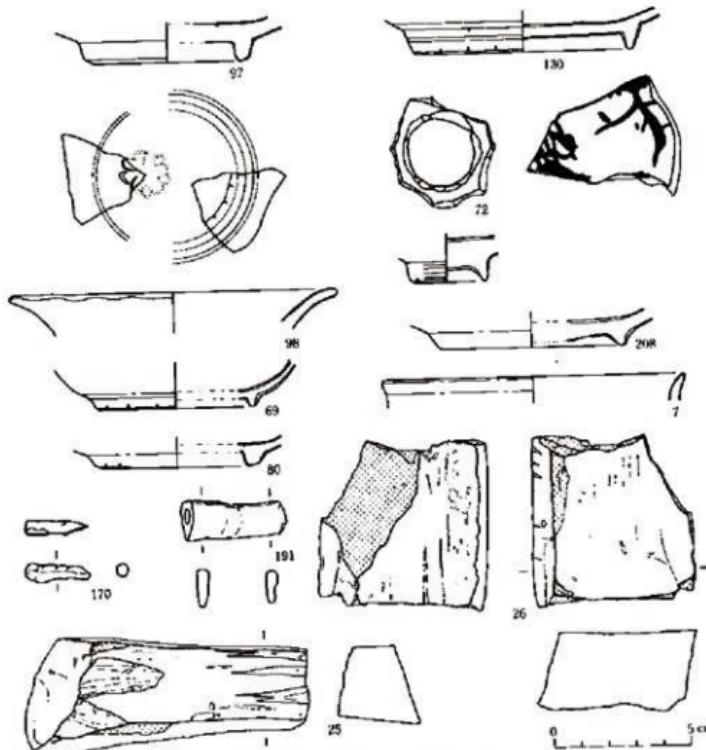
#### 金属製品・鐵滓（第13図）

鐵製品は共に折損する小片であるが、釘様(170)のもの3点、鐵板、小柄とみられる破片各1点である。(191)は刃部境で欠損し、誘化が進んで剥落している。現存長3.9cm、刃幅1.5cmである。5号堀Fj 48トレンチ3層出土。

そのほか通路の小標に混じる火繩の鉛弾1点がある。青灰色を呈し、1.2cmの球状をなす。鐵滓1点は海綿状をなす4.6cmの小滓である。5号堀1層出土。

#### 石製品（第13図）

砾石2点、石臼1点である。砾石(25)は一端を折損する長方形で、4面面を有して縱方向に溝状の研磨痕が残る。現存長10.0cm、幅4.1cm。(26)は両端を欠き、断面不整な長方形をな



第13図 1の羽東辺5号堀出土遺物

す。現存の長さ6.2cm、幅5.8cm。共に二次加熱によって赤色化する斜長石流紋岩である。それ  
ぞれ48トレンチ5号堀3層、同土壌出土。

石臼は下臼受皿の縁片である。粗粒凝灰岩砂岩製で、推定外径40cm。同5号堀3層出土。

#### 表類（第6表）

5号堀覆土及び土壌に広く散乱する炭化米である。10例によってみると、一粒の長さは0.

第6表 5号堀土米計測表

No	長さ	幅	厚さ	厚さ	長短比	備考	No	長さ	幅	厚さ	幅	長短比	備考
1	4.7mm	2.5mm	1.8mm	—	1.81	—	6	4.8mm	2.5mm	1.7mm	1.92	—	—
2	4.4	2.5	1.7	—	1.76	—	7	4.3	2.2	1.7	1.95	有芒	—
3	4.4	2.3	1.7	—	1.91	—	8	4.2	2.2	1.7	1.91	—	—
4	4.7	1.8	1.5	—	2.61	—	9	4.4	2.9	2.0	1.52	—	—
5	4.7	2.7	1.9	1.74	有芒	—	10	3.5	1.8	1.5	1.82	—	—

35~0.48cm、幅0.18~0.29cmを計り、大小混在している。長幅比は1.52~2.61である。このほか北端4層及び土壌より径3.5×5.0cmの小塊をなす焼粧が出土している。

#### 要約

Iの郭東辺は安山岩質凝灰岩の風化礫を伴う地山を削り出し、42°前後の勾配を有して5号堀に続く。もっとも東端に張り出す中央部南側ではこれに符合して高位となり、鞍部をかけては緩やかに下降している。

高位の南トレンチでは底部が広く、緩やかな法面をなして諸薦研状を呈し、北進して薦研状をなす。幅5.14~5.62m、深さ1.42~2.25mを計る。北に深いが、法面の勾配やIの郭削平地面における比高に著しい相違は認められない。

覆土は共に東西の法面に沿う堆積層によって占められ、部分的にレンズ状の堆積が認められる。底部より中位層にかけては大小礫が混入し、特に南トレンチでは巨石を伴っている。これより西法面にかけてのみ炭化米が認められ、東辺削平地の変遷に伴う流入とみられる。また、厚層をなす上層においても南北トレンチには対応する堆積層を形成し、同様の影響をうけているものと推定される。東法面に沿う堆積については比較的初期の段階に地山に類似する流入土が認められ、土壌上の盛土である可能性もあげられる。また、南トレンチでは更に若干の水平堆積層が認められ、6号堀と同様に改修による相違も考えられるが、共に明確ではない。

北端の通路にかけては殆ど同様の堆積をなすものとみられ、通路上層では砂礫層をなし、5号堀に異なっている。推定される土橋は未確認であるが、通路に近接するほど粘性が強く、調査中の湧・滲水の状況や遺物の分布によつては一定期間に渡って堰止められているものと推定され、4号堀に境して平坦をなす現状地形に符合するものである。

5号堀に平行する土壁は、東へ張り出すIの郭東辺の中央部がもっとも高位となり、鞍部東辺に沿つて下降し、共に対応して形成される。しかし、旧表土は認められず、盛土による築成の形跡は確認されていない。その大部分はIIIの郭形成に伴つて削平をうけているとみられるが、基底幅3~4mの削り出しによって低平な山なりをなし、更に後述するIIIの郭西辺にあって重複する削平地の切土をうけて形成される部分も認められる。盛土構築については特に低位となる鞍部東辺に沿つて4号堀南法面の疊層に対応する東法面に多量の礫がみられ、残存部の散乱する礫を含めて盛土によって築成されている可能性があり、また高位部分においても削平地に多量の礫が認められる点で同様に類推されるものではある。

土壁のもっとも高位をなす北端より鞍部にかけて配される柵列は、壁壘に付設する配備であり、推定される旧地形に対応するものである。土壁と同様に上部の削平も認められるが、幅0.30~0.40m、深さ1m前後の布掘りをなし、径0.10cm前後の丸太状の杭を打ち込み、これを並列させる木柵である。覆土によって単一期の構築と見做され、上壁中央部より西側して配され

る点では盛土の崩落防止を兼ねるものと解される。また、同様の布振りを有する柵列は低位となる4号堀南辺に認められ、対応する柵列とみなされる。

遺物はモとして5号堀に検出され、その大部分は上層に含まれるが、炭化米については下層に西偏して認められ、1の郭削平地に伴うものとみられる。南トレンチでは二次加熱をうける遺物も多く、火災焼失に伴う削平地の変遷や建物施設の存在を示すものである。また、通路付近の下層には明代の磁器が出土しており、開削時期に近接する遺物とみられる。

### 3. IIの郭東辺

Iの郭東辺より通路を経て北に続く5号堀の延長にあたり、北辺は小溝をなして熊川に至る総長140mの4号堀である。土壠はIIの郭北辺削平地の西辺に僅かに高位部分をなして認められるほかは明瞭でない。

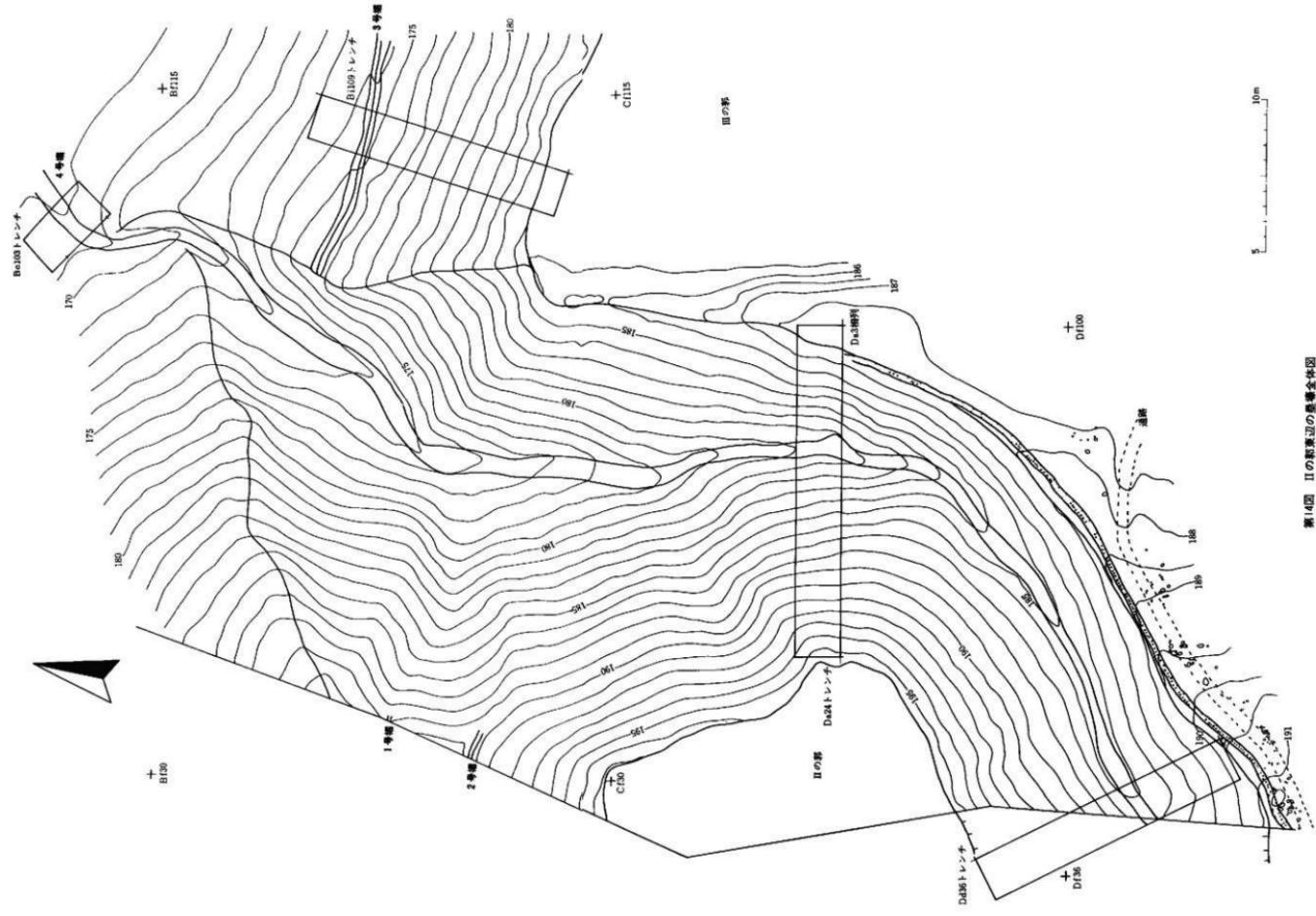
調査区域は南西の一部を除くIIの郭東辺以北であり、調査はIIの郭南東2辺にはメ直交する幅3mの試掘溝Dd42及びDa24トレンチを設定して進めるが、南西の一部が現状保存区域となり、改めてDd36トレンチを設定し、さらに全面発掘とした。しかし、北辺については東西3m、南北6mのBc103トレンチによったのみである。

検出遺構は4号堀のほか、これに沿ってIIIの郭西辺にあたる東辺には柵列及び土壠状の遺構があり、これを含めて記述する。遺物は主として4号堀南西の覆土に多く、陶磁器、木製品等である。なお、土壠に重複する遺構については土壠及び柵列を除いてIIIの郭削平地の遺構として後述している。

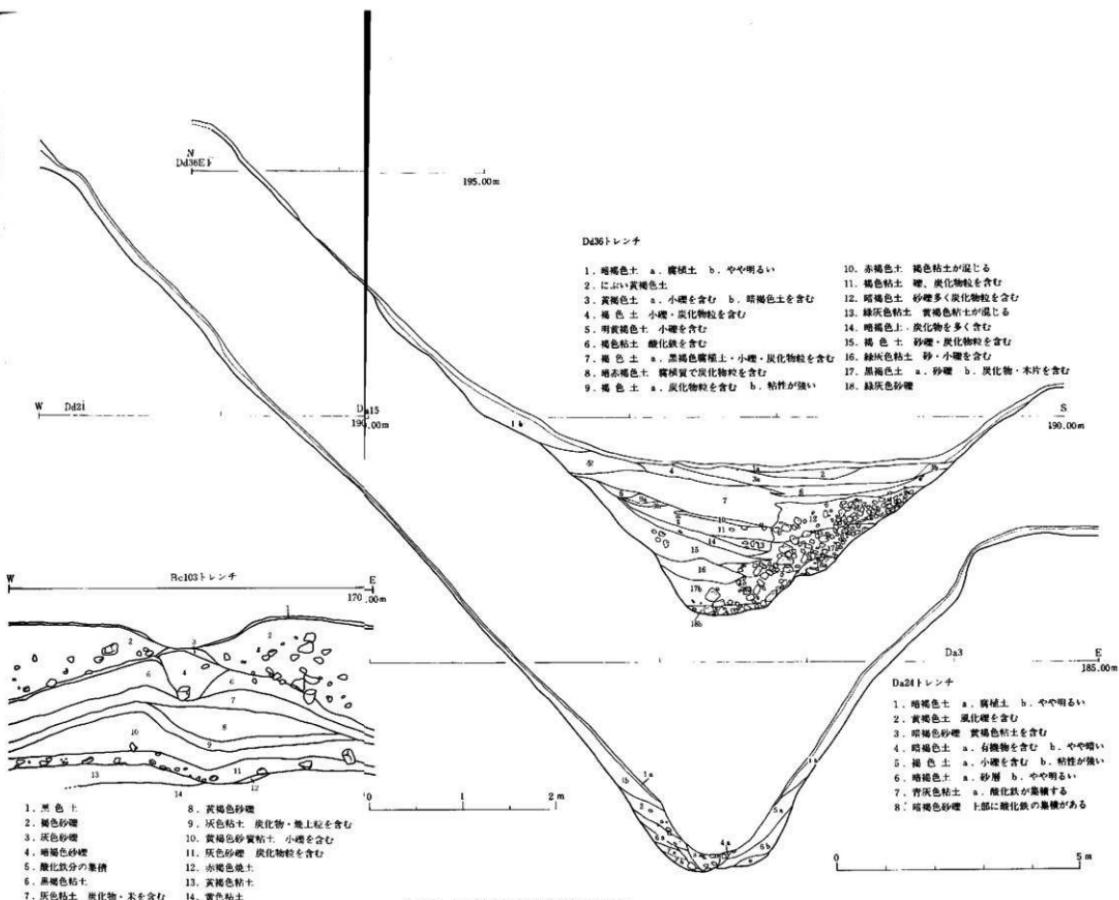
#### (1) 4号堀(第14、15図 図版5~8)

IIの郭南西辺は約10mの比高を有して4号堀底部に達している。上方の法面は45°、下方では27~28°勾配をなして緩やかとなるが、4号堀振り込み面では40.5~44.5°勾配を計る。幅8.95m、底部幅1.55m、深さ3.54mである。底部は南西辺で5°前後をなして北東へ傾斜している。

覆土は南西辺ほど厚く、2.96~3.11mに達する。北法面に沿う厚層のほか、南法面には多量の跡を伴い、下層ではグライ化が進んでいる。Dd36トレンチにおいては18層に大別され、上層の水平堆積のほか、北法面に沿う厚層が特徴的である。地山類似層は5層であり、黄褐色、または赤褐色土の混土が15層以上に多い。また、16層以下は砂礫を含み、グライ化して粘性が強いため、炭化物粒は4、7、9、11、14、15層に含まれ、うち7、14層には磁器、炭化穀類が混入し、中位層以上に各種の遺物が認められる。一方南法面には大粒の大小跡が堆積し、その広がりは南西辺全域に及び、5号堀北側の東法面にも散見される。乱雑な堆積であり、下層に入ると大の跡が目立ち、上層では比較的小跡が多い。北法面に沿う堆積層は不明瞭となり、著しい湧水によって細別されない状況にある。下層における遺物には磁器、炭化穀類、木製品のほか、若干の雜木片が含まれる。



第14図 IIの郭東辺の馬鹿全体図



第15図 IIの鶴来東の基壠断面図(4号縦)

東辺ではIIの郭削平地に沿って南西辺より湾曲して進み、1～2号堀接合部付近で北東方向に転じ、蛇行して北辺に達する。法面は西方で47°前後の傾斜を有して一挙に底部に達し、比高は15mに及ぶ。東方では55°勾配をなしてIIIの郭に達する。底部における法面の交点は78°を計る。堀幅は1～2号堀付近でやゝ広く、これより以北では次第に狭少となる。Da24トレンチでは堀幅7.46m、底部幅1.35mとなり、深さ4.15mである。底部は部分的に広狭が認められ、高低差が大きい。東辺より北辺にかけては12～21.5°勾配をなして傾斜し、南北の比高は16mである。

覆土は東西法面に沿う地山面の崩壊土、あるいは流出土の堆積がみられるが、底部中央部では殆ど流出している。Da24トレンチでは法面に沿う1、2層に風化礫を含み、下層ではグライ化する青灰色粘土である。中央部は砂疊層をなし、絶えず苦しい流水がみられる。遺物は1点も出土していない。

IIの郭北東辺より熊ノ沢に至る北辺では堀幅1.50m、深さ0.20～0.30mの小溝をなし、明顯な開削は認められない。Bc103トレンチにおいては多量に流入する堆積削に被われ、その上層に流路が開かれている。わずかに6層を切る4層の砂疊層が認められるが2層と同質であり、6層以下では砂疊層、粘土層となって掘り込み面は明らかでない。14層の黄褐色土層では焼土の形成が認められるが、湧水によって確認できないま、埋め戻している。遺物は7層に炭化米が混入するほかは検出されていない。

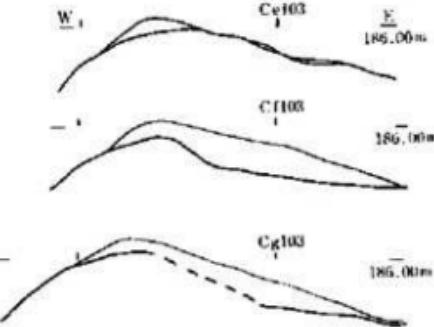
なお、IIIの郭北辺の緩斜面に設定するBa103トレンチにおいても北辺トレンチ2層に相当する炭化物粒の多い褐色土層が厚く被い、同様の堆積が認められる。

### (2) 土壘 (第14、16図 図版20)

4号堀南西辺ではIIIの郭の通路に境して幅1.0～1.50m、高さ0.10m前後の地山削平面が認められるが、明らかに盛土構築による土壘は認められない。南西辺より東辺にかかる湾曲部分においても同様であり、僅かに地山に類似する黄褐色土が被っている。IIIの郭北東にあたる北辺では、土壘状をなし、特にCi100以北には暗褐色土の盛土が認められ、0.5mの潜厚をなす。基底幅2.20～3.50m、高さ0.40～0.60mを計るが、III-1、2号平地の形成に伴つて同一性は認められない。遺物は表土に微細の炭化米と青磁片1点が出土している。

### (3) 棚列 (第14、17図 図版8)

南西辺より東辺にかかる4号堀に沿って僅かに高位となる土壘状をなす地山面に確認されるDa3棚列である。北端は4号堀東法面に至って消滅し、南西では現状保存区域に統く総長44m



第16図 IIの郭東辺土壘断面図(1:100)

である。5号墳に沿って配される柵列と同様に布堀りをなし、幅0.30~0.50mを計る。深さは東方ほど浅くなるが、最深部で0.68mである。底部には径0.10m前後の円形をなすピット120が認められ、南西辺では部分的に径0.30m前後の円形をなす性痕が確認される。配列はやゝ不規則であるが、0.10~0.20m前後に配される部分が多い。

第17図 柵列断面図

覆土は地山に酷似する褐色土や黄褐色土で締りが強く、南西辺では牛の蹄が含まれる。遺物は中央部の上層に染付片1点が出土している。

重複する柵列には田一5割半地におけるDh27溝があり、柵列はこれを切って構築している。

#### (4) 遺物 (第18~20図、第7~9、121表 図版44、45、47)

4号墳出土の遺物は86点余りにのぼる。陶磁器をはじめ、金属製品、石製品、木製品、古錢、植物遺体等が含まれるほか、須恵器、繩文土器片が若干出土している。共に小破片で復元可能なものはない。大部分は南西辺の覆土に混入し、東辺では陶磁器3点のみである。南西辺の覆土によって大別V層とすれば、遺物の70%以上はV層以上の上・中位層に含まれ、陶磁器がもっとも多い。木製品はV1・V2層の下層に限られ、炭化穀類は各層に散在している。炭化米のはか大麦、粟、小豆等である。

第7表 4号墳出土遺物

種類	Dh	古	褐	白	磁	尖	目	水色灰青	黄褐色	土色の 底地部	直	曲	鉢	壺	瓶	甕	罐
I(1~2)		4	3	1							3	1	1				
II(3~4)		3		3	1					1				4			本
III(5~7)		3	3	6	3						2			3			木・大友・小豆
V(9~11)		1		4				1		1	1	1	1	1			木・大友
V(13~14)		3	3	2										2			"
V(15)														1			木・大友・鐵・小豆
V(16)				2										1			木・小豆
V(17~18)				4										1		12	木・大友
計		7	10	25	7	1	2	3	6	9	2	2	12	12	2	2	

土塁には東辺北方の上層に青磁1点、炭化米若干が出土し、柵列の覆土上層には染付の細片がある。

#### 青磁 (第18図 図版44)

7点のうち碗3点、皿2点が認められる。二次加熱によって灰白色をなす破片4点、焼成不十分な灰白色の皿1点が含まれる。

碗の口縁部2点のうち(32)は内外面に成形痕を僅かに残し、体部外面に小粒の付着物がみられる。一様の暗緑色を呈するが、口縁端に薄く淡褐色となり、貫入が認められる。口縁直下には不規則な波状の沈線が走り、蓮弁文が線刻される。胎土は緻密な灰白色である。推定口径14.4cm、4号墳III層出土、(37)の口縁部はやゝ薄手で滑らかである。施釉は二次加熱によって灰白色となり、内面の一部は淡赤褐色となって光沢を失っている。口縁直下に微かな沈線が走

る。推定口径12.0cm、器厚0.45cm、同IV層出土。

皿の底部(36)は腰部に僅かな成形痕がみられ、内面には棱を有する。高台は安定した削り出しである。暗緑色の施釉は全面に及び、大小の貫入が認められる。胎土は粗粒が含まれ、灰色である。推定高台径6.0cm、同IV層出土。

#### 白磁(第18図、図版44)

10点共に皿とみられ、口縁部に端反りするものとやゝ内彎して立ち上がる皿1点が含まれる。口縁部4点のうち(45)、(42)は緩やかに外反し、(45)はやゝ亞みがある。内外面一様の白色釉で(45)はやゝ光沢が薄く、貫入が走る。(42)では砂粒の付着を有し、灰色の斑点が広がっている。胎土は緻密であるが(42)は小さい亀裂がみられる。推定口径はそれぞれ12.0、10.8cm、同III、V層出土。(39)は外面に棱を有する内彎する皿である。乳白色を呈し、微細な貫入が全面に及び、やゝ光沢が弱い。胎土は密で淡褐色を呈す。推定口径10.0cm、同I層出土。

底部4点のうち(2)は腰部が薄く、底部はやゝ歪んで高台内には亀裂がみられる。二次加熱をうけて灰白色を呈する。推定高台径6.2cm、IIの郭東辺の斜面出土。(7)は厚手で高台脇の削り出しがやゝ深い。高台脇には細砂の付着が残る。全面に及ぶ施釉は高台脇に厚く青白色がかり、光沢が強い。推定高台径6.5cm、底部の器厚0.5cm。(36)は高台に砂粒の付着が多く、高台内や胎土に亀裂が入り、光沢も弱く粗雑である。推定高台径6.0cm、(7)、(36)共にI層出土。

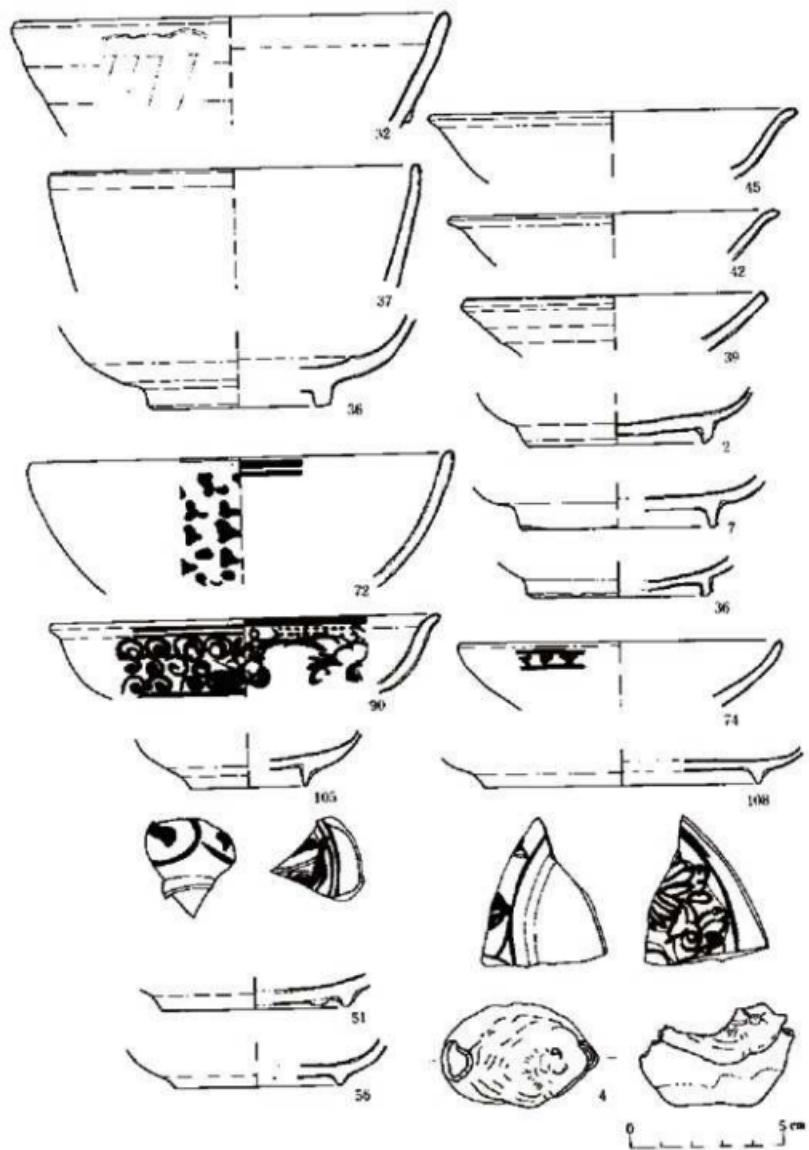
#### 染付(第18図、図版44)

碗4点、皿9点、盃1点が判明する。また、二次加熱によって光沢を失い、器面の変色が認められる5点が含まれる。

碗(72)は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部でやゝ薄くなる。白磁は二次加熱をうけて青灰色となって光沢を失ない、貫入が走る。内外に2条、更に外面に線描をなすが、くすんで不鮮明である。推定口径14.0cm、4号墳IV層出土。

皿の口縁部は3点であり、端反りの皿2点、内彎する皿1点である。(90)は口縁部に至って僅かに外反し、やゝ亞みをもつ。内面の唐草、外面の渦巻文は濃淡のある繪青をなすが、二次加熱によって光沢を失っている。胎土は緻密で白色を呈し、灰色となる変色部分を有する。推定口径12.6cm、同IV層出土。(74)は内彎して立ち上がり、口縁部にやゝ薄い。淡緑色の白磁に青灰色の区画帯が外面に廻り、胎土はやゝ密で白色である。推定口径10.6cm、柵列覆土出土。

底部(105)は腰部からの立ち上がりが強く、碗の底部とみられる。高台は薄く削り出され、高台内がやゝ深い。内外の施釉は発色のよい青色をもって描画され、見込みに重團文を有する。推定高台径3.8cm、同IV層出土。(108)は器厚の薄い端整な皿の底部である。高台に僅かに砂粒が付着し、外面に唐草、内面に菊花文が描かれる。胎土は緻密で白色を呈する。推定高台径9.



第18図 IIの新東邊4号墓・横列出土遺物（1）

0cm、同VII層出土。そのほか、皿の底部片にはIIの郭削平地2枚出土片に接合する砂高台片がIV層出土している。

その他やゝ厚手で内面に薄青色の発色をなす底部片4点、口縁部がくの字状に外反する細片1点があるが、全体は明らかでない。25点中碗の体部片2点が伊万里系とみられ、他は明代の舶載品である。

#### 灰釉・鉄釉陶器（第18図 図版45）

灰釉は7点共皿片であり、端反りする丸皿2点が含まれる。共に淡黄緑色を呈するが、1点は二次加熱をうけて白色化している。

底部6点は厚手で歪みがあり、全体的に粗雑である。高台には不整な円形の輪トチ痕が残る。施釉は全体に及び、殆ど白色に近い。胎土は間隙が多く、白濁色である。推定高台径6.2cm。(56)はやゝ薄く削り出されて整っている。高台脇にはやゝ厚い薬溜があり、高台内に薄い。貫入には鉄分が沈透し、胎土と同様に褐色を帶びている。推定高台径5.4cm、共に同V層出土。

鉄釉は水滴1点である。水鳥形で頭、尾の一部を欠いている。頭部に沈線を有し、その直下に押圧して眼を描く。羽根は短い降線をもって表わすが、左右不整で胸部に偏って接合する。底部は糸切り痕が残り、歪みがあってやゝ不安定である。頭部より胸部にかけて黒褐色を呈するが、陰線では薄い褐色をなす。現存長5.2cm、胴径3.4cm、高さ3.4cm。同IV層出土。

#### その他の陶器・須恵器

壺片とみられる3点である。1点は外面に格子状の平行する叩き目文が残る。他の2点は頭部及び体部片で同一個体とみられる。粗粒の目立つ灰褐色の須恵質である。同IV、III層出土。

そのほか壠場とみられる鰐物岸の付着する口縁部片がある。同IV層出土である。

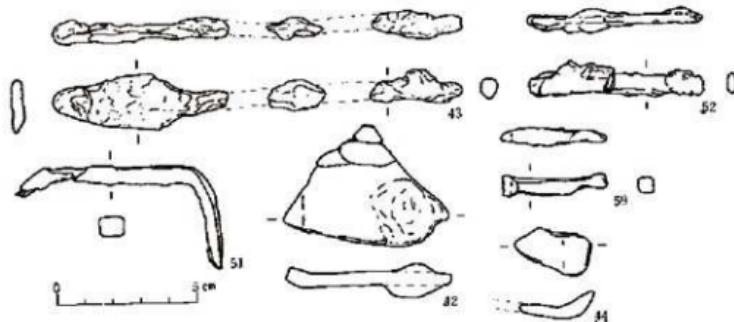
#### 縄文土器

摩耗の著しい6点である。2点は单節斜纏文の地文に波状の沈線がみられる。胎土に小砂を含み、焼成は良好で褐色を呈する。前期、または中期とみられる。その他晩期の小片が含まれる。同I～III層出土。

#### 金属製品、古銭（第19図 第122表）

鉄製品8点、銅製品1点である。鉄弾を除いて折損しているが、鉄鉤、鉄釘、鍔等が推定される。鉄錐2点のうち(43)は刃部の現存長6.1cm、刃幅2.0cmを計る。(52)は鉄鉤の基とみられる。現存長6.2cm、断面は長方形に近い。それぞれ同II、III層出土。(51)は両端を欠損する鍔とみられ、現存長7.3cmである。同III層出土。

その他板状の鉄片2点があり、(42)は鍋底状をなし、(44)は煤が付着して皿状をなす。それぞれ同II、III層出土。



第19図 北の郡東辺4号塚出土遺物(?)

寛永通寶2点である。共に背文「文」を有する。1点は二次加熱によって文字面が歪み、小孔が認められる。同VI層出土。

#### 石製品

砥石1点、水晶2点がある。砥石は加熱をうける小片で、2底面が認められる細粒石質凝灰岩製である。水晶は6面の加工された宝形をなす。径・高さ共に0.65cmを計る。同IV層出土。

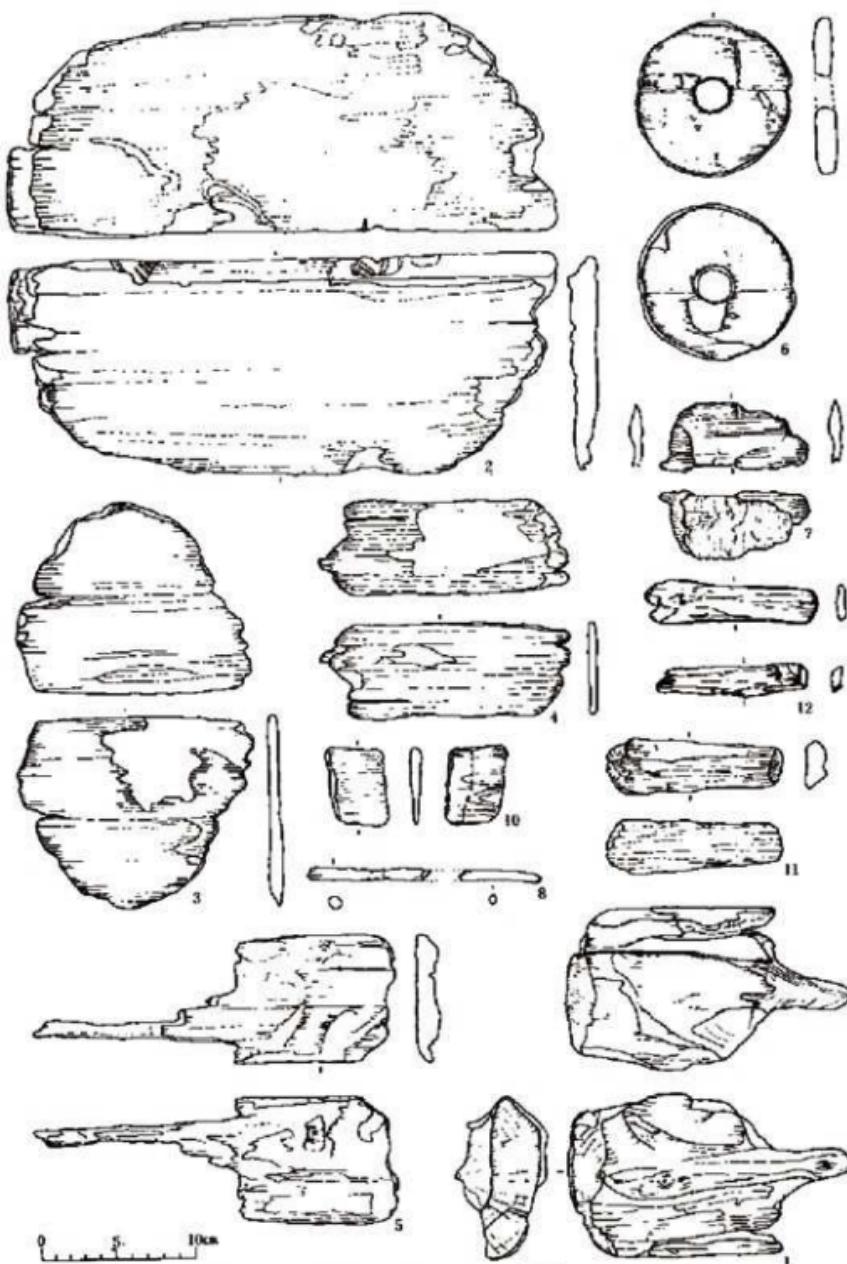
#### 穀類(第8表)

炭化米がもっとも多く、大麦、粟、小豆が微量含まれる。粟を除いて焼彫れや胴割れするものが多く、粉が若干含まれる。下表によってみると、一粒の長さ0.38~0.52cm、幅0.12~0.30cmで大小混在し、長幅比は1.39~2.36である。

大麦では一粒の長さ0.52~0.64cm、幅0.26~0.32cm、厚さ0.22~0.29cmを計り、焼彫れするものが大部分である。小豆は長さ0.63cm、幅0.39cmを最大とする3粒である。また、粟は穀中に混入しているとみられるが、同VI層中にのみ長さ3.2cm、幅2.0cm、厚さ1.5cmの小塊をなして検出される。外面に纖維質が付着し、粟粒には種皮が認められる。

第8表 4号塚出土米計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長幅比	種	No.	長さ	幅	厚さ	長幅比	種
1	4.7mm	2.7mm	1.6mm	1.74	豆網(1~4)	13	5.2mm	2.2mm	2.0mm	2.36	
2	4.9	3.0	2.1	1.63	梗	14	4.6	2.6	1.7	1.77	V網(14~17)
3	4.3	2.6	2.1	1.65	梗	15	4.7	2.8	1.8	1.66	
4	4.7	2.3	1.4	3.04		16	4.3	3.2	2.1	1.34	
5	4.2	2.7	1.7	1.24	豆網(5~8)	17	4.9	2.8	2.0	1.75	VI網(17~21)
6	5.1	2.7	2.0	1.86		18	4.7	2.8	1.8	1.68	
7	3.8	1.7	2.3	2.24		19	5.0	2.6	1.7	1.92	
8	4.7	2.6	1.7	1.83		20	4.7	3.0	1.9	1.57	石芯
9	4.6	2.6	1.7	1.77	豆網(9~13)	21	5.2	2.8	1.8	1.86	
10	4.9	2.2	1.7	1.53	梗(1)	22	4.7	2.6	1.7	1.81	V網(22~24)
11	4.3	2.1	2.2	1.59	焼彫れ	23	4.6	2.7	1.9	1.70	
12	4.7	3.2	2.1	1.47	梗(2)	24	4.2	2.2	1.7	1.91	



第20図 IIの郷東辺4号墳出土遺物（3）

## 木製品(第20回 第9表 図版47)

加工木材を含む12点である。いずれも破損し、用途の明らかなものはない。板状をなす(2)、(3)、(4)、(7)、(8)は直線に沿って加工され、桶底状をなす。(8)は著片とみられる。また、(6)は中央部に径2.1cmの穿孔を有し、摩耗の痕跡が認められ、回転に伴うものとみられる。その他若干の雜木片が出上している。共に同図附出七。

第9表 4号堀出土木材・木製品

No.	長さ	幅	厚さ	材種	状態	直径	穿孔	長さ	幅	厚さ	材種	状態	直径	穿孔
1	(7.8m)	10.3m	7.26m	丸太	ヒノキ(セバ)	7	+	0.3m	3.0m	0.8m	楓	枝	1.5m	なし
2	35.1	13.4	1.8	板	スギ	9	-	7.7	0.8	0.8	杉	板	不	なし
3	15.0	12.1	0.9	板	スギ	9	-	10.8	2.8	0.5	杉	板	2	なし
4	15.3	9.8	0.5	板	スギ	10	-	4.2	4.2	0.2	杉	板	2	なし
5	22.7	8.1	1.4	板	スギ	11	-	11.1	3.5	1.4	杉	板	2	なし
6	6.8	9.7	1.3	板	スギ	12	-	9.5	1.8	0.6	杉	板	2	なし

## 要約

IIの郭東辺を限る4号堀は5号堀の延長にあたり、調査区域中最大の規模を有する。堀幅8~9m、深さ3.5~4.5mであり、IIの郭削平地との比高は15m、IIIの郭では7mに及んでいる。その形状は流失や崩壊によって若干の相違があるが、法面は40.5~55.0°の急勾配をなし、5号堀に続く豪研掘とみられる。しかし、北辺の緩斜面にあっては明確な掘り込み面が確認されず、現状に沿う流路が認められるのみである。底部の比高は地山を切る緩斜面境において16mに達しており、自然の流路に依っているものとみられる。

堀上は東辺以北で殆ど流失しているが、南西辺に若しくよい堆積をなす。法面の崩壊によるほか、IIの郭削平地形成に伴う流入堆積とみられ、数回に渡る削平地の変遷にかかるものと推定される。出上する遺物によって火災焼失に起因する削平地の造成や建物施設が類推され、また、寛永通寶の出土によって中位層以上は17世紀後半以後に堆積するものとみられる。このほか、5号堀北端とト様兩法面に沿っては大量の礫が認められる。大小混在して特長をみい出しえないが、推定される旧地形ではもっとも低位となる鞍部東辺に限られ、併設される土塁の崩壊に伴う堆積もあげられる。

土塁は4号堀に沿ってIIの郭北西辺に削り出しをうけて形成されるほかは僅かに高位をなし、明らかな盛土構築の痕跡は削平にあって認められない。しかし、柵列の削平状況や南接する礫の分布、更には4号堀における礫の堆積によって空堀に沿って形成されていることも考えられ、Iの郭東辺の土塁によってみるとなるらば高さ0.6~0.9m以上に達するものと類推される。東辺北部では柵列が4号堀法面に至って失われ、削平地に伴う削り出し土塁上には後述する建物構造が存在しており、この点では土塁は更に西方に偏って構築されているものと想定される。

柵列は南西辺より東辺にかけて4号堀に沿って蛇行し、その北端は急崖をなす4号堀法面に至って消滅している。東法面は著しい急勾配をなしており、法面の崩壊に伴って失なわれるも

のとみられる。横列は断面U字形をなす溝状の掘り方を有し、杭、または柱を据え、あるいは更に打ち込み、並列して構築される。Iの郭東辺の横列に類似する構造とみなされ、同時に連続、または対応する横列と解される。

遺物は明代の青磁、白磁、染付のほか、美濃産の灰釉陶器を中心であり、地方窯の陶器は明らかでない。いずれも碗、皿類であり、甕、壺類は少ない。金属製品では武器、鉄釘のほか、皿状の鉄片があり、燈明皿等の断片であろうか。炭化米をはじめとする穀類の出土は木製品と共に最下層に出土し、4号堀開削直後の流入とみられる点で5号堀に共通するものであり、4、5号堀開削以前の所産とみなされる。

#### 4. IIの郭北辺

IIの郭北辺の壁塹は北西よりやゝ蛇行して東進する150m余りの壁塹であり、部分的に二重塹と水抜きが認められる。更に北東に張り出す削平地北辺では約50mに及ぶ二重塹をなし、共に東端で4号堀に接する。

当初の調査区域は壁塹の東端部分であり、削平地を限る2号堀20m、北に平行する1号堀13m及び付属する土塁である。調査は東西3m、南北20.6mの試掘溝Bi33トレンチによって進められたが、その大部分は現状保存区域となり、最終的には壁塹先端部のみである。

遺構は1、2号堀とこれに平行する土塁であり、付設される遺構は認められない。遺物は2号堀法面に出土する2点である。

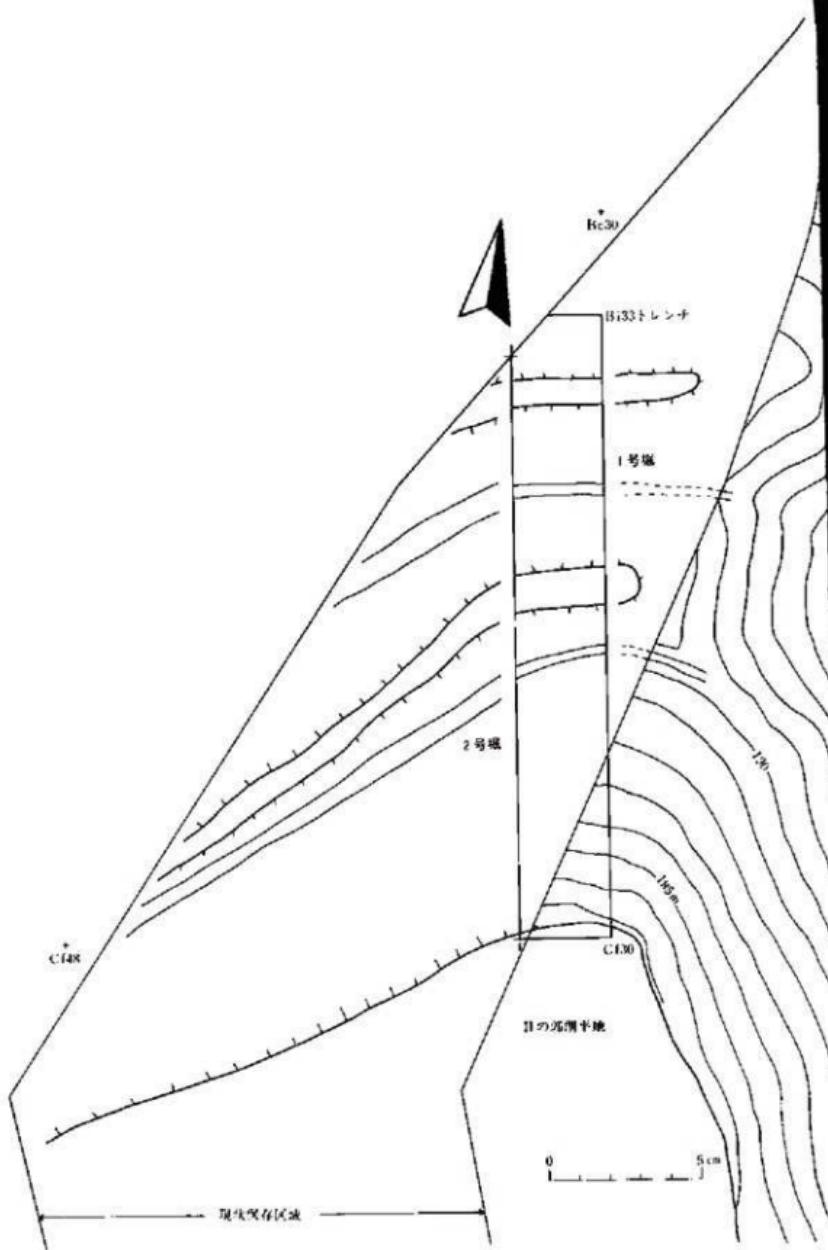
##### (1) 1号堀 (第21、22図 図版4)

IIの郭北西に続く1号堀はほゞ東西の直線状をなす部分であり、Bi33トレンチ以東は7.10mである。南接する土塁の緩やかな傾斜に続いて掘り込み面では46°勾配をなして底部に達し、北法面は42.5°勾配を有して北辺に続く。両法面の交点は91.5°となり、断面は正三角形に近い。変換点における堀幅2.98m、底部幅0.20m、深さ1.28mを計る。東端においても殆ど変化は認められないが、底部は8~9.5°を有して東へ下降し、やゝ狭少となる。

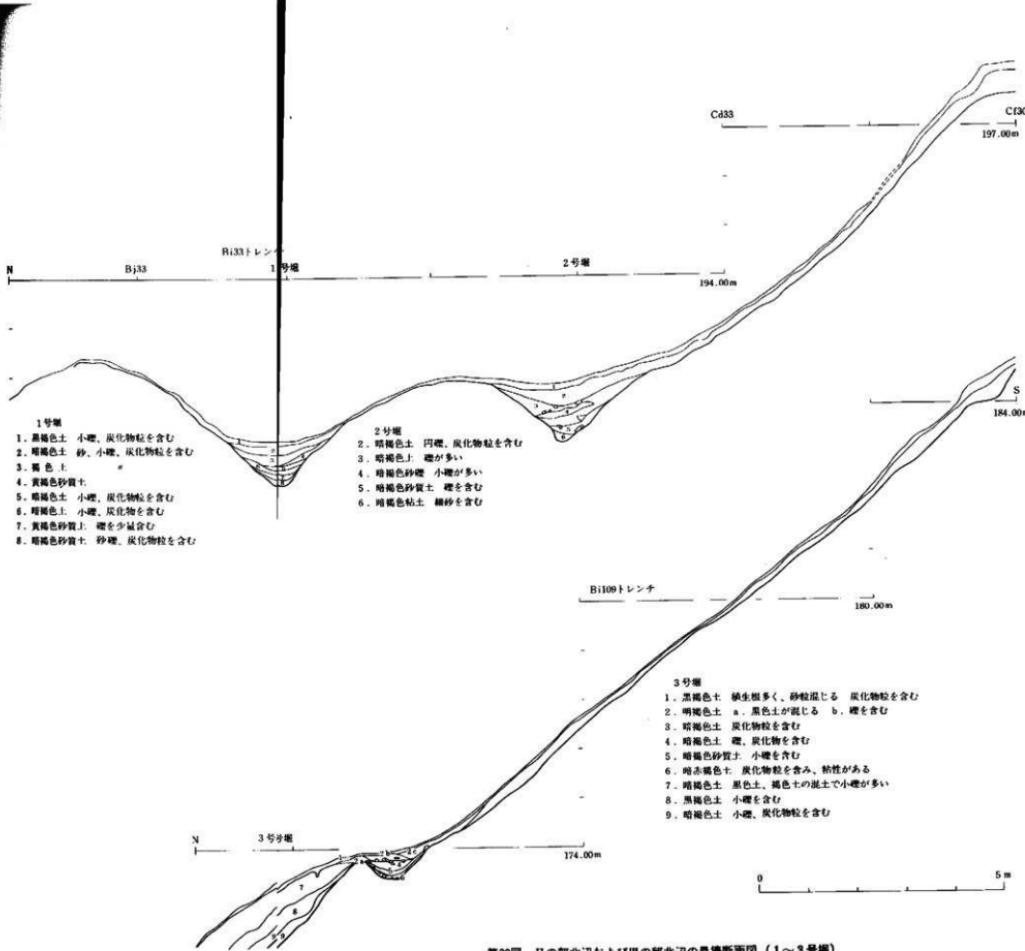
覆土は0.92mで浅く、東端では流失して更に少ない。堆積層は大別8層となり、ほゞレンズ状をなす。主として暗褐色、または黄褐色土に小礫を伴い、地山の凝灰岩風化礫が僅かに混入している。また、中位層以下では粗砂質となり、最下層では粘性が強く、伏流水が伴う。炭化物は中位層に微粒をなして点在する。

##### (2) 2号堀 (第21、22図 図版4)

IIの郭北東端の削平地に沿って開削され、北東端ではやゝ南へ弯曲する。II-2削平地北辺は39°勾配をなして傾斜し、比高は8.5~9mである。トレンチ以東は弯曲部分にあたり、6.50mで4号堀に続く。南北法面はそれぞれ41.5°、37.5°勾配で北に緩やかとなる。堀幅2.9m、深さ1.18mで1号堀に近似する。底部はやゝ北偏して6.5~13°で東へ傾斜し、湧水が絶えない。



第21図　日の出北辺の墓場平面図



第22図 IIの郭北辺およびIIIの郭北辺の土壤断面図（1～3号塹）

覆土は大別6層となり、南法面に沿う堆積層が多い。最下層を除いて風化礫が3~5層に含まれ、2~4層に小礫が多く混在する。また、2層には炭化物粒が認められ、削平地北端の土壘状の盛土に類似している。遺物は東端南法面に施釉茶碗、縄文土器の破片が出土している。

### (3) 土壘 (第21、22図 図版4)

1号堀に北接する土壘はこれに沿って4号堀開削線まで、東西6.10mである。確認される東端では削り出しをうけ、Bi33トレンチにおける基底幅は4.5m前後と推計される。山なりをなす上面幅は0.90m、南法面勾配は25.0°である。北法面に続く熊戸沢に達する北斜面は未調査であるが、上方には若干の盛土層とみられる堆積がある。

1、2号堀間の南北土壘は東西4.10mであり、東端では2号堀に沿って僅かに湾曲し、4号堀法面に至って消滅する。トレンチ以東では殆ど低平な地山削り出し面をなし、盛土は全く認められないが、2号堀に接してやゝ高位となる。上面幅1.20m、基底幅2.80m、高さ0.40m前後を計り、上面は北土壘に比して0.40m低位となる。



### (4) 遺物 (第23図)

2号堀東端の南法面に出土する2点である。施釉茶碗の高台片は底部の器厚が薄く、削り出し高台も整っている。外面は濃い褐色、内面青灰色を呈し、染め分け碗とみられる。推定高台径4.0cm。他は縄文中期とみられる土器片である。木葉底をなし、底径12.0cmである。



第23図 IIの郭北辺2号堀出土遺物

### 要約

1、2号堀及び土壘は東西には平行して開削され、試掘溝における両堀底部間は5.77m、土壘間は7mである。しかし、北東端に至って1号堀が直線状をなして4号堀西法面に連なるのに対し、2号堀ではやゝ南東に湾曲している。土壘も同様の走向を示し、その配置に相違が認められる。

空堀の形状についてはもっとも流水の影響を受け易い部分であるが、堀幅3m、深さ1.20m前後で殆ど同様の計測値をなす。法面勾配は42.5°~46.0°の1号堀に対し、2号堀ではこれよりやゝ強い傾斜をなして共に薬研状を呈する。

覆土は底部の傾斜が強く、流失して比較的浅い。小礫を伴うレンズ状の堆積層を形成する1号堀では主として西方よりの流入堆積とみられる。法面に沿う堆積層は2号堀にやゝ厚く、法面の崩壊上やIIの郭削平地形成に伴う流入土とみられる。

土壘は共に空堀開削に伴って地山削り出しをうけて残存する部分であり、4号堀に至って消滅している。北土壘は直線状に延びて1号堀に、南土壘は南東へ湾曲して2号堀にそれぞれ対

応する形成である。削り出し面は南土壁が著しく低平をなし、北土壁では南北は同一法面を有して山なりをなす。共に盛土築成の形跡は明らかでないが、北斜面に統いては1号堀開削に伴うとみられる堆積が認められる。

県境の配置や形状の相違は時間的な経過を推定させるものであるが、新旧関係は明確ではない。また、1号堀がIIの郭北西に連続して開削されているのに対し、2号堀では北東に限られており、この点ではIIの郭削平地の変遷に対応するものと解される。

### 5. IIIの郭北辺

IIIの郭北辺は北端の熊戸沢に達する急斜面をなし、西端を限る4号堀より削平地東辺に連続している。県境はこの斜面に削平地を巻いて開削されているが、現状では東辺に至って不明となり、全長は明らかでない。

調査区域は県境及び熊戸沢に達する北辺の斜面全域であり、県境についてはIIIの郭北辺よりほぼこれに直交する東西3m、南北16.9mのBi109トレンチを設定し、更に東西に拡大して完掘している。熊戸沢に近い緩斜面では東西30.5m、南北2mのBa103トレンチによって進めるが、遺構は認められず全域調査には及んでいない。

遺構は削り出し斜面に配される3号堀と付属する土壁であり、遺物は陶磁器6点である。

#### (1) 3号堀 (第14、22図 図版4)

IIIの郭北辺の斜面は39前後の勾配をなして削り出し、9~10mの比高を有して3号堀に達している。西端は4号堀に近接して開削され、僅かに北に湾曲する16.3mの東西堀である。東端は更に未調査区域に統いている。Bi109トレンチにおいては幅1.12m、深さ0.37mを計り、14条の空堀中ではもっとも小規模である。法面勾配は南北共に46.5°、交点は87°となるが、底部は幅0.30mを有して平坦に近い。東西端の比高は2.1mを計り、東へ傾斜している。

覆土は浅く、IIIの郭北辺に続く斜面に沿う暗褐色土の堆積である。トレンチにおいてはほとんどの状態で堆積をなし、上層では北法面による褐色土が被っている。炭化物粒は中・下層に認められ、遺物は上層に限られている。

#### (2) 土壁 (第14、22図 図版4)

3号堀に沿って僅かに山なりをなして削り出され、東方ほど低平となって明瞭ではない。トレンチにおける北法面では現地形の34°勾配に比して著しく強く、地山面で45.5°をなす。北斜面には旧表土とみられる黒色土を境に暗褐色土の混土が厚く堆積するが、盛土をもって構築されている形跡は認められない。

#### (3) 遺物 (第24図 11絵、図版44)

##### 青磁 (第24図 口絵)

亮光に近い輪花皿一点である。体部から口縁部にかけてやゝ薄く引き出されて外反し、輪花は不規則に削り取られて棱を残す。脚部は僅かに棱を有し、やゝ歪みがある。底部は厚手とな



第24図 IIIの郭北辺 3号堀出土遺物

り、高台の削り出しが不整である。施釉は高台内及び高台端を除いて全面に及び、暗緑色を呈する。口縁端部では薄い褐色を呈する。高台脇にやゝ厚く、両面には買入が認められる。施文は口縁部内面には不規則な波状文が認められ、直下に一对の草花文、底部には圓文が浅く線刻される。口径11.8cm、高台径8.6cm、器高2.9cm。3号堀2層出土。

#### 白磁（第24図 図版44）

皿の口縁部2点と体部1点がある。(218)は体部より内彎して立ち上がり、口縁部ではやゝ薄くなって外反する。乳白色をなす施釉は二次加熱をうけて光沢を失っている。胎土は密で淡褐色を呈する。推定口径9.6cm。3点共に同1層出土。

#### 灰釉陶器・その他

淡黄緑色の薬漬を有する皿の高台1点と褐色釉の皿の底部1点がある。同1層出土。

#### 要約

IIIの郭北辺は削平地北端より急斜面をなしてIの郭南辺に類似するが、熊戸沢に達する裾部分では緩やかな勾配をなす。壁塗はその斜面の変換点に開削される。3号堀は堀幅1m前後を計る小溝状をなす東西堀であり、調査区域中もっとも小規模である。勾配はIIIの郭削平地に続く削り出し斜面に比してやゝ強く、著しい崩壊の形跡も認められず、旧状を留めているものとみられる。

覆土は削平地北斜面に統いて流入土とみられ、上層では土塁を越えて更に以北へ堆積しているが、削平地形成に伴う多量の流入土は認められず、遺物も少ない。

土塁は斜面の削り出し及び3号堀の開削に伴って形成される地山残存部分である。北法面には緩斜面に続く開削土とみられる厚層が堆積し、盛土を有して築成されている形跡は判然としていない。旧表上が認められる点では削り出しをうけず、余土を放置しているものと解される。

### 6. IIIの郭内

IIIの郭中央部の削平地以北に縦横する4条の空堀である。最上段のIII-14、9削平地を南北に走り、更に鞍部境を東進する11号堀、この東端より現状保存区域に続く12号堀、11号堀に接してIII-5削平地を南北より東西に走る13号堀、III-5削平地より北辺のIII-2削平地に達する14号堀である。いずれも削平地の造成に重複して現状では認められず、地山面で検出される。

土塁は西辺に概述する4、5号堀に沿って配されるほか、南辺の10号堀に沿って認められる

が、後者はIIIの郭南辺の墓塚に含めて記述している。そのほか11～14号堀に対応するとみられる土塁はすべて削平にあって認められず、付設される遺構は確認されていない。また、遺物は13号堀を除いて削平地を形成する覆土上層に検出されるものであり、削平地境をなす土塁と共に当該削平地に後述している。

#### (1) 11号堀（第25、26図 図版13～16）

IIIの郭中ではもっとも長く102.2mに及ぶ。南端は現状保存区域となり、III-13削平地南辺の土塁以南は明らかでない。調査は削平地に沿って南北、または東西方向に試掘溝を設定するほか、適宜跡を残して全面排土を行ない、後述の12～14号堀においても同様である。

#### 南北方向（第25図 図版13～15）

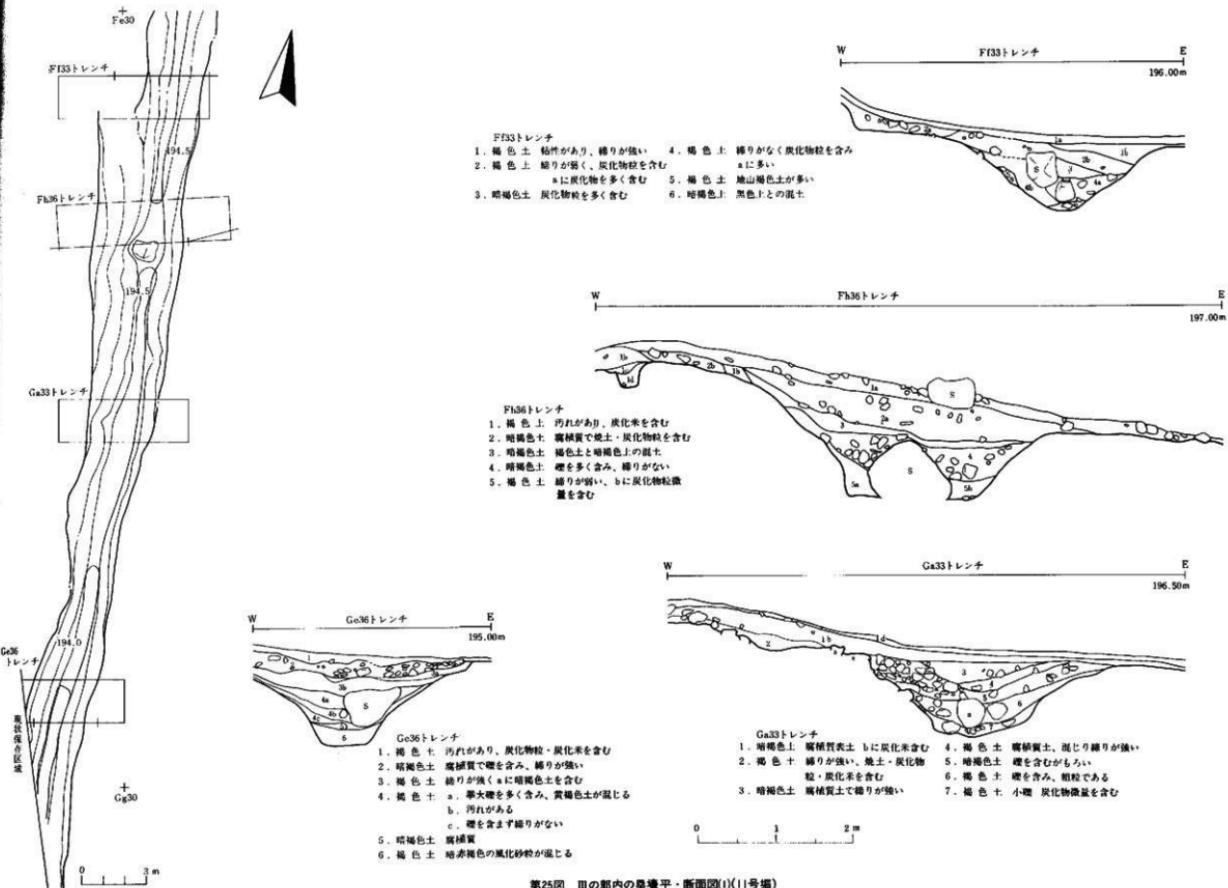
III-13削平地南辺よりIII-9削平地北辺に連する57.9mのはゞ直線状をなす部分である。共に削平地西側にあって地山を切って開削され、北端は湾曲して鞍部境より東西方向に連なる。上部は削平地の形成に伴って失なわれ、もっとも高位となる両削平地境より対称的に南北へ傾斜し、その中央部には巨石が取り残されている。

III-13削平地西側にあたる南半は削平地南辺の土塁まで29.3m、堀幅1.90～2.60m、深さ0.65～0.85mを計る。底部幅は0.30～0.50mで北よりもやゝ広く、中央部では1.55mである。東西法面はそれぞれ38.8～54.0°、40.8～59.5°勾配をなし、東法面に強いほか著しい変化は認められない。底部は大石に南接する部分で若干の掘り込みが認められるが、殆ど平坦をなし、4.8°勾配で南へ傾斜する。南端における比高は1.30mである。

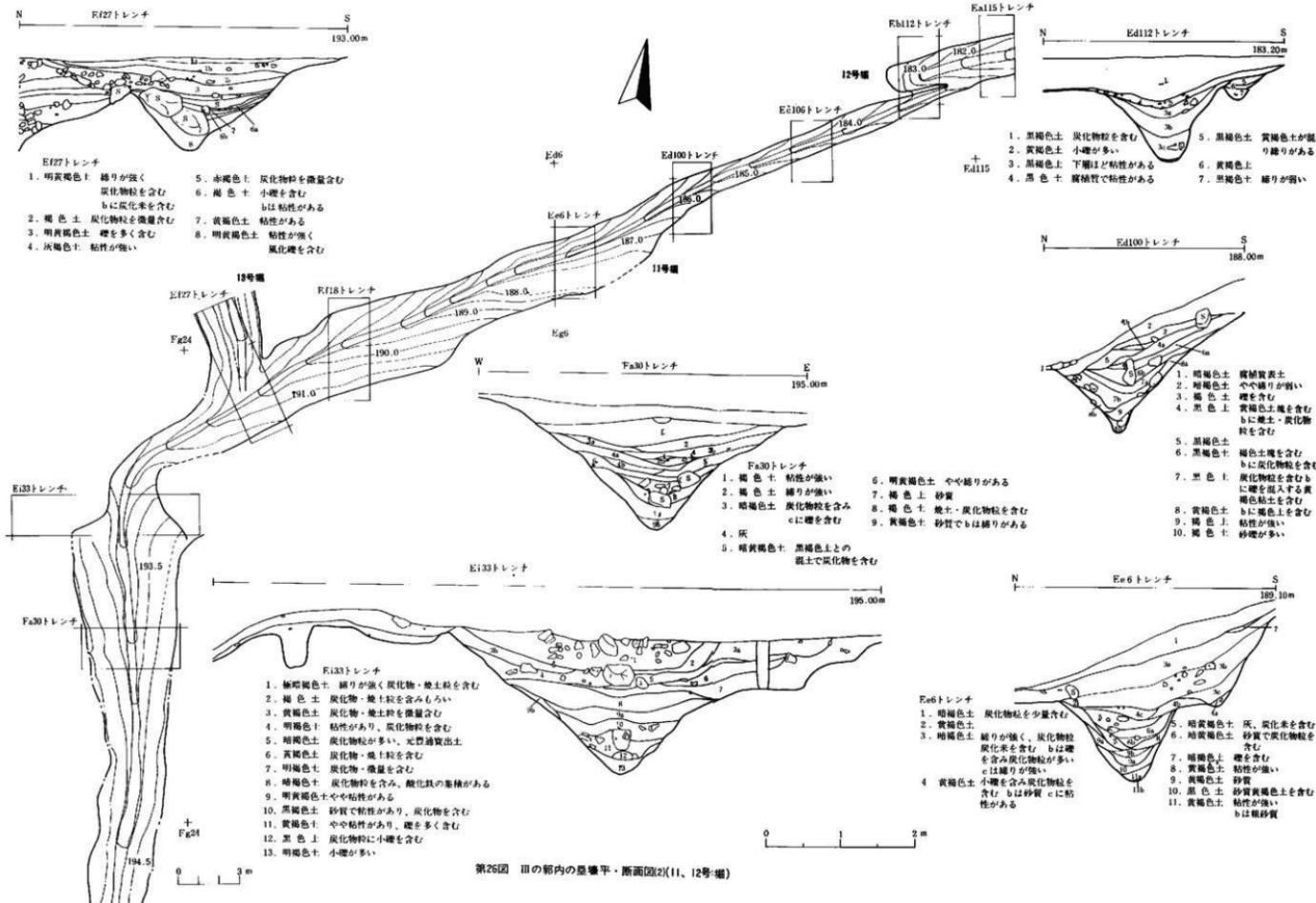
覆土は底部より中位層にかけては風化礫を伴って地山に酷似する褐色土である。中位層より上層においては著しい拳大前後の礫が含まれ、散石状をなす。特に高位部分をなすIII-9削平地に近い北側では西辺の土塁に続く多量の礫によって被われる。Fh 36トレンチにおける礫は中位層で0.40m、上層では0.60mの厚層をなし、両削平地間の土塁を構成している。また、Ga 33トレンチでは削平地の形成に伴って礫層の一部が削平をうけて失なわれ、削平地面では繰りが強い。遺物は土塁に続く礫層に混入する炭化米のほかはいずれも削平地造成以前の堆積層に含まれ、中位層以下では認められない。

III-9削平地西側の北半では、南半の延長線上を延びて北側で僅かに東偏している。堀幅2.10～4.55m、底部幅0.25～0.40m、深さ0.65～1.55mを計り、北進するほど広く深い。東西法面はそれぞれ35.7～41.2°、36.5～56.7°勾配をなして共に西法面に強いが、南半に比して底部が狭まって断面V字状を呈する。底部は北進して下降し、III-13削平地境より18.7mまでは4.7°勾配、これより東折部分までは8.1°勾配をなす。両端における比高は2.60mである。

覆土は法面に沿う堆積層のほか、レンズ状を呈する間層が部分的に認められ、褐色土のほか、黒色土が含まれる。礫は東西の土塁よりに比較的多い。また、中位層以上に炭化物・焼土粒の



第25図 田の郭内の基準平・断面図(1)(11号地)



混人がみられ、Ga33 トレンチではやゝ下層に炭化物、Fa15 トレンチでは灰の薄層がみられるが、他の遺物は出土していない。

重複する削平地及び両削平地間の東西土塁はそれぞれ上部を削平、または埋め戻して形成され、北辺の Ei 30 建物遺構は覆土を切って構築される。そのほか、柱穴群、焼土遺構等いずれも 11 号堀廃棄以後の遺構である。

#### 東西方向（第26図 図版14～16）

III-9 削平地北西辺より曲折して東進する 44.3m の部分である。曲折する角度は 113.5° を計り、鞍部の削平地境をなす北斜面を E 32.0° N 方向にはゞ直線状に延びて東端は 12 号堀によって失なわれている。西方 7.7m には 13 号堀が重複しており、これを切って開削している。

現状では削平地形成に伴う造成土を含む厚い堆積層によって被われるが、III-4、6 削平地では削平地の形成に伴って上部を失っている。西方では堀幅 2.90～3.40m、底部幅 0.20m、深さ 1.10m 前後を計る。東方においては堀幅 0.90～1.33m、底部幅 0.10～0.15m、深さ 0.50m 以下となって東端の 12 号堀によって失なわれる。南北法面はそれぞれ 39.2～55.5°、41.0～56.0° 勾配で東方にやゝ強いが、南北における法面の変化は認められない。断面はほゞ整った V 字状をなす。底部は曲折部より中央にかけて 11.2°、これより東端までは 11.6° 勾配となって下降し、東方ほど段状をなす部分が多い。

覆土は下層に砂礫層が堆積し、中位層にかけては主として南法面に沿う黄褐色土である。風化礫のほか、中央部では人頭大以上の礫が混入している。東方においてはレンズ状の堆積がみられ、黒色土の堆積が多い。上層は共に南削平地を限る斜面に沿ってやゝ締りの強い暗褐色土の厚層となり、重複する鞍部の削平地面では踏み固められる褐色土が認められる。そのほか、III-5 削平地南東隅にあたる中央部には盛土厚層下に 13 号堀東端の土留石に類似する人頭大以上の礫が乱雑に混入している。遺物は III-6 削平地面直下の混土層に微量の炭化米が認められるほかは斜面を形成する厚層の盛土層に限られている。

#### 要約

III の郭中もっとも高位である西辺より曲折して東進する堀切状の空堀である。南北方向は 5 号堀に平行しているが、中央部削平地北西より屈曲して大旨直線状をなす。曲折部分は 9 号堀のそれに近似している。規模は北西に大きく、堀幅 3.40～4.55m、底部幅 0.30～0.50m、深さ 1.0～1.55m を計り、東方ほど小規模となる。法面勾配は 35.7～59.5° をなし、東西方向を含めて著しい変化は認められない。南半部においてのみ底部幅が大きく、諸薬研状をなすが、これより以北ではほゞ V 字状を呈する薬研堀である。底部は I の部東辺の張りだしに対応して西辺の高位部分を堀に対称的に傾斜し、東西方向ではやゝ勾配を強くして下降し、ほゞ旧地形に沿って開削されるものとみられる。

覆土は曲折部を境に若干の相異が認められる。高位部分には疊が多く、特に南北では上層に集中し、西法面に沿って堆積する。また、中央部では削平地境をなして上累を構築しており、5号堀の開削に伴う疊の可能性が強い。東法面に沿う下層の堆積層によっては、東接する土壌も想定され、これに平行する幅0.6mの高位地形が東側に認められる点に符合するものではある。中・上位層では焼土・炭化物粒を混入しており、共に削平地の形成に伴って埋没、または削平をうけるものである。

東西方向では主として南法面に沿う堆積であり、中位層では炭化物、灰層が形成される。同時にこれを被う明褐色土の堆積が互層上に認められ、焼失に伴う切土地形が数回に渡っていることが推定される。埋没以後では更に大規模な地形に伴うとみられる厚層をなす盛土が形成され、III-4～6削平地を含む南接削平地の変遷が伺われる。特に13号堀覆土に類似する巨疊を伴う点ではIII-5削平地形成にかかわる段階と類推される。

遺物は上・中位層に混入する微量の炭化米であり、南北方向の中央部にあっては上累に統く疊層に含まれ、5号堀開削に伴う疊層とみるとならば、11号堀は埋没段階にあたるものといえる。

### (2) 12号堀 (第26図 図版16、17)

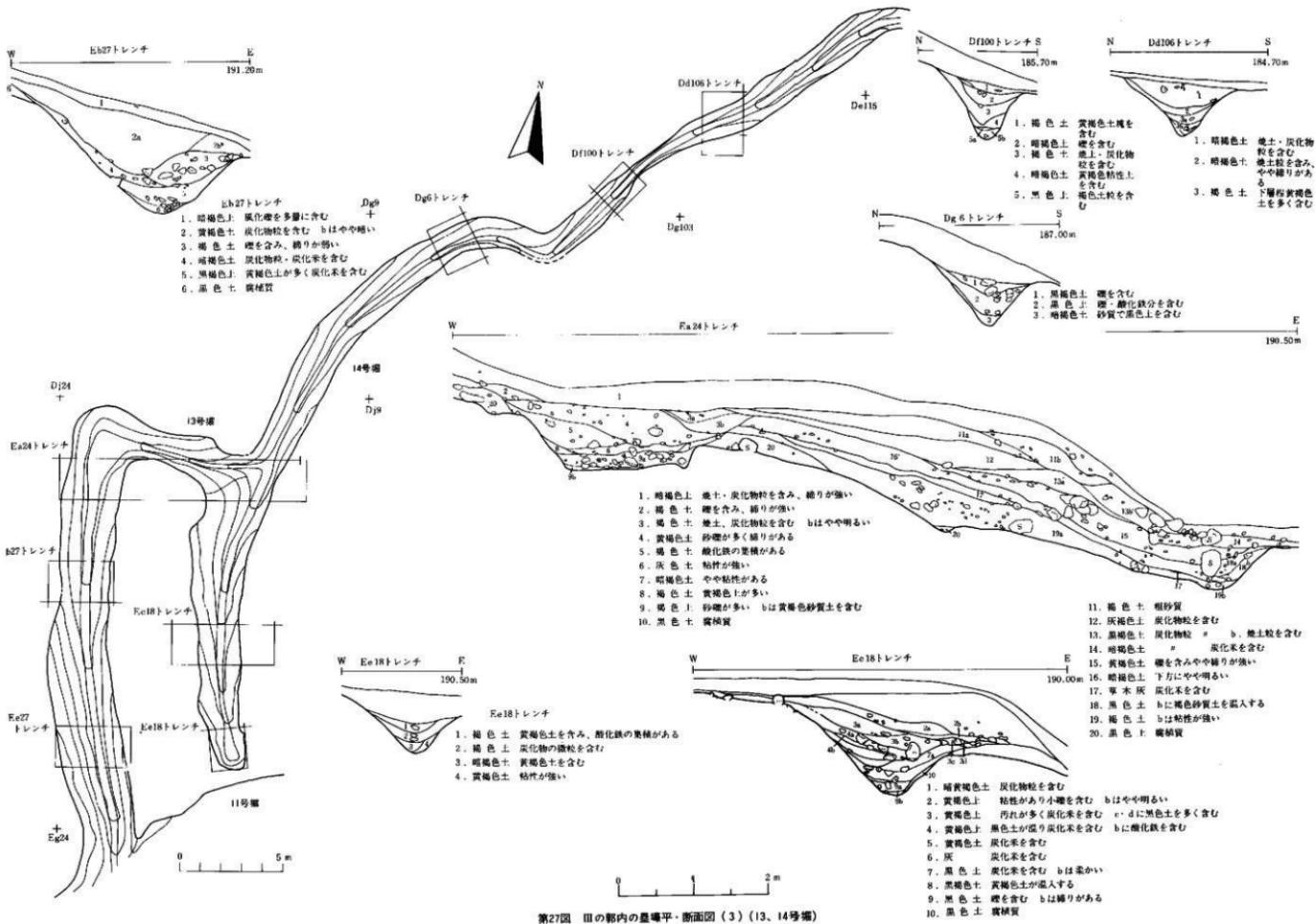
11号堀東端に盛土を除去して検出される6.5mの東西堀である。III-12削平地北斜面にあたり、11号堀を切って開削され、東端は現状保存区域へ続いている。西端においては堀幅1.15m、底部幅0.30m、深さ0.65mを計り、東方ではやや拡大して堀幅1.90m、底部幅0.60m、深さ0.75mである。南北法面は西方の掘り込み部分でそれぞれ66.0～57.5°、東端では53.0～51.5°勾配をなして共に南法面に強い。また、西端の開削法面は46.0°と緩やかであるが、ほど々U字状を呈し、断面も同様である。底部は12°前後で東へ傾斜し、両端の比高は0.95mである。南接するIII-12削平地間では26.5°勾配の斜面に続き、比高3.30mで削平地面に達する。

覆土は上層までほど々3層に大別される。底部より中位層にかけては黒褐色土に地山の黄褐色土が若干混入している。上層には大小疊が多く、これを被って北西に緩く黒褐色土が堆積し、Eb112トレンチでは0.60mの層厚をなす。遺物は上層にのみ微量の炭化米が認められる。

中・上位層境には南法面に傾斜するレンズ状をなす疊層が認められ、これに伴う黄褐色土が南法面に沿っている点では南接するIII-12削平地に関連するものとみられる。また、これを被う上層の盛土は北西に広がり、埋没以後の大規模な造成が行なわれているものと解される。

### (3) 13号堀と遺物 (第27、28、90図 第122表 図版17、18、44、46)

III-4、5削平地の盛土層を除去して地山切土面及び旧表土面で検出される。11号堀を南端として14号堀に接する東端まで鉤形に延びる28.6mの空堀である。南北方向は14号堀にほど々平行し、これより約6m西方に位置する。遺物は陶磁器等19点が出土している。



## 1. 13号堀（第27、90図 図版17、18）

南北方向はIII-4削平地東辺にあたり、南端で削平をうけているが、比較的よく遺存する部分である。南北20.7mはほゞ直線状をなし、北端は85.5°で屈曲している。南端は11号堀方向に対して113°で開削される。南側では堀幅2.40m、底部幅0.30~0.40m、削平地切土面との比高は南端で最大となり、東西それぞれ1.90m、1.40mである。東西法面は42.5~52.5°勾配をなし、ほゞV字状の断面をなす。底部は11号堀に比して僅かに高く、南端では16°をなして下降する。

中央部より屈曲部にかけてはIII-4削平地斜面にかかるて狭少となる。Ed27トレンチでは堀幅2.02m、底部幅0.42m、深さ0.74mである。法面は43.9~46.0°を計り、交点は底部中央部直下に結ぶ。形状は南側に同様である。曲折する北端においては堀幅2.48m、底部幅1.66mの最大値をとり、逆台形状の断面を呈する。底部は5.5°で北へ傾斜し、南北の比高は2.05mである。

覆土は南北に若干の相違があるが、主として西法面に沿う堆積層である。下層では風化礫を伴う褐色土であり、中位層に比較的礫が多い。Ee27トレンチでは下層より中位層にかけて礫を含む黒色土層をなし、共に炭化物や焼土粒、灰の混入が認められ、Eb27トレンチに連続している。上層では南端ほど水平堆積する薄層が多く、Eb27トレンチでは層厚0.80mの黄褐色土が西法面に沿って堆積している。屈曲部においても後者とほゞ同様の堆積であるが、酸化鉄の集積が認められ、礫がやゝ多い。

遺物はEb27、Ee27トレンチの黒色土にそれぞれ青磁・灰釉陶器片が出土し、炭化米が微量混入している。

東西方向は屈曲部より東進して14号堀に接続する7.9mである。III-5削平地東辺では旧表土を切って開削され、14号堀方向に対しては115°を計る。南北方向に比して著しく狭少となり、中央部においては堀幅1.20m、底部幅0.25m、深さ1.52mである。南北法面はそれぞれ52.0°、46.5°を計り、断面はV字状をなす。底部は東端で0.30mの段差をなすほかは10.5°勾配でなだらかに下降している。東西の比高は1.52m、南端に比しては3.57m低位となる。

覆土は下層に黒色土及び少量の礫を含む褐色土が堆積し、これを炭化米の伴う草木灰が最大0.10mで被っている。中位層以上では黄褐色土及び褐色土が灰・黒褐色土層を境に厚層をなし削平地斜面を形成し、東辺では怪0.30m前後の土留石が南北方向に不規則に並列している。更に東端の接合部では14号堀東法面に沿う黒色土を被って黄褐色土が13号堀より続いている。

遺物は灰層に混入する炭化米のほか、中位層に青磁、古鏡、馬齒等である。

13号堀に関連するとみられる遺構には北西の屈曲部に柱穴状のP3が認められる。西法面下方のP2と東西に一対をなし、P2-3間は1.95mである。径0.19~0.29m、深さ0.15~0.25mの打ち込み状をなす。覆土を切っていない点では空堀の開削に伴う可能性があるが、その性格は明らかでない。また、南辺には東接して土壙状の削り出し面が認められ、低位となる中央部以北

においても僅かに高位となるが、削平地形成に伴う切土造成にあって識別できず、覆土によつても土器の構造は明確でない。

重複する遺構は現状削平地のほか、旧削平地とこれに伴う遺構である。削平地北半の旧削平地は13号堀によって失なわれ、溝及び柱穴についても同様である。埋没以後の遺構には Ea21、Ea24 燃上遺構、Ea24 溝がある。また、III-4 削平地における柱穴は上層の覆土を切って検出されるものが多い。

## 2. 遺物 (第28図 122表 図版44、46)

中位層以上に出土する陶器器4、鉄製品1、石製品1、古銭1、馬齒12点の合せて19点である。そのほか微量の炭化米を検出しているが、11、14号堀のそれと同様調査上の不注意によつて採集されていない。

### 陶器器 (第28図 図版44)

青磁1点、染付、灰釉陶器各2点である。共に小破片で図示できるものは1点である。青磁(44)は碗の口縁部である。口縁端で僅かに外反し、器厚は口縁直下で薄くなる。淡い暗緑色をなし、光沢を失っている。外面はやゝ褐色を帯びて質人が著しい。胎土は緻密で灰色を呈する。推定口径14.8cm、Ea24トレンチ12層出土。

染付には皿の体部片が含まれ、外面に草花文、内面に重圓文がやゝ明るい発色をなす。共にEf27トレンチ3層出土である。そのほか、灰釉陶器は淡黄緑色をなし、吸水性のある胎土を有する小片でIII-4、5削平地出土片と同類である。Eb27トレンチ5a層及びEe27トレンチ5b層出土。

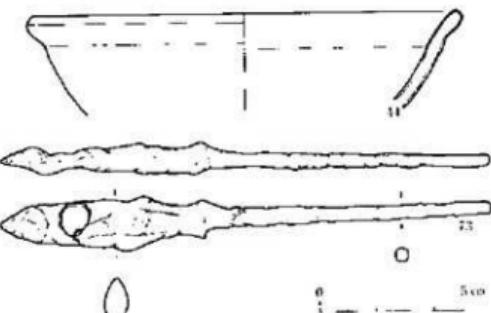
### 鉄製品 (第28図 図版46)

鉄瓶 (73) 1点である。全長17.1cm、最大幅1.9cmを計り、刃部に錆瘤が著しい。刃部は長さ7.1cmで中央部に厚い。基は断面方形をなし、先端ほど小さい。Ee27トレンチ出土。

### 石製品

石質凝灰岩製の砥石1点である。現在の長さ5.4cm、幅3.2cm、厚さ2.2cmの長方形をなす。1面にのみ研磨面が認められる。Ea24トレンチ東端15層出土。

### 古銭 (第122表)



第28図 IIIの郭内13号堀出土遺物

北宋錢の景祐元宝1点である。調査中に破損し、外縁の一部を失っている。同16層出土。

#### 馬齒

東端の土留石付近には×縫りをもって検出される。セメント質を失い、破損しているものが多いが、上顎第2前臼歯、同第1後臼歯が含まれる。第1後臼歯の前後幅は23.2mmで、現代馬のそれより小さい。同16層出土。

#### 要約

鞍部の二段削平地に鉤形に配される。南北方向は14号堀にほど平行し、更に東端で同堀に接続する。南端は11号堀によって失なわれるものの両堀方向とは南北それぞれ113°、115°を計って近似する配置である。削平地の形成に伴う上部の切土は南北方向に厚く、屈曲部で最大となるが、堀幅は屈曲部に広く、南北に比して東西は狭少となる。南北方向では堀幅2.02m～2.40m、底部幅0.30～0.42m、深さ0.74～1.40mをなし、東西方向の中央部ではそれぞれ1.20m、0.25m、1.52mを計る。法面の勾配は42.5°～52.5°を計り、屈曲部で諸薬研状を呈するほかはV字状の断面をなす。もっとも広い屈曲部には対応する柱穴状の遺構があり、また、溜水の形跡が認められるが共にその関連については明らかでない。

覆土は南北に若干の相違が認められるほか、殆ど共通する堆積層を形成する。下層は崩壊及び流入堆積とみられるが、中位層以上には褐色土の厚層が西法面に沿って認められ、III-4削平地以西の地形に伴うものと解される。また、この厚層直下は草木灰、炭化物の流入が著しく、焼失に起因する直後の造成を示すものとみられる。上層では更に地山に類似する堆積層が混土を被って認められ、東端の土留石に対応している。大別2段階を経て埋没しており、削平地の造成はほど空堀の機能を失う段階に符合して行われているといえる。

遺物は主として陶磁器である。いずれもIII-4、5削平地出土遺物と同様であり、舶載磁器及び美濃である。共に二次加熱をうけるものが含まれ、流入及び造成に伴う混入とみられる点で開削時期に近接する遺物と認められる。また、馬齒の出土は11・12号堀上層を被う盛七層出土のそれに共通するものであるが、その関連や移動の状況は明らかでない。

#### (4) 14号堀 (第27、72、90、95図 図版18～21)

III-5削平地南辺よりIII-2削平地東辺に達する55.6mの蛇行する南北堀である。現状ではIII-5、6、2削平地を形成し、中央部では通路に重複して、いずれもその形跡は認められず、盛土敷地層を除去して確認される。

#### 南半部 (第27、90、95図 図版18、19)

III-5削平地南辺より下段のIII-6削平地北辺にかかる弧状をなす31.3mの部分である。南端は11号堀に近接し、両堀間は0.60mを計る。西方6mには13号堀が平行して走り、南端より15.4mでこれに接続している。接合部以南ではほど旧表土を切って開削され、III-6削平地に

あっては上部の切土をうけている。

接合部以南では南端ほど小規模をなし、Ea18トレンチでは堀幅2.18m、底部幅0.38m、深さ0.50mを計る。北進してEc18トレンチではやゝ拡大して堀幅2.18m、深さ0.67mである。接合部南側では上幅3.20mとなって最大値をとるが、東肩は旧地形を残して低位となり、極めて浅い。法面は42.0~52.5°勾配をなしてやゝ西法面に強い。中央部直下に交点をとり、断面V字状をなす。底部は中央部3m間で20.5°勾配をなして急下降するほかは10.5°で北へ傾斜している。両端における比高は2.62mである。

覆土は法面に沿う堆積層が多く、黒色土、または黒褐色土によって占められ、中位層には華大の礫が含まれる。南端は底部より褐色土が被ってレンズ状をなす。中央部以北では下層より礫を含む黒色土であり、中位層には炭化米が混入する。Ec18トレンチでは更に草木灰が西法面に沿って認められ、上層にやゝ厚い黄褐色混土層が被る。最上層は暗褐色土が0.55mの層厚をなし、灰層以上はいずれも西方よりの堆積である。また、接合部では東法面に沿って黒色土が堆積するほか、13号堀覆土に統く黄褐色土である。この南側には南北6mに渡る土留石がIII-6削平地切土斜面に統いて認められる。

関連を有するとみられる遺構には半円状をなす掘り込みが認められる。南端より3.2mの上端に平面突起状をなして対応する。径0.30m前後で、底部は南北法面に沿って傾斜している。東西間は1.20mを計る。覆土は14号堀南端と同様である。また、土壘については東接して旧地形を残すが、開削土による盛土の痕跡は削平地造成に伴う盛土層と識別されず明瞭でない。

重複する遺構にはFa21溝のほか、柱穴状ピットがあり、14号堀に先行する遺構には同溝、P51があり、他は削平地を含めて大部分空堀開削以後の遺構とみられる。P51は平面円形をなし、平坦な底部を有し、東方は黒褐色土の覆土と共に西法面によって失われている。

接合部よりIII-6削平地北辺にかけては、上部の切土にあって小規模となる。堀幅1.15~1.50m、底部幅0.20~0.35m、深さ0.55~0.72mである。東西法面はそれぞれ39.0~48.5°、46.2~50.5°と西法面に強く、Dg6トレンチの孤状をなす部分ではやゝ勾配が大きい。断面は共にV字状を呈し、著しい変化は認められない。底部は接合部以北3mは殆ど平坦をなし、これより5.5°勾配で北へ傾斜している。

覆土は礫を伴う黒色土、または黒褐色土が多く、中位層は西法面に沿う堆積である。重複する遺構には削平地に伴う溝及び柱穴があり、Dj15溝は覆土を切って形成され、柱穴も同様であるが、判明しないものが含まれる。

北半部（第27、72、95図 図版19~21）

III-1削平地南東よりIII-2削平地東辺にかけて蛇行する北半は24.3mである。削平地造成によって上部を失い、更に小規模となる。堀幅0.90~1.10m、底部幅0.20~0.30m、深さ0.45~0.

55mである。南北法面はそれぞれ48.5~67.0°、47.5~58.0°勾配をなし、III-1削平地南東部にもっとも強い。Df100トレンチにおいては南北それぞれ67.0°、52.5°を計り、北法面の下方では66.4°をなし、U字形に近い断面を呈する。III-2削平地に至っては再び上幅が広がり、南半部に類似している。底部はIII-2削平地南東にやや強い傾斜を示すが、III-2削平地では5.0~6.5勾配で緩やかに下降し、東端で段差をなしてIII-3削平地に達している。

覆土は下層を除いて褐色土となり、中位層以上には炭化物・焼土粒を含む厚層が被る。遺物は一点も出土していない。

重複する遺構は3条の溝である。Df3溝を切るほかはDe3、Dg3-1溝に先行して開削される。また、III-2削平地に検出される柱穴群は大部分覆土を切るものである。

#### 要約

鞍部の二段削平地南側より北辺の二段削平地北東端に達するやや蛇行する空堀である。南端は11号堀に接続して鞍部では南北方向より半径約50mの弧状をなして湾曲し、北辺削平地より鉤形に屈曲して北進している。共に旧表土を切って開削されているとみられるが、旧表土はIII-5削平地東辺にのみ確認され、以北の大部分は切土をうけている。南端では浅く、平面はやや緩やかなU字状に掘り込まれ、削平地中央部では上幅3.20m、深さ0.50mを計る。これより以北では更に小規模である。法面はIII-2削平地南東の屈曲部に強く、断面U字状をなすが、他は共にV字状を呈する。また、南端よりには東西に対応する拡幅部分が認められ、何らかの付属する施設と推定されるが、その性格は明らかでない。

覆土は下層を除いて南北に若干の相違が認められる。III-5削平地では中位層以上に西法面方向の堆積が多い。特に中央部においては草木灰の流入以後明らかに整地・地山切土を伴う造成土によって埋没が進行し、上層に至っては0.60m前後の厚層をなして削平地面を形成している。火災焼失以後空堀の機能がほぼ失なわれているものとみられる。14号堀接合部では13号堀覆土が西法面に沿って堆積しているが、対応する東法面には改修されている形跡は認められず、接合部以北では13号堀開削段階において放置、あるいは既存堀として利用されていることが推定される。13号堀東端の中位層に認められる上留石は、14号堀をも壊止める配石であり、斜面にあってなお完全に埋没していないとみられる点では後者の可能性が強い。接合部以北においては造成に伴う一時的な堆積は明らかではなく、改修の形跡も確認されていない。開削以後主として自然堆積によって埋没し、上層の削平地形成段階に至るものと推定される。また、II-2削平地南辺以北では中位層以上にやや厚い褐色土の堆積となり、III-2、3削平地の形成に関連するものとみられる。埋没状況によっては南半のIII-5削平地部分における堆積に類似し、極めて近接する段階の地形と解される。重複する遺構のうちIII-5削平地における東西溝を除いて前後関係の判明する遺構はいずれも埋没以後の遺構である。

## 7. IIIの郭南辺

IIIの郭南辺を東西に限る3条の塁壕である。最南端の8号堀、これに重複して湾曲する9号堀、南辺の削平地と中央部の削平地を画する10号堀であり、更にこれに平行する土塁である。

調査区域は東西43.9~52.5mであり、8号堀以南は斜面掘の通路及びこれに続く南辺30mの低地を経て岩の日沢に至る間である。調査途上において東西両端合せて7mが現状保存区域となり、その一部を埋め戻している。

調査は塁壕に直交、または平行する3m幅の3~4試掘溝を設定して進め、以後全面に拡大している。低地については遺構が確認されず、部分調査によっている。

検出遺構は3塁壕及び10号堀北側の柵列であり、8号堀以南の斜面には墓跡が検出される。

遺物は陶磁器、石製品、牛・馬齒等である。ここでは記述の都合上、8号堀以南の遺構と遺物を含めて記述し、10号堀北辺の土塁と柵列については遺物と共にIII-15、21削平地に後述している。

### (1) 8号堀以南の遺構と遺物 (第29~36図 図版10、11、44)

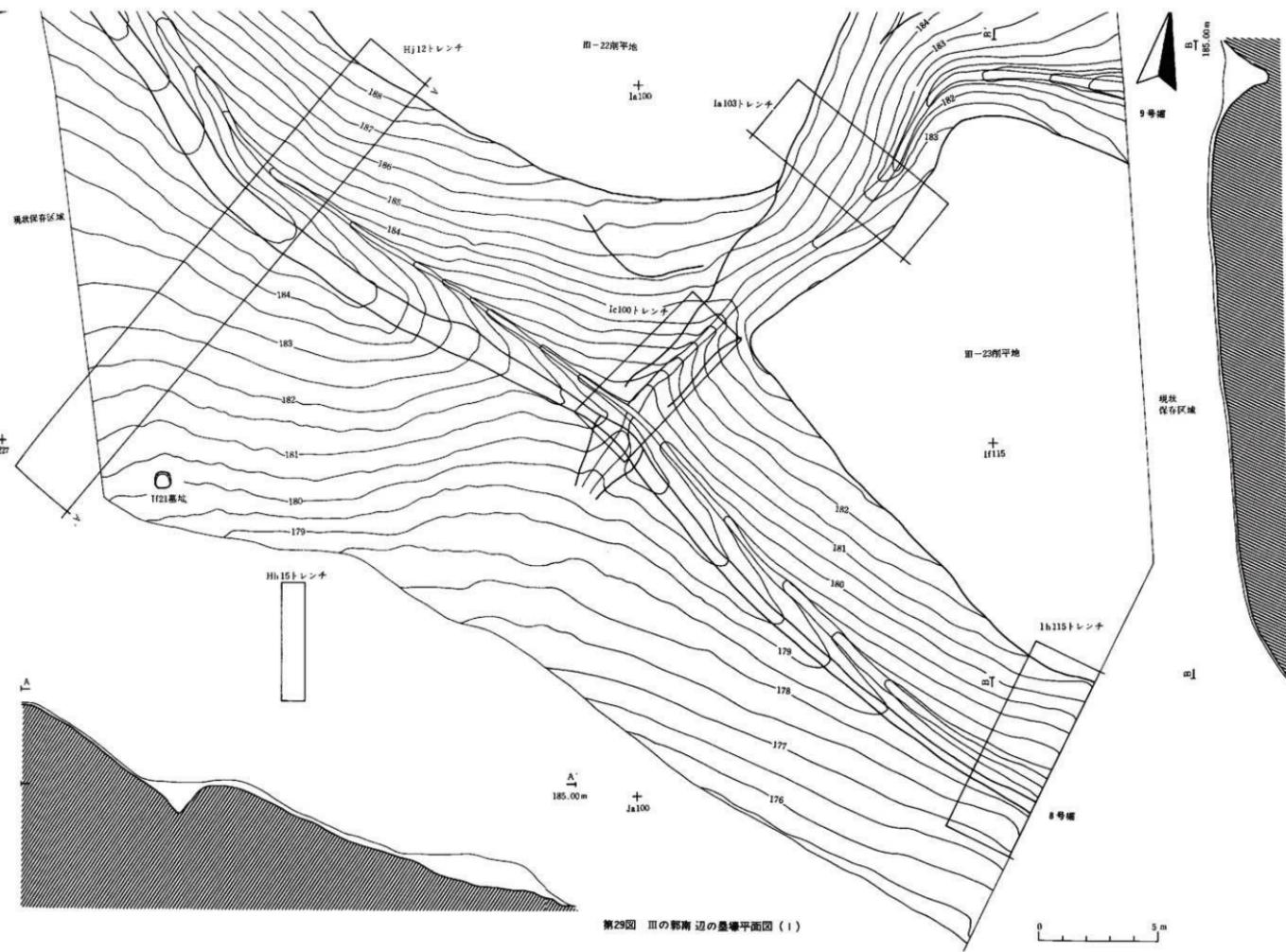
#### 1. 8号堀 (第29、30、35、36図 図版10)

北西より南東方向に継走する南端の塁壕である。北西端はIII-13削平地南端への登り口付近より発し、III-22、23削平地南辺を曲して東進し、IIIの郭南東に至って不明となる。現状で確認される66mのうち、東西両端を除く60.5m部分である。

北西では10号堀には△並列して直線状をなすが、中央部より南東にかけては緩やかに蛇行し、現状地形に沿って東へ傾斜している。現状保存区域に続くHc24トレンチにおいては掘幅2.20m、底部幅0.25m、深さ0.73mであり、両堀間は4.45mを計る。南北法面はそれぞれ26.5°、44.9°勾配をなし、交点では54.5°である。底部は緩やかに南東へ傾斜してIII-22削平地へ続く。

覆土は1.20mで多量の礫を含んで10号堀に類似する堆積である。底部は砂礫層によって被われ、中位層では北法面に沿う褐色土に拳大前後の礫が南に厚くみられる。上層では小礫を含む褐色土が南接する土塁を被って平坦をなし、共に北西方向に連続する堆積層である。遺物は上層に染付、灰釉陶器、繩文土器各1点が混入し、下層には一点も出土していない。

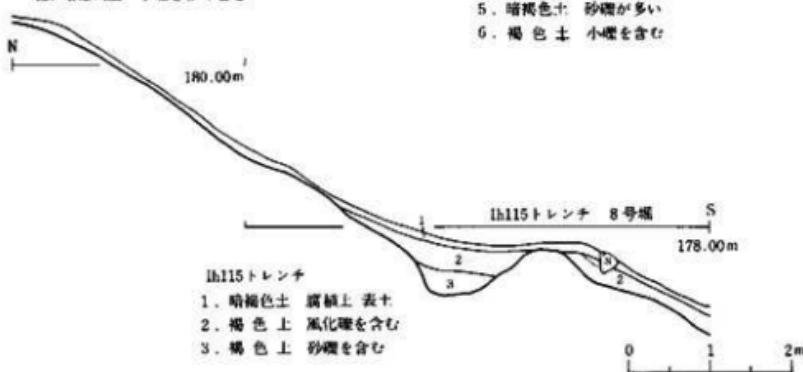
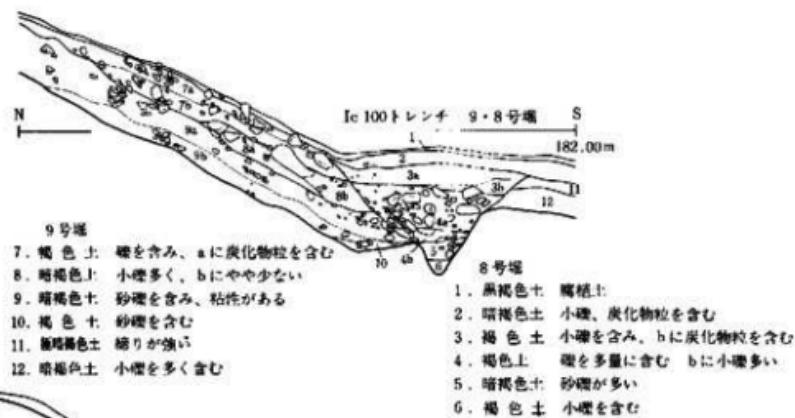
III-22削平地南辺では僅かに湾曲して低位となり、削平地南東においては4.5m前後の比高を有する。中央部のHj12トレンチでは削平地に続く37.2°勾配の斜面に続き、6mで底部に達する。掘り込み面は変換点を有して44.0°~48.5°をなし、北法面に緩やかとなるが、下方では南北それぞれ55.0°、68.5°を計って北法面に強い。掘幅2.50m、底部幅0.20m、深さ1.20mで、断面は△V字状を呈する。底部の傾斜は西方に比してや強く、南接する土塁に対応して段状となつて下降する部分が認められる。



第29図 IIIの郭南邊の墨塙平面図(1)



- Hj12 レンチ
1. 黒褐色土：腐植土 表土
  2. 明褐色土：風化礫が b に多く炭化物を含む
  3. 増褐色土：小礫、炭化物粒を含み、b に多い
  4. 明褐色土：小礫、炭化物粒を含む
  5. 増褐色土：小礫、炭化物粒を含み、縛りがある
  6. 明褐色土：小礫を少量含み、b に砂が多い
  7. 棕色土：砂礫を含む
  8. 明褐色土：砂質で小礫を含む



第30図 IIIの郭南辺の墓壙断面図(1)

覆土は北西トレンチに比してやゝ厚い。底部に砂礫層が堆積し、中位層に季人以下の礫を含む。上層では小礫を含む明褐色土の厚層に被われ、上面は土壌にのびて平坦となる。下層を除いては北法面に沿う堆積であり、北西に共通している。

9号塹に重複する削平地境の南辺ではやゝ方向をかえて東進する。重複する9号塹覆土を切って開削され、底部は更に地山を切る。幅2.30m、底部幅0.10m、深さ1.35mを計り、南北法面はそれぞれ49.2°、48.8°勾配である。地山を切る下方では55.5°～57.0°をなし、北法面の地山境よりやゝ強いV字状をなす。

覆土は底部より砂礫が多く、特に中位層では東西方向に傾斜する人頭大の礫が混在する。上層は小礫を含む暗褐色土、または褐色土でHj 12トレンチに類似する。遺物は上層に含まれる土師器片2点である。

III-24削平地に沿う南東は僅かに湾曲して下降し、削平地との比高は4.2～2.8mに減少している。北法面は削平地に統く31.3°勾配の南斜面を切って殆ど同一面をなして続き、下方で変換して65.6°となる。南法面は37.4°勾配で緩やかである。南東ほど小規模となり、Ih 115トレンチでは幅1.64m、底部幅0.50m、深さ0.56mである。底部は広く、若しく緩やかである。

堆積層は2分され、下層は風化礫を伴う砂礫層であり、上層では小礫を含む暗褐色土である。

### 2. 土堀（第29、30、35、36図 図版10）

8号塹に南接して北西より南東に続く。現状では8号塹覆土によって明瞭でないが、南斜面に比してやゝ強い勾配をなして認められる。

北西よりIII-24削平地中央部南辺にかけては、8号塹開削に伴うとみられる若干の盛土層が認められるが、南斜面の削り出しのほかは築成に伴う痕跡は明らかでない。上面は殆ど平坦をなし、上面幅は1.0～1.20m前後である。Hj 12トレンチにおける基底幅は変換点によって1.70mを計る。法面は8号塹に統く北に強く、南法面に緩やかとなる。同トレンチでは26.5°勾配をなす。

これより以東では段状をなして下降し、上面幅は0.60m前後となってIII-24削平地南辺へ続いている。中央部では旧表土への盛土によって構成されているが、南斜面の削り出しは認められない。やゝ低位となる中央部は0.10m前後の暗褐色土層であり、礫を伴ってやゝ南へ傾斜している。また、9号塹に重複するIc 100トレンチでは覆土に伴う大小の礫が南斜面に及んでおり、これを削り出している形跡は認められない。III-23削平地に沿っては山なりをなす地山削り出し面となり、明瞭な盛土による築成は認められない。西端トレンチにおける上面幅0.40m、基底幅2.20m、高さ0.55m、南北法面はそれぞれ29.0°、32.5°となってほゞ対称形をなす。

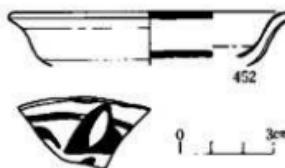
### 3. 遺物（第31～33図 図版44）

いずれも上層に検出される陶磁器3点、土器11点、石器1点である。8号塹覆土に多く、土

里に検出される遺物は 1 点である。

#### 陶磁器 (第31図 図版44)

染付 2 点は共に皿片である。(452) は薄手の端反りする口縁部である。二次加熱をうけて光沢を失ない、外面の線描は不鮮明であるが、口縁直下及び底部内面に条線が走る。推定口径 9.0cm、8 号堀北西Ⅲ層出土。他の 1 点は発色のよい体部片であるが、全体は不明である。III-22 削平地南西辺 I 層出土である。



第31図 8号堀出土遺物(1)

灰釉陶器 1 点は内弯する皿の口縁部小片である。黄褐色釉は二次加熱によって白色化し、吸水性の強い胎土に変質している。8 号堀北西Ⅲ層出土。

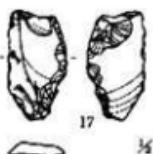
#### 土器 (第32図)

土器 3 点は薄手で外面にロクロ成形痕を有し、内面黒色処理をなす体部片で同一個体の坏とみられる。III-23 削平地南辺の Hj 12 トレンチ II 層及び Ic 100 トレンチ I 層出土。



第32図 出土遺物(2)

先史土器 3 点のうち北西の土壘に混入する 1 点は、単節斜繩文を有し、上部に沈線及び磨消しが認められる。その他繩文土器片 6 片がある。共に III-22 削平地南辺の覆土に出土し、同削平地出土片に類似する。



第32図 出土遺物(3)

#### 石器 (第33図)

長さ 5.2m、幅 2.7cm の断面台形状をなす搔器 1 点である。刃部を両面削離によって形成される。Hj 12 トレンチ II 層出土。

#### 4. 南斜面の遺構と遺物 (第29、34図 図版11)

8 号堀に続く南斜面は 24° 前後の勾配をなし、III-24 削平地南辺中央部より 9 号堀にかけてはやゝ東南へ傾斜している。土壘が段状に下降する南東斜面に旧表土を認めるほかは土壘に近接して地山削り出し面をなす。Hj 24 トレンチでは地山面に土壘に統く暗褐色土が被い、南辺では下層の黒色土上に 0.90m 前後の厚層で堆積する。共に拳大の礫を伴う混土であり、8 号堀開削及び削り出しに伴う余土とみられる。

遺構は南西辺の地山面に確認される馬歯を伴う基壇である。これに近接して牛・馬歯が出土しているが、掘り込みは明らかでない。また、現状で認められる南辺の東西通路は幅 2 m 前後の開削によって林道と化し、以南では低湿地帯をなして遺構は認められない。

#### If 21 墓塚と牛・馬歯 (第29、34図 図版11)

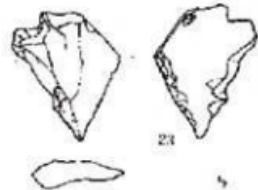
東西 0.65m、南北 0.68m のほぼ方形をなし、深さは北辺で 0.10m を計る。底部は平坦をなし、中央部南より馬歯 13 点が認められる。大部分咬合面を中心にして南北方向に並列し、更に重複

して方向を異にするものがある。歯冠や歯根部を僅かに残すものもあるが、脆弱となって採集段階以後に破損するものが多い。歯牙は上・下顎臼歯で各々第1後臼歯が含まれ、同一部位の重複が認められない点では同一個体の可能性が強い。覆土は柔らかい黒色土に掌大の礫が含まれ、上層の黒色土と識別できない。

墓壇に近接する東方2~3mにはやゝ網りをもって分布する牛・馬歯が検出される。黒色土下層に合せて11点が混在し、牛歯は下顎第1~3前臼歯、同第1~3後臼歯が判明し、下顎第2後臼歯のみ2点含まれる。歯根部を残すほか、下顎骨の破片が含まれる。また、馬歯4点中には下顎第1後臼歯、同第3臼歯が判明し、後臼歯の前後幅は現代牛・馬に比して共に大きい計測値が得られている。

#### その他の遺物（第34図）

南西辺のI、II層より縦文土器とみられる破片8点が出土する。摩耗する体部片で、斜縞文を有する1点が認められる。III-22削平地出土片に類似する。そのほか、長さ4.3cm、幅3.5cmの搔器1点がある。同I層出土。



第34図 南斜面の出土遺物

#### 要約

IIIの郭の南辺を走る空堀であり、IIIの郭南西に続く通路東方より南東方向に湾曲して開削される。北西で10号堀に南接し、以東は南辺の2削平地斜面の削り出しに続いて掘り込まれ、9号堀に重複する中央部では覆土を切って構築される。両削平地との比高は4.5m前後を計るが、南東端では著しく減少している。堀幅1.64~2.50m、底部幅0.10~0.50mを計り、中央部に大きく、南東に小規模となる。法面の勾配は東西二方にやや緩やかであり、中央部においては44.0~49.2°をなし、下方では更に急傾斜となり、いずれも北法面に強い。流水による影響も認められるが、形状はほゞV字状を呈する堀壁である。

覆土は東西に若干の相異が認められるものの共に底部より中位層にかけての砂疊層が厚く、北法面に沿う堆積が多い。大部分削平地を含む北西方向よりの流入堆積とみられ、III-23削平地南辺では削平地に類似する堆積層である。また、南法面に沿う薄層は土壁に続き、盛土の流入も推定される。

8号堀に南接する土壁は削り出し及び盛土によって形成され、特に低位となる中央部では旧表土への盛土が認められる。上面幅1.20~2.20m、基底幅2.20~4.90mを計るが、南東は0.60m前後となって狭く、ほゞ8号堀規模に対応している。法面は南法面に緩やかとなり、南斜面に比してやゝ強い勾配をなす。削平地南端及び上堀南端を結ぶ南北の傾斜は中央部を除いて22~23°前後を計り、これより24~27°勾配をなす南斜面となり、堤壁はほゞH地形に沿って構築されているものと解される。

土壁外方にあたる南斜面は上方で削り出しをうけるが、中央部では東南斜面をなして僅かに低位となり、旧地形が残存する。9号塚の延長にあたる斜面においても大軸の砂礫が堆積し、削り出される形跡は認められない。また、削り出しの明瞭なIII-22削平地南西の斜面では、旧表土上に1m前後の盛土をなして南端に張り出し、これを迂回して東西通路が開かれている。しかし、通路は改変されている可能性があり、当初より迂回の目的に沿って形成されているかは明らかでない。

墓壇は斜面裏に確認される1基である。掘り込み面は旧表土とみなされるが、一頭の埋葬とみても小規模であり、不明な点が多い。近接して出土する牛・馬歯は部位の重複によって各2頭に相当し、同様の盛土層によって被われる。墓壇と共に墳塚開削以前の遺物とみなされる。

遺物は陶磁器、上器片若干である。8号塚北西の上層に混入する染付は明代の舶載品であり、灰釉陶器は美濃産である。共に以北の削平地に共通するものである。南邊の2削平地に関連する遺物は上器片を除いて皆無であり、中央部の削平地と同様の施設の存在は認め難い。

#### (2) 9号塚と遺物 (第29、35、36図 図版11、12)

III-23削平地北・西辺を画し、ほゞV字状に東西方向へ延びる空堀である。南西は8号塚に重複して南斜面に続き、削平地西辺でIII-22削平地を境して北進する。更に湾曲して10号塚に平行してIIIの郭東端に達する。全長凡そ50mの堀切である。現状においては削平地西辺で溝状をなし、北辺では埋没して凹地状を呈する。

調査区域はIII-23削平地北西辺にあたる33mであり、東端1mは現状保存区域に編入されている。遺構は現状で確認される空堀のほか、これに付設する遺構は認められない。遺物は北辺に出土する石製品等2点である。

#### 1. 9号塚 (第29、35、36図 図版11、12)

地山を切って確認される32mである。南北方向に配されるIII-23削平地西辺以南では、北西隅よりやゝ蛇行して南斜面に達する。もっとも高位となる削平地南西隅を境に南北に下降し、南は8号塚及び上層に重複し、8号塚によってその一部を失っている。重複する南斜面にあっては堀幅1.50~2.0m、深さ1.20m前後で小規模となり、底部は南進してやゝ狭く、27°勾配で傾斜している。8号塚以南では斜面に沿って緩やかとなり、南3mで消滅する。南端における比高は4.50mである。

覆土は上方ほど砂礫が少なく、斜面にかけては底部より砂礫層によって占められ、中位層に人頭大以上の礫が含まれる。8号塚もほゞ同様であり、延長線上にあたる斜面裏には層状に分布する礫が堆積している。

西辺中央部ではほゞ同様の形状を示すが、Ic100トレンチ南壁では堀幅2.60m、底部幅0.50m、深さ1.12mをなし、やゝ底部が広い。東西法面はそれぞれ35.2°、33.0°で傾斜し、下方では50.

5~51.5°を計る。

覆土は0.85mで東西法面に沿う堆積層をなし、特に西法面に沿っては0.50mの厚層がみられる。底部より中位層にかけては砂礫が多いが、上層の水平堆積層では殆んど含まれず、南斜面のそれに相違している。

これより北辺にかけては形状に変化が認められ、特に底部に著しい。削平地南西隅より8.8mに渡って5°勾配で傾斜する。北辺にかかる1.7m間では1.1mの段状をなして急下降し、再び10°勾配となって北行している。形状は北辺と同様法面勾配が強く、下部で著しく狭まる。また、南北に比してやゝ深く、III-22削平地間の比高は最大4.7mを計る。

北辺は10号堀に境してこれに平行する直線掘をなす。Hfl15トレンチによって堀幅4.65m、一部幅0.45m、深さ2.23mとなり、南北法面はそれぞれ54.1°、45.4°勾配で北法面にやゝ強い。要換点を有する下半では71.0~79.0°をなして断面U字状を呈する。

覆土は1.96mに達し、レンズ状の堆積が認められる。主として褐色土であり、砂礫は底部より中位層に限られる。中位層以上には灰・炭化物粒の混入がみられ、特に上層が北法面に沿っている点で北西方向よりの流入堆積とみられる。遺物は1層より2点出土している。

## 2. 遺物

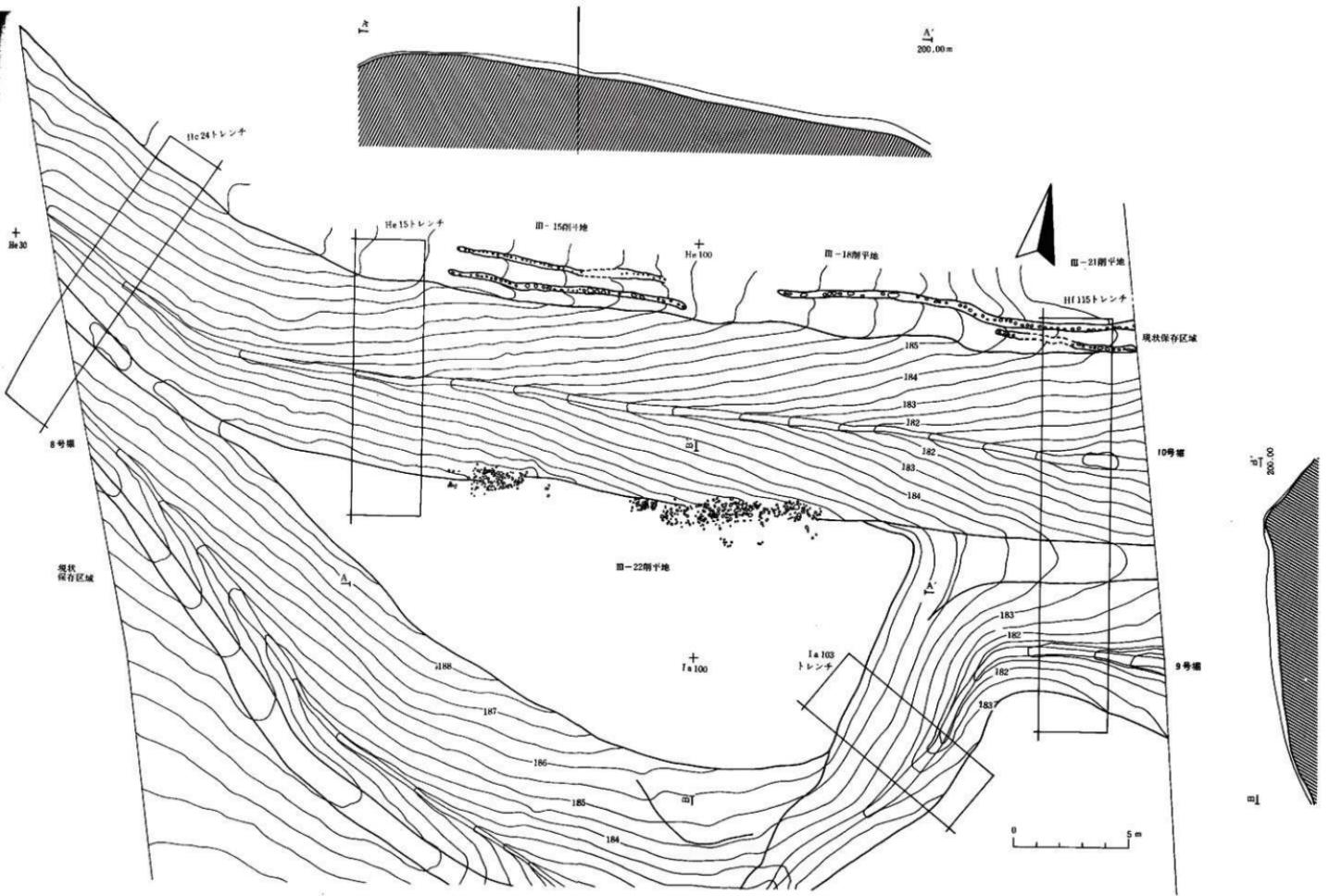
砥石は折損する石英安山岩質の小片である。現存長2.6cm、幅5.5cm、厚さ2.6cmの断面長方形を呈し、上下2面に研磨面を有する。そのほか磨耗する織文土器片1点がある。共にHfl15トレンチⅠ層出土である。

## 要約

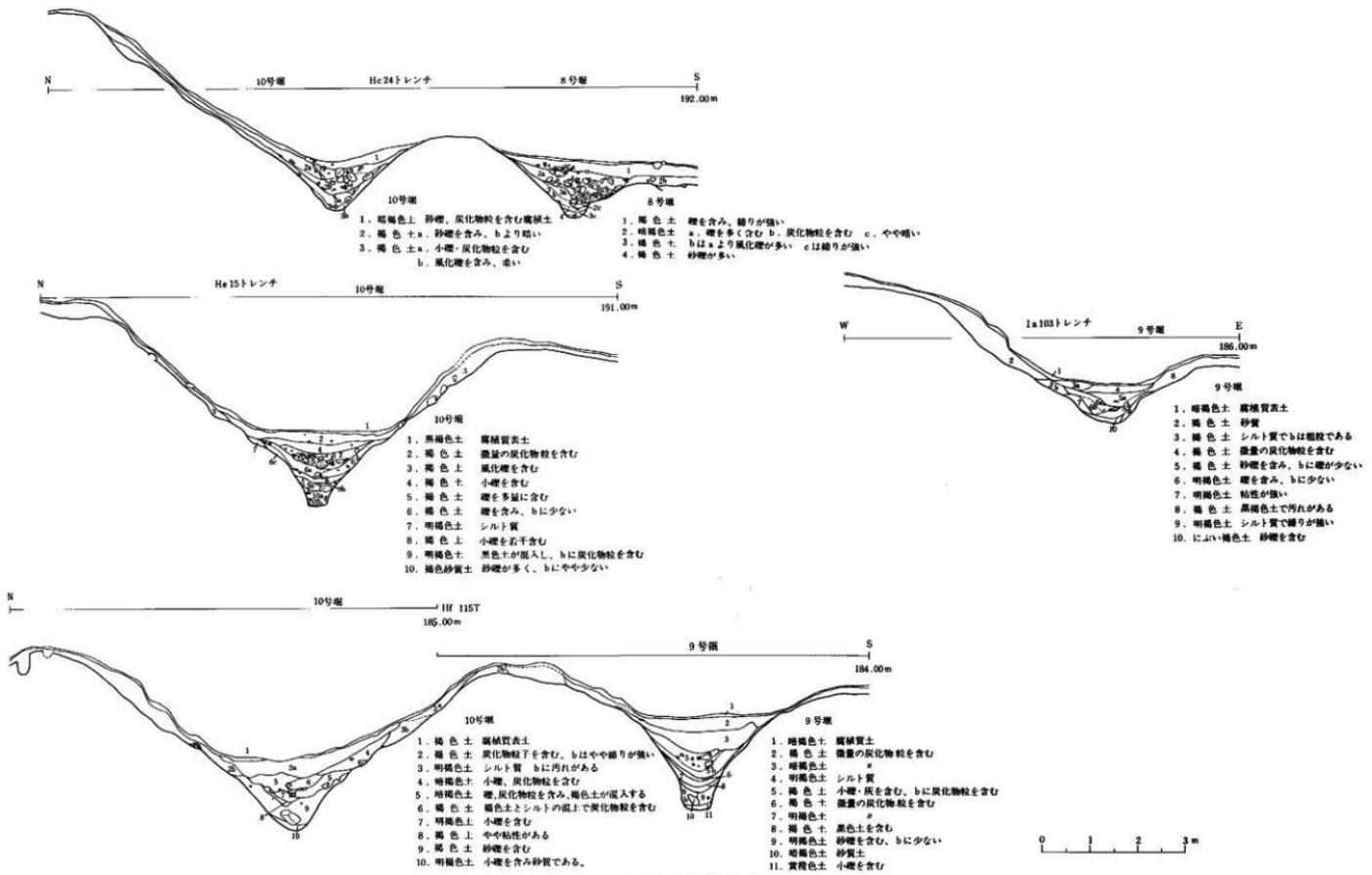
IIIの郭南辺の2削平地を両して南北方向より東西方向に延びて10号堀に南接する堀切である。III-23削平地南西隅を境に南北へ下降し、特に南半は急傾斜をなして8号堀に重複し、さらに南斜面に達する。III-23削平地南西より南斜面にかけて浅い小規模なV字状をなす。高位部分では堀幅共に広く舗装研磨状をなす。湾曲部以東では更に拡大し、堀幅4.65m、深さ2.23mを計る。法面勾配は湾曲部に強く、下方では71~79°をなしてU字状に近い。

覆土は南西の高位部分を境にして、南は著しい砂礫の堆積層である。北辺では粘性土となつて中位層以上に炭化物粒を含む以外に判然とする相違は認められない。III-23削平地西辺以北における上層は主として北西方向よりの堆積であり、西法面に沿う厚層が埋没進行途上にみられる点ではIII-22削平地形成以前の開削が推定される。また、西辺に沿って東西0.9m幅の高位部分が認められ、これに続く東法面上方にやゝ厚い堆積層を形成している点では、開削に伴う盛土の存在も想定されるが、北辺ではその形跡が確認されず明らかではない。

重複する遺構では埋没以後8号堀によって南斜面の一部を失っており、これに先行する開削であるが、北辺に平行する10号堀については明瞭でない。覆土上層の堆積が土壌に続き、10号



第35図 IIIの東南辺の墨書き平面図（2）



第36図 IIIの郭南辺の墓場断面図（2）

處に比して高位をなす点で同時に開削されている可能性は薄く、III-20, 23削平地を結ぶ南北の地山面が僅かに南へ傾斜しており、この地形に沿って開削されているとみるならば埋没進行状況によって10号堀に先行するⅢ堀である可能性が強いといえる。

### (3) 10号堀と土塁 (第35~37図 第9、10表 図版44)

Ⅲの郭南西端より南辺の2削平地を画して東端に達する全長凡そ90mの東西堀とこれに平行する土塁である。現状では空堀の西端が明確でないが、南北削平地間にあって2.50m前後の比高を有し、東方では切通し状をなして認められる。土塁は8、9号堀に平行する東西両端では僅かに高位となるが、III-22削平地北辺および中央部削平地南辺にあってはIII-23削平地に判明するほか、殆ど明らかでない。

調査は東西52.5mの部分であり、東端1.2mは現状保存区域となって未調査である。また、西端確認のためのトレンチを設定しているが、同様に保存区域となって埋め戻している。

遺構は10号堀及び南・北に平行する土塁であり、さらに北接して2個列が検出される。遺物は10号堀覆土に含まれる23点余りである。

#### 1. 10号堀 (第35、36図 図版12, 13)

西端よりIII-23削平地北辺に至る8mは8号堀に接して北西に僅かに湾曲し、III-15削平地南辺より37'前後の勾配をなして開削され、5.5mで底部に達する。Hc24トレンチにおいては堀幅4.20m、底部幅0.30m、深さ1.53mとなり、底部におけるIII-15削平地との比高は4.13mである。南北法面は下方でそれぞれ45.5~53.0'を計り、北法面にやゝ強い。断面はほゞV字状を呈する。

覆土は法面に沿う堆積層であり、西方ほど大小跡が多い。特に中位層以上に拠大以上の跡が伴っている。遺物は表土中より磁石片1点が出土している。

中央部では南北削平地間に切って直線状に東進し、東西方向はE4.3°N方向を計る。両削平地間のはゞ中央に配される底部の比高はIII-15削平地において3.77~4.65m、III-23削平地では3.17~3.68mを有し、中央部で最大となる。Hc15トレンチにおける堀幅7.12m、底部幅0.35m、深さ3.18mであり、削平地間の比高は3.30~3.95mを計る。法面は上方を37.1~41.5'を勾配で下降し、下方では71.0~80.0'勾配をなす。交点では29.0'となって対象的なV字状を呈する。

覆土は法面に沿って堆積する褐色土である。底部より中位層にかけては地山の風化跡を含み、中位層により大きい跡が多い。遺物はこの跡層を被う褐色土に認められ、堀底以下には1点も出土していない。

9号堀に平行する東方では形状に相異が認められるもののほとんど中央部と同様である。Hc15トレンチによるとIII-23削平地南端と9号堀間の土塁を結ぶ地山面は1.7勾配で南へ傾斜しているが、南肩部より共に4mを計り、底部はその中心に位置する。南北両端との比高にそれぞれ3.26m、3.55mである。同トレンチにおける堀幅7.97m、底部幅0.25m、深さ

3.23mを計る。法面は共に37.5°勾配をなし、下方ではそれぞれ49.0°、57.0°である。断面は緩やかなV字状をなす。底部は西端より殆ど同一勾配をなし、東西端の比高は7.75mである。

覆土は1.50mで大部分法面に沿って形成される堆積層である。底部より中位層にかけては砂疊層を主体としており、中位層にやゝ疊が多い点では中央部と類似している。上層では南北法面に沿う褐色土が流入しており、共に土壌には現状以上の堆積が推定される。

## 2. 土壠（第35、36図 図版12,13）

10号堀に南接して形成される土壠は東西二方の8、9号堀間にあって僅かに高位をなすが、中央部30mはIII-23削平地北辺にあたり、その延長線上に部分的に判明する。削平地北辺の土壠についてはIII-23削平地の項に合せて後述している。

III-23削平地の西方は徐々に下降し、8号堀に接して殆ど平坦をなして削り出される。西端はIII-13削平地南端の登り道に接している。Hc24トレンチにおける上面幅は0.90m、南北法面はそれぞれ26.0、34.5°勾配をなし、8号堀に続く南法面に強いて、緩やかな対称形をなす。

東方ではIII-23削平地北東端より段状をなして削り出され、次第に下降して9、10号堀間に続く。削り出し面は東西36.5°勾配を有してIII-22削平地切土斜面に対応し、北辺土壠とほぼ同一面をなして東へ傾斜している。9、10号堀間は4.0～4.5mを計り、土壠は東端で僅かに10号堀に寄っている。上部は褐色土によって被われているが、明瞭な盛上の形跡は認められない。Hf115トレンチでは上面幅1.85mを計り、南北法面はそれぞれ27.4°、43.4°勾配をなし、9号堀に続く南法面に緩やかである。変換点における基底幅は4.20m、高さ1.17mである。

## 3. 遺物（第37図 第9、10表 図版44）

陶器12点のほか、石製品、鐵製品、穀類等である。中央部に多く、東方ではIII-19、22削平地南辺では北法面に沿って分布する。

第10表 10号堀出土遺物

種	位	古	磚	白	縞	青	竹	四	五	六	外付	器	縛	土	瓦	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234	1235	1236	1237	1238	1239	1240	1241	1242	1243	1244	1245	1246	1247	1248	1249	1250	1251	1252	1253	1254	1255	1256	1257	1258	1259	1260	1261	1262	1263	1264	1265	1266	1267	1268	1269	1270	1271	1272	1273	1274	1275	1276	1277	1278	1279	1280	1281	1282	1283	1284	1285	1286	1287	1288	1289	1290	1291	1292	1293	1294	1295	1296	1297	1298	1299	1300	1301	1302	1303	1304	1305	1306	1307	1308	1309	1310	1311	1312	1313	1314	1315	1316	1317	1318	1319	1320	1321	1322	1323	1324	1325	1326	1327	1328	1329	1330	1331	1332	1333	1334	1335	1336	1337	1338	1339	1340	1341	1342	1343	1344	1345	1346	1347	1348	1349	1350	1351	1352	1353	1354	1355	1356	1357	1358	1359	1360	1361	1362	1363	1364	1365	1366	1367	1368	1369	1370	1371	1372	1373	1374	1375	1376	1377</

はやゝ不整に削り出す14弁の蓮弁とみられる。体部より口縁部にかけて内彎して薄くなり、底部は基部底をなす。高台内を除く施釉は口縁端にやゝ厚く、貫入のみられる薄い緑色を呈する。胎土は堅緻な灰白色である。推定口径9.6cm、周高台径5.6cm、器高2.4cm。(132)、(130)共に東端II、Ⅲ層出土。

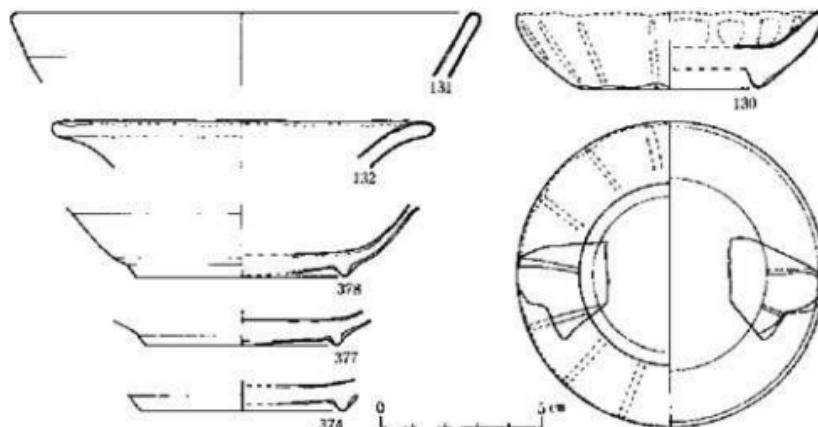
#### 白磁・染付

合せて4点であるが、細片で図示できるものはない。染付には薄手の直行する口縁部片があり、小杯とみられる1点が含まれる。共に中央部I、II層出土。

#### 陶器 (第37図)

灰釉陶器5点であり、碗1点、皿3点が含まれる。碗は口縁部の小片でやゝ薄い緑色をなし、外面には蓮弁とみられる細線が認められる。胎土は淡褐色を呈し、吸水性がある。皿は共に厚手で高台の低い底部片である。高台内には輪トチの痕跡を残す。内外淡黄緑色、または淡緑色を呈するが、(374)の高台内では施釉が薄く褐色をなす。底部内面及び高台脇には薬窓があり、貫入が著しい。全体に光沢を有するが、(378)の内面には擦痕が廻ってやゝ弱い。胎土は礫と同様である。推定高台径6.0～6.6cm、高台高0.3cm。(374)は中央部2層、他は東方1層出土。

他の1点は二次加熱をうける壺の体部片である。内外赤褐色を呈し、外面には黄褐色と変色する灰釉の流れがみられる。胎土は粗砂を含み、壺状をなす赤褐色である。中央部1層出土。



第37図 東の郷南辺10号窯出土遺物

#### 土器

弥生土器2点は体部小片で斜綱文が認められる。内外褐色をなすが、胎土は砂粒が多く黒色である。III-23削平地出土片に類似する。中央部II層及びIII-15削平地南辺の法面出土。

その他縄文土器3点がある。III-18削平地にかかる北法面I、II層出土。

#### 鉄製品・鉄滓

鉄釘2点で共に先端を欠損する皆折形をなす。(341)、(342)は現存長はそれぞれ6.1cm、5.6cm、断面は方形をなす。鉄滓は3.1×2.9cmの海綿状の小滓である。中央部II層出土。

#### 石製品

硯2点、砥石1点がある。共に小片で図示できるものはない。硯は側面を残す墨池が認められ、高さ0.6cmの小硯である。他の1点は使用痕を有する墨堂で、高さ1.1cmを計る。いずれも石質凝灰岩製、中央部I層出土。

砥石は二次加熱をうける六角形をなす石英安山岩製の断片である。西方I層出土である。

#### 炭化穀類（第11表）

III-23削平地に続く南法面上層に検出される小量の炭化米及び大麦である。そのほか炭化する小豆とみられる円粒がある。

炭化米は糲米や焼膨れするものが含まれ、大小粒が混在している。170余粒のうち、20例によつてみると下表の通りであり、長幅比の平均は1.75である。

大麦は炭化米に混在して認められ、焼膨れするものがみられる。小豆とみられる炭化粒は長さ0.52cm、幅0.28cm、厚さ0.32cmを計る。

第11表 10号堀出土米計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考
1	4.7mm	2.7mm	1.8mm	1.74		11	4.6mm	2.6mm	1.6mm	1.77	
2	5.1	3.1	1.7	1.65		12	4.6	2.7	1.8	1.70	
3	4.7	2.7	1.8	1.74	ヒビ割れ	13	4.2	2.4	1.6	1.75	
4	4.7	2.4	1.7	1.90		14	4.9	2.8	2.2	1.75	
5	4.7	2.6	1.6	1.81		15	4.5	3.0	2.0	1.50	
6	4.6	2.6	1.7	1.77		16	4.5	2.6	2.1	1.73	
7	4.7	2.3	1.7	2.04		17	4.3	2.6	1.7	1.65	
8	4.6	2.6	1.8	1.77		18	4.7	2.8	1.7	1.68	
9	4.4	2.6	1.7	1.60		19	4.5	2.5	1.7	1.80	
10	4.7	2.6	1.8	1.81		20	4.7	2.7	1.9	1.74	

#### 要約

IIIの郭南西端の門跡南際より東端に達するほゝ直線状をなす東西堀である。地形に沿って東へ傾斜し、共に北接する削平地南界より地山を切って開削される。削平地面に比して4.0~5.5mを計り、西方にやゝ大きい。堀幅は最大8.0m、底部幅0.25~0.35mである。法面は37~59°勾配と北法面に強く、下方では更に急傾斜をなす。東西にやゝ不均衡をなすが、大旨V字状をなす薬研堀である。

覆土は法面に沿う堆積が多く、西方ほど大小砾を伴い、特に中位層に多い点では8号堀西方に類似している。中央部より東方にかけてはやゝ厚層をなすが、レンズ状の堆積をなし、崩壊や流失による影響をうけているものとみられる。また、上層に含まれる遺物の大部分は北接す

る削平地に伴う混入とみなされる。

土壘は10号堀外方にあたり、東西二方では10、9号堀境をなして削り出され、明らかな盛土による構築は認められない。10号堀覆土によっては更に高位をなす土壘も推定されるが明瞭ではない。東西では若干の相違が認められ、東方では上面幅1.10～1.27m、高さ1.17m、基底幅4.20m前後をなし、西方ではこれより小規模である。法面は26～43°勾配を計り、著しい変化は認められない。

関連する遺構にはIII-22削平地北辺の土壘があり、10号堀に沿って配される点では同時、または近接して併設されるものとみられる。また、後述する中央部の削平地南辺には土壘及び柵列が10号堀北側に平行しており、同様に構築されているものと推定される。また、削平地に関しては中央部以東で10号堀を境にする南北の削平地が共に同一面を形成し、連続する地形とみなされ、東方においてはIII-22削平地西方における南北の切土方向に一致して10号堀開削以前における削平地の存在も推定される。

遺物は炭化穀類を除いて10号堀北法面に集中し、中央部にやゝ密である。北接するIII-15、18、20削平地出土陶磁器と同様、明代の舶載磁器、美濃の灰釉陶器が含まれる。また、炭化米は南辺III-22削平地出土米に共通して散乱する焼米と推定される。

## 第4章 I、IIの郭の遺構と遺物

### 1. Iの郭

調査区域はIの郭北東端の最下段削平地にあたり、小削平地中央部より東辺にかけての一帯75m<sup>2</sup>である。更に削平地をなす北辺の東西上堀に続く鞍部南東削平地の一部90m<sup>2</sup>を含み、IIの郭に仮称するところであるが、記述の都合上それぞれI-1、I-2削平地としてこれに括している。共に調査途上にあって現状保存区域となり、I-1削平地では遺構精査段階に、I-2削平地は遺構検出中にあって埋め戻している。

I-1削平地は南西二方の上段削平地に限られ、北辺を東西土堤に、東辺を5号堀によって区切られる。東西9m、南北15mの長方形をなし、上段削平地の比高は0.80~1.00mを有するIの郭中もっとも低位の小削平地である。また、5号堀に接するIIIの郭西側削平地との比高は5.3mを計り、IIIの郭のほとんどの全域を眼下にすることができる。

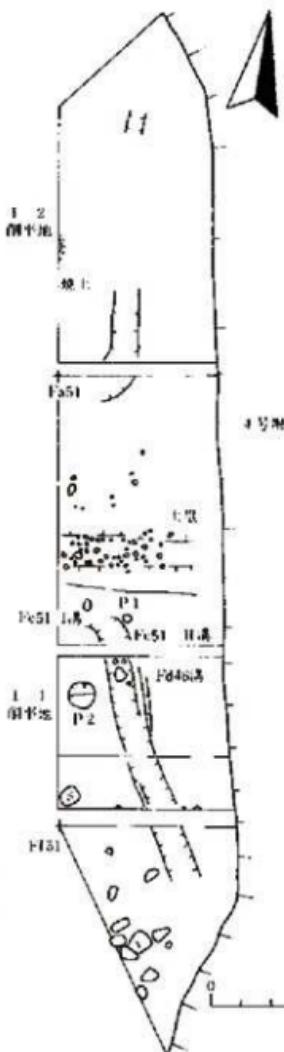
北辺の土堤はIの郭と鞍部を分ける北斜面の東西延長線上に位置し、I-1削平地に比してやや高く、小疊が散乱している。5号堀に接する東縁は低く、鞍部に続く通路状をなす。土堤の北法面に続くI-2削平地は坂斜面をなして最下段削平地に連なり、東辺はI-1削平地と同様東へ張り出し、北東に狭少となる。

遺構は土堤と削平地に検出される溝5条、柱穴、焼土等であり、遺物には陶磁器、鉄製品、炭化米がやや多い。

#### (1) I-1削平地の遺構の遺物(第38~41図 図版20,44)

##### 1. 削平地の形成と遺構(第38~40図 図版20)

削平地は北辺の土堤を残して整地剤によって被われているが、地山面は北西より南東方向に削平され、南西では0.50m以上の盛土層を形成している。南端の上段削平地境では盛土層中に人頭大以上の土留石によって限ら



第38図 I-1,2 削平地遺構概要図



第39図 I-I削平地断面図

れ、これを被う0.70m以上の盛土層によって形成される。道構は溝3条、柱穴であり、地山削平面にこれを切って認められ、南西では盛土層に確認される。そのほか、径0.50m以上の礫石状の扁平な自然石を検出しているが、未確認である。

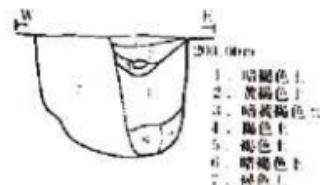
溝3条のうち重複する Fe51-1、Fe51-II溝は共に北西より南東方向に走る。北端は削平によって明らかでないが、南端は削平地東縁に達している。南西ほど幅広となり、II溝 Fe51-II溝は最深部で1m以上を有する。断面は緩やかなV字状である。覆土は暗褐色土及び明褐色土の混土をなし、拳大以上の礫が伴う。Fe51-II溝はこれを切るやや浅い溝である。焼土・炭化物粒の混入する暗褐色土には人頭大の礫を含み、共に人为的な堆積とみられる。更にこれを切ってやや方向を異にする Fd48溝を検出するが、削平にあって部分的に認められるのみである。

遺物は Fe51-1 溝覆土に灰釉陶器や須恵器片、鉄板の断片、鉄錠等が含まれる。

柱穴は西辺の地山面に検出されるほか、盛土層に柱穴状のビットが含まれる。P2は径0.70×0.50mの平面梢円状をなし、深さ0.95mを計る。調査区域中では最大の掘り方を有し、柱痕は径0.30mの円形をなす。覆土は炭化物粒を含む暗褐色土が多く、上層では地山の黄褐色粘性土が被っている。上層に染付、擦鉢、石鏡等の小破片が出土する。

## 2. 遺物 (第41図 第12、13、121表 図版44、46)

ほぼ全域にかけて目視以上に広く分布するが、南西の盛土層では試掘溝によっており、精査途上の遺物である。陶磁器、鉄製品、鐵滓、古銭等95点のほか、炭化木が混入している。



第40図 P-2 柱穴断面図

第12表 I 削平地出土遺物

分類	在	種	白	赤	灰	陶	磁	金	銀	銅	鐵	錠	金	石	骨	鐵	灰	漆	器	
			骨	器	白	赤	灰	陶	磁	金	銀	銅	錠	金	石	骨	鐵	灰	漆	器
I-a	3		1		2			2	3	2	2	3								
I-b	3	2	8	10	3	1		1	1											
II	1			1	2	1		1		2	9									
III				1							2									
遺物			1	2	1			1	1	16	1									
計	7	2	14	15	5	2	5	3	29	3	3	1								

遺構出土の遺物は柱穴P 2 覆土上層に磁器等 3 点、旧溝 2 条の覆土には灰釉陶器片等が出土している。共に小片であり、完形は鉄器 1 点である。

#### 青磁

7 点のうち碗 4 点、皿 2 点が含まれる。碗の口縁部 1 点はやゝ丸味をもって直行して立ち上がり、外面には体部にかけて蓮弁が認められる。灰緑色を呈し、胎土は緻密で灰白色を呈する。皿は外反する口縁部であり、釉調、胎土は碗と同様である。

#### 白磁

端反りする皿の口縁部と内側して立ち上がる皿の体部片が含まれるが、図示できるものはない。前者は薄手の白色をなす端整な作りであり、後者はやゝ肥厚があり、貫入が認められる。

#### 染付（第41図 図版44）

碗 2 点、皿 12 点である。碗（263）は体部より薄くなつて立ち上がり、やゝ丸味をもつ。施釉は口縁端及び内面に若干厚く、全体的に淡水色をなす。外面には二条の区画線と草花文が濃淡をもつて描画される。胎土は緻密な白色を呈する。推定口径 13.0cm、西辺 II 層出土。

皿の口縁部 4 点は共に端反りし、外反りのやゝ強いものと口縁部を僅かに引きだすものが含まれる。施釉は碗と同様であり、内外面に草花文や團文が認められる。推定口径は（249）の 10.0cm、（224）は 16.0cm であり、大小の皿が混在している。底部 2 点は高台をやゝ強く削りとるもののほか、滑らかな成形をなすものが含まれる。内外の施釉は高台端を除いて一様をなし、濃淡のある草花文や条線を描くものが多い。そのほか小皿片に二次加熱によって白青色を呈する 1 点が含まれる。（224）は南辺 I 層、（249）は同 IV 層出土。

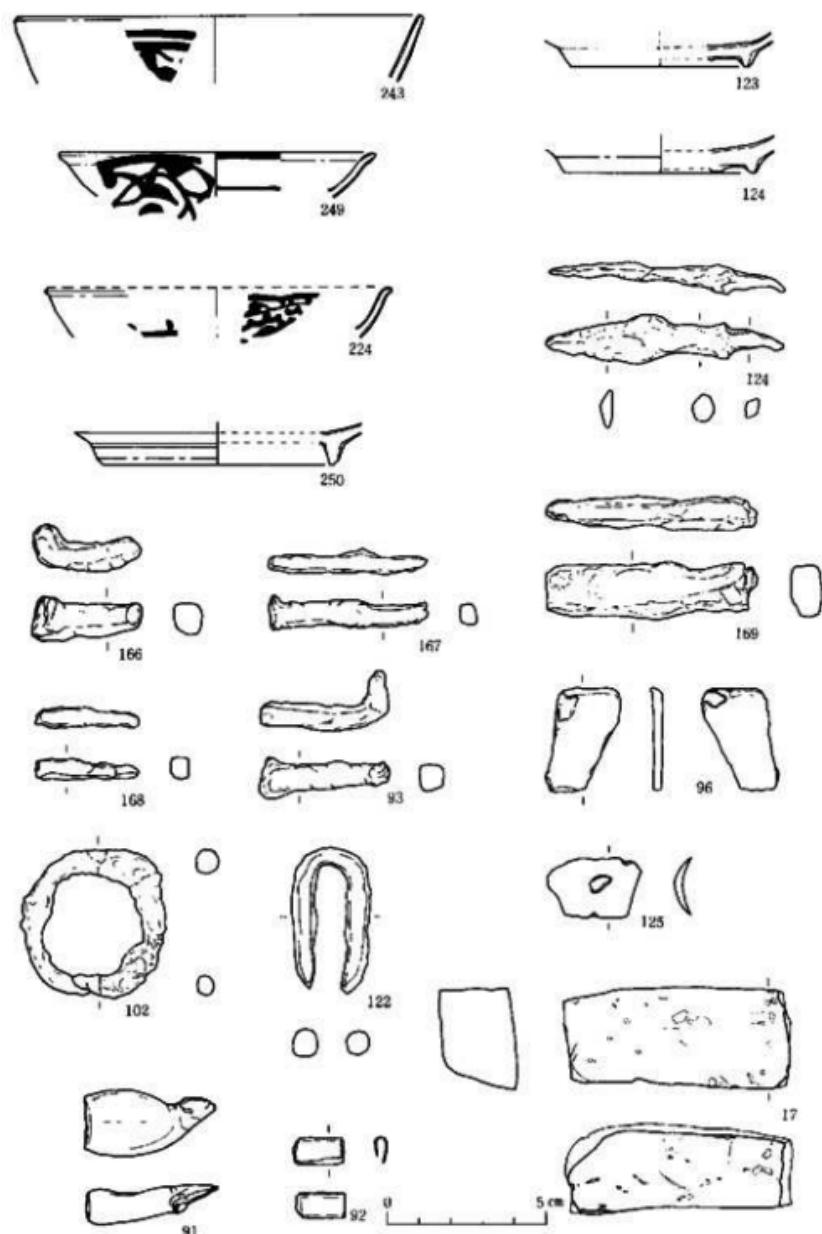
#### 灰釉陶器

いずれも皿片とみられ、口縁部 3 点、底部 7 点が含まれる。外反する端反皿で体部に積を残すものを含む。統じて器厚 0.45cm 前後の厚作りである。高台は浅い削り出し高台をなすが、高台幅、高さとも一様ではない。高台内には輪トチンの痕跡を残すものが多く、円形、または亞方形状の剝離面が認められる。淡黄緑色釉が全面に及び、特に見込みや高台脇に厚く薬漬し、厚さ 0.15～0.20cm に及んでいる。共に貫入が走り、見込みに花文を有するものが 1 点含まれる。胎土は白色をなし、均質である。底部の器高 0.3～0.6cm（173）、（174）の推定高台径はそれぞれ 5.6cm、6.0cm である。共に南東 II 層出土。

#### その他の陶磁器

施釉陶器は 2 点であり、淡緑色釉の茶碗とみられる細片と外面にのみ褐色釉のかかる小片が含まれる。ほかに外面暗赤褐色を呈する壺の体部片がある。

摺鉢は体部より底部にかけての破片である。体部の器厚は 2.2cm を計るが、底部は 0.8cm で極端に薄い。整然とした施釉は 10 条まで確認され、見込みはかなり磨耗している。色調は灰褐色



第41図 Iの郭削平地出土遺物

をなす。

その他培塿とみられる破片があり、分厚く歪みの大きい手捏である。口縁部より体部外面にかけては暗緑色をなし、不規則な亀裂が走る。内面には黒灰色の鉱物滓の付着を有し、班点状に朱色をなす。胎土は褐色の細粒粘土で、中央部は稍状に灰色化している。

#### 土師質土器・須恵器

土師質土器は2点共に皿形をなす底部片である。赤褐色の精選された胎土で、やゝ軟質である。須恵器は甕の体部片とみられ、黒色、または灰色を呈し、焼成不良のもの1点が含まれる。

#### 鉄製品・鉄滓（第41図 図版46）

鉄製品9点のうち用途の判明するものは釘3点、鉄鎌1点である。鉄釘は折損しているが、断面方形をなす皆折形とみられる。（167）は現存長5.0cmである。鉄鎌（124）は長さ7.4cm、身の長さ5.6cm、身幅1.6cmの茎の短い尖根である。その他扁平をなす盤状のもの（169）、締金具状のもの（122）、Fd51溝出土の湾曲する薄板（125）がある。鉄滓は南東に分布する小滓である。

#### 古銭（第122表）

鉄銭の著しい不明銭1枚、明治10年の半銭2枚が上層に出土している。共にI層出土。

#### 石製品（第41図）

硯2点は共に断片である。1点は墨池の輪郭が認められる流紋岩製である。砥石（17）は一端を折損している。現存長7.1cm、幅3.1cm、厚さ2.3cmで、断面台形状をなす。4面を有する石英安山岩質凝灰岩である。硯1点がP2覆土上層に出土するほかは中央部以南I層出土。

#### 穀類（第13表）

ほゝ全域に散在し、特に南西の盛土層に多く混入する炭化米である。粹米が多いが、芒を有するものが微量認められる。一粒の大きさは28例によってみると長さ0.42~0.51cm、幅0.22~0.30cm、厚さ0.12~0.22cmを計り、長幅比は1.50~2.09である。

第13表 I—I 削平地出土米計測表

No	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考	No	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考
1	4.7mm	2.3mm	1.7mm	2.04	Fe51-48-I (1~10)	15	4.5mm	2.2mm	1.2mm	2.05	
2	4.7	2.7	1.7	1.74		16	4.8	3.1	2.2	1.55	Ff51-W (16~25)
3	4.7	2.8	1.9	1.68		17	4.3	2.6	1.7	1.65	
4	4.7	2.7	1.7	1.74		18	4.4	2.8	1.9	1.57	
5	5.1	3.1	1.7	1.65		19	4.2	2.3	1.7	1.83	
6	4.8	2.9	1.9	1.66	ヒビ割れ	20	4.6	2.7	1.9	1.70	
7	4.5	2.5	1.7	1.80		21	4.5	2.9	2.2	1.55	
8	5.1	2.9	2.1	1.76		22	4.6	2.2	1.7	2.09	
9	5.0	2.7	1.9	1.85		23	4.3	2.7	2.1	1.59	
10	4.7	2.6	1.7	1.81		24	4.7	2.6	2.0	1.81	
11	4.3	2.5	1.9	1.72	Fe51-II (11~15)	25	4.4	2.9	1.9	1.52	
12	4.2	2.4	1.7	1.75		26	4.3	2.6	1.7	1.65	Fg51-W (26~28)
13	4.7	2.9	1.8	1.62	有芒	27	4.7	3.0	2.2	1.57	
14	4.2	2.8	1.8	1.50		28	4.5	2.6	2.1	1.73	

(2) 土壘、I-2削平地の遺構と遺物 (第38、41図 第14、15、122表 図版20、46)

1. 土壘と削平地の遺構 (第38図 図版20)

鞍部のI-2削平地に接する土壘は、東西5mまで確認される。西端は保存区域に統一され、5号堀に接する東縁では不明瞭である。I-1削平地に比して0.30m前後高位となり、緩やかな山なりをなして削り出される。上面に盛土の形跡は認められないが、小礫が散在している。西方における上面幅0.60m、基底幅1.50mを計り、中央部以東ではやゝ狭少となり、東縁1mほどでなだらかとなる。

I-2削平地は土壘北法面に統一してやゝ緩やかな斜面をなし、北進して平坦となる。北辺ほど厚い盛土層によって形成されている。中央部に地山を切って開削される屈曲する溝のほか、整地層に焼土及び南北の小さい溝を検出している。共に確認するに至っていない。

2. 遺物 (第41図 第115、122表 図版46)

北辺の盛土整地層にやや密に分布し、土壘に統く緩斜面には鉄釘、染付の各1点がある。I-1削平地と同様に陶器がもっと多く、金属製品、古銭、穀類等が出土し、合せて28点余りである。共に小片で図示できるものは少ない。

第14表 I-2削平地出土遺物

層位	青磁	白磁	灰釉陶器	鉄製陶器	その他の 陶器群	鉄製品	鐵 津	鋼製品	古 銭	石製品	植物遺体	備 考
Ia	2	2			4	1			5	1	米・小豆	
Ib	1	1	3			2		2			米・小豆	
II				1			2					試掘溝による
溝						1						試掘溝による
計	3	3	3	1	4	4	2	2	5	1		

青磁

皿の底部1点と碗の体部2点である。共に細片で図示できるものはないが、底部は薄い緑色をなし、碗には薄手の淡水色を呈するものが含まれる。

白磁

内彎して立ち上がる皿の口縁部と端反りする皿の体部2点がある。内彎皿の口縁部は内取りされて棱が残る。施釉は後に比して薄く、両面に買入が認められる。

灰釉陶器

碗の口縁部1点が含まれる。直行する口縁をなし、口縁端は丸味をもって薄くなる。やゝ褐色がかかった黄緑色を呈し、不規則な波状の沈線と縦の線刻による蓮弁が認められる。胎土は均質細粒をなす白色である。口径は12.0cm前後と推定される。

鉄釉陶器

体部片1点である。内外黒褐色を呈し、外面の露胎直上では薄くなつて褐色となる。胎土は緻密で灰白色をなす。腰部の器厚0.9cm、推定口径13.0cm前後の天目茶碗とみられる。

### その他の陶磁器

施釉陶器 2 点のうち 1 点は外面褐色、内面乳白色の茶碗とみられる破片である。他は大皿の高台とみられ、高台内を餘いで淡黄褐色をなす削り出し高台である。推定高台径 10.0cm。

そのほか、甕の体部片と薄青色の花卉文を有する染付甕の小片がある。後者は光沢が強く、胎土は堅固で近世後半以後の所産とみられる。

### 鉄製品、鉄滓（第41図）

鉄製品には釘 2 点、締金具 1 点が判明する。鉄釘（93）、（168）は共に頭部を折損している。断面は方形をなし、1 点は先尖部で折れ曲がっている。締金具（102）は外径 4.6 × 4.7cm を計り、湾曲して先端部に重合している。断面は径 0.6cm の円形の棒状をなす。接合部には木質の付着が僅かに認められる。その他板状の小片で用途は明らかでない。（102）は溝覆土、他は中央部以北 I、II 層出土である。鉄滓 1 点は 4.8 以下の中滓であり、I—1 削平地出土のそれと同様である。

### 銅製品（第41図 図版46）

煙管状の（91）と薄板を折り曲げた小片（92）である。前者は押圧されて扁平となり、先端は折損している。現存長 4.2cm、厚さ 0.2cm である。共に北西辺 II 層出土。

### 古鏡（第122表）

東縁の盛土中に 5 枚一括して検出される。永楽通寶 4、宣德通寶 1 点である。永楽通寶 1 点は外縁を欠いているが、比較的遺存がよい。

### 石製品

茶白の受け皿部分の破片である。安山岩製で、外面は研磨されて滑らかである。外縁径は 30.0cm 前後と推計される。北東 I 層出土。

### 穀類（第15表）

土塁を除いてほぼ全域に散在する炭化米のほか盛土に混入する微量の大麦、小豆が含まれる。炭化米は粒米が多く、穀は殆んど確認されていない。一粒の大きさは長さ 0.14~0.50cm、幅 0.22~0.30cm、厚さ 0.15~0.20cm を計り、I 層出土米が若干小さい。長幅比は 1.57~2.04 となり、I—1 削平地に近似している。

第15表 I—2 削平地出土米計測表

No	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考	No	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考
1	4.6cm	2.6cm	1.7mm	1.77	Fa51—I (1-10)	11	4.7cm	3.0mm	1.8mm	1.57	Eh51-II (11-20)
2	4.3	2.4	1.7	1.79		12	4.8	2.6	1.7	1.85	
3	4.3	2.4	1.7	1.79		13	4.9	2.6	1.9	1.88	
4	4.3	2.2	1.5	1.95		14	4.8	2.7	2.0	1.78	
5	4.7	2.3	1.7	2.04		15	4.7	2.6	1.6	1.81	
6	4.7	2.8	1.9	1.68		16	5.0	2.7	1.9	1.85	
7	4.5	2.7	1.6	1.67		17	4.6	2.6	1.5	1.77	
8	4.1	2.2	1.6	1.86		18	4.7	2.5	1.7	1.88	
9	4.2	2.3	1.7	1.83		19	4.8	2.6	1.7	1.85	
10	4.2	2.2	1.6	1.91		20	4.7	2.5	1.7	1.88	

## 要約

I-1 削平地における旧地形はIの郭削平地の張り出しや南東辺の厚層をなす盛土層によって上段削平地に続く北西辺がもっとも高く、南東へ傾斜しているものとみられる。削平地の切土面は削り出し土壘を北辺にして北西に認められ、南東への盛土によって形成されている。検出される遺構がいずれも上部の削平によって失なわれている点では更に旧削平地の重複が推定される。しかし、判然とする変化は確認されていない。

検出される遺構のうち、溝3条についてはFc51-I→Fc51-II→Fd48溝の変遷が認められる。前二溝はほど同一方向に鉤形に呈し、断面V字状をなす。現状の削平地方向にはほど一致するFd48溝と異なり、防備施設として開削されている可能性もあげられる。鉄滓等の遺物によつては関連施設の存在を伺せるものである。覆土は共に削平地形成に伴う埋没とみなされるが、Fd48溝にあっては焼土や炭化物粒の混入と共に陶磁器が多く、この間の削平地の変遷や建物施設が推定され、IIIの郭とは性格を異なる掘立柱建物も考えられる。

I-2 削平地においては土壘北法面に統いて地山切土面が認められ、北東は盛土によって形成される削平地であるが、土壘及びI-1 削平地との関連は共に明らかでない。出土する遺物によつては同様に形成される削平地とみなされる。

## 2. IIの郭

馬の背状に延びるIIの郭東端にあたり、北東へやや張り出す削平地の一部である。削平地は西方に高く、方形に近い上段削平地とこれより南東に下降して帯郭状の下段削平地が形成され、北辺を1、2号堀に、南東二方を4号堀によって限られている。上段のII-1 削平地には北辺に土壘状の高まりを有するほかは平坦をなし、僅かに東へ傾斜している。

調査区域は東西26m、南北25mであるが、遺構検出中に西方のII-1 削平地の大部分と南東のII-2 削平地の一部が現状保存区域となり、最終的には東西14mに縮少されている。

遺構はII-1 削平地の保存区域においては北辺の土壘状の盛土が認められるほか、柱穴状ピット46が検出されている。縮少されるII-1 削平地には溝状遺構3、焼土遺構1、柱穴等があり、II-2 削平地では柱穴群、溝及び溝状遺構13、土塙6、柵列3、焼土遺構1である。そのほか、両削平地にかけて縄文時代の土塙16が検出される。

遺物は陶磁器、金属製品、石製品、古錢、穀類等であり、前二者がやや多い。ここでは記述の都合上、両削平地の遺構と遺物を一括し、現状保存区域における遺物を含めて記述している。また、縄文時代の土塙にはIII-2 削平地に検出される2土塙を加えている。

### (1) 削平地の形成 (第42、43図 図版20)

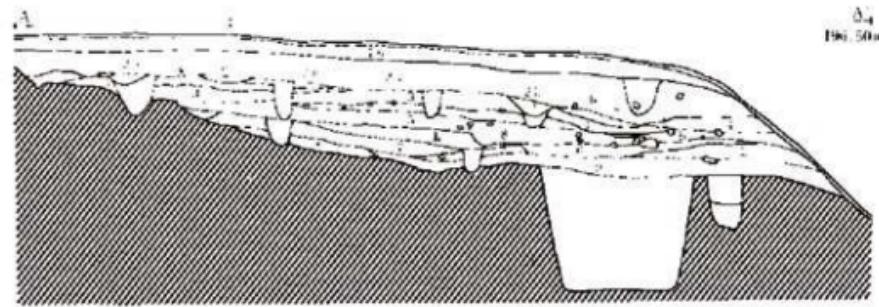
II-1 削平地は大部分を地山の切土によって形成され、北東辺に若干の盛土整地層が認められる。高位となる西方に統く中央部には東西5.5m、南北7mの削平地が形成され、これより南

東に東西6m、南北5mの削平地、更に0.30m低位の東西5mの切土面が認められる。しかし東辺は保存区域となる前二者に先行する削平地とみられ、II-2削平地に続く切土斜面となって判然としている。調査区域にあたる下段削平地の切土面は東西5m、7.2%勾配の斜面をなし、盛土をなす北東辺では切土斜面に続く南傾斜面となって削平地境は明瞭でない。盛土層は東縁に厚く、幅約0.60mに及び、地山に類似する褐色土によっている。

II-2削平地は現状保存区域より帯状に続く削平地の一部東西8m、南北15mである。北西辺はII-1削平地に続く切土斜面に平行し、北東辺に狭く、中央部は東へやや張り出している。現状削平地は斜面の端より盛土をなし、西辺で0.30m前後をなすが、中央部より南東縁にかけては1.20~1.80mの厚層をなし、特に現状保存区域に続く南西に厚い。地山の切土は削平地全面に及び、東西の傾斜は6.3%前後の勾配をなす。切土面は北側中央部以東がもっとも早く、これより平行する南北方向の切土が西辺に認められる。以後はやや南へ移行して南西より北東方向の切土となり、南東辺への盛土が形成されている。いずれも削平地西辺の山側には幅0.30~0.40mの溝が配され、削平地はこれより以東に形成される。南辺においては溝以南に削平地面を有し、4号堤にかかる削平地に伴うものと解される。

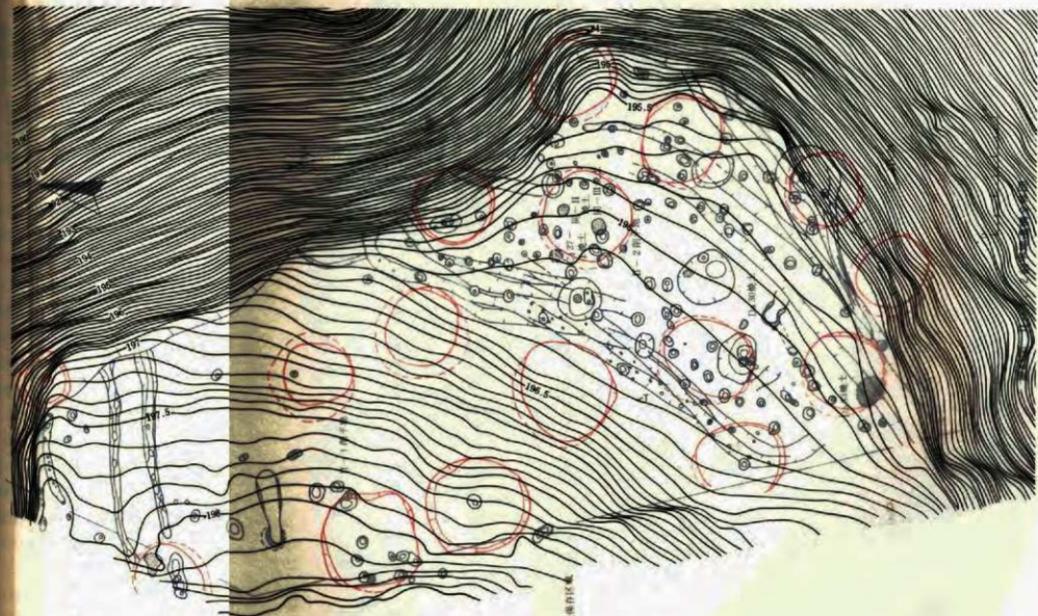
盛土層は部分的な相違があって対応する関連をみいだし得ないが、中央部における堆積層では上層の1、2層がもっとも厚く、これより下層では炭化物や焼土粒を含む暗褐色土層を被って地山の赤褐色土、または黄褐色土の堆積が互層状に認められる。整地層及び地山切土に伴う盛土層とみるとならば、4層以下では8度以上に及ぶ造成が重複しているとみられるが、共に明瞭な削平地境は西辺を除いて明らかではない。

切上面及び構造構によっては東西6m、南北10m前後の小規模な削平地をみなされ、その間10数回に及ぶ地形を行なわれているものとみられる。削平地面は東へ傾斜し、ほぼ4~6%勾配をなし、残存する地山削平地面東端を結ぶ12.5~13%勾配に比して著しく減少している。



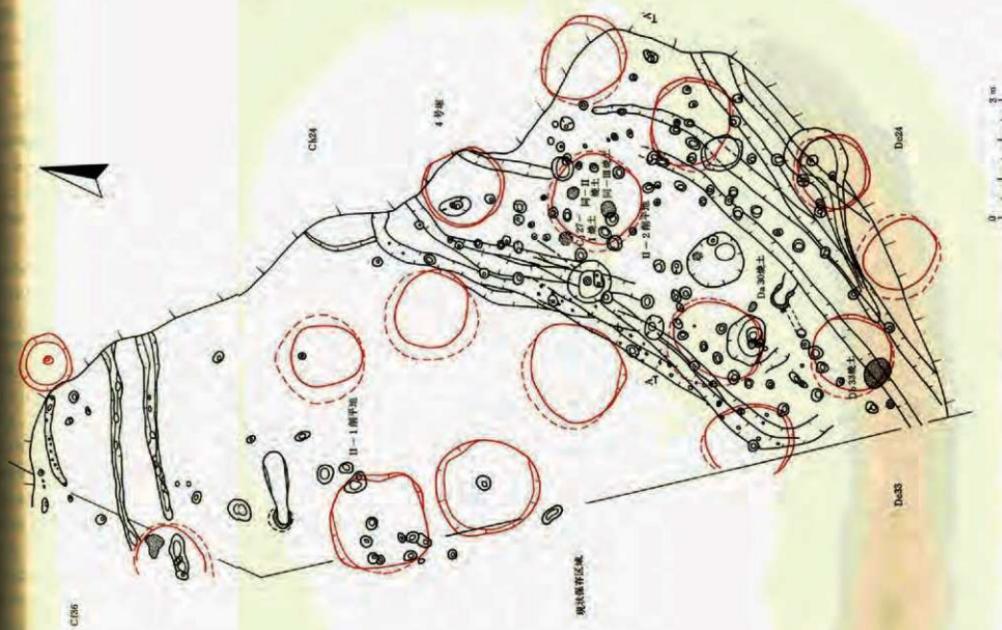
1. 塗覆土 2. 褐色土 3. 黄褐色土 4. 塗覆土 5. 黄褐色土 6. 塗覆土 7. 黄褐色土 8. 塗覆土 9. 黄褐色土 10. 塗覆土 11. 黄褐色土 12. 黄褐色土

第42図 II-2 削平地断面図



C136

第43图 II-1、2两种虫道线全图



(2) 溝及び溝状遺構 (第44、45図、第17表 図版20)

1. Ce33溝状遺構 (第44図、第17表 図版20)

I-1 削平地北東端にあって、西方の土壘に続く0.20~0.30mの盛土層を除去して地山面に確認される。0.05m前後の凹地状をなし、径0.04m前後の円形の打ち込み状ピットが不規則に連なる。東端にはCe27土塁の覆土上層にあって確認できず、西方は削平によって明らかでない。東西の比高は0.30mであり、切土面に沿って東へ傾斜している。

2. Cf36-I溝 (第44図、第17表 図版20)

Ce33溝状遺構の南1.5mにはばこれに平行して地山面で検出される東西溝である。東端は削平地東辺の4号堀に至って消滅し、西方はCf36土塁付近で木根による攪乱のため明らかでない。深さ0.14m前後であるが、西方程浅くなり、上部が削平されているとみられる。東西の比高は1.00mである。底部には凹み状をなす部分が認められるほかは平坦をなす。覆土は焼土・炭化物粒を含む固い暗褐色土であり、柱痕等は判然としていない。

3. Cf36-II溝 (第44図 第17表 図版20)

Cf36-I溝の0.60~0.70m南に平行する東西溝であり、同様に地山面で検出される。削平地東辺に至って消滅し、西方はCf36土塁付近で途絶えるが、西方の現状保存区域に接して痕跡を留めており、連続する遺構とみられる。溝幅は0.10~0.20mで西方ほど狭少となり、上部の削平が認められる。底面には不連続に径0.20m前後の凹地が認められ、覆土はやや柔い暗褐色土で焼土粒や炭化物粒を含み、前2溝のそれに相違している。

4. Ch27-I溝 (第45図 第17表 図版20)

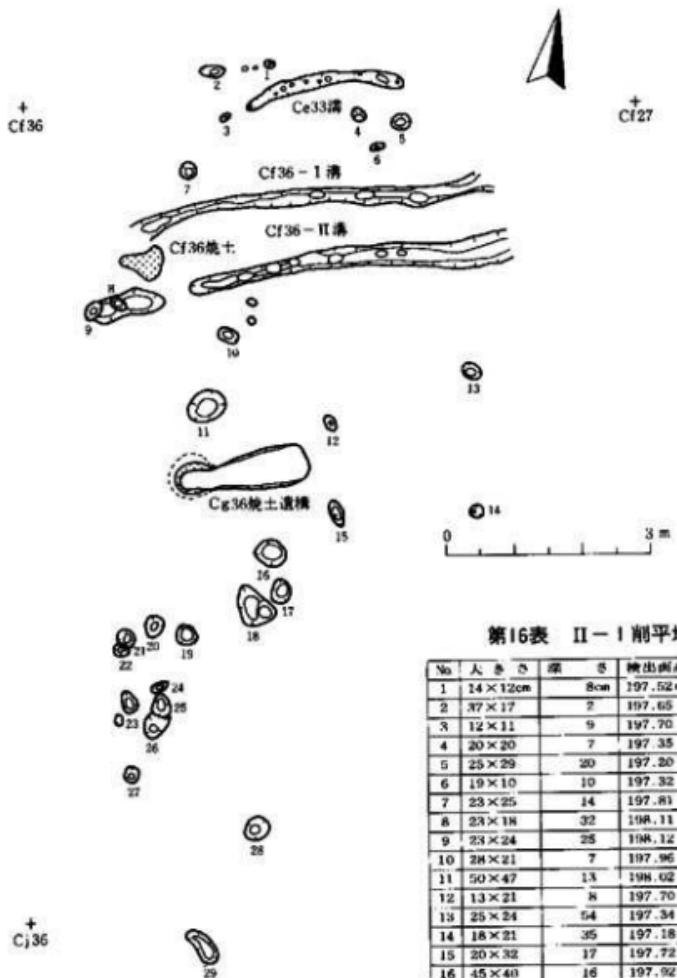
II-1 削平地における盛土整地層を除去した地山面で検出する南北溝である。北端は湾曲して4号堀に至って尖なれ、南端はP95付近で不明となる。Da30土塁の南端に僅かに溝状の凹地部分があり、東折するものとみられる。直線部分は約9.93mである。溝の上部は北端の湾曲部分を除き、その後の削平によって失われている。切土面境をなし、削平地造成に伴うものとみられる。

5. Ch27-II溝 (第45図 第17表 図版20)

Ch27-I溝南東の切土面で検出される。南北方向より緩やかに北東に湾曲して削平地東縁に延びるが、南端はその後の削平にあって明らかでない。重複するCi27溝とほぼ同一方向にあり、これを削平整地して掘り込み、削平地を限る西辺の溝とみられる。また、Ci27-I溝、Ci27-II溝と同一方向にあって、共にほぼ中央に張り出す高位部分の削平地造成段階の遺構とみられる。

6. Ci30-I溝 (第45図 第17表 図版20)

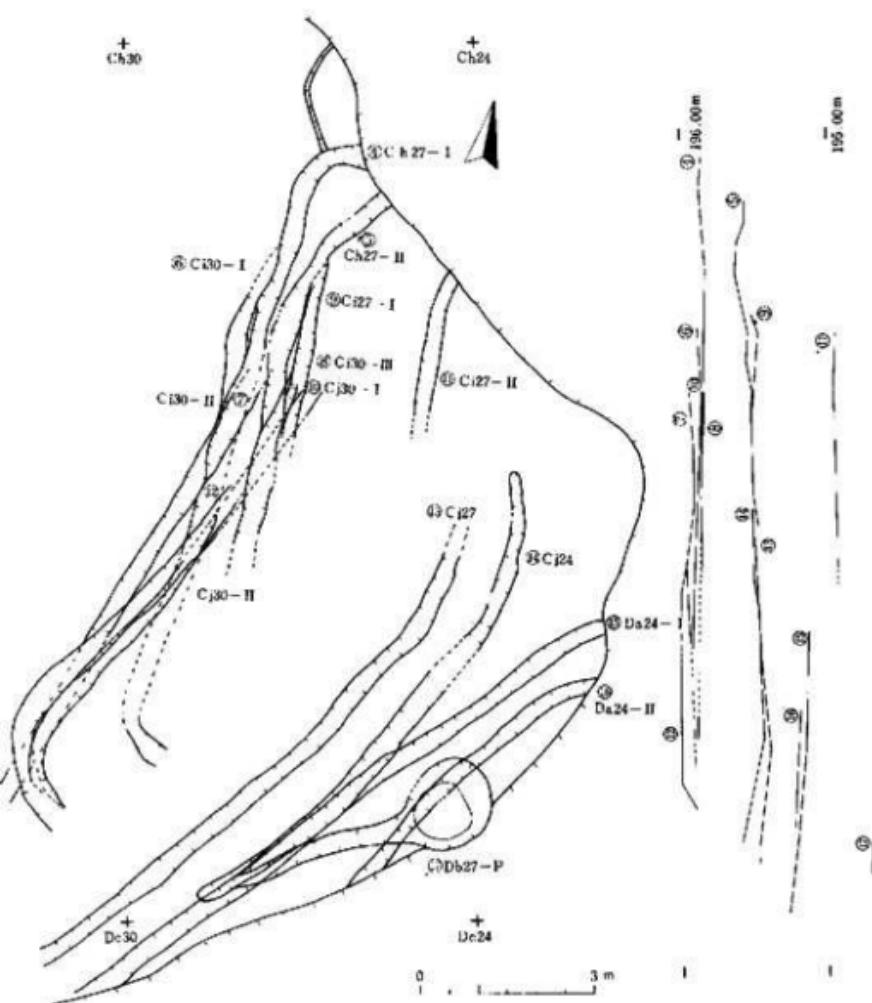
Cj30溝追跡中、斜面の地山面に部分的に認められる南北溝である。Ch27-I溝の上部を削平しており、東折する溝とみられる。重複部分における掘り込みは明瞭でない。南端はCj30溝に



第44図 II-1 削平地遺構全体図  
(土塁を除く)

第16表 II-1 削平地柱穴計測表

No.	人	身	脚	頭	被出面高	底面高	備考
1	14	× 12	cm	8	cm	197.52	m 197.44
2	37	× 17		2		197.65	197.63
3	12	× 11		9		197.70	197.61
4	20	× 20		7		197.35	197.28
5	25	× 29		20		197.20	197.00
6	19	× 10		10		197.32	197.22
7	23	× 25		14		197.83	197.67
8	23	× 18		32		198.11	197.79
9	23	× 24		25		198.12	197.87
10	28	× 21		7		197.96	197.89
11	50	× 47		13		198.02	197.89
12	13	× 21		8		197.70	197.62
13	25	× 24		54		197.34	196.80
14	18	× 21		35		197.18	196.83
15	20	× 32		17		197.72	197.55
16	45	× 40		16		197.92	197.76
17	26	× 35		44		197.80	197.36
18	50	× 58		18		197.89	197.71
19	31	× 28		65		198.08	197.43
20	24	× 23		76		198.20	197.44
21	24	× 24		60		198.04	197.44
22	25	× 19		9		198.30	198.21
23	22	× 20		22		198.20	197.98
24	23	× 16		42		198.06	197.64
25	28	× 32		61		198.06	197.45
26	37	× 39		61		198.05	197.44
27	21	× 22		22		198.18	197.96
28	35	× 45		30		197.68	197.38
29	28	× 40		12		197.81	197.09



第45回 II-2 削平地溝

切られて不明である。

7. Ci30-II溝(第45図 第17表 図版20)

盛土整地層除去中に検出され、Cj30付近で地山を切るほかは南北の整地層に続く。北端はCh27-I溝上部を切っており、東へ湾曲するとのもみられる。南西は現状保存区域へ続いているが、上部はその後の切土によって失なわれている。覆土は明黄褐色土で炭化物の細粒が混入している。

#### 8. Ci30—I溝（第45図 第17表 図版20）

上層の盛土整地層を除去して検出される浅い溝である。上部の削平をうけて僅かにその痕跡を留め、部分的に確認できるのみである。覆土は2層の整地層と同様に炭化物、焼土の微粒を含む暗褐色土で底部には褐色土が薄く堆積している。Cj27溝とほぼ同一方向をとり、3層上面の整地に際し、西方より削平されている。重複する遺構ではCj30土塙によって切られているがCi27—I、Ci27—II溝を切って新しい。削平地造成に伴う溝とみなされる。

#### 9. Ci27—I溝（第45図 第17表 図版20）

Cj27—II溝検出中、地山面に僅かに痕跡を留めて認められる。北端はP34、Cj27—II溝によつて不明であり、Cj27—II溝と殆ど重複して同一面の切土にあって消滅するものとみられる。Ci27—I溝と平行し、同一方向にある点では初期の削平地造成に伴う溝とみなされる。

#### 10. Cj30—I溝（第45図 第17表 図版20）

整地層除去中に検出される。上部はCj30—I溝の開削と削平地造成によって失なわれ、全長は確認されていない。北端はCj30土塙によって切断され、僅かに南側にその痕跡が認められる。南は湾曲して東に延びるが、削平によって明らかでない。覆土はCj30—I溝と同様、炭化物粒が混入する盛土の暗褐色土である。

#### 11. Ci27—II溝（第45図 第17表 図版20）

最下層の炭化物・焼土粒を含む明褐色土の整地層を除去して確認される。北端は削平地東辺で消滅し、南端はP135によって切断される。更に南へ続くとみられるが、凹地状をなす以外掘り込みは明らかでない。北端でやや北東方向に湾曲し、地山の切土面に伴う点で、初期の削平地造成における西辺の溝とみられる。伴う遺構は明確でないがP137、142、143、144はほぼ同一検出面に認められる。遺物は一点も出土していない。

#### 12. Cj30—II溝（第45図 第17表 図版20）

地山及び整地層中に確認される南北溝である。Cj30—I溝と重複し北端はCj30土塙によって失なわれ、南は湾曲して東へ延びるが整地層に統いて不明である。覆土は炭化物粒の混入する暗褐色土である。

#### 13. Cj27溝（第45図 第17表）

西辺では表土除去後に溝状に炭化物・焼土粒の混入する黒褐色土が検出され、さらに径0.10m前後の柱痕が部分的に確認される。中央部ではDa30焼土遺構南辺を切り、やや北に湾曲しながらP128付近で不明となる。西端では深さ0.30mであるが中央部付近より北端にかけて浅くなる。II—I削平地に続く斜面に連続する杭列とほぼ平行する方向にあり、削平地南東辺に沿っている点でCj24溝に類似している。

#### 14. Cj24溝 (第45図 第17表)

表土を除去した暗褐色土の整地層上面に検出される。地山の黄褐色土を掘き固めたとみられる覆土が一様に入り、下方に拳大の礫が部分的に埋め込まれている。底部は南側に若干高くなるほかはほぼ平坦である。削平地東辺に沿って南北に弓なりに伸びるが、北端のCj24以北は調査中の不注意によって不明である。南端は4号堀に至って消滅している。柱痕等は判然としていないが、II-1削平地に続く削り出し斜面に平行し、現状削平地の南東辺に沿っている点ではCj27溝と相前後する同様の施設に伴う溝とみられる。

#### 15. Da24-I溝 (第45図 第17表)

盛土整地層の除去中に検出され、褐色土の盛土整地層に確認される。東西端共に4号堀に至って不明となるがほぼ直線上にのびて東端でやや南に湾曲する。断面はU字状を呈し、底部はほぼ平坦をなす。両端の比高は0.10mで北へ傾斜している。覆土は炭化物の微粒が僅かに混入する柔い暗褐色土である。同一検出面を有する遺構はP106のみであり、他はいずれも前後している。また、重複するCj24溝はこれを整地盛土して掘り込んでおり、P108、117共に新しい。

#### 16. Da24-II溝 (第45図 第17表 図版20)

Da24-I溝に沿って盛土整地層に確認される。東西端はいずれも削平地南東縁で失われ、西端はやや南東に湾曲している。上部は削平をうけているが、南東側に低く削平地に伴う溝とみられる。底部はほぼ平坦でDa24-I溝と同様に南高北低となって僅かに傾斜している。覆土は柔かい暗褐色土で微量の炭化物粒を含む。削平地面を被る盛土に類似し、Da24-I溝に伴う削平地の形成によって被われるものとみられる。

第17表 IIの郭溝遺構計測表

No.	名 称	Lc	s	幅	深さ	方 向	新	旧	間 係
1	Ce34	0.32	m	0.20	m	0.05	m	N68.5E	
2	Cf36-I	5.16	m	0.30		0.14		72.5	
3	Cf36-II	4.70	m	0.30		0.10		71.5	
4	Ch27 I	7.80	m	0.30		0.35		7.7	C130-I, C130-II ← Ch27-I
5	Ch27-II	7.36	m	0.37		0.30		2.2	C130-I, C130-II ← Ch27-II
6	C130-I	1.50	m	0.30		0.26		1.1	C130-II ← C130-I ← Ch27-I
7	C130-II	7.30	m	0.30		0.11		13.4	C127-H, C130 ← C130-II ← C127-I, C130-I
8	C130-III	0.72	m	0.12		0.07		3.6	C127-II ← C130-III ← C127-I, C127-II
9	C127-I	3.10	m	0.25		0.10		0.8	C130-III, C130 ← C127-II ← C127-I
10	C127-II	7.80	m	0.30		0.13		29.2	C130 ← C130-III, C127-I, C127-II
11	C127-III	2.50	m	0.30		0.13		1.1	
12	C130	7.58	m	0.30		0.18		32.8	C130 ← C127-I, C127-II ← C130-III
13	C127	0.06	m	0.30		0.30		(41.4)	
14	Cj24	9.80	m	0.40		0.37		(27.4)	Cj24 ← Da24-I, Da24-II
15	Da24-I	0.56	m	0.35		0.25		44.0	Cj24 ← Da24-I ← Da27
16	Da24-II	5.26	m	0.25		0.17		38.6	Da24-II ← Da27
	Db27-II	3.56	m	0.30		0.11		61.2	

(C130続列) —— C130 ← C127-II+ C130-II+ C130-I+ Ch27-I ← C130-III ← Ch27-II+ C127-II  
 C127-III ← C127+ C127+ Da24-I ← Da24-II+ (Db27-II)

### (3) 柱穴群 (第44、46図 第16、18表 図版20)

II-1 削平地の保存区域にあっては検出面径0.30~0.35m、深さ0.35~0.50mを計るもののがもっとも多いが、略測によっており共に未確認である。

調査区域においては現状削平地のもっとも低位となる削平地東辺の地山面に認められる。検出面径0.30m、深さ0.60m前後の円形をなす柱穴が南より多い。近接する Cf36、Cg36焼土遺構に伴う柱穴の含まれる可能性もあるが、規則的な配列は認められない。また、削平地北辺の小ピットは盛土を除去して認められ、柵列の一部ともみられる。径0.04m、深さ0.05m以下で現状保存区域に統いて不明である。

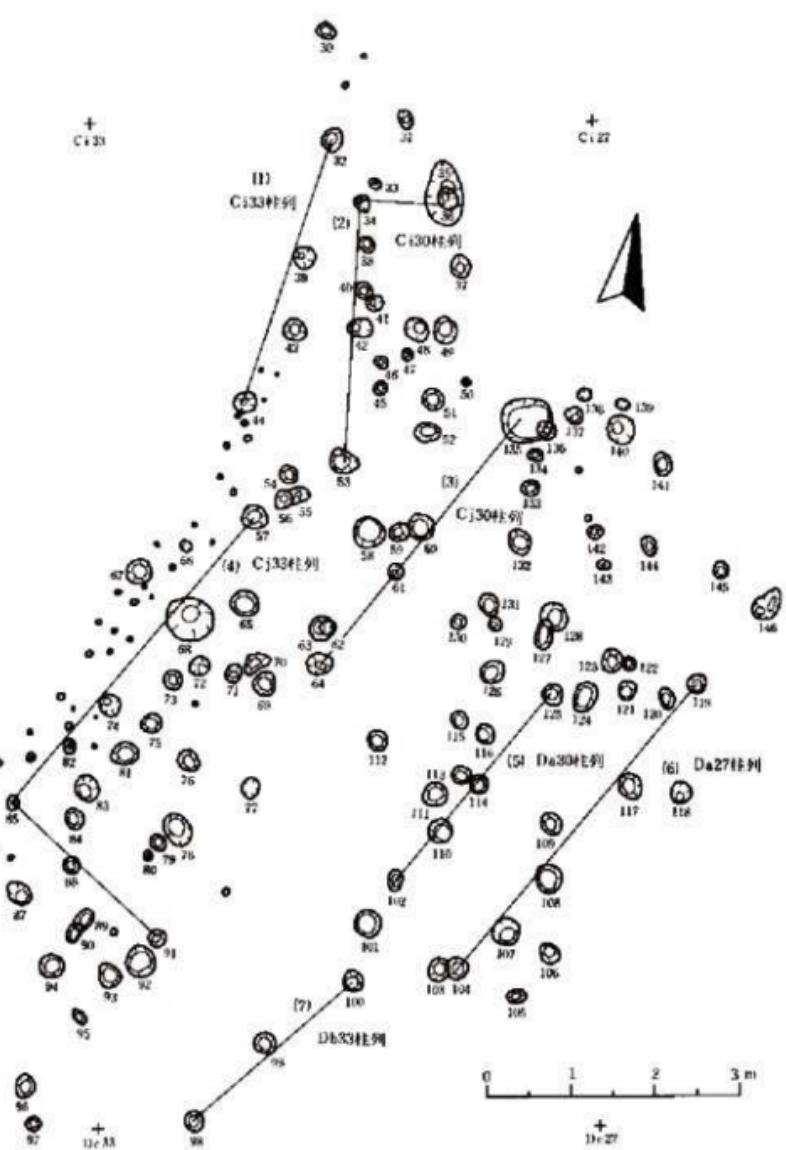
II-2 削平地ではやや中央部に少ないがほぼ全域に渡って分布する。合せて117のほか、西辺の打ち込みの杭穴が認められる。柱穴はいずれも上層の盛土厚層には確認されず、現状削平地形成以前の整地面及び西端の地山面に確認されるものが大部分である。柱穴の掘り方はほとんどのなし、径0.30~0.20m、検出面下の深さは0.40m以下のものが多く、それぞれ64.8%を占めている。柱痕が識別できるものは少なく、P 36、39、135等数例に確認されるのみである。径0.18~0.23mの円形である。

やや纏りを有する配列には(1)32-39-44、(2)P 36-34-42-53、(3)P 135-60-64、(4)P 57-68-74-85-88-89-91、(5)P 125-114-102、(6)P 119-117-108-104、(7)P 100-99-98等があげられ、大部分南北方向に認められるものである。

(1)及び(2)柱列はそれぞれ南北3.30m (10.891尺) でほぼ等間をなし、既述の(4)~(6)溝方向に近似している。(3)柱列のP 57-85では4.50m (14.851尺) を計り、(2)溝に平行する柱列である。(4)~(6)柱列においては(3)柱列と同一方向にあるが、低位な削平地面にあって同一建物とは見做し難く、削平地面の傾斜を考慮しても(3)柱列に先行し、Db27土塙より新しい。(1)及び(2)柱列は初期の削平地造成時に、(3)~(7)柱列は削平地がやや北東方向に移動する段階における建物の一部と推定されるものの数回の整地が重複しており、各削平地における建物遺構を確定するには至っていない。

柱穴中の遺物にはP 35、44に染付片、P 124に内縫する白磁皿小片、P 77、115に宋通元寶各1点がある。いずれも掘り方覆土の上層に検出される遺物である。

上・下段削平地境の斜面に沿って認められる杭列は南西では盛土層に、他は地山面で確認される39のピット列である。南北にやや蛇行して長さ6.80mに及び、南端は現状保存区域に統く。北端は明確でないが、削平地東辺に連なるものとみられる。径、深さ共に0.10m前後で、底部は先尖して打ち込み状をなす。やや不規則な配置もみられるが、0.60m前後の間隔を有し、東西幅0.20mで並列する部分が多い。現状地形の斜面裾に沿っており、前述の(3)、(4)溝方向に類似している点では、これに近接する段階の簡便な柵等の施設が推定される。



第46図 II-2 削平地柱穴全体図

第18表 II-2 前平地柱穴計測表

No.	大きさ	溝さ	樹木留高	先	高	後	左	No.	大きさ	溝さ	樹木留高	先	高	後	左
30	23×20cm	2cm	195.85m	195.78m				85	22×23cm	6cm	195.94m	195.96m			
31	15×20	33	195.85	195.52	C127-Ⅱ溝より新しい			90	4×21	4	195.98	195.92	木 枝?		
32	25×28	36	195.45	195.49	C127-Ⅰ溝より新しい			91	22×28	15	195.86	195.71			
33	14×16	15	195.45	195.30				92	36×38	13	195.82	195.69			
34	19×30	33	195.61	195.28	C127-Ⅰ溝より新しい			93	27×25	12	195.99	195.76			
35	47×77	62	195.42	194.80	空付			94	30×27	25	195.96	195.74			
36	21×38	32	195.90	195.33	P35より新しい			95	16×16	23	195.88	195.56			
37	20×26	12	195.73	195.61				96	21×26	30	195.00	194.79			
38	20×30	3	195.61	195.61	C127-Ⅰ溝より新しい			97	16×15	3	195.68	195.47	C127溝より古い		
39	25×25	38	195.81	195.46	C127-Ⅰ溝より新しい			98	21×21	37	194.76	194.39	C128溝より古い		
40	20×29	30	195.48	195.18	C127-Ⅰ溝より古い			99	26×23	64	195.04	194.49			
41	25×18	5	195.72	195.67				100	24×24	49	195.77	194.37			
42	33×22	17	195.50	195.33	C127-Ⅰ溝より新しい			101	32×32	26	195.43	195.17			
43	28×25	29	195.56	195.56	C127-Ⅱ溝より新しい			102	16×25	27	195.42	195.15			
44	27×21	39	195.98	195.59	空付C127-Ⅰ溝より新しい			103	24×25	34	194.86	194.46			
45	16×11	49	195.46	195.43				104	22×36	71	195.72	195.68			
46	13×10	12	195.78	195.66	C130+地より古い			105	25×14	16	195.09	194.95	I1627地より新しい		
47	12×12	7	195.74	195.67				106	22×24	22	195.52	195.05	I1624-Ⅱ溝より新しい		
48	20×29	47	195.78	195.31				107	33×39	34	195.74	195.38	I1627-地より新しい		
49	30×32	22	195.76	195.54				108	30×33	26	194.72	194.52	I1601-【溝より古い】		
50	11×10	18	195.73	195.55				109	24×35	28	195.13	194.35			
51	27×25	29	195.74	195.46				110	29×28	47	195.33	194.32			
52	30×36	74	195.54	194.89				111	36×26	37	195.36	195.39			
53	33×24	45	195.62	195.17	C130地より古い			112	22×22	24	195.04	194.49			
54	29×20	20	195.62	195.42				113	19×20	15	195.13	194.98	C127溝より古い		
55	23×18	8	195.37	195.29	C130+地より古い			114	20×22	39	195.56	195.11			
56	22×22	22	195.40	195.18	C127-Ⅱ溝より古い			115	19×20	35	194.91	194.56	木造元寶		
57	31×27	28	195.93	195.95	C130+地より古い			116	21×23	15	195.09	194.94	C127溝より古い		
58	38×36	14	195.73	195.59				117	28×25	30	194.78	194.48	I1624-Ⅰ溝より古い		
59	24×21	16	195.59	195.13	C127溝より古い			118	26×36	32	195.34	195.02			
60	20×30	37	195.56	195.18				119	23×26	27	194.75	194.48			
61	20×20	20	195.16	194.36	C124溝より古い			120	18×22	61	195.56	194.95			
62	19×18	4	195.92	195.88				121	20×25	11	194.76	194.45	C128溝より古い		
63	28×27	29	195.50	195.21				122	16×16	16	194.77	194.81			
64	32×42	18	195.31	195.13				123	25×26	21	195.76	194.55			
65	34×29	13	195.23	195.10	C127-Ⅱ溝より新しい			124	26×31	32	195.40	195.38	白 板		
66	14×16	3	195.82	195.79				125	23×24	24	195.53	195.29			
67	30×28	2	195.91	195.83				126	29×26	46	195.63	195.27			
68	56×50	25	195.36	195.21	C127-Ⅰ溝より新しい			127	20×24	2	195.50	195.38	木 枝?		
69	26×26	16	195.25	195.16				128	33×33	29	195.66	195.37	C127溝より古い		
70	30×23	19	195.90	195.71				129	14×16	29	195.20	194.91			
71	23×21	38	195.89	195.91				130	7×16	37	195.92	195.45			
72	25×21	21	195.94	195.70				131	24×25	41	195.72	195.50			
73	22×21	50	195.72	195.10				132	29×26	22	195.45	195.23			
74	26×26	36	195.82	195.16	C127-Ⅱ溝より古い			133	22×28	9	195.60	195.51			
75	24×21	21	195.22	195.01				134	18×14	16	195.60	195.44			
76	25×25	35	195.97	195.82				135	52×52	55	195.46	194.91	C127-Ⅱ溝より新しい		
77	22×23	15	195.82	195.67	米澤瓦窓			136	22×22	17	195.99	195.43	P125より新しい		
78	32×18	58	195.61	195.23	Da30-1 土壌より新しい			137	22×29	7	195.04	194.85			
79	29×19	13	195.17	195.04	Da30-1 土壌より古い			138	18×13	8	195.00	194.32			
80	10×12	15	195.16	195.01	Da30-1 土壌より古い			139	17×13	6	195.00	194.94			
81	33×24	14	195.48	195.34				140	31×35	22	195.37	194.96			
82	14×23	3	195.92	195.89				141	22×27	14	195.26	195.12			
83	29×30	24	195.56	195.42				142	19×18	6	195.48	195.32			
84	22×23	36	195.69	195.33				143	16×12	7	194.89	194.66	C124溝より古い		
85	4×16	34	195.96	195.72	C127-Ⅱ溝より古い			144	17×24	6	194.92	194.86	C124溝より古い		
86	25×26	31	195.95	195.81	C130-Ⅰ溝より古い			145	17×18	15	191.65	191.70			
87	28×26	23	195.64	195.44				146	32×34	54	194.82	191.26			
88	21×19	31	195.96	195.60											

(3) 焼土遺構 (第42、44、47、48図 第19表 図版34)

1. Cg36 焼土遺構 (第47図 図版34)

II-1 削平地における整地層除去後の地山削平面で検出する。東西の長軸方向は2.05mまで確認され、東端は削平によって上部を失っている。燃焼部は西方にあって0.70m前後の円形をなし、焼土は環状に上部を覆い、径0.30m前後の空洞をなす。底部は船底状に掘り込まれ、壁から上部にかけて厚く焼土が形成される。焼土面よりの深さは0.38mである。焚口は長軸1.35m、最大幅0.60mであり、短軸方向では燃焼部付近が狭く東よりに擴張がりとなる。

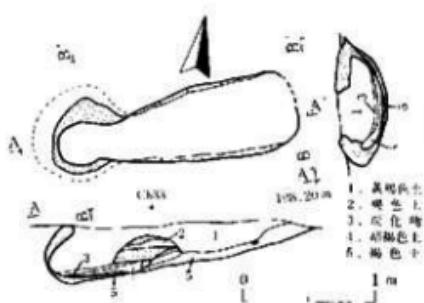
覆土は共に上部を非常に堅い暗褐色土に被われ、燃焼部では炭化物の厚層が底部に広がる。焚口境には崩落したとみられる焼土が塊状に認められ、下層の焼土は白色化している。関連する遺構は明確でなく、遺物も出土していない。最終削平地造成以前の遺構である。

2. Da30焼土遺構 (第48図 図版34)

II-2 削平地上層の盛土層を除去して確認される。焚口は Cj27溝によって破壊されているが、燃焼部より煙道には整地層が覆い、ほぼ60°の角度で南西方向に延びている。焚口は現状では0.30m前後を計り、掘り込み幅は燃焼部に近い程狭少となる。燃焼部境には焼土・炭化物層が互層に堆積する。燃焼部は上面の焼土が焚口境を除いて環状をなし、中央部では径0.40mの空洞をなす。深さは最深部では0.30mを計る。覆土は炭化物の混入する褐色土が底部に広がる炭化物を被っている。底部は平坦をなすが、壁は鋭角に立ち上がり、煙道へは18.0°の傾斜をもって上昇し、0.90mで煙出しに達する。底面はいずれも堅固な焼土が形成され、煙出し周辺も同様である。煙出しが0.25×0.20mの楕円状をなし、燃焼部上面の焼土より若干高位となる。

重複遺構には Cj27溝があるが、他の建物遺構とも関連は明らかでない。焚口より燃焼部に至る方位によってはN76.0°Wを計り、(12)、(10)、(7)溝方向とはそれぞれ99.8°、96.2°、90.4°となり、遺存状況より(12)、あるいは(7)溝を西辺とする削平地に伴う遺構と推定される。

3. その他の焼土 (第42、44図 第19表)



第47図 Cg36焼土遺構



第48図 Da30焼土遺構

II-1 削平地に1、II-2 削平地に5焼土が認められ、いずれも整地層上に形成される焼土である。Cf36焼土を除いてはほぼ円形をなし、南端のDd33焼土は散乱して最大となる。厚さ0.10m前後を計り、炭化物を伴うが掘り込みは認められていない。焼き締りがやや強く、建物施設に伴うものかは明確でない。

第19表 IIの郭焼土

No.	焼土名	大きさ	厚さ	検出面	No.	焼土名	大きさ	厚さ	検出面
1	Cf36	52 × 55cm	5 cm	197.96 m	4	Cj27-III	47 × 35cm	9 cm	195.53 m
2	Cj27-I	38 × 40	5	195.73	5	Da30	25 × 22	5	195.78
3	Cj27-II	32 × 40	6	195.61	6	Dd33	75 × 65	5	195.45

#### (4) 土塙 (第45、49~53図 第17表 図版20、34)

##### 1. Cj30土塙 (第49図 図版20)

上層の盛土層を除去して(8)、(10)溝の延長線上にこれを切って検出される。平面径1.10mの円形をなし、最深部で0.38mを計る。底部には炭化物、灰層が厚く被い、上層は焼土粒や炭化物を含む黄褐色土の盛土が一様に被う。上層の盛土整地層と同質である。遺物は上層に染付の小片1点が出土する。中央部のピットは若干の炭化物粒を混入するが、土塙によって上部が失われ、Cj30土塙以前の柱穴とみられる。

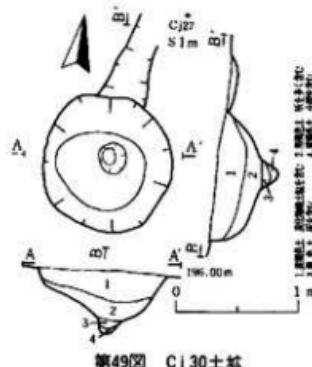
底部における焼土の形成は認められていないものの灰層の堆積状況によってはDa30-I、II土塙と同様の施設とみられ、削平状況よりDa30-II土塙以後に位置付けられる。

##### 2. Da30-I 土塙 (第50図 図版34)

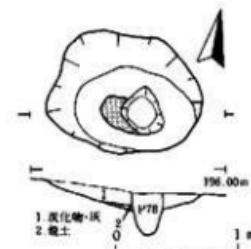
(8)及び(10)溝に伴う遺構の検出中、径1.26×1.00mのほぼ円形の土塙を整地面に確認する。中央部は柱穴で破壊されているほか、東偏ほど削平をうけて東南に傾斜している。全面に小枝状の炭化物が混入する柔軟な灰層が広がり、南よりの底部に薄い焼土が形成される。焼土に比して灰層が著しく厚く堆積している。削平の状況によって(8)、(10)溝に伴う削平地以前の土塙とみられる。

##### 3. Da30-II 土塙 (第51図 図版34)

上層の盛土層下の整地面に検出される径1.43×1.43mのやや不整な円形の土塙である。底部はなだらかに傾斜して船底状をなし、一面に柔軟な灰と小枝状の炭化物に覆われる。北よりに僅かに焼土が張り付く状態で認められる。上層には柔軟な黒褐色土



第49図 Cj30土塙



第50図 Da30-I 土塙

が堆積し、上面では更に灰や若干の炭化物が広がる。現状削平地以前の削平地の遺構と推定される。

#### 4. Da27土塹 (第52図 図版34)

06溝と共に盛土整地層に認められる小土塹である。径0.86×1.07mの南北の長円形を呈し、底部は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。0.20m前後の疊が上面にのみ乱雜に混在し、火熱をうけた小礫と炭化物が認められる。覆土は一様の明褐色であり、礫を伴う04溝に類似する覆土である。重複する

Da24土塹はこれを切って新しい。

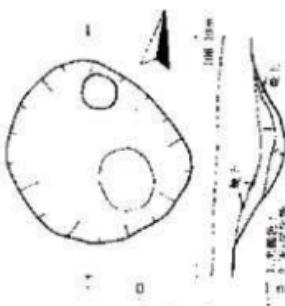
#### 5. Db27土塹 (第45、53図 第17表 図版20)

下層の盛土層に検出される溝とこれに続く地山を切る掘り込みである。掘り込みは東西1.52m、南北1.43mのはゞ円形をなし、深さ0.37mである。なだらかな掘り込みであり、底部は平坦をなすが南西で緩やかに上昇して溝に続く。覆土の上層は炭化物・焼土粒を含む整地層が被い、下層には砂質土が堆積する。一様に酸化鉄が集積し、漏水した痕跡と認められる。

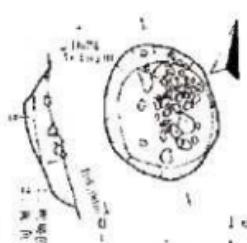
溝は東西3.50mまで確認され、西方は削平をうけて不明である。断面V字形をなし、溝幅0.30m、深さ0.11m前後を計る。底部は西高東低となって緩やかに傾斜し、西端では土塹に比して0.40m高位となる。

近接する遺構はP99、103が同一検出面に認められるほかは明らかでない。また、遺物は一点も出土していない。

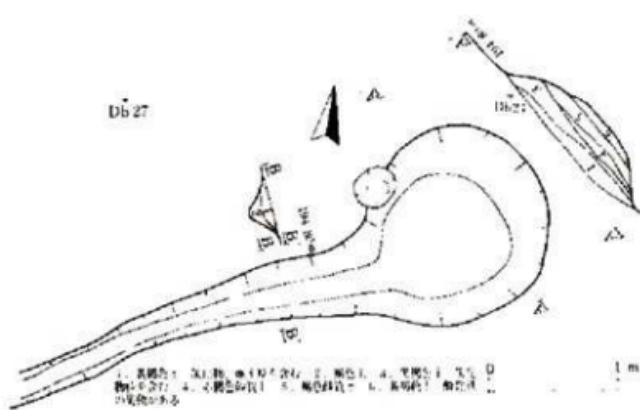
覆土によっては導水路とこれに続く用水槽等が推定され、南北方向に移行する段階における削平地に伴う遺構とみられる。



第51図 Da 30-II 土塹



第52図 Da 27 土塹



第53図 Db 27 土塹

(6) 遺物 (第54~57図 第20、21、122表 図版44~46)

II-1 削平地においては現状保存区域を含めて少數の陶磁器、鉄滓、炭化米が出土する。陶磁器はいずれも小破片であり、青磁・白磁・染付・灰釉陶器、その他を含めて20点である。皿と皿が大部分を占める。白磁皿・施釉茶碗2点はII-2段削平地出土破片に接合する。また、両削平地共に二次火熱によって変質・変色している遺物が含まれている。

II-2 削平地ではほぼ全域に分布し、特に第1~2層にもっとも集中している。第1層では上段削平地に続く斜面裾付近にやや多く、青磁・染付・灰釉陶器21点のほか、鉄釘、鉛弾、古銭の大部分が含まれる。第2~3層では南東に若干密になる。陶磁器、金属製品、石製品が大部分であり、第1層と同様、炭化米が盛土・整地層に混入している。細片が多く、復元可能な遺物は殆どないが、陶磁器では青磁・染付の碗、青磁・白磁・青花・灰釉の皿、白磁・染付の杯等が判明する。第4層には施釉陶器が含まれず、青・白磁・染付片・鉄釘等が出土し、第5層以下には鉄釘3点のほか、北東辺に朱漆箔片を検出したのみである。

第20表 II の郭削平地出土遺物

層位	青 磁	白 磁	染 付	灰釉陶器	その他の 陶器	その他の 施釉陶器	鐵製品	鐵 釘	銅製品	鉛 弹	古 銭	石製品	骨 骸
II-1	2	1	1	3	15								木
I-2	2	3	7	6	4	1	1	1					小立
1-3				1									
1-6	8	3	1	3		4				1	1	1	米
II-2	3	6	19	7	7	1	9	2	1			2	米
I-3	7	10	16	11		1	18	1				2	2
2-4	2	1				1	6					3	
5						3							
合計	22	29	46	20	29	4	33	4	1	1	8	3	

遺構出土の遺物は第4層検出のCj 30 土塗に染付片、第3・4層にかけて検出されたP35、44に染付皿片、P124に白磁内彫皿、P77、115に宋通元寶がある。共に細片、または欠損して整地層に混入する遺物とみられるものである。

青磁 (第54図 図版44)

22点中、碗8点、皿3点が確認される。碗の口縁部2点のうち(5)は外反せずに立ち上がり、口縁直下にやや薄い。体部は外面に蓮弁文がやや不整に配される。内外共に暗黄緑色、または薄い緑色を呈する。胎上は密な灰白色である。推定口径11.6cm、II-2削平地3層出土。底部(9)は高台内を除いて施釉され、内面には花文とみられる文様と圓文の一部が残る。高台は体部境を浅く削りとり、やや粗雑な削り痕を残す。薄緑色の釉薬は二次加熱によってくすんでおり、胎土には小さい間隙があって灰白色を呈する。推定高台径5.8cm、高台高1.4cm、II-2削平地2層出土。(6)は腰部にやや張り出す様をもつ輪花皿である。口縁部の削りはやや粗雑で内面には3条の波状文が走る。釉薬は暗黄緑色、または青緑色を呈し、胎土は緻密で灰色を呈す。推定口径12.0cm、II-2削平地4層出土。4号堀出土片に接合する。そのほか焼成不良の輪花皿

片がある。内外面白色をなし、胎土は赤褐色である。

#### 白磁（第54図 図版44）

皿17点、杯2点を含む29点である。接合する4点中、1点は両削平地出土の破片が含まれる。

第4層検出のP140覆土中の内縁皿1点のほかは薄手の端反皿で推定口径9.0cm前後である。

底部は器厚がやや厚く、砂高台を有する。推定高台径6.0cm、高台高0.5~0.7cm、II-2削平地3層出土。

釉薬は薄く全面に及ぶものが多いが、高台端を除くものが含まれる。胎土・焼成の比較的良好なものとや、粗雑なものが混在し、色調も純白や薄い褐色を呈するものが認められる。

内縁する厚作りの皿(II)は口縁端がやや鋭角をなす。内面は滑らかであるが、外面の全体に擦れを残し、極めて薄い乳白色の釉が全面を被っている。高台端は欠損している。推定口径9.6cm、同高台径4.6cm、II-1削平地P124覆土出土。

小杯の口縁部はやや外傾して立ち上がり、口縁端に僅かに厚く釉薬が残るほかは滑らかで焼成も良好である。推定口径6.0cm、器厚0.15cm、II-2削平地3層出土。

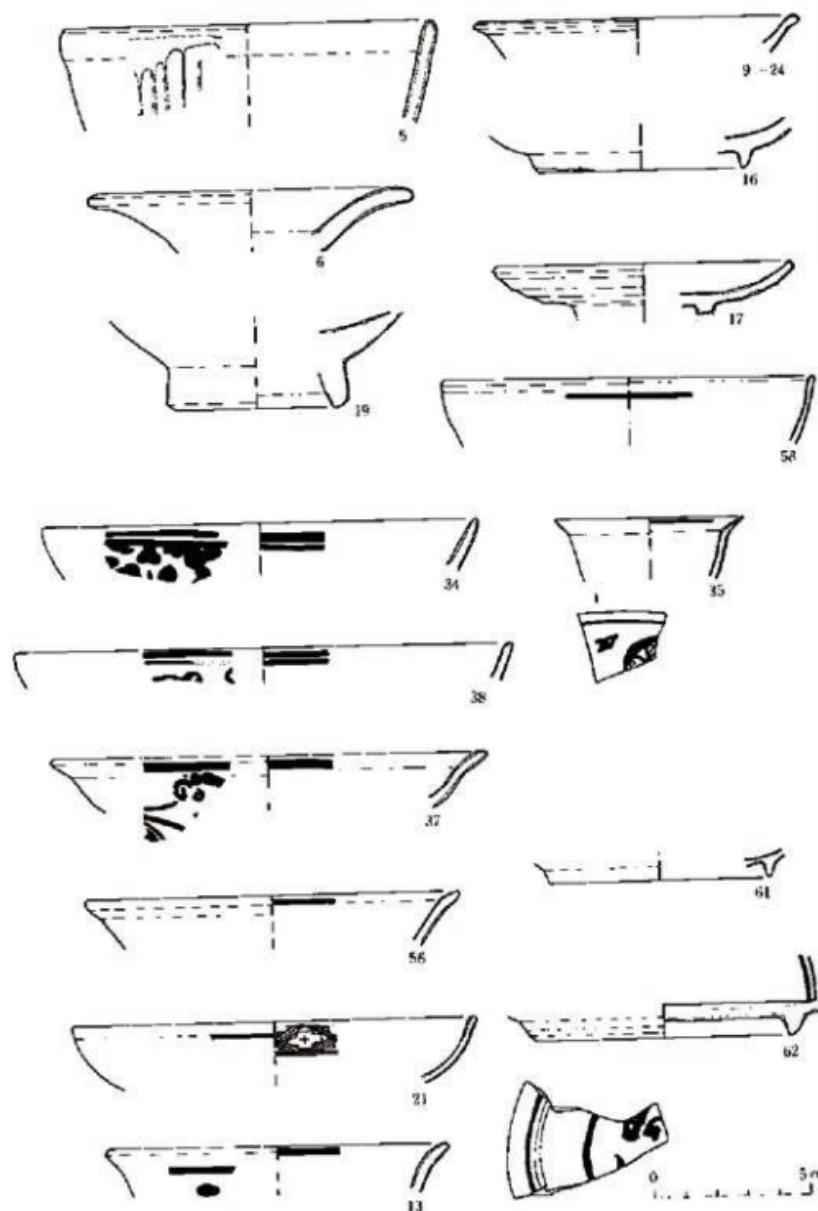
#### 染付（第54図 図版44）

碗13点、皿17点、杯2点の破片を含み、合せて46点に及ぶ。同一個体の破片は皿4点、杯1点が認められる。碗の口縁部は口縁端ほど器厚・釉薬が薄くなるものが多く、直行するものとやや内縁するものがみられる。推定口径は共に14.0cm前後である。内外面共に1~2本の条線、外面に花文が濃淡をもって描画される。胎土は密であるが、白色のほか薄い褐色を呈する焼成不良のものが含まれる。底部は細片1点である。器厚0.45cmで厚くなり、体部にかけて薄手となる。見込み部分に圖文の一部のみ確認される。

皿は口縁部11点中、I、II層出土の内縁皿4点、III層に外反するもの4点が認められる。施文は口縁部に条線を持つが、前者は両面、または外面に、後者は両面、または内面に線描される。胎土・焼成共に良好である。端反皿には淡褐色の胎土で、釉薬も灰白色をなす質入の著しいものが含まれる。推定口径12~13cm、器厚は0.2~0.3cmである。

底部は器厚の薄い良好なもの、やや粗雑に施釉が残る厚手のものがあり、いずれも砂高台である。紋様は内面花文のもの、高台内に「大明」、「福」を銘識するものがある。例は4号堀IV層出土片に接合する砂高台片である。内外共にくすんだ白磁に質入が認められる。内外の2条繊維のほか、高台内に「大明」の銘が圖文を有して認められ、共に青灰色を呈す。胎土は間隙があり、やや粗雑である。推定高台径8.2cm、高台高0.6cm、II-2削平地2層出土。そのほか基筒底とみられる小片がある。

杯(IV)は口縁部のみである。器高0.15cmの薄手で体部より緩やかに外反する。内外1条の細線が明るい発色をなし、胎土・焼成共に良好である。推定口径6.0cm、II-2削平地2層出土。



第54图 II-1、2 胶平地出土遗物(1)

### 灰釉陶器（第55図）

27点の大部分は皿片とみられ、接合する4点が含まれる。口縁部はやや内側する厚作りのものと外反してやや薄手になるものが混在する。いずれも淡黄緑色を呈し、貢入が著しい。胎土は褐色がかった白色をなし、均質である。推定口径10cm、器厚0.35～0.5cmを計る。

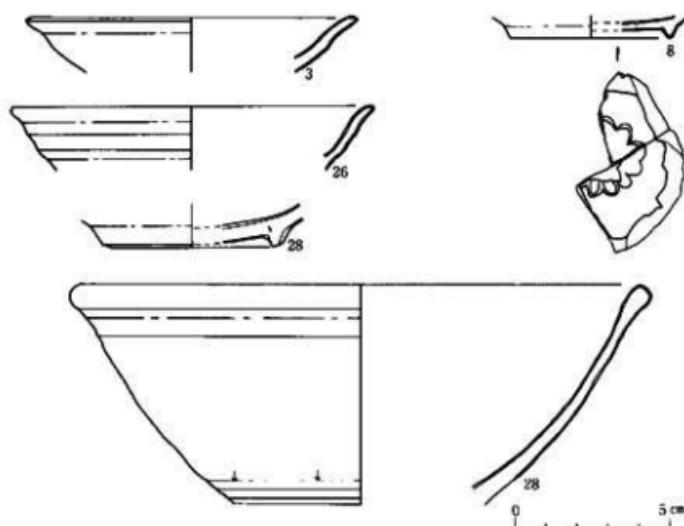
底部は体部に比してやや厚くなり、高台は低く高台内に輪トチの痕跡を残す。施釉は全面に及び、高台脇に厚く薬溜する。また、内面に菊花の押印が認められるものがある。推定高台径5.2～5.6cm、高台高0.3cm、器厚0.45～0.6cmである。

その他器厚1.65cmの分厚い外面黄緑色釉、内面無釉の破片があるが、同系の花器等とみられる。

### 施釉陶器（第55図 図版45）

30点のうち2削平地に渡って2点が接合する。碗6・鉢1・皿1個体が確認される。碗は推定口径11～12cmの直行する口縁で、器厚0.3～0.5cm、底径5cm前後の殆ど同形の碗と見られる。胎土は白褐色を呈し、比較的細密である。高台内を除く全面の施釉は全体に薄く、青灰色・灰白色・暗黄緑色等を呈し、微細な貢入が共通して観察される。その他外面より高台内まで暗赤褐色釉に被われ、胎土の緻密な底部片が出土している。

鉢は体部より口縁部にかけて薄手となり、玉縁状の口縁をなす。腰部を除く施釉は外面褐色をなし、見込み部分は青灰色を呈して貢入が認められる。胎土は灰褐色で砂粒が認められる。



第55図 II-1、2削平地出土遺物(2)

皿は口径6.0cm前後的小皿である。やや内彎する口縁で、薄い施釉は内面青灰色、外面透明に近い灰白色をなし、胎土も同色である。

#### その他の陶器

鋸鉢片とみられる細片と粗糲な坩堝とみられる破片がある。そのほか赤褐色の上漆質土器があり、構造された滑らかな胎土を有する小片である。

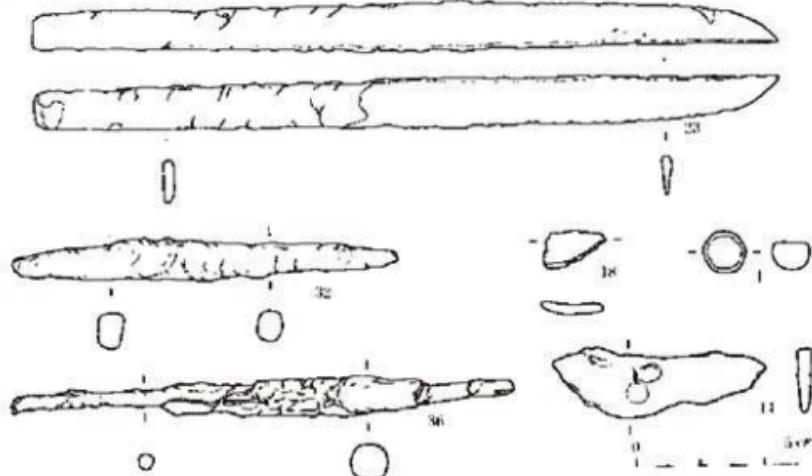
#### 鉄製品・鉄滓（第56、57図 図版46）

II-1削平地では分厚い板状の断片1点であり、他はII-2削平地の盛土層に集中している。用途の判明するものは釘及び釘状をなすもの15点のほか、小柄、鉄鎌等である。鉄釘は長さ6.3cm前後を計り、断面方形をなす背折形のものが含まれる。小柄②3は長さ23.3cm、刃身12.6cm、刃幅1.4cmである。柄は断面長方形をなし、厚さ0.3cmを計り、柄頭にや、細くなる。②8は錆化が進行して明瞭でない。②2、②9は共に断片をみられ、②8は現存長10.4cm、刃幅1.4cmである。鉄鎌②10は錆瘤が大きく、全体は明らかでないが、茎は断面方形をなすとみられ、屈曲して先端を欠いている。②11は6.6cmの断片である。共に中央部3層出土である。そのほか不明なものには毛抜状の鉤、錠金具状の鉤等がある。

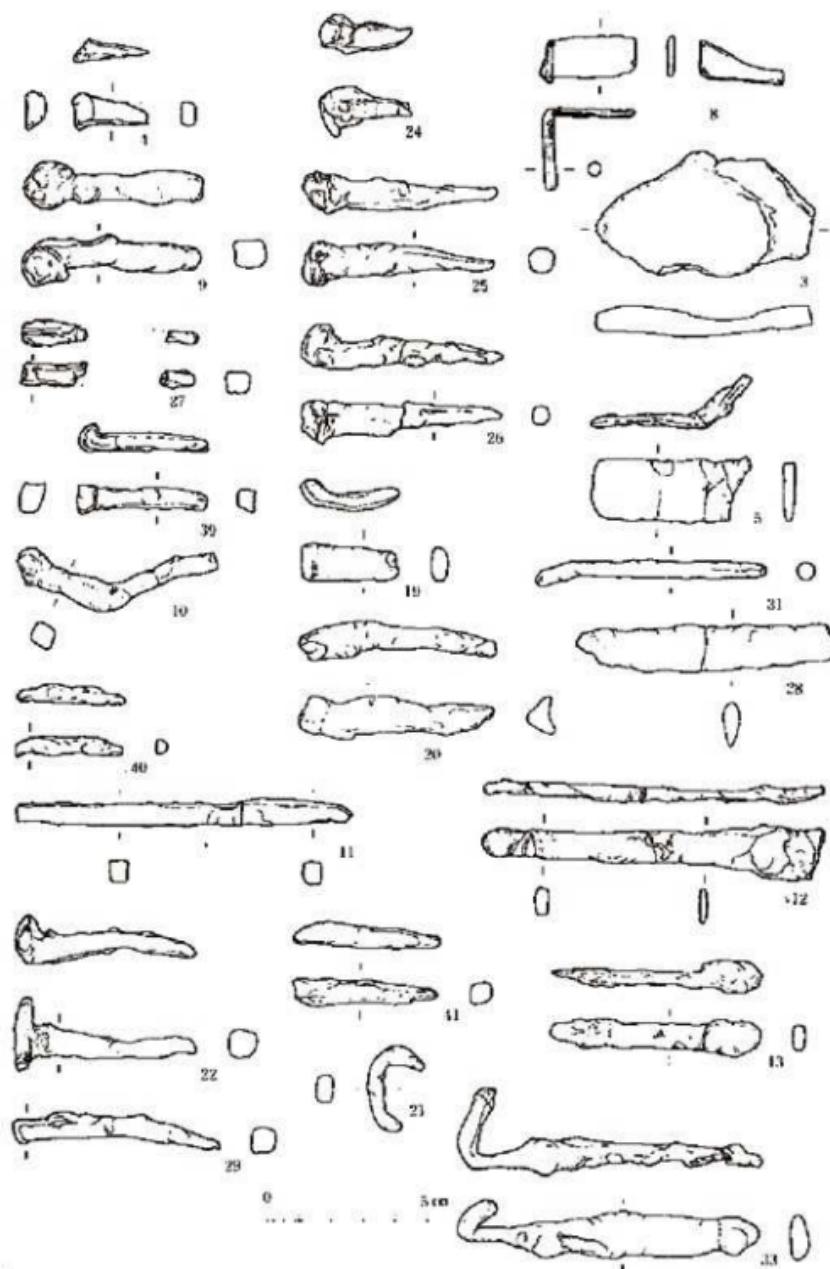
鉄滓はII-1削平地に海綿状の扁平な80gの小滓1点、II-2削平地II・III層に50g前後の3点があるほか、長さ3.6cm、直径1.4cmの折損した鉢状の黒色塊が出土している。

#### 銅製品、その他（第57図 図版46）

II-2削平地に銅の薄い合せ板⑧1点があり、長さ5.5cmを計る。また、II-1削平地西端より火繩の鉛弾⑪1点を検出する。一方は扁平となり、白色化している。8.75gを計る。



第56図 II-1、2削平地出土遺物(3)



第57圖 日一1、2剖平地出土遺物(4)

## 石製品

II-1 削平地 2 層より砥石 2 点が出土する。共に小破片である。1 点は 6 角柱状の輝石安山岩で滑らかな研磨面を有し、最大幅 4 cm の一面がもっともよく使用されている。他は断面不整な五角形をなし、共に磨耗している。特に上・下 2 面は煤の付着後の二次使用が認められる。斜長石流紋岩製である。

## 古銭 (第122表)

II-2 削平地盛土層より開元通寶、皇宋通寶、永樂通寶各 1 点、不明銭 3 点、第 4 層検出 P77、115 の堀り方覆土より宋通元寶 2 点が出土している。火熱によって銭銘の不明なもの、一部を欠損しているものである。

## 穀類、その他 (第17表)

両削平地の上層に炭化した米、豆類が散乱する状態で出土する。II-1 削平地には微量で、東斜面に若干採集される程度である。II-2 削平地では南東に密となり、焼土・炭化物粒を含む盛土層に他の遺物と共に混入する。

第21表 II-1・2 削平地出土米計測表

No	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考	No	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考
1	4.2mm	2.7mm	2.1mm	1.56	C148-I (1-10)	10	4.2mm	2.5mm	1.9mm	1.68	側の一部欠
2	4.1	2.3	1.7	1.78		11	4.5	3.0	2.1	1.50	焼形れ
3	5.0	2.8	2.3	1.79	有芒 焼形れ	12	4.2	2.6	1.7	1.62	C142-I (11-14)
4	4.6	2.7	2.3	1.70	焼形れ	13	4.2	2.7	2.1	1.56	
5	4.8	2.7	1.8	1.78		14	4.2	2.3	1.8	1.83	魚歯い
6	4.7	2.7	1.8	1.74		15	4.2	2.7	1.9	1.56	#C133-I
7	4.3	2.5	2.0	1.72		16	4.5	2.6	2.1	1.73	C133-30-I (16-17)
8	4.2	2.6	2.1	1.62		17	4.7	2.6	1.7	1.81	
9	5.2	2.7	2.1	1.93							

1 層出土の炭化米は長さ 0.41~0.52cm、幅 0.23~0.30cm を計り、長幅比は 1.50~1.93 である。このほか II-2 削平地 2 層には径 4.5×3.5cm の塊状をなす炭化米が出土し、粉粂が認められる。また、両削平地より炭化する小豆 2 粒が混入している。

そのほか、II-2 削平地北東の地山切土面直上の盛土層に木質部の付着する朱漆塗模片が検出され、黒漆の絞様が僅かに認められる。P129 出土の細片も同様である。

## 要約

II の郭北東端にあたる 2 削平地においては削平をうけて旧地形を認め得ないが、両削平地東辺を結ぶ東西の傾斜は 12.5°~13.5° を計り、更に III の郭北端削平地の延長勾配は 14.0° となって近似値を示し、ほぼ旧地形に沿って形成される削平地とみられる。

削平地はほぼ南北方向の地山切土とこれに伴う低位となる南東方向への盛土によって造成され、西辺に溝を配して東西 4 ~ 6' 勾配の平坦面を形成している。その規模は溝及び切土面によって東西 6 m、南北 10 m 前後と推定されるが、重複によって判然としていない。特に II-2

削平地において西辺を限る溝は11条に及び、重複する削平地は切土や盛土整地層が区域や方向を異にして画一的な地形は認められず、対応する遺構を把握するに至っていない。削平地を限るとみられる溝遺構や盛土整地層によってみると、①南北方向を長辺として東面する削平地、②これよりやや南偏する削平地に大別され、②はさらに削平地南西の切土斜面を西辺とする削平地と削平地南東に位置し、大部分を4号窓によって失なわれる削平地に2分される。その移行については検出状況によって①→②の変遷が認められ、更に現状地形を形成する削平地を加えて3~4期に及ぶ移行と見えられる。

溝遺構は合せて16条である。上段削平地における3条は共に崖壁に平行し、西方ほど削平をうけて浅くなる。底部には杭、または柱穴状の凹地が部分的に認められ、南2条では布掘状をなし、欄列等の施設とみなされる。削平の状況や覆土によってCe 33→Cf 36→I→Cf 36-IIの変遷が推定され、共に現状削平地形成以前の遺構である。

下段削平地には用水溜とみられる土塀の付設溝を除いて13条に及ぶ。共に削平によって全体は明らかでない。走行する方向によってみると、①削平地崖縁に沿って弓なりに湾曲する溝、②削平地を南北に切り、東へ曲折する溝に大別される。①は現状削平地を形成する上部の盛土層に認められ、もっとも新しい溝であり、底部に柱穴状の小ビットが認められる点では欄列等に伴うものとみられる。4号窓にはメ平行して走行する(3)及び(4)溝がこれにあたり、溝幅が広く深い。②は更に(4)、(5)、(6)、(7)溝の4条、(4)~(9)、(1)溝の7条に分けられる。前者は長軸方向をN 44.0~29.2°Eにとり、後者はN 13.4°Eを最大にしてより真北方向に近い。検出状況によって後者の7条は(4)、(5)溝に先行している。長軸方向は10m前後で、溝幅、深さ共に0.30m程度とみられる。底部は殆ど平坦をなし、東折してやや下降している。共通して削平地西端にあって溝以東をもって削平地を向し、排水を兼ねるものと解される。覆土には炭化物・焼土粒を混入するが、遺物は出土していない。

削平地における遺構では建物柱穴、土塀、焼土遺構である。柱穴群については下段削平地においてほど削平地方向に沿った配列をなし、桁行3間程度の建物が推定される。検出状況によって想定される1~3期の削平地に及んでいるが、現状削平地にあっては明らかでない。

焼土遺構は堀道を有する窓状をなすが、遺物を伴わないためその使用については明らかでない。II-2削平地においては現状削平地に先行する削平地に伴うものとみなされる。

土塀のうち用水溜と推定されるDa 24土塀を除き、共に灰や炭化物が多量に堆積し、焼土を殆ど形成しない点では、相前後する窓埋施設等が推定され、南西の削平地に位置付けられる。

遺物は大部分II-2削平地上層の盛土層に含まれ、上段削平地における切土造成によって移動している可能性が強い。下層においても同様であり、伴う遺物は特定できない。陶磁器では鉢蓋器及び美濃を中心としているが、江戸期後半に及ぶものが散見される。

(7) 繩文時代の土塙 (第42、58~61図 第22表 図版40、41)

1. Ce33土塙 (第58図 第22表 図版40)

削平地北東の盛土を除去して斜面に検出される。上部は2号輪法面となって北東方向に削平をうけている。ほど円筒状をなし、平坦をなす底部中央には径0.18m、深さ0.12mの円形の小ビットが認められる。

覆土は拳大の風化礫を伴う地山に類似する赤褐色が厚く上層を被い、中・下位層においても殆ど同様の堆積をなす。炭化物粒を微量に伴うが遺物は出土していない。

2. Cf36土塙 (第58図 第22表)

もっとも高位をなす北西にあって、西半は現状保存区域に続く。上部を北・東に削平されているが、開口部がやや狭くフラスコ状を呈す。

覆土は中央部下間に水平堆積が僅かにみられ、壁際には地山に類似する厚層をなす。上層はレンズ状の堆積である。

3. Cg33土塙 (第58、59図 第22表 図版40)

II-I 削平地東方の斜面に盛土を除去して削平される地山面に検出される。フラスコ状を呈して底部に広く、平坦をなす。

底部に焼土・炭化物の粒子が混入する赤褐色土が北東に広がり、更に全面に踏み固められるとみられる固い黄褐色土が水平に堆積する。炭化物と共に繩文土器片1点が混入する。壁側には崩壊土とみられる風化土が厚層をなし、中位層には腐植土を含む薄層が形成される。上層では炭化物・焼土粒を含む小礫混りの赤・黄褐色土がレンズ状に被い、土器片5点が含まれる。いずれも繩文土器とみられる磨滅した細片である。

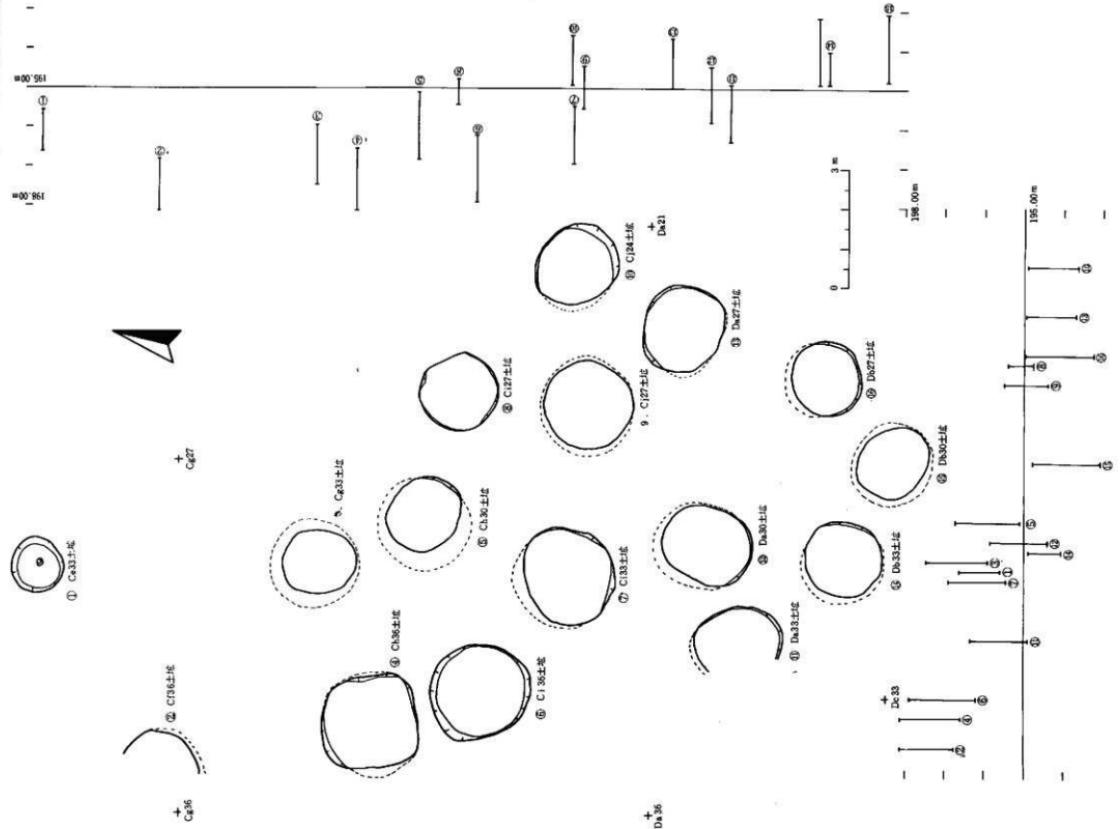
4. Ch 36土塙 (第58、60図 第22表 図版40)

高位となるII-I 削平地西方に位置し、上部を東方向に削平される。検出土塙中では開口部・底部共に最大で、円筒状に近い。底部は平坦をなし、炭化物粒を含む固い赤褐色土が全面に広がる。中位層では風化礫を伴う黄褐色や赤褐色砂質土が不規則に堆積し、上層では暗褐色土の厚層を形成する。

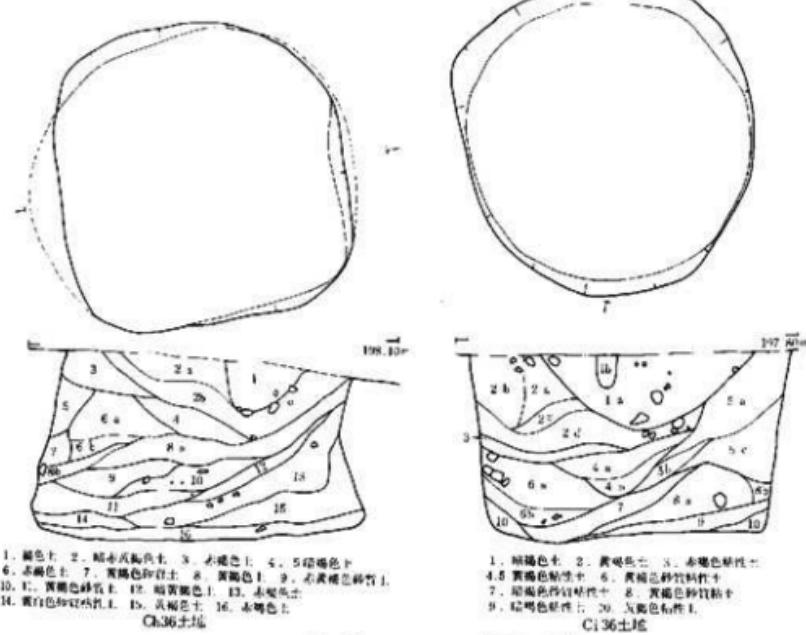
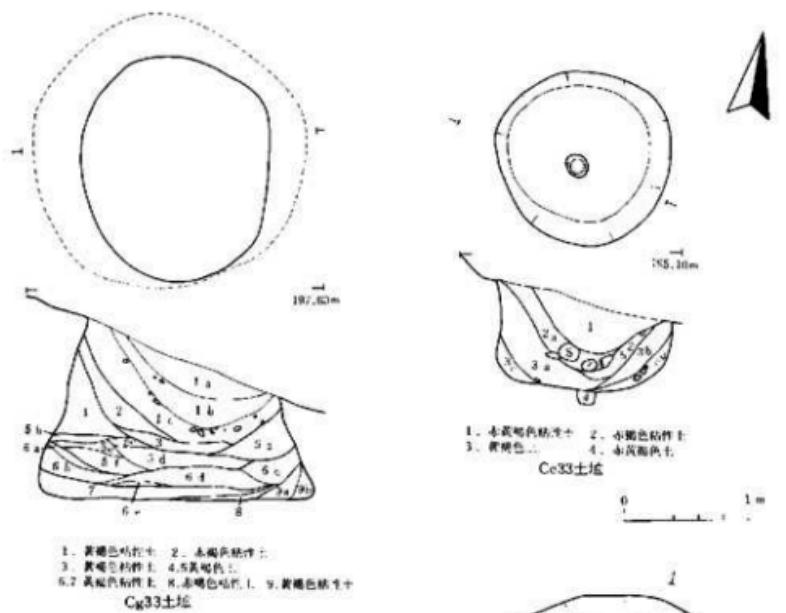
5. Ch30土塙 (第58、60図 第22表 図版40)

II-1 削平地東斜面の盛土を除去して確認される。東端は Ci30-I 溝によって上部を失っているが、ほどフラスコ状を呈する。

底部には赤褐色土が広がり、締りが強い。西壁より中央部にかけては腐殖を含む地山風化土が大量に認められ、中・上位層は水平に近い堆積をなす。中位層には炭化米が微量含まれており、上層にかけては削平地形成に伴うものとみられるが判然としていない。



第58図 II-1、2 斜平地土壠全体圖



第59図 II-1、2 斜平地土塙(1)

#### 6. Ci36土壌 (第58、59図 第22表 図版40)

Ch36土壌に近接して削平される地山面に検出される。開口部・底部共に広く、壁はやゝ外方に立ち上がり、ピーカー状をなす。

覆土は壁際に比較的厚い黄褐色土がみられ、中位層では炭化物・焼土粒を含む薄層がレンズ状、または波状をなして堆積する。上層は黄褐色土・暗褐色土の一様な厚層をなし、最上層は削平地の形成にかかわる堆積とみられる。

#### 7. Ci33土壌 (第58、60図 第22表 図版40)

II-2削平地に続く西辺の切土斜面に認められ、上部の削平をうけている。平面・底部径はCh36土壌と共に最大である。

覆土はCi36土壌に類似し、底部に炭化物粒を含む黄褐色粘性土が被うほか、壁際に崩壊土とみなされる厚層が堆積する。中位層では粘性土・砂質土の薄層となるほか、やゝ東偏して擾乱とみられる落ち込みが認められ、上面に扁平な礫を載せている。上層は焼土粒を含む縮りの強い暗褐色土をなし、削平以後の堆積と把えられるが、これに続く遺構は確認されていない。東端ではこれを切ってCi33-II溝が走る。

#### 8. Ci27土壌 (第58、60図 第22表 図版40)

II-2削平地北東端に位置し、上部及び北東縁は失われて土壌中ではもっとも浅い。(3)、(5)土壌と同様に底部には炭化物の微粒を含む固い褐色粘土が広がる。中・上位層では壁際に除いて水平に近い堆積をなす。西偏では削平後のP35、36が覆土を切って認められる。

#### 9. Cj27土壌 (第58、60図 第22表 図版40)

II-2削平地のやゝ北よりの切土斜面に検出される。上部の削平をうけてピーカー状に近い。覆土は壁際にやゝ厚い堆積層を形成するほか、やゝ波状をなす。

#### 10. Cj24土壌 (第58、61図 第22表)

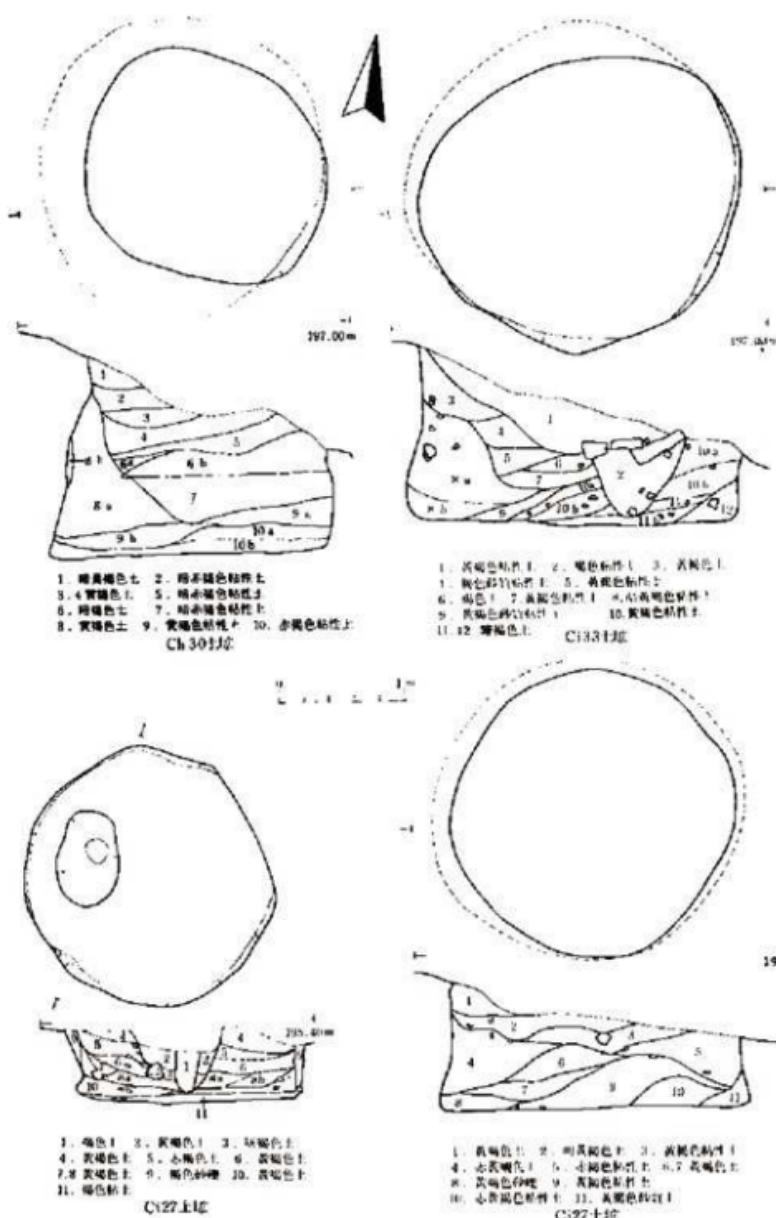
II-2削平地東端にあたり、4号掘法面に統いて上部を失っている。プラスコ状を呈するが、底部は礫のためやゝ水平をかいしている。

下層では粘性土を被って斜行する薄層が多く、中・上位層では西方よりの厚層が認められる。

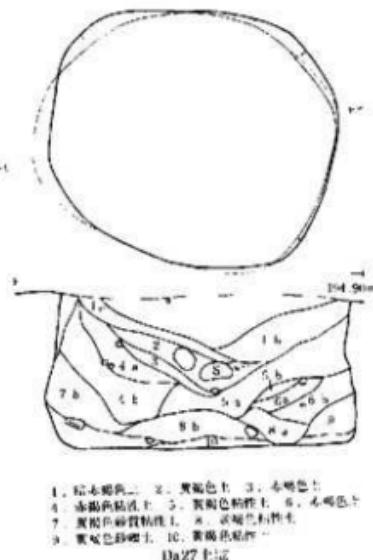
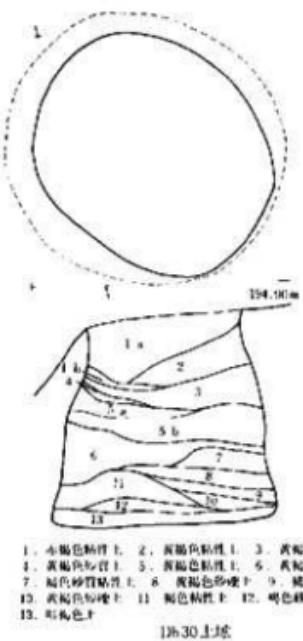
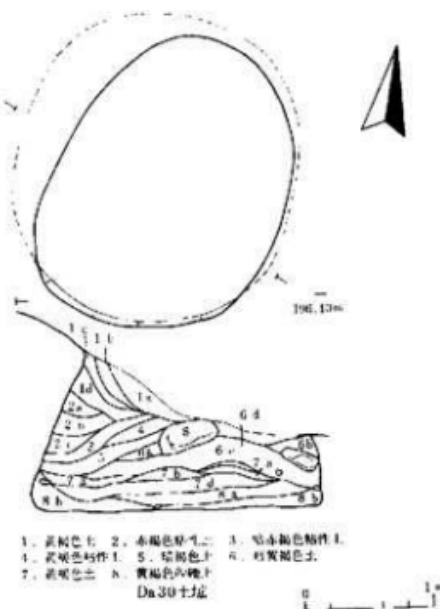
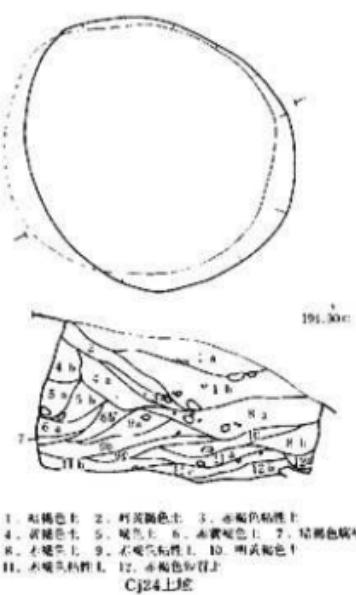
#### 11. Da33土壌 (第58図 第22表 図版41)

II-1削平地の東南斜面よりII-2削平地にかけて盛土を除去して確認される。西方は現状保存区域に続いている。

F・中位層には粘性土・または砂質土の薄層が互層状に堆積し、南壁際を除いて水平堆積に近い。上層は斜面より傾斜する褐色土及び暗褐色土であり、削平地形成にかかわる堆積とみられる。



第60圖 1-2 前平地土壤(2)



第61图 II-1、2 划平地土壤(3)

12. Da30土塙 (第58、61図 第22表 図版41)

Da33土塙の東にあたり、上部は削平をうけて東南に浅い。覆土は中央部に人頭大以上の礫を伴い、やゝ高くなるほかは著しい変化は認められない。

13. Da27土塙 (第58、61図 第22表)

II-2 削平地東南よりの地山切土面に認められる。東壁にやゝくびれ状をなす部分を有するほかは殆ど他の土塙に共通している。

覆土は下位層にやゝ高くなるが壁際に厚く堆積し、上層では削平地面を形成する赤褐色土の厚層が被っている。

14. Db33土塙 (第58図 第22表 図版41)

II-2 削平地面よりにあって、上部は著しい削平によって失なわれている。中位層より上層にかけてやゝ斜行する堆積をなすが、底部や壁際では他の土塙と同様である。

15. Db30土塙 (第58、61図 第22表 図版41)

II-2 削平地南縁に位置し、上部の削平をうけているが、土塙中もっとも深いラスコ状を呈する。底部に炭化物粒を含む固い暗褐色粘性土であり、これより中位層にかけては壁よりに厚い。全体的にはや水平をなす堆積である。上層では赤褐色粘性土の厚層をなして削平地面を形成している。

16. Db27上塙 (第58図 第22表 図版 )

II-2 削平地南端の切上面に検出される。Db30土塙と同様やゝ深いラスコ状を呈し、覆土も類似している。

17. Ch112土塙 (第73図 第22表)

III-2 削平地の整地層を除去して検出され、地山面に確認される。底部は平坦をなすが、壁  
第22表 繩文時代の土塙計測表

No.	土塙名	横出丈	底丈	深さ	横出面高	備考	今
1	Ce 33	1.41×1.50m	1.40×1.45m	1.02m	96.62m	中央底部に18×18cmのピットあり	
2	Cf 36	—×1.31	—×2.02	1.34	196.12	西方は現状保存区域	
3	Cg 33	1.53×1.83	2.25×2.23	1.64	197.46	覆土中に繩文土器出	
4	Ch 36	2.40×2.50	2.70×2.40	1.56	196.18		
5	Ch 30	1.93×1.80	2.29×2.41	1.64	196.74		
6	Ct 36	2.44×2.60	2.31×2.26	1.70	197.90		
7	Ct 33	2.69×2.37	2.65×2.54	1.47	196.90		
8	Ct 27	2.05×2.07	2.00×1.98	0.97	196.42		
9	Ct 27	2.29×2.30	2.50×2.40	1.08	195.90		
10	Ct 24	2.08×2.20	2.11×1.93	1.28	194.89		
11	Da 33	—×1.96	—×2.25	1.45	196.38	西方は現状保存区域	
12	Dn 30	2.01×2.25	2.22×2.39	1.44	195.85		
13	Dn 27	2.23×2.00	2.34×2.10	1.28	194.97		
14	Db 35	1.94×1.99	2.06×2.15	0.95	194.87		
15	Db 36	1.85×1.90	2.17×2.08	1.72	194.79		
16	Db 27	1.89×1.72	1.99×1.59	1.72	194.68		
17	Ch 112	1.22×1.73	0.70×0.53	1.18	184.36		
18	Ct 112	1.18×1.35	0.86×1.03	1.20	184.11	覆土中に繩文土器出	

4~16は日の出側半地、17,18は同じ2削平地

際ではやゝ緩やかに立ち上がる。断面ビーカー状に近い。

覆土は底部より中位層にかけては一様の赤褐色土であり、上層は黒褐色土が被っている。

#### 18. Ci112土塁（第73図 第22表）

Ch112土塁に南接して東斜面に検出される。形状・覆土共に類似している。中位層下方の赤褐色土中に縄文時代中期とみられる土器片3点が出土している。共に摩耗しているが、1点は口唇部に刻みを有する単節斜縄文の口縁部片で、胎土、焼成はやゝ良好である。

#### 要約

IIの部削平地における16基の土塁はいずれも切土によって上部を失なっているが、重複することなくほぼ全域に及び、標高19.6～19.8m間の南東斜面に分布している。検出面径2.0～2.50mを有する土塁が多く、削平の影響が少ない(4)～(6)土塁では径2.50m以上、15、16号では2m以下である。底部はこれよりやゝ大きく、平坦をなして、プラスコ状を呈する。1号土塁にのみ底部に小穴を伴い、下半の堆積層もレンズ状を呈し、他に相違する唯一の土塁である。

覆土は底部に炭化物や焼土粒を含む堅固な黄褐色土、あるいは赤褐色土の薄層がほぼ水平に広がるものが多く、その上層に炭化物・焼土粒を含む薄層が不整に堆積している。地山類似の厚層は壁際に多く崩壊土とみなされる。中央部に薄い傾向にあるがほぼ平行する堆積とみられる。(3)、(9)、(13)土塁では中央部下半にやゝ山なりをなす堆積層であり、壁の崩壊が著しく進行していない段階の堆積と解される。

遺物は(3)土塁の下層に出土するほかは認められていないが、分布や形状、覆土の堆積状況に著しい相違の認められない点で同時代の遺構と推定される。その性格については底部が踏み固められているとみられる以外に関連遺構を含めて明らかでない。

IIIの郭北端削平地の2土塁ではやゝ小規模であり、ビーカー状に近い。覆土は黄褐色土の厚層をなし、上部では黒色土層となるが、IIの郭のそれと同様の堆積とみなされ、遺物によって縄文時代の土塁と推定される。また、削平地にかかる周辺に関連する遺構も考えられるが、いずれも明確に判別できるものは認められない。

## 第5章 IIIの郭の遺構と遺物

### 1. III-1 削平地

IIの郭北東端の削平地と4号堀を境にする北辺の上段削平地である。南辺を鞍部境の登り道に面され、東辺はIII-2削平地の切土斜面に限られる。東西14m、南北22mを計るが、北辺は土壁に統一して西辺を斜辺とする三角形状をなす。面積174m<sup>2</sup>の小削平地である。現状においては北西辺がもっとも高く、これより南東に緩やかに傾斜し、4.5°勾配をなす。標高187.6m、削平地南北の比高は1.30mである。

検出される遺構は削平地中央部より南にかけて柱穴群及び建物遺構、焼土遺構、土塙、石敷等である。遺物は主として南東の盛土層に多く、陶磁器、鉄製品等23点である。なお、北辺に高く土壁には掘り込みを有する建物7棟が検出されており、都合上これを含めて記述している。

#### (1) 削平地の形成 (第62図)

現状削平地は北西より中央部にかけて地山の切土面をなし、南東では盛土整地層によって被われる。通路に沿う南辺には大小礫が土盛状をなして散乱し、14号堀をはじめ大部分の遺構を被い、北辺の建物遺構においても同様である。

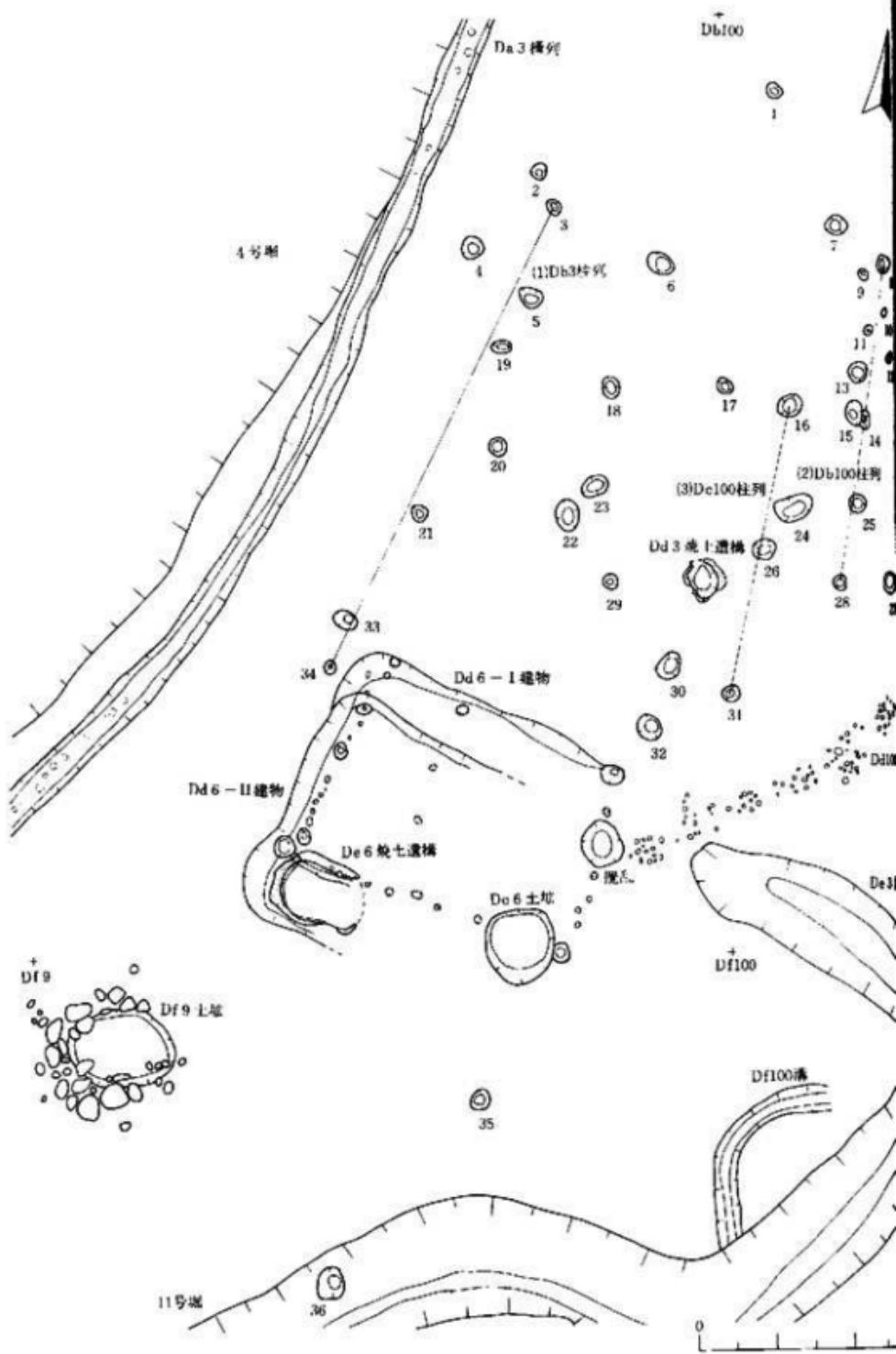
これに先行する削平地の形成は明瞭な痕跡を留めていないが、南東隅には14号堀に重複する地山切土面が認められ、黒色腐植土の薄層によって被われている。同一検出面にはDf100溝が認められ、削平地西辺を画する溝とみられる。また、石敷遺構の北東方向にも削平地が推定されるが、III-2削平地となって明らかでない。

14号堀開削以後においては覆土を切る東西のDe3溝があり、地山類似の褐色土層が厚く被い、更に上層では炭化物・焼土粒を含む暗褐色土となる。南端では0.50~0.60mに達して現状削平地面を形成し、その間の造成も推定されるが削平地面は明瞭でない。

#### (2) 柱穴群及び建物遺構 (第62~66、72図 第23~26表 図版20、32)

##### 1. 柱穴群 (第62図 第23表)

大部分中央部の地山切土面において検出されるほか、南に若干分布する。掘り方は径0.20~0.30m前後の円形をなし、比較的浅い柱穴が多い。柱痕を残すものは殆どない。いずれも規則的な配置はみいだし得ず獨立柱建物として確定するには至っていない。柱列としてあげられるものには西辺には(1)P 3-19-21-33-34の柱列、東辺では(2)P 8-14-28、(3)P 16-26-31の南北柱列がある。(1)柱列におけるP 3-33の柱間は6.56m(2.650尺)で、P 19-21-32-34では2.38(7.855)-1.66(5.489)-0.65m(2.145尺)を計り、III-2削平地におけるCi103-II建物に類似するが、柱列方向はN17°Eで大きく東偏している。掘り方は径0.30m前後のほゝ円形である。P 3、19が浅く不安定であるほかは深さ0.34~0.59mに及び、P 33では径0.18mの



第62図 III-1 削平地遺構全体図

第23表 III-1 削平地柱穴計測表

番	大きさ	深さ	掘出面高	底面高	幅	高さ	底面高	幅	高さ	掘出面高	底面高	幅	高さ
1	20×20 cm	7 m	187.34 m	187.27 m	c.		19	23×19 cm	17 cm	187.34 m	187.17 m		
2	20×22	15	187.34	187.39			20	23×27	7	187.26	187.21		
3	19×25	25	187.58	187.36			21	22×26	55	187.87	187.28		
4	29×30	36	187.71	187.35			22	32×40	36	187.37	187.01		
5	34×29	34	187.52	187.18			23	34×31	12	187.18	187.06		
6	35×31	26	187.46	187.20			24	45×41	14	187.02	186.93	A柱?	
7	29×26	32	187.15	186.83			25	25×25	7	186.89	186.85		
8	29×28	9	187.94	187.89	c.		26	31×30	8	187.02	186.94		
9	15×48	5	187.12	187.67			27	30×31	61	186.08	186.97		
10	11×12	8	187.03	186.95			28	20×24	36	186.82	186.46	c.	
11	14×11	4	187.05	187.01			29	20×20	13	187.06	186.93		
12	15×15	7	186.97	186.93	c.		30	31×30	16	186.92	186.92		
13	26×31	11	187.67	186.95			31	21×20	13	186.95	186.92		
14	15×29	6	187.48	186.93	A柱?		32	30×34	19	186.79	186.59		
15	25×32	9	187.07	186.98	c.		33	30×27	44	187.28	186.84	(18)	
16	33×34	11	187.18	187.07			34	15×20	34	187.36	187.02		
17	21×24	9	187.24	187.15	A柱?		35	25×20	28	186.65	186.37		
18	23×30	8	187.27	187.19	c.		36	36×44	61	186.57	186.96		

円形の柱痕が認められる。(2)～(3)柱列ではP28を除いて浅く明瞭でないものの、(2)、(3)はそれぞれ2.06m(6.815尺)、1.88m(6.205尺)の等間をなし、ほぼ同一方向をとる。共に直交する柱穴は判明していない。

## 2. Cg3建物 (第63、72図 第24表 図版20、32)

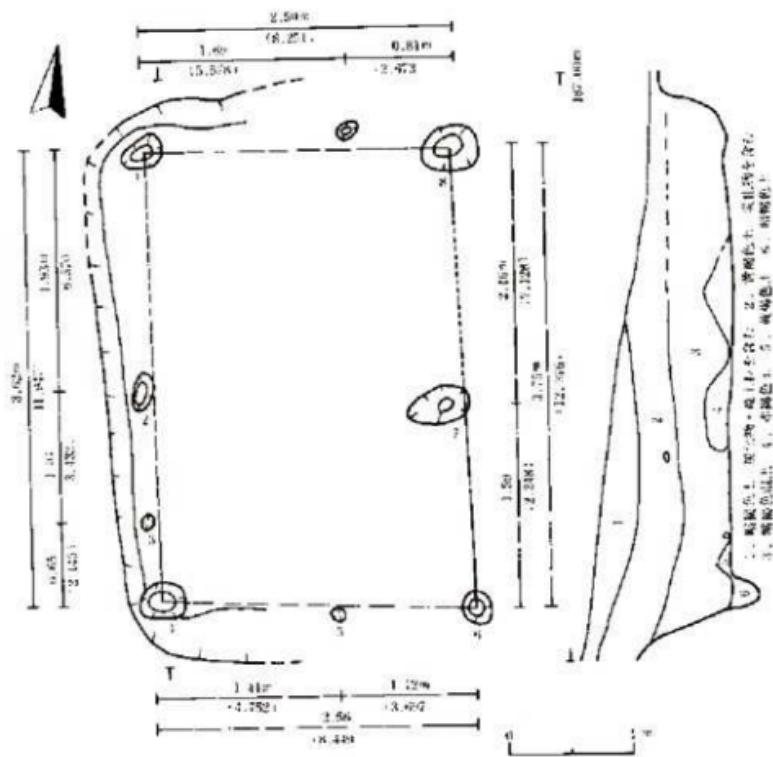
北辺の土壁を掘り込む建物である。柱列は南北でやや歪んで不整な長方形をなす。壁は東辺に認められず、半坦な床面は一段低いIII-1削平地に続く。掘り込みは南北4.56m、壁高は南西辺でもっとも大きく0.70mに及び、強く立ち上がる。壁際の四隅に柱穴が配され、桁行3.62m(11.947尺)2間、梁行2.50m(8.251尺)1間をなし、支柱穴が東辺を除いて不規則に並ぶ。掘り方は円形に近く、径、深さ共に不均衡である。北西の隅柱における柱痕は0.18mの円形であり、他は明瞭でない。

覆土は壁際に崩壊土が塊状にみられるほか、床面より柔い暗褐色腐植土と褐色土の混土が一様に被い、炭化物の微粒を含んで厚さ0.40～0.50mに及ぶ。

重複するCg100建物西壁を切り、床面を僅かに高くする建て替え建物とみられる。桁行方向はN13°Wを計り、Cg100建物より僅かに西方に偏っている。

## 3. Cg100建物 (第64、72図 第25表 図版32)

Cg3建物に重複する長方形をなす建物である。東辺はIII-2削平地によって失なわれ、南北壁を残すのみである。南北の掘り込みには4.88m、壁高は南辺に高く0.60mを計る。南西に深さ0.05m前後の浅い周溝が認められ、床面はほぼ平坦をなして踏み固められている。北西よりには舟底状の深さ0.10mの凹地をなすが明瞭な掘り込みは認められない。柱位置は四隅のほか、東辺に2柱穴が認められる。柱間は南北3.77m(12.442尺)1間、東西2.87m(9.472尺)であり、東辺のみ3間をなし、西辺に比して僅かに短い。東面P6-5-4-3は1.30(4.290)-0.



第63図 Cg3 建物遺構

第24表 Cg3 遺物柱穴計測表

No.	大きさ	深さ	横幅	柱穴面積	壁面高さ	No.	大きさ	深さ	横幅	柱穴面積	壁面高さ
1	200×260cm	110cm	185.57cm	185.57cm	6	25×25cm	37cm	185.89cm	185.59cm		
2	10×32	6	185.52	185.46	7	48×35	43	185.36	184.93		
3	11×13	5	185.52	185.47	8	47×30	42	185.36	184.95		
4	38×32	21	185.50	185.29	9	15×13	9	185.29	185.30		
5	12×14	7	185.42	185.36							

86 (2.838) - 1.32m (4.356尺) である。南北方向はN11.4°Wを計る。柱穴の掘り方は径0.30m前後の円形をなし、北西隅を除いて浅い。東辺における柱痕は径0.18mである。

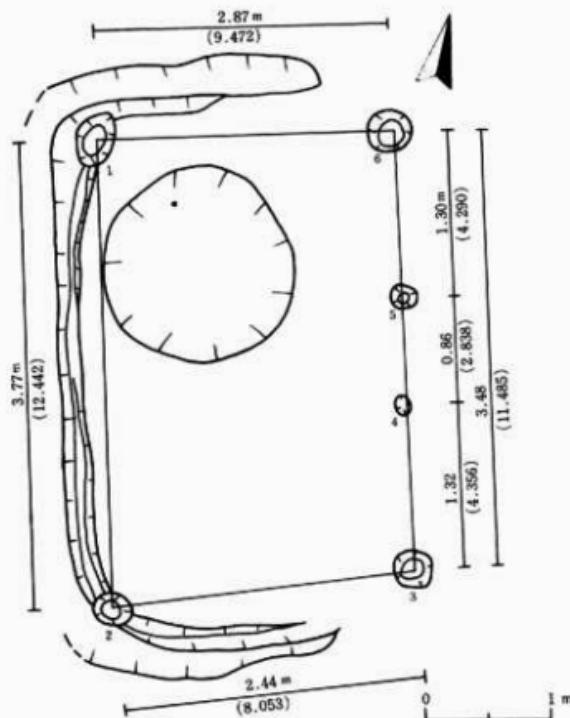
覆土は南北辺の壁際に崩壊土、床面には暗褐色上が薄く張り付く状態で広がる。炭化物は認められず、遺物も出土していない。Cg3建物の東壁はCg100建物南壁に沿う覆土を切って構築され、Cg100建物に先行している。

#### 4. Cg3-I建物（第65、72図 第26表）

Cg3-II建物の北壁及び覆土を切って構築される建物とみられるが、調査上の不注意によって

判明しない点が多い。南北の掘り込みは3.48m、壁高は南辺で0.35mを計り、北辺に比して緩やかに立ち上がる。Ci3-II建物と殆ど同一規模と推定され、これよりやゝ北偏している。床面は平坦で西辺中央部に塊状の黄褐色土に混じって炭化物粒が広がり、焼土粒が僅かに認められる。これを被う腐植質土には礫が混入し、上層は柔い暗褐色土が0.40mの層厚となり、一挙に埋め戻されているとみられる。

重複するCi3-II、Ci100建物より新しく、また、覆土の堆積状況によって北辺のCg3建物より新しい建物と認められる。



第64図 Cg100建物遺構

第25表 Cg100建物柱穴計測表

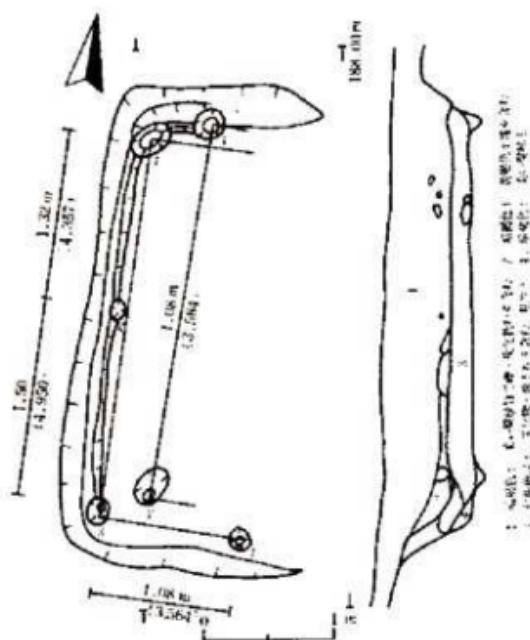
No	大きさ	深さ	検出面高	底面高	No	大きさ	深さ	検出面高	底面高
1	28×45cm	113cm	185.39m	184.26m	4	13×17cm	13cm	185.05m	184.92m
2	29×25	23	185.41	185.18	5	22×21	14	185.03	184.89
3	30×31	18	185.01	184.83	6	35×36	8	185.12	185.04

#### 5. Ci3-II建物 (第65、72図 第26表)

掘り込みを有する建物である。南北3.52mを計るが、東辺は既に削平地されて明らかでない。壁高は南辺で、0.53mを計り、西辺の壁際には浅い周溝が走る。床面は非常に固く、炭化物が中央部より僅かに検出されるが焼土は認められない。柱穴は南西に確認され、南北2.82m (9.307尺) 2間、東西1.08m (3.564尺) 1間である。堅穴の覆土は壁際に地山の黄褐色土が塊状に混入するほか、腐植土を伴う黄褐色土が被い、炭化物・焼土粒が微量認められる。

#### 6. Ci100建物 (第65、72図 第26表)

Ci3建物内に認められる2柱穴によって推定される建物である。南北の柱間は2.85m (9.406尺) である。柱穴は著しく浅く、その痕跡を留めるのみである。重複するCi3-II建物よりやや東にあって、南北の柱間方向はN2.2°Wをなして僅かに東偏するが、同建物に先行する同様の建



第65図 CI3, CI100建物遺構

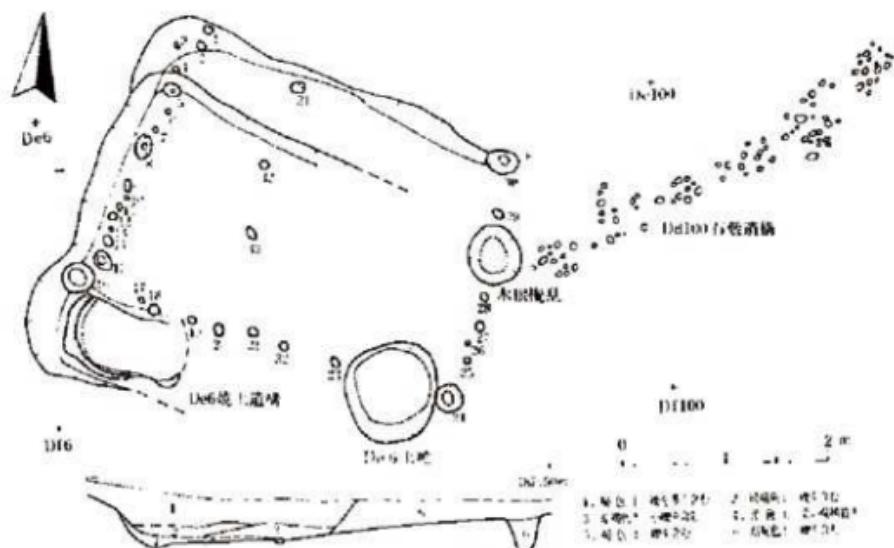
物とみられる。

#### 7. Dd6-1建物 (第66図 第26表)

東辺は不明であるが、掘り込みを有する建物である。東西4.10m、南北2.75mまで確認され、長軸方向はE 14.5°Nにある。壁高は西方で0.38mを有して強く立ち上がり、壁に沿って小ピットが不偏いながら、ほぼ並列する。更に北西を除く三隅には径0.20mの柱穴が配される。南西隅がやや深く、0.41mを計る。床面は平坦で黒色土が広がり、上層は小砾を伴う一様な褐色土の盛土が被っている。

重複する遺構にはDd6-II建物のほか、De6土塙があり、いずれにも先行している。

#### 8. Dd6-II建物 (第66図 第26表)



第66図 Dd6建物遺構

第26表 C13、C1100、Dd6建物柱穴計測表

No.	大きさ	深さ	検出面高	底面高	備考	No.	大きさ	深さ	検出面高	底面高	備考
1	32×31cm	39cm	186.92m	186.53m	C13建物	15	19×21cm	41cm	186.80m	186.39m	
2	14×16	20	186.92	186.72	(1~4)	16	30×29	33	187.01	186.18	Dd6建物I
3	17×24	6	186.92	186.86		17	5×7	9	186.76	186.67	(16~18)
4	20×17	32	187.00	186.68		18	10×9	10	186.66	186.76	
5	24×29	21	187.06	186.85	C1100建物	19	9×7	33	186.69	186.36	
6	25×34	27	187.10	186.83	(1~2)	20	12×13	7	186.72	186.65	
7	10×10	15	186.75	186.60	Dd6建物	21	10×12	25	186.64	186.39	
8	8×9	14	186.86	186.72	(1~33)	22	10×9	7	186.60	186.53	
9	6×6	13	186.87	186.74		23	10×10	18	186.55	186.47	
10	6×4	23	186.87	186.64		24	25×25	11	186.39	186.28	
11	20×13	11	186.78	186.67		25	9×10	9	186.35	186.26	
12	5×5	2	186.77	186.75		26	5×5	8	186.39	186.31	
13	5×5	4	186.77	186.73		27	10×8	19	186.51	186.32	
14	15×21	9	186.77	186.68		28	9×10	6	186.52	186.46	
15	6×10	5	186.79	186.74		29	10×11	16	186.62	186.46	
16	5×5	5	186.79	186.74		30	31×27	33	186.82	186.49	
17	5×7	3	186.73	186.70		31	15×13	30	186.73	186.43	
18	10×7	1	186.77	186.70		32	10×9	8	186.68	186.60	Dd6-II
19	5×5	3	186.74	186.71		33	11×11	7	186.69	186.62	
20	10×14	3	186.70	186.67							

Dd6-I 建物南壁及び覆土を切る建物であるが、その後の削平や調査中の不注意もあって不明な点が多い。北壁では Dd6-I 建物の覆土を切って旧来の西壁を共用し、やや南に位置している。Dd6-I 建物と殆ど同一方向、同一規模とみられる。壁高は北壁で 0.34m を計る。また、豊際には小ビットの一部を確認するほか、P 5、16 の柱穴が配される。しかし、南辺に検出されず、北東隅では擾乱により不明である。重複遺構には南東に De6 焼土遺構があるが、P 16 を被って埋没以後の遺構と認められる。

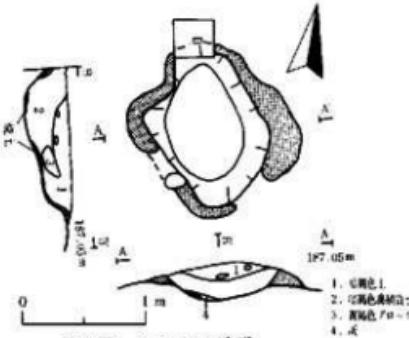
### (3) 焼土遺構 (第67、68図)

#### 1. Dd3 焼土遺構 (第67図)

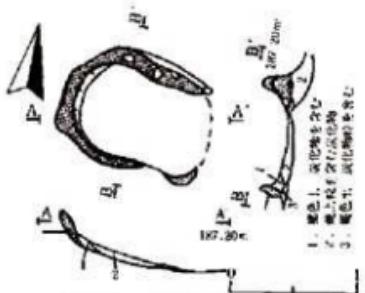
地山剖面に検出される環状遺構である。焼土は径 0.57m のほゝ環状をなして形成され、0.20m 前後の掘り込みが認められる。北端は測量杭によって破壊されているほか、上部は削平によって失なわれている。底部には若干の炭化物と焼土が広がり、上層は暗褐色土の整地層が被っている。

#### 2. De6 焼土遺構 (第68図)

整地層を除去して検出され、Dd6-II 建物覆土中に確認される。東西 0.92m、南北 1.20m の掘り込みをなし、底部は僅かに東へ傾斜する。焼土は環状をなして認められ、北壁には火熱をうけて赤色化した小礫を作り。覆土は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土であり、遺物は一点も含まれていない。上部は明瞭でないが、煙道や煙出しを有する痕跡は認められない。



第67図 Dd3 焼土遺構



第58図 De5 焼土遺構

して堆積している。関連する遺構や遺物は判明していないが、用水溜等の施設が推定される。

#### 2. Df9土塙（第70図 図版36）

整地層中に環状をなす礫群を検出し、地山面で確認される。東西1.37m、南北0.98mの長円形をなし、株上面よりの深さは0.30mである。やや緩やかな壁をなして掘り込まれ、平坦な底部に続くが、地形に沿って東方への傾斜が強い。周囲に径0.30m前後を最大とする扁平な自然石を巡らし、西方には掘りあげに伴うとみられる小礫が散乱する。

底部には草木灰が傾斜に沿って東に厚く堆積しているが、底部や壁面には火炎をうけた痕跡は認められず、長期間に渡る加熱の可能性は認められない。

#### （5）石敷遺構（第66図）

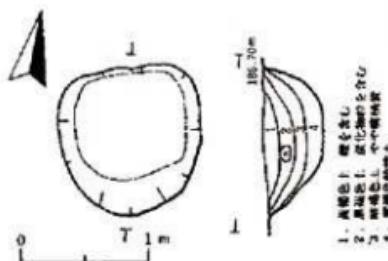
整地層を除去した地山面に検出されるDd100石敷遺構である。削平地南東辺に沿ってやや弯曲し、Dd6建物東辺に至る延長4.70mの小礫群である。北東はIII-2削平地切上面で失われる。やや乱雑な部分も認められるが、径0.30~0.50mの繊まりをもつて飛石状に7群まで確認される。いずれも踏み固められた状態で地山に入り込み、上面は殆んど平坦をなす。Dd6建物出入口に続く通路等が推定されるが、南西端ではDd6-I建物床面と同一面にあり、その関連については明確でない。また、De3溝西端に近接する位置にあり、石敷を残して溝を開削している可能性もあるが前後関係は不明である。

#### （4）土塙（第69、70図、図版36）

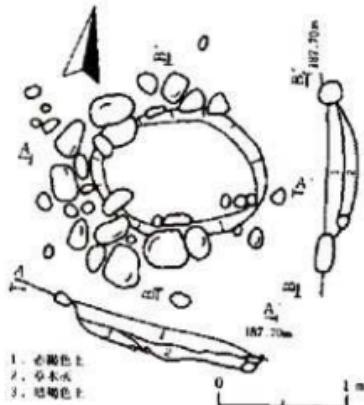
##### 1. De6土塙（第69図）

整地層上面に検出される東西0.87m、南北0.95m、深さ0.47mのほぼ円形をなす土塙である。やゝ緩やかな掘り込みをなし、底部は平坦である。

覆土最下層は柔い黄褐色粘土であり、酸化鉄の集積が認められる。上層には炭化物を含む黒褐色土の流入がみられ、更に盛土層の黄褐色土が共にレンズ状をなして堆積している。関連する遺構や遺物は判明していないが、用水溜等の施設が推定される。



第69図 De6 土塙



第70図 Df9 土塙

(6) 遺物 (第71図 第27表 図版44)

陶磁器16点、鉄器3点、その他4点である。

中央部の地山削平地面では白磁2点であり、大

部分は南東辺の藪地盛土層に出土する。遺構で

はDd6建物の覆土上に鉄鏃2点、11号堀覆土上に須恵器片が出土するが、共に上層の整地層にあ  
たっている。

青磁

南東盛土層に出土する2点である。1点は輪花皿の口縁部小片であり、体部に稜を有する。  
内外暗緑色をなし、質入が認められる。他は薄い暗緑色の細片である。胎土は共に灰色をなす。

白磁

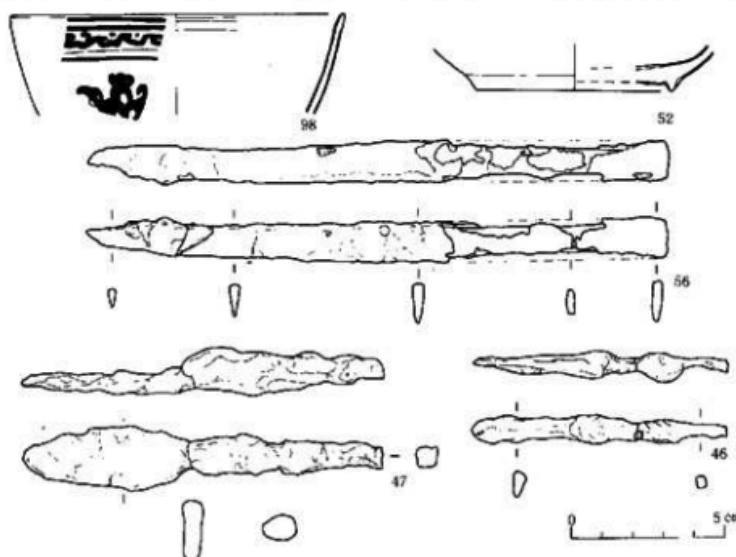
5点共に皿片とみられる。口縁部2点のほかは体部小片である。I層出土の口縁部は薄手で  
反りし、やゝにぶい白色を呈する。また、II層出土のそれは体部よりやゝ厚い口縁となり、  
僅かな稜を残す。灰白色の釉は光沢が弱く、質入も認められ、二次加熱の可能性が強い。胎土  
は前者が乳白色をなし、後者は密で白色を呈する。

染付 (第71図 図版44)

7点のうち、碗の口縁部1点を除く5点は皿片とみられる破片である。碗の口縁部は体部  
より外傾してやゝ薄く引き出されている。光沢が弱く、青味がかった白磁に紺青の発色をなす。

第27表 III-1 削平地出土遺物

層位	青磁	白磁	染付	鉄製品	陶製品	石製品	須恵器
I	1	1	4		1		
II	1	4	3	2	2	1	3
計	2	5	7	2	3	1	3



第71図 III-1 削平地出土遺物

口縁直下の外面に波状の区画帯、体部に唐草文の一部が認められる。胎土は微密で白色をなす。推定口径13.0cm、南東辺I層出土。なお、III-2削平地出土上片間に接合する破片であることが判明し、第6章の2に再掲している。器高6.6cmである。

#### 灰釉陶器（第71図）

2点共皿片である。1点は白色化する体部片で二次加熱をうけているものとみられる。底部は分厚く、低い削り出し高台を有し、高台内に輪トテンの痕跡を残す。淡黄緑色釉は全面に及び、高台脇及び底部内面に薬漬する。中央部には花文の一部が認められる。推定高台径6.4cm、南西II層出土。

#### 鉄製品（第71図）

小柄<sup>59</sup>は南辺の通路に沿う様に混じて出土する。長さ19.0cm、刃部11.4cm、刃径1.3cmである。錆化して剥落する部分が多いが、茎部に薄い銅板が遊離して認められる。他の2点は共に折損する鐵鎌とみられる。<sup>60</sup>は現存長11.4cm、刃部8.4cmの尖端である。最大刃径2.0cm、厚さ0.6cmを計る。茎部の断面は0.7cmの方形をなす。<sup>61</sup>は現存長8.2cm、刃部4.2cm、刃径0.8cmであり、共に錆化が進行している。いずれも南東2層出土。

#### 石製品

砥石の小破片1点であり、研磨面は1面にのみ認められる。二次火熱によって暗赤褐色化する石質凝灰岩製である。

#### 須恵器

甕の体部片とみられる。II層出土の1点は内外に平行する叩き目文が重複する。他は薄手の灰白色をなす小片で二次加熱をうけている。

14号堀覆土上層の破片は外面に浅い平行叩き目文が重複し、胎土は暗赤褐色の綿状をなす。

#### 要約

IIの郭東方にあたる削平地は大部分を切土面によっており、やゝ低位となる南東部にのみ盛土層を形成する。しかし、南東辺においても旧表土は認められず、重複する削平地とみなされる。南東の小削平地を除き、(1)柱列と掘り込みを有する建物及び焼土遺構、III-2削平地に統く東西溝と14号堀等の重複により数回の整地が推定され、盛土層によっては火災焼失に伴う造成も推定される。

遺構は柱穴群のほか、7棟の建物遺構、焼土遺構、土塙等であるが、共に検出状況によって現状削平地に伴う遺構は認められず、これより以前の削平地に伴うものと解される。建物遺構ではIII-2削平地における柱列に類似する柱列が西辺に認められ、同様の掘立柱建物の一部とみなされる。他は共に掘り込みを有する建物である。

7棟の建物は大別して3棟の建て替えと把えられ、それぞれ規模や方向を異にしているが、

共通して東壁は認められない建物とみるならばCg3建物東性もあげられ、同様にDg6柱穴は主として四隅に配され性はみられないが隅柱に深く入り、2間、または1.5間に相当大きく、柱間が狭くなる点で用する形跡は認められず、通常よっては防備上の施設があつ北側の5棟についてはIII-2の建物と解される。

No.	建物名	堤	幅
1	Cg3	-	4.70m
2	Cg100	-	4.87
3	C1.3-I	3.48	-
4	C1.3-II	3.52	-
5	C1100	-	-
6	Dg6-1	-	2.90
7	Dg6-II	-	3.12

遺物は南東辺の盛土整地層央部に推定される掘立柱建物Ⅲであり、その比率は1:7。二次的な火熱をうけるものがあるものである。

## 2. III-2削平地

IIIの郭最北端にあたるⅢ-2は広い。南半はやや狭く東西9m限られて1.5~2mの比高をなす勾配の斜面をなし、Ⅲ-3削平地に達する削り出し斜面をもつて低く通路状に開かれている。

遺構は南北に重複する6削平地12が確認される。また、南辺

遺物は陶器がもっとも多

共通して東壁は認められない。特に北辺の土壙上にあたる2棟の場合、東接する削平地に伴う建物とみるならばCg3建物東辺の狭い柱間は出入口とみなされ、当初より東壁を有しない可能性もあげられ、同様にDg6建物では削平地に続く石敷遺構を伴うものとみることもできよう。柱穴は主として四隅に配され、壁際には浅い周溝が認められる。柱穴の掘り方は必ずしも統一性はみられないが隅柱に深く、柱痕は径0.18~0.24mを計る。柱間は平行方向では6尺間となり、2間、または1.5間に相当し、梁行方向で1.33間となる。掘立柱建物に比して柱痕径はやや大きく、柱間が狭くなる点では性格を異にする建物施設とみられる。床面には恒常に火を使用する形跡は認められず、遺物も出土していないが、共に床面が踏み固められている。立地によっては防備上の施設があげられ、棟方向によっては掘立柱建物に付属する施設が推定される。北側の5棟についてはIII-2削平地、あるいは掘立柱建物方向に酷似しており、近接する段階の建物と解される。

第28表 III-1 削平地建物遺構

No.	建物名	規格	壁高	柱間(東 西 × 南 北)				柱間方向
				左	右	中	右	
1	Cg 3	-4.70m	0.70m	2.53m (8.350尺)	1間	3.62m (11.947尺)	2間	N 13.0° W
2	Cg100	-4.87	0.60	2.66 (8.762)	3	3.77 (12.442)	1	N 11.4° W
3	Ci 3 - I	-3.48	0.35					-
4	Ci 3 - II	-3.52	0.53	1.08 (3.564)	1	2.82 (9.307)	2	N 4.3° W
5	Ci 100	-	-			2.85 (9.406)	1	N 2.2° W
6	Dd 6 - I	2.90	0.38	2.40 (7.921)	1	3.62 (11.947)	1	(N 14.5° E)
7	Dd 6 - II	3.12	0.34	-		-		(N 20.2° E)

遺物は南東辺の盛土整地層に多く、共に現状削平地形成以前の遺構に伴うものとみられ、中央部に推定される掘立柱建物等に関連する遺物と推定される。大部分は青・白磁、染付の碗と皿であり、その比率は1:7と圧倒的に皿が多い。灰釉皿を除いては明代の舶載磁器であり、二次的な火熱をうけるものが目立つ。出土点数が少ない点では短期間における使用が推定されるものである。

## 2. III-2 削平地

IIIの郭最北端にあたるIII-2削平地は東西16m、南北42mに及び、現状の削平地中もっとも広い。南半はやや狭く東西9mとなり、面積は約460m<sup>2</sup>である。西辺は土壙及びIII-1削平地に限られて1.5~2mの比高をなし、地山の切土斜面は41°勾配をなす。東辺はIII-3削平地境の46°勾配の斜面をなし、III-3削平地との段差は2mである。南北はそれぞれ鞍部境の通路、3号堀に達する削り出し斜面をもって限られる。通路北辺には高さ0.20mの盛土が認められ、東端は低く通路状に開かれている。削平地は殆ど平坦をなすが、南東にやや傾斜している。

遺構は南北に重複する6削平地が認められ、削平地には柱穴群、溝9条、焼土及び焼土遺構12が確認される。また、南辺には14号堀が東西に開削され、III-3削平地に達している。

遺物は陶磁器がもっとも多く、その他鉄製品、石製品、古鏡、穀類等である。

なお、14号墳についてはIIIの郭内の塁壕に、縄文時代の土塙と遺物はIIの郭削平地の土塙に含め、III-1削平地南東の溝2条については、III-2削平地の遺構として記述している。

#### (1) 削平地の形成 (第72図 図版20、21)

削平地は西方の地山を切土し、東方に盛土、あるいは整地による造成と認められるが、重複する削平地の形成によって削平地境の明瞭でないものが多い。切土面によって推定されるものを含めて以下の6削平地があり、いずれも南北方向を長辺とする削平地である。

#### 1. III-2-1削平地 (第72図)

現状削平地の中央部より北辺にかかる削平地である。西辺は土塙及びIII-1削平地に接して1.5~2mの比高をもって削り出し、東辺は盛土斜面をなしてIII-3削平地に続く。北端は約3mをおいて急崖をなし、南辺はIII-2-6削平地に連なって同一平坦面をなす。西辺は地山面をN16.2°W方向に僅かに切土して、東方に盛土層をなす。東西12m、南北18mと推計され、東西の傾斜2°を計って殆ど平坦である。重複する削平地はIII-2-2~5削平地に及び、III-2-2削平地は殆ど同一面にあるが北西隅でこれを切り、現状削平地北辺にはIII-2-1削平地、またはそれ以前の造成に伴うとみられる整地層が認められる。

重複する同一3、4削平地は約1.5m低位の削平地であり、同一2削平地の造成によって被われる。同一5削平地では0.2m低く、薄い整地層がこれを被っている。従って確認できる5削平地中ではもっとも新しい段階の削平地である。

#### 2. III-2-2削平地 (第72図 図版20、21)

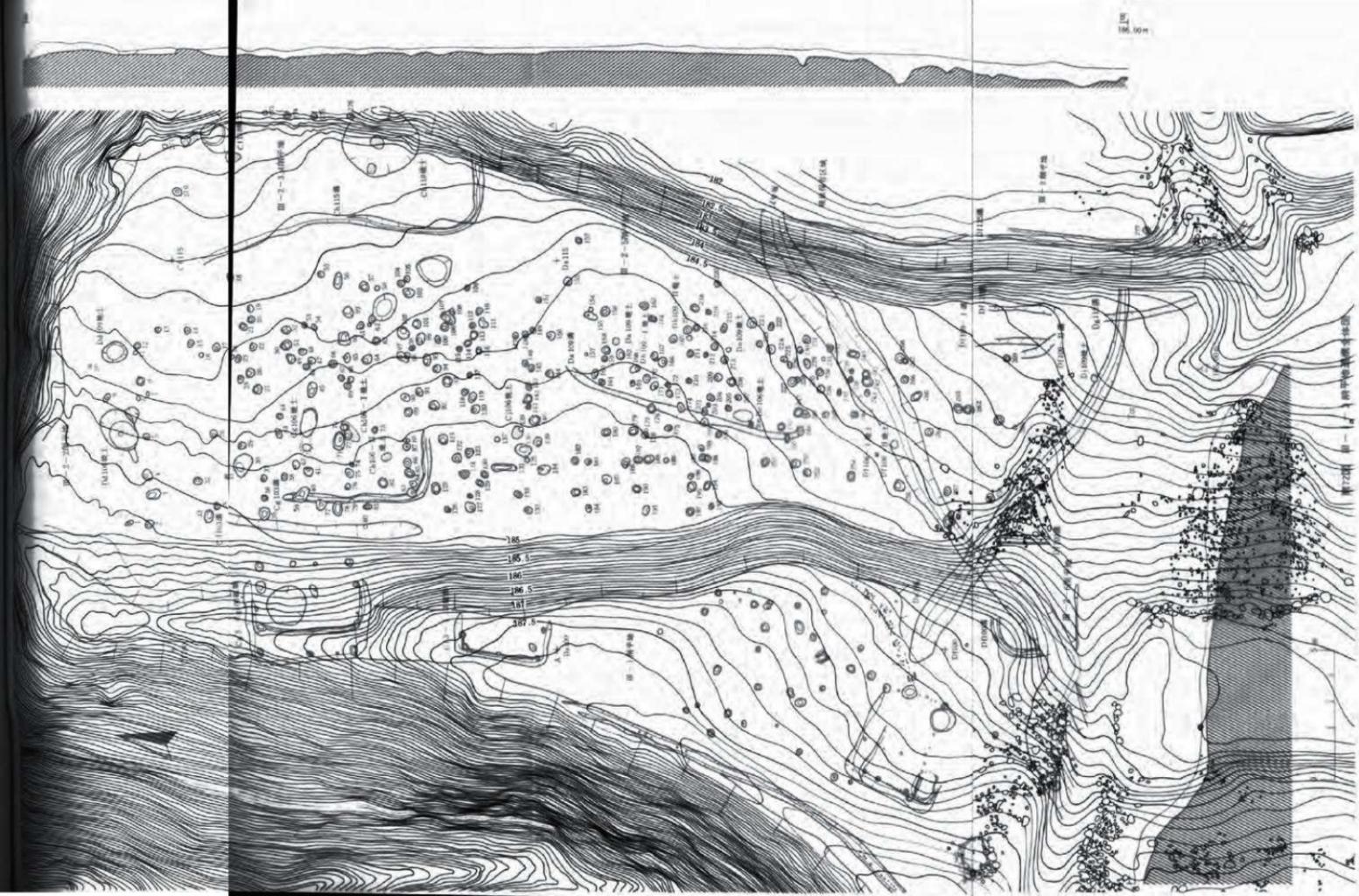
III-2-1削平地に重複する北辺の削平地であるが全体は明確でない。北西端の土塙を残してN4.8°W方向の切土面が認められ、北端は削り出し斜面に限られる。東西の地山切土面は中央部まで認められ、以東の盛土は北半で旧表土の黒褐色土を被い、更に東端の同一3、4削平地より南に及んでいる。II-2-1削平地に先行する削平地、またはこの前後の造成にかかわるものとみられ、Cg103溝に伴う削平地と推定するならば、前後する造成の可能性もあるが、現状削平地に近い段階の削平地と推定される。

#### 3. III-2-3、4削平地 (第72図 図版20、21)

北東に検出されるほど同一面をなす2削平地である。III-2-3削平地は旧表土及び地山をN30.3°W方向に0.40m前後の切土によって形成される。しかし、東方の盛土はIII-3削平地切土斜面となって明らかでない。南半に重複する同一4削平地においても殆ど同様であるが、東西に湾曲する浅いCh115溝を有し、切土方向はN4°Eで著しく東偏している。共に南北12m前後の削平地と推定され、東西の傾斜は2°前後で平坦をなす。

#### 4. III-2-5削平地 (第72図 図版20、21)

南北9mの小削平地で、東隣は一様の盛土整地層となって明らかではない。西端にはDa109



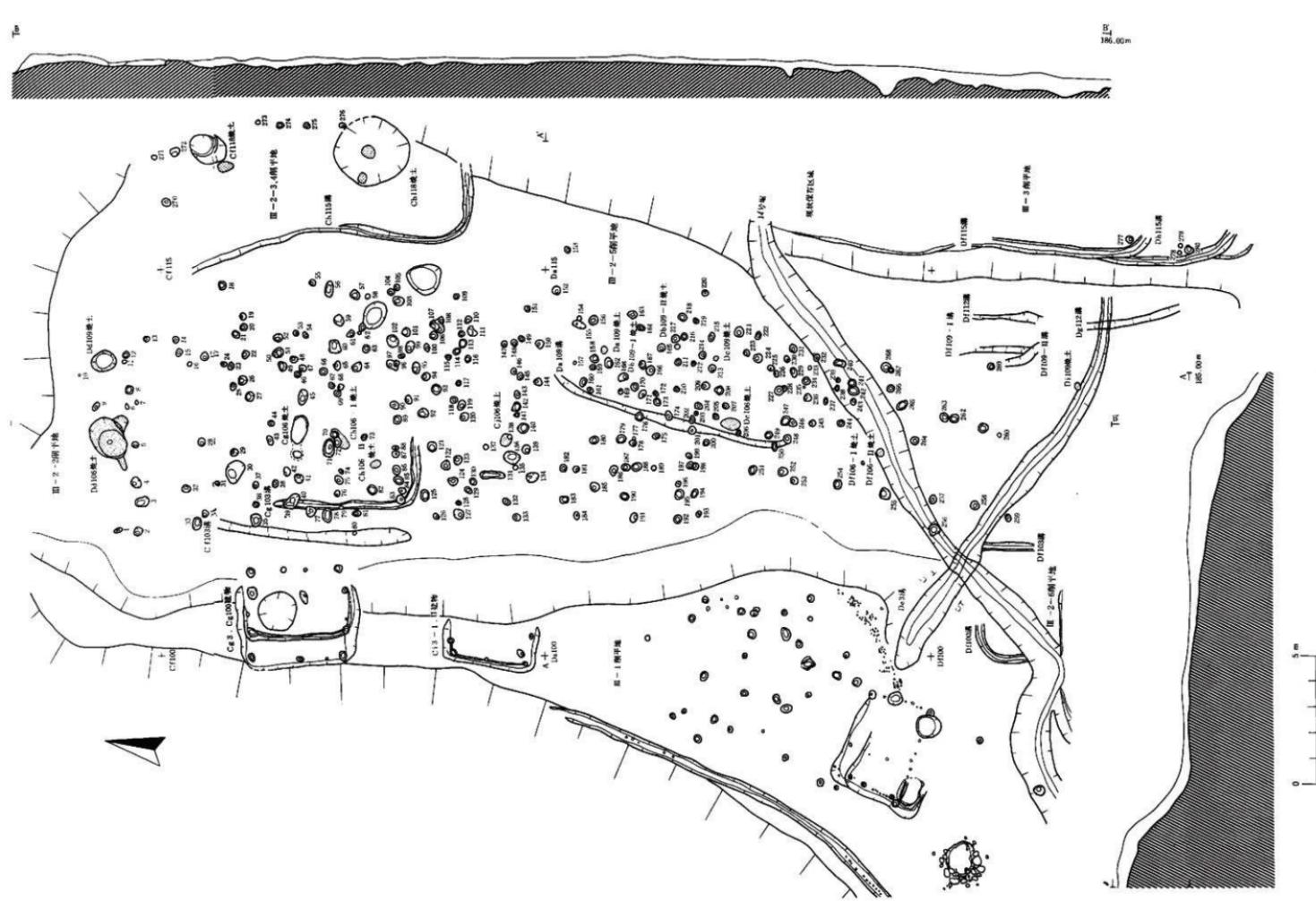


圖72—III-1-3 斜平地遺構全體圖

溝を伴い、N4.5°E方向に切土されている。削平地面上には炭化物、草木灰が西辺に沿って認められ、部分的に焼土が形成される。これを被う褐色土は西端の切土面上部がIII-2-1、2削平地の造成、またはその前後に削平をうけており、これに伴う整地層とみなされる。

#### 6. III-2-6 削平地（第72図 図版20、21）

III-1削平地南東のDf100溝以東に続く小削平地である。東西2.5m、南北6.0mの切土面が確認され、切土方向はN2.8°Wである。南半は11号堀以南に続き、III-7削平地にその痕跡を留めている。削平地面上には黒色土が薄く認められ、上層は褐色土によって被われ、溝の覆土に共通している。

#### 7. その他の削平地（第72図 図版20、21）

南西のIII-1削平地境に方向を異にする切土面が認められ、削平地の北西隅と推定される部分があり、南東には4条の溝が南北に走行して削平地西辺を画するものとみられる。更に北西の土壌を切ってIII-2-3削平地方向に平行する切土部分が認められ、削平地北西隅とみられるが、削平地面上はIII-2-1、2削平地に重複して明らかでない。また、南西の盛土は最終段階における削平地境と解されるもののいずれに伴うかは明らかでない。

#### (2) 溝造機（第72、73図 図版20、21）

##### 1. Cf103溝（第72図 図版20、21）

北西辺の土壌に沿う地山面に検出される南北7.6mの溝である。溝幅0.60m、深さ0.05mで僅かに痕跡を留め、III-2-1削平地の形成や前後する切土によって上部を失っているものとみられる。溝方向はN2.5°Wにあり、III-2-2削平地方向に近似する。底部は殆ど平坦をなし、南に若干傾斜している。覆土は地山に酷似する褐色土である。

##### 2. Cg103溝（第72図 図版20、21）

Cf103溝の東に近接し、検出面はこれより僅かに高い。南北方向より曲折して東方に延びる8mを確認する。溝幅0.30m、深さ0.10m、南北方向はN9.0°Wを計る。底部は平坦をなし、東南にやや低位となる。覆土は暗褐色土で炭化物粒や焼土が微量混入している。重複する柱穴にはP40、77、78、83があり、覆土に混入物を伴なわず、溝以前の柱穴とみられる。

##### 3. Ch115溝（第72図 図版20、21）

III-2-4削平地南西辺に沿って開削される。長さ7.36m、幅0.30~0.35m、深さ0.10~0.15mを計り、底部は東南にやや傾斜している。北端はIII-2-3削平地によって失われ、曲折する東端はIII-3削平地切土面によって明らかでない。覆土は削平地と同様に一様の暗褐色土である。

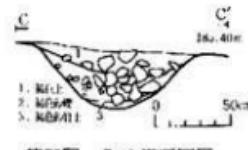
##### 4. Da109溝（第72図 図版20、21）

III-2-5削平地西辺に沿う南北溝であり、両端は僅かに東へ湾曲している。長さ9.40m、

幅0.15~0.42m、深さ0.10~0.25mを計り、底部は平坦である。覆土は炭化物粒を含む褐色土である。重複するP174、176、201、202、248は共に溝を切っているが、P250は不明である。

#### 5. De3溝（第72、73図 図版20、21）

III-1削平地よりIII-2~6削平地にかかる東西溝である。東端はIII-3削平地切土面で不明となる。長さ16.78m、溝幅は西方で1.15mを計り、東進して狭くなる。底部幅は0.15~0.40mで緩やかな壁に続く。西方にやや深く0.26mであるが、III-2~6削平地より東端にかけては0.13mになる。東西の比高は2.78mに及んでいる。



第73図 De3 溝断面図

覆土は底部に若干の砂礫を含み、上層は殆ど拳丈の礫を伴う褐色土である。西方ではIII-1削平地付近では黒色土が堆積し、若干の砂礫を伴っている。

重複する14号堀の覆土を切るほか、Df103溝、Dg112溝を切って4溝中もっとも新しい。

#### 6. Df100溝（第72図 図版20、21）

III-1削平地南東の地山面で確認される2.80mの小溝である。北端は東に湾曲し、14号堀以南は明らかでないが、III-7削平地に続く削平地に伴う溝とみられる。溝幅0.30m、深さ0.10mである。覆土は底部の黒色土を被って上層では暗褐色土となり、共に以東の削平地面に共通する。

#### 7. Df103溝（第72図 図版21）

III-2~6削平地南辺の地山面に検出される南北の小溝である。北端はDe3溝によって失われ、2.10mのみ確認される。溝幅0.25~0.35m、深さ0.10mを計り、覆土は炭化物を含む黒褐色土である。

#### 8. Df109-I、Df109-II、Df112溝（第73図）

共にIII-2削平地南東に位置し、整地層に僅かに認められる南北溝である。Df109-I溝の3.20mが最長である。溝幅は0.23~0.30m、Df112溝がもっとも深く0.10mである。溝方向はそれぞれN7.5°W、N33.6°W、N6.3°Wを計る。Df109-II溝は湾曲して明らかでないが、他の2溝は削平地に伴う可能性が強い。

#### 9. Dg112溝（第72図）

III-2削平地南東端の地山面に確認される3.70mの南北溝である。溝幅0.25~0.30m、深さ0.16m前後で南に傾斜している。溝方向はN16.6°Wにあるが、削平地との関連は明らかでない。覆土は砂礫を含む黒色土が被っている。

#### (3) 柱穴群及び建物遺構（第72、74~76図 第29表 図版20、21）

検出される柱穴は276に及ぶ。ほとんどの削平地全域に分布するが、北、西辺及び東辺盛土部分にやや少ない。殆ど地山切土面に確認されるものである。柱穴の掘り方は径0.30m前後のほぼ円形をなす。深さは上部の削半によって不均衡であるが、0.30~0.50mのものが多い。確認できる

柱痕は0.15~0.18m前後を計るもののが大部分である。柱穴覆土には著しい差異は認められず、縁を伴うものは殆どない。また、覆土中の遺物は掘り方底部に埋設されているほか、10点の染付片が出土している。

規則的な配置が推定できる柱列はIII-1・1~2削平地に6、同-5、6削平地に各2柱列である。これによって推定される掘立柱建物は10棟であるが、全体を確定できる建物を復元するまでには至っていない。

#### 1. Ce103柱列 (第72、74図 第29表 図版21)

北西辺の地山面に検出される南北7.80m(25.143尺)5間の柱列である。南北の西辺P1-2-33-35-77-79に東辺のP8-26-46-66が平行し、東西ではP2-4-8、P35-37-27等が直交するが、明確ではない。P1-79の柱間は2.23(7.360)-2.38(7.855)-2.22(7.327)-1.22m(4.026尺)となり、N17°W方向を計る。東西のP2-8では5.53m(18.251尺)である。西辺P2-77の掘り方は円形をなし、径0.36~0.49m、深さ0.29~0.56mでは一定している。両端ではこれより浅く0.20m前後である。柱痕は西辺に認められ、径0.18mの円形である。覆土には炭化物粒が多く、炭化米を伴う褐色土であり、柱痕部分は暗褐色を呈して柔かい。遺物はP33掘り方覆土上層に染付底部片1点がある。

#### 2. Cf106建物 (第74図 第29表 図版21)

Ce103柱列南半に重複して地山面に確認される。南北6.50m(21.452尺)4間、東西4.14m(13.663尺)1間、または2間で、桁行方向はN12.3°Wである。西辺P30-42-74-86はそれぞれ2.12(6.997)-2.22(7.327)-2.13m(7.030尺)となり、南にやや狭い。東辺P23-49-65-96は2.01(6.634)-2.18(7.195)-2.12m(6.997尺)であり、共に7尺等間とみられる。梁行方向は4.09(13.498)~4.18m(13.795尺)である。南辺ではP86-89-96の2間等間とみることもできるが明確でない。掘り方は木根による擾乱によって不整なP30を除いて、径0.30m前後のほぼ円形をなし、検出面下の深さは0.20~0.58mにあって不均衡である。西辺は浅く、東辺では検出面が低くやや深い。P74にのみ柱痕が認められ、径0.15mの円形を呈する。暗褐色の掘り方覆土にはP74、65に炭化物粒が含まれる。

#### 3. Cg103建物 (第74、76図 第29表 図版21)

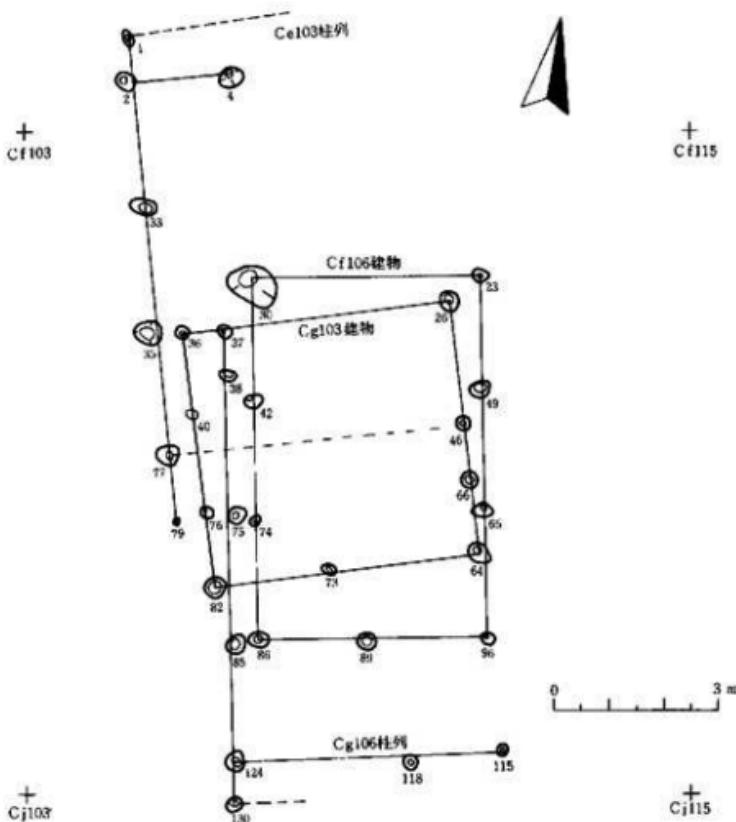
Cf106建物に殆ど重複し、南北4.60m(15.182尺)2間、東西4.82m(15.908尺)1間、または2間の柱列であるが、建物の一部をなす可能性もあって特定することができない。柱間方向はN18.5°Wを計ってCe103柱列に近似する。西辺のP36-40-76-82は1.54(5.083)-1.68(5.545)-1.40m(4.620尺)、東辺のP26-66-64は3.25(10.727)-1.31m(4.323尺)となり、ほぼ対応する柱間である。梁行方向南辺のP82-73-64は2.06(6.799)-2.73m(9.010尺)である。北西を除く隅柱の掘り方は径0.34~0.40mでやや大きく、深さは0.23~0.41mである。南西隅のP82掘り方にのみ底部に染付碗跡が埋納され、さらにこれを被って径15×18cmの楕円

形をなす厚さ3.5cmの扁平な自然石を据えている。

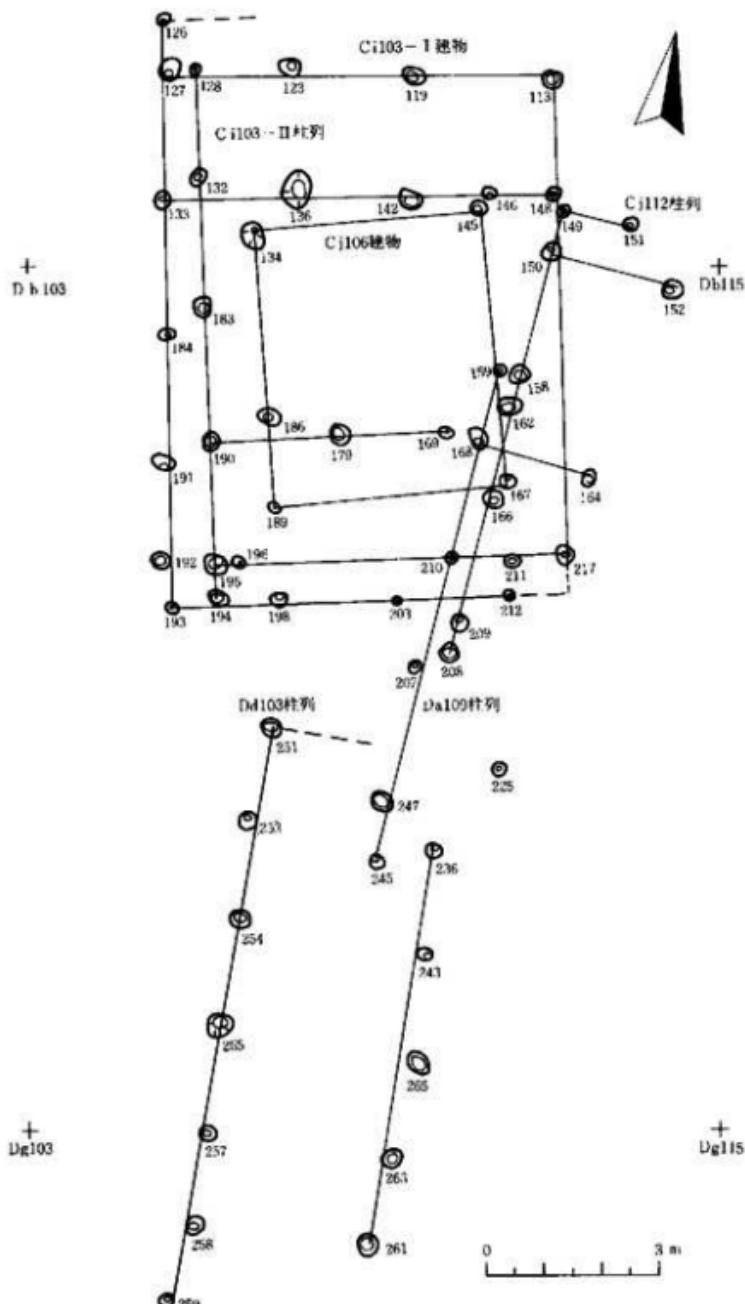
#### 4. Cg106柱列 (第74図 第29表 図版21)

Cf106、Cg103建物に重複する柱列である。南北7.57m(24.983尺)5間で、東西は4.79m(15.809尺)1間、または2間まで確認される。桁行方向P37-38-75-85-124-130は0.80(2.640)-2.55(8.416)-2.34(7.723)-2.07(6.832)-0.80m(2.640尺)を計り、南北端が等間であるほか若干の広狭がある。梁行方向のP124-118-115では3.21(10.594)-1.17m(3.861尺)となる。柱間方向はN19.3°Wである。

掘り方は南北の側柱穴が径0.30m以下でやや小さく、P38-124では径0.30~0.37mの共に円形をなす。P75、124に径0.12mの柱痕が認められ、P75には炭化米、P85に炭化物が掘り方覆土に混入している。



第74図 III-2 削平地建物柱列(I)



第75図 III-2 削平地建物柱列(2)

### 5. Ci103—I建物（第75図 第29表 図版21）

III—2—2削平地南偏の地山面及び整地層に検出される。南北10.22m (33.730尺) 6間、東西5.85m (19.307尺) 3間と認められるが、北東二辺では明瞭でない。桁行方向はN11.2°Wにある。柱間は桁行方向 P126—127—133—184—191—192—193は0.92 (3.036) 2.22 (7.327) —2.33 (7.690) —2.26 (7.459) —1.67 (5.512) —0.95m (3.135尺) となり、ほぼ規則的な配置をなす。梁行北辺ではP127—123—119—113、P133—136—142—146—148が直交し、南辺にはP193—198—203—212のほか、P192—196—210—211—217があるが、東辺や内部柱穴は明らかでない。南辺P193—212の3間は1.83 (6.040) —2.02 (6.667) —1.96m (6.469尺) のほか等間をなす。

掘り方は共に不整な円形をなし、径0.30～0.40m、深さ0.30～0.50mであり、P136のみは径0.54×0.70mで最大である。また、南北端では径0.20m前後で小さく、深さ0.11～0.18mと浅くなる。母屋柱穴には径0.18mの柱痕が認められ、覆土に炭化物粒を含むものが多い。またP119、127、142、192には炭化米が掘り方覆土上層に混入している。

### 6. Ci103-II柱列（第75、76図 第29表 図版21）

Ci103—I建物に重複して殆ど同一面に検出される。南北柱列のほかは明瞭でないが、Ci103—I建物と同様の建物にみられる。南北9.85m (30.528尺) 5間をなし、棟方向はN13.2°Wを計る。柱間P128—132—183—190—195の4間では1.90 (6.271) —2.25 (7.426) —2.33 (7.690) —2.16m (7.129尺)、南端のP194—195は0.60m (1.980尺) となって狭くなる。北端では同様の側柱穴が確認されていない。これに直交する東西の柱列にはP190—179—169、P195—210または(211)—217等があり、P190—169は2.23 (7.360) —1.88m (6.205尺) となり、P195—217では6.70m (22.112尺) である。

掘り方は径0.30m前後であり、深さは0.18～0.46mとやや不均衡である。柱痕が認められるのはP132、183で、共に0.18mの円形をなす。また、P128、132、183、190の掘り方覆土には焼土・炭化物粒に混入して炭化米が上層に含まれるほか、P183に灰釉皿の小破片が出土している。

Ci103—I建物とは切合関係にある柱穴を認めないが、検出状況によっては近接する時期の建物とみられ、Ci103—I建物に先行するものと解される。

### 7. Cj106建物（第75図 第29表 図版21）

III—2—1削平地南半の地山面及び整地層に検出される。南北4.86m (16.040尺) 2間、東西4.05m (13.366尺) 2間、または1間であるが、建物の一部分である可能性もあって明確ではない。桁行方向はN15.5°Wにある。柱間は西辺のP134—186—189は3.20 (10.561) —1.56m (5.149尺)、東辺のP145—162—167では3.51 (11.584) —1.25m (4.125尺) で東西に若干

の相違がある。

掘り方はP134、186、162が大きく、径0.30~0.45mを計り、他はやや小さい。検出面下の深さは東辺に浅いが、底面高は殆ど相違がない。柱痕はP186で径0.15mの円形をなす。また、暗褐色土の覆土にはP140に炭化物粒が認められる。

C103-I、II建物に重複しているが、前後関係は明確でない。掘り方の覆土等によっては同2建物に先行するものと解される。また、Db109-I焼土はP167によって一部を失なっている。

#### 8. Cj112柱列 (第75図 第29表 図版21)

III-2-5削平地より北辺にかけて地山面に確認される。南北7.90m (26.073尺) 5間であるが、西辺のみで明確でない。柱列方向はN 5.8°Eにある。P149-150-158-166-209-208の柱間は0.70 (2.310) -2.25 (7.426) -2.14 (7.063) -2.13 (7.030) -0.67m (2.211尺) で南北両端が狭く、3間はほぼ等間をなす。直交する梁行方向はP149-151、P150-152等があり、それぞれ1.17m (3.861尺)、2.15m (7.096尺) を計る。

掘り方は共に径0.30m前後の円形をなし、深さはP166で0.72mに及ぶほか、0.22~0.42mである。柱痕は径0.15mの円形をなし、覆土には炭化物の微粒が認められる。

重複するDa109柱列に比して検出面がやや高く、桁行方向が近似する点では同建物の建て替えとみられる。

#### 9. Da109柱列 (第75図 第29表 図版21)

III-2-5削平地方向に沿って地山面に検出され、一部は焼土の混入する草木灰を除去して確認される。しかし、西辺のみで全体は明らかでない。南北8.77m (28.944尺) 5間で、東西は1.98m (6.535尺) 1間以上とみられる。P159-168-210-207-247-245の柱間は1.27 (4.191) -2.06 (6.799) -2.01 (6.634) -2.38 (7.855) -1.05m (3.465尺) となり、N4.3°E方向にある。これに直交する柱列はP168-164のみである。

掘り方はP168、245の隅柱で径0.30~0.40m、そのほかは0.20m前後では△円形をなす。深さは0.20m前後で共に浅い。一様な褐色土で柱痕は確認できない。検出状況によれば焼失している可能性が考えられる。

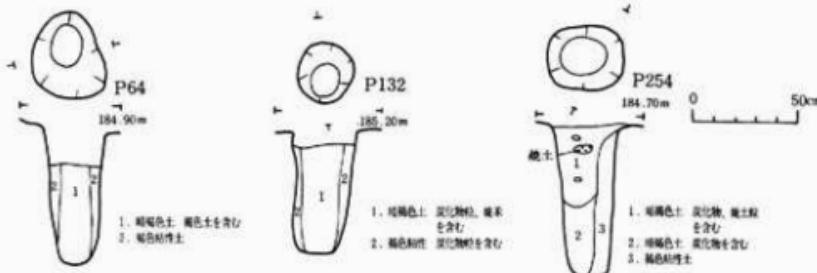
#### 10. Dd103柱列 (第75、76図 第29表 図版21)

III-2-1削平地南端よりIII-2-6削平地の地山面で検出され、南端P255~259は整地層及び通路北辺の疊を含む盛土を除去して確認される。南北10.07m (33.234尺) 5間である。東西は3.96m (13.069尺) 1間のみ確認され、他は明らかでない。柱列方向はN1.1°Wを計る。柱間P251-253-254-255-257-258-259は1.63 (5.380) -1.68 (5.545) -1.88 (6.205) -1.90 (6.271) -1.63 (5.380) -1.34m (4.455尺) となって南北に対称的な配置をなす。これに直交する東西にはP253-236、P254-243、P255-265、P257-263があり、共に3.00 (9.901)

～3.30m(10.891尺)となり、桁行2間のP251～254に相当している。また、北辺のP251～225では3.96m(13.069尺)となり、P254～257の2間に近い計数値を示す。

掘り方は径0.30～0.40mの円形をなし、P255が径0.41×0.45mでやや大きい。深さは南北端がやや浅いほかは0.34～0.47mで、柱痕は径0.18mの円形である。覆土には共通して炭化物・焼土粒が混入し、P234、253には掘り方上層に炭化米が認められる。

北辺でDa109建物に重複しているが、検出状況によってこれに先行する建物とみられる。



第76図 III-2 削平地柱穴断面図

### 11. その他の柱列（第72図）

III-2-1～2削平地にかけて、Ce106、Cg109の南北2柱列がある。Ce106柱列はP51～28-43-71-88で南1間を除いて2.55(8.416)～2.65m(8.726尺)の等間となり、Cg109柱列P51-60-102では2.20(7.261)～2.35m(7.756尺)で等間となる。P51-102は掘り方が大きく深いが、黒褐色土の覆土で柱痕は明らかでない。

III-2-5削平地にはDa109溝に沿って南北するDb109柱列、P173-205-249があり、柱間は4.46m(14.719尺)2間のみである。これに平行してP218-221-231があるが底面高が低く、同一建物と見做し難い。

その他III-2-3、4削平地の柱列P270-271-272-274…及びP273-275-276のCf115、Cg118柱列があり、共に削平地方向に平行する建物の一部とみられるものの特定できる配列は確認できない。

第29表 III-2、3削平地柱穴計測表

No.	大きさ	深さ	検出面高	低面高	備考	No.	大きさ	深さ	検出面高	低面高	備考
1	25×35cm	9cm	185.12m	185.03m		11	15×19cm	8cm	184.41m	184.32m	
2	36×34	40	185.11	184.71		12	24×25	10	184.32	184.22	
3	45×54	19	185.03	184.84		13	20×25	14	184.30	184.16	
4	43×41	43	185.08	184.65	c.r.	14	21×29	16	184.32	184.16	
5	21×30	33	184.92	184.59		15	30×25	16	184.41	184.25	
6	25×13	5	184.65	184.60		16	17×19	6	184.46	184.40	
7	18×12	8	184.60	184.52		17	32×31	42	184.56	184.14	
8	33×25	9	184.72	184.46		18	35×31	12	183.94	183.82	
9	32×25	7	184.72	184.65		19	30×30	28	184.13	183.85	
10	12×11	4	184.54	184.50		20	25×31	13	184.29	184.16	

1	30×33	14	184.29	184.15		81	24×31	10	184.99	184.89	
2	29×30	10	184.45	184.35	e.	82	40×40	53	184.99	184.46	染付 a.
3	34×26	42	184.62	184.20		83	36×35	52	184.97	184.45	r.
4	21×25	23	184.53	184.30	e.	84	21×30	20?	184.97	184.77?	
5	32×28	42	184.61	184.19		85	30×37	6	184.99	184.93	r.
6	38×39	41	184.56	184.15		86	36×32	32	184.93	184.61	
7	40×36	35	184.67	184.32		87	27×26	22	184.92	184.70	c.
8	34×30	33	184.82	184.49		88	16×25	35	184.92	184.57	
9	26×30	36	184.87	184.51		89	31×30	15	184.67	184.52	c.
10	92×73	12	184.93	184.81	木板による搅乱	90	32×32	41	184.90	184.49	r.
11	18×19	13	184.94	184.81		91	31×26	37	184.79	184.42	r.
12	33×30	30	185.01	184.71		92	35×40	38	184.88	184.50	c. r.
13	46×43	53	184.98	184.45	染付 c. r.	93	38×36	39	184.87	184.48	c. r.
14	28×25	70	185.02	184.32		94	33×32	40	184.79	184.39	
15	49×39	29	184.81	184.52	e.	95	40×31	5	184.73	184.68	
16	23×22	25	184.92	184.67		96	43×50	45	184.71	184.26	
17	29×25	16	184.93	184.77		97	30×24	34	184.71	184.37	
18	30×23	26	184.92	184.66		98	20×27	24	184.70	184.46	
19	30×52	11	184.96	184.85	木板?	99	42×34	34	184.60	184.26	染付
20	52×40	30	184.96	184.61		100	34×25	25	184.68	184.43?	木板?
21	35×38	36	184.93	184.57	染付 3 b. c. r.	101	35×33	36	184.54	184.18	c.
22	34×26	26	184.92	184.66		102	48×46	48	184.62	184.14	c.
23	36×32	29	184.82	184.53		103	33×47	22?	184.56	184.34?	
24	24×25	24	184.74	184.50		104	27×28	13	184.01	183.88	
25	53×35	37	184.72	184.35	染付 2	105	24×24	32	184.03	183.71	
26	25×30	28	184.69	184.41		106	37×31	15?	184.64	184.49?	
27	30×31	37	184.69	184.32		107	30×45	88	184.64	183.76	木板による搅乱
28	26×30	36	184.65	184.29		108	63×65	17	184.63	184.46	
29	36×35	47	184.64	184.17		109	25×25	12?	184.62	184.50?	
30	23×25	45	184.61	184.16		110	29×25	20	184.29	184.09	
31	40×40	54	184.61	184.07		111	41×41	20	184.29	184.09	
32	32×37	33	184.36	184.03		112	25×24	21	184.67	184.46	
33	19×20	15	184.63	184.48		113	38×30	57	184.57	184.00	
34	24×25	3	184.32	184.29		114	28×32	16	184.76	184.60	
35	29×30	33	183.90	183.57		115	20×25	24	184.63	184.39	
36	63×38	17	184.01	183.84		116	26×25	22	184.73	184.51	
37	39×37	15	184.54	184.39		117	25×24	26	184.85	184.59	
38	22×23	13	184.56	184.43		118	24×25	37	184.85	184.48	
39	44×47	26	184.54	184.26	木板?	119	39×32	56	184.87	184.31	r.
40	47×52	63	184.65	184.02		120	31×27	46	184.87	184.41	水素通寶
41	29×33	15	184.37	184.22	西脇して木板あり	121	37×41	41	184.94	184.53	
42	28×27	9	184.59	184.50	木板?	122	36×34	32	184.99	184.67	
43	29×28	31	184.66	184.35		123	40×30	58	184.99	184.41	
44	34×40	58	184.66	184.08	(18) 染付 e.	124	31×39	43	184.96	184.53	(12) r.
45	39×33	58	184.75	184.17	c. r.	125	41×36	17	184.97	184.80	
46	30×35	36	184.75	184.39		126	22×22	11	184.97	184.86	
47	27×25	20	184.75	184.55		127	41×43	43	184.99	184.56	r.
48	24×20	42	184.75	184.33		128	19×20	25	184.98	184.73	r.
49	57×39	28	184.75	184.47		129	25×26	18	184.98	184.80	
50	31×33	12	184.87	184.75	CM61壁上より新 h.c.	130	27×25	13	184.96	184.83	
51	34×25	29	184.87	184.58	木板? b. c.	131	33×94	20	184.96	184.76	木板?
52	37×30	43	184.82	184.39	CM61壁上より新	132	25×30	59	185.11	184.52	(18) b. c. r.
53	24×21	28	184.89	184.61	"	133	29×30	35	184.97	184.62	c.
54	20×22	20	184.91	184.71	(15) c.	134	45×48	67	184.93	184.26	
55	31×35	50	184.94	184.44	(12) c. r.	135	21×17	12	184.94	184.82	
56	23×24	27	184.94	184.67		136	54×68	32	184.86	184.52	床輪胸器 r.
57	33×42	56	185.10	184.54		137	19×15	10?	184.96	184.86?	
58	47×39	46	184.99	184.53		138	18×17	11?	184.95	184.83?	CJ106壁上より新しい
59	20×23	5	184.92	184.87		139	35×31	22	184.93	184.71	
60	18×15	3	184.99	184.96		140	39×40	29	184.91	184.62	c.

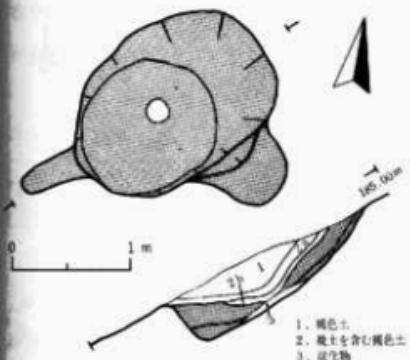
141	22×23	36	184.87	184.51		201	29×28	19	184.86	184.67	Dal09より新しい
142	36×35	46	184.87	184.41	c. r.	202	31×16	28	184.79	184.51	
143	30×25	37	184.83	184.46		203	18×17	10	184.79	184.69	
144	30×32	40	184.75	184.35		204	25×33	27	184.55	184.28	
145	26×24	30	184.77	184.47		205	25×25	6	184.55	184.49	
146	26×25	18	184.77	184.59		206	21×15	37	184.85	184.48	c.
147	24×24	44	184.71	184.27		207	24×25	32	184.73	184.41	
148	26×28	47	184.71	184.24		208	19×24	25	184.69	184.44	c.
149	21×20	25	184.57	184.32		209	27×31	31	184.55	184.24	
150	35×30	42	184.54	184.12	c.	210	22×24	25	184.53	184.28	
151	26×27	6	184.26	184.20		211	26×26	10	184.49	184.39	
152	30×32	7	184.26	184.19		212	22×15	8	184.73	184.67?	
153	27×25	20	183.79	183.59		213	31×29	81	184.67	183.86	r.
154	9×14	18	184.75	184.57	=	214	35×28	19	184.53	184.34	
155	13×20	20	184.75	184.55	染付	215	36×20	25	184.68	184.43	灰鶴2 c. r.
156	36×36	67	184.74	184.07		216	30×28	4	184.32	184.28	
157	16×17	16	184.55	184.39		217	29×27	78	184.74	183.96	
158	32×31	47	184.52	184.15		218	27×32	34	184.21	183.87	
159	21×25	25	184.56	184.31		219	24×22	6	184.68	184.62	
160	41×25	14	184.59	184.45	砾石	220	23×25	31	183.90	183.59	
161	20×21	29	184.57	184.28		221	36×32	43	184.11	183.68	
162	40×32	26	184.51	184.25		222	31×25	18	183.85	183.67	
163	29×33	30?	184.74	184.44?		223	22×20	16	184.64	184.48	
164	28×30	19	184.71	184.52		224	33×32	20	184.65	184.45	c.
165	30×28	18?	184.74	184.58?		225	20×28	19	184.28	184.09	
166	35×30	72	184.79	184.07	c.	226	25×20	22	184.53	184.31	r.
167	29×24	27	184.52	184.25	Dal06-1底±1%レバ	227	32×30	12	184.73	184.61	b. c.
168	34×39	38	184.57	184.19		228	19×21	16	184.61	184.45	
169	22×15	31	184.57	184.26		229	36×34	35	184.26	183.91	
170	33×28	32	184.57	184.25		230	20×23	39	184.47	183.08	
171	34×26	22	184.57	184.35		231	32×30	19	183.87	183.68	
172	26×29	7	184.57	184.50		232	29×22	16	184.43	184.27	11号底より新しい
173	26×30	29	184.53	184.24		233	19×15	11	184.01	183.90	
174	39×25	20	184.85	184.65	Dal09底より新しい	234	29×30	39	184.40	184.01	
175	26×26	29	184.91	184.62		235	10×8	7	184.89	184.82	
176	30×33	33	184.83	184.50	Dal09底より新しい	236	30×28	31	184.40	184.09	上脚質十群b.
177	15×10	11	184.81	184.79		237	27×18	16	184.37	184.21	
178	36×20	40	184.95	184.55		238	20×18	24	184.25	184.01	11号底より新しい
179	32×34	30	184.92	184.62	c.	239	16×20	28	184.00	183.72	"
180	32×36	4	184.96	184.92		240	28×40	44	184.39	183.95	"
181	25×26	7	184.96	184.89		241	28×31	17	184.36	184.19	" b.
182	29×25	37	184.96	184.59		242	30×41	28	184.37	184.09	"
183	31×33	46	184.97	184.51	(18) 灰鶴 c. r.	243	24×20	28	184.37	184.09	"
184	25×21	30	184.98	184.68		244	29×28	23	184.41	184.25	
185	37×40	56	184.97	184.41	p. b. c. r.	245	25×27	29	184.51	184.22	
186	40×29	62	184.99	184.37	(15) s.	246	29×28	28	184.65	184.37	
187	29×35	36	184.98	184.62		247	40×38	22	184.65	184.43	P246より新しい
188	29×36	30	184.93	184.63	r.	248	36×34	57	184.69	184.12	
189	24×19	12	184.93	184.81		249	29×30	10	184.56	184.46	
190	29×30	37	184.97	184.60		250	34×21	15	184.69	184.54	
191	35×30	38	184.99	184.61		251	35×31	24	184.77	184.53	b. c.
192	35×32	46	184.96	184.50	r.	252	40×40	55	184.63	184.08	
193	25×25	18	184.95	184.77		253	32×30	44	184.69	184.25	b. r.
194	37×36	37	184.95	184.58		254	36×31	46	184.67	184.21	(18) b. c.
195	31×33	32	184.93	184.61		255	41×45	41	184.57	184.16	c. r.
196	23×25	31	184.93	184.62		256	36×38	40	184.67	184.27	11号底より新しい
197	15×12	6	184.93	184.87		257	34×29	34	184.43	184.09	b. c.
198	13×20	4	184.93	184.89		258	38×35	47	184.63	184.16	
199	20×26	12	184.88	184.76		259	29×26	34	184.57	184.23	
200	22×20	29	184.79	184.50		260	16×14	8	183.88	183.80	

261	28×25	48	184.17	183.69	b.c.	271	19×24	21	182.50	182.29	
262	20×21	16	184.19	184.03		272	35×38	35	182.50	182.15	b.c.
263	23×23	14	184.19	184.05		273	20×21	24	182.60	182.36	
264	29×32	27	184.33	184.06	天目 e.	274	26×31	42	182.74	182.32	
265	40×44	50	184.28	183.78	染付 c.	275	24×28	28	182.75	182.47	
266	24×26	18	183.41	183.23	P267より新しい	276	20×26	34	182.79	182.45	b.c.
267	24×23	42	183.82	183.40		277	27×30	20	181.73	181.53	
268	20×25	18	184.28	184.10		278	15×17	5	181.74	181.69	
269	26×28	12	183.84	183.72		279	16×19	7	181.72	181.65	
270	28×33	32	182.98	182.66		280	35×40	14	181.79	181.65	

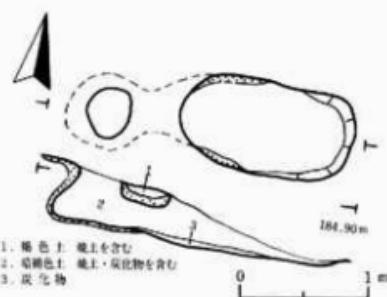
#### (4) 焼土遺構 (第77~80図 図版21)

##### 1. Ce106焼土遺構 (第77図 図版21)

III-2-2 削平地北端の整地層上面に検出される。平面は梢円形をなし、長径1.20m、深さ0.44mを計る。底部は殆ど平坦をなし、北東は緩やかに、南西では強く立ち上がる壁面に続く。底部に炭化物が広がり、焼土はその上層を摺鉢状に被っているが、中央部を径0.18mの穿状に欠いている。更に上部は整地層とみられる褐色土が堆積している。周辺では南西に接して焼土が広がり、南側の炭化物を含む焼土は0.5mに渡って形成されているが、煙道は明らかでない。



第77図 Ce106焼土遺構



第78図 Cg106焼土遺構

##### 2. Cg106焼土遺構 (第78図 図版21)

III-2-1 削平地北偏の地山削平地面に検出される竈状の遺構である。東西2.26mを計り、長軸方向はW4°Nである。焚口より燃焼部にかけては東西1.38m、南北1.23mの長円形をなし、燃焼部の深さは0.24mを計る。煙道は地山を厚さ0.12mを残して掘り貫き、煙出しは径0.35mの円形をなす。底部は平坦をなすが、煙道より煙出しにかけては僅かに高位となる。壁面は焚口にやや緩やかであるが、燃焼部では強く立ち上がり、全面に堅固な焼土を形成している。

覆土は焚口より燃焼部にかけて炭化物を多量に含む黒褐色土であり、上層は焼土・炭化物粒を含む暗褐色土である。上層には炭化米が混入しているが、他の遺物は一点も出土していない。遺物柱列に重複する位置に認められるものの関連する遺構については明らかでない。

### 3. Cf118焼土遺構（第79図）

III-2-3 斜平地東辺の地山面に認められる焼土とこれに続く炭化物を多量に伴う浅い掘り込みである。焼土は0.40mの円形をなして広がり、厚さ0.14mで縦りが強い。東接する斜面の土塙は東西1.05m、南北1.50mの楕円形をなし、壁面はやや緩やかである。底部は中央部より北側にかけてやや平坦となり、焼土面との比高は0.60mである。底部より草木灰とみられる灰層が厚く堆積し、部分的に明黄褐色土が混入して互層状をなす。

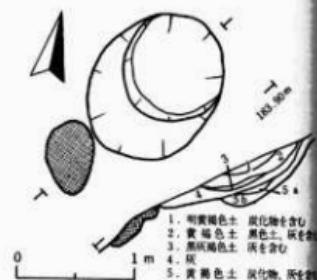
近接するP272の覆土上層には焼土・炭化物が多く傾斜して認められ、Cf118焼土遺構以前の柱穴と認められる。

### 4. Ch118焼土遺構（第80図）

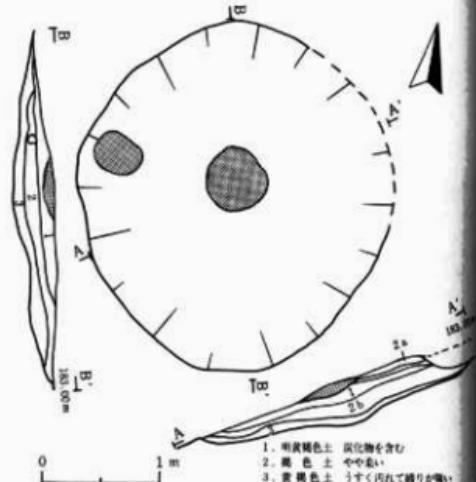
III-2-4 斜平地山面に検出される焼土及び焼土を中心とする舟底状の土塙である。焼土は径0.50～0.55mの円形をなして形成され、炭化物を含む明黄褐色土に0.18mの厚さで認められるほか、西に不整に散乱している。

土塙は径2.50～2.86mの円形をなして緩やかに掘り込まれ、中央部がやや深く焼土上面より0.29mを計る。床面は固くしまり、薄い汚れが目立つ。床面より木灰を含む褐色土が被い、その上層には炭化物を含む黄褐色土が共に踏み固められた状態で堆積する。

Cf118焼土遺構とやや形状を異にするが、共に同様の遺構とみられる。北東に認められる柱列との関連については明らかでない。



第79図 Cf118焼土遺構



第80図 Ch118焼土遺構

### 5. その他の焼土（第72図）

大小合せて12の焼土を検出する。その大部分は地山削平地面に形成される厚さ0.10m以下の焼土である。Ch106-I、Dc106焼土はその形状より竪状の遺構と推定され、Db109～Dc109の4焼土は炭化物や草木灰中に認められ、火災焼失に伴う形成も推測される。そのほか、建物に伴う焼土の含まれている可能性もあげられる。

第30表 III-2 削平地焼土

No	焼土名	東西	南北	厚さ	検出面	備考	No	焼土名	東西	南北	厚さ	検出面	備考
1	Ce109	80 × 96cm	6cm	184.65m			7	Db109-II	20 × 20cm	4cm	184.74m		
2	Ch106-I	45 × 98	8	184.90	P71.72より古い		8	Dc106	15 × 20	3	184.60		
3	Ch106-II	30 × 40	8	184.95			9	Dc109	43 × 72	5	184.73	草木灰を伴う	
4	Cj106	47 × 42	10	184.96			10	De106-I	60 × 15	5	184.50	#	
5	Da109	33 × 27	3	184.98			11	De106-II	32 × 28	4	184.45		
6	Db109-I	20 × 20	4	184.72	P67より古い		12	Dg109	28 × 22	5	183.50		

### (5) 遺物 (第81～83図 第31、121、122表 図版44～46)

陶磁器片がもっとも多く76点に及び、鉄製品、その他を含めて104点余りである。その分布は削平地北西辺の地山切土面に少なく、南東の盛土層に集中している。遺構では陶磁器、炭化米等であり、その大部分は柱穴の掘り方覆土に認められる。また、土塙及び旧表土には繩文土器が若干出土している。共に完形品は1点も含まれず、小破片で図示できるものは少ない。

第31表 3-2 削平地出土遺物

署位	青磁	白磁	染付	灰陶器	鉄陶器	その他	陶器	土質質土器	繩文土器	全量	鉄	古鉄	石製品	穀類
I-II	4	8	15	17	2	10				10	3	3		
III	2		3	1	1	2				1	2			米
遺構			7	4				4	(3)			1	1	米・豆
計	6	8	25	22	3	12	4	4		12	3	4	1	

#### 青磁

6点のうち碗3点、皿3点である。いずれも小片で全体は不明である。碗には青灰色及び暗緑釉の口縁部があるが、体部に蓮弁の細線を有するもの、二次加熱により胎土の変色するものが含まれる。皿は共に体部片で灰白色及び暗緑色を呈する。薄い緑色釉の体部片はくの字状をなし、内面に僅かな削り痕があって菊皿と思われる。胎土は密で灰白色である。

#### 白磁

すべて皿とみられる小破片である。舶載白磁6点には口縁部2点、底部1点がある。口縁部は緩やかに端反りしてやや薄く引き出される。1点のみ灰白色をなすが、他は均質な胎土で白色を呈する。他の2点は薄い施釉をなし、光沢の強い明白色の白磁釉である。近世後半以後の所産とみられる。

#### 染付 (第81図 図版44)

碗9点、皿9点が認められる。二次加熱をうけて変色するもの1点、意識的に打ち欠いている碗3点のほか、極めて光沢の強い碗の体部片が含まれている。

碗では図示できるもの 2 点である。(7)は切土、盛土方向に約 22m において接合する口縁部である。やや内彎する薄手の口縁で、口縁直下の内外に走る条線は弱い発色を呈する。推定口径 14.0cm、I 層出土。(8)は P 82 の掘り方底部に伏せた状態で埋設される碗である。薄く引き出された体部は内外に打痕を残して打ちかかれ、底部のほぼ 2 分の 1 を残している。底部は中央部にやや厚く削り出され、安定した高台を有し、砂粒の付着が多い。施釉は全面に及び、淡青色がかかった白色をなす。施文は見込みに二重圓文と十字花文、外面には唐草文を配し、高台脇より高台にかけて 3 条の細線が巡る。見込みではやや暗いが、外面では澄んだコバルトの発色である。また、底部内面には不規則な無数の擦痕が認められる。推定高台径 5.6cm。

(III) は口縁部 3 点、底部 3 点が含まれる。(3) は薄手の端反りする口縁部で、薄い青色の施文があるが全体は明らかでない。推定口径 13.0cm、削平地中央部の I 層出土。(6) は内彎して立ち上る口縁で口縁端にやや歪みがある。口縁端は褐色をなすが、他は僅かに青味がかった白磁に草花文と見られる暗い発色の施文を有する。胎土は緻密で白色をなし、伊万里系とみられる。推定口径 12.2cm。北東 II 層出土。

底部(38)は砂粒の付着する基底をなす。やや粗雑な削り痕が残り、高台を除いて施釉される。青味の強い白磁にやや明るい発色をなす。外面に 2 条の細線が巡り、内面は寿文とみられる。推定高台径 4.0cm。P 33 掘り方上層出土。(4) は低い削り出し高台で、砂粒が付着する。内面 2 条、外面に 1 条の細線が巡る。推定高台径 9.0cm。東辺 II 層出土。そのほか高台内に「太」の銘を有する小片がある。

#### 灰釉陶器 (第 81 図 図版 44)

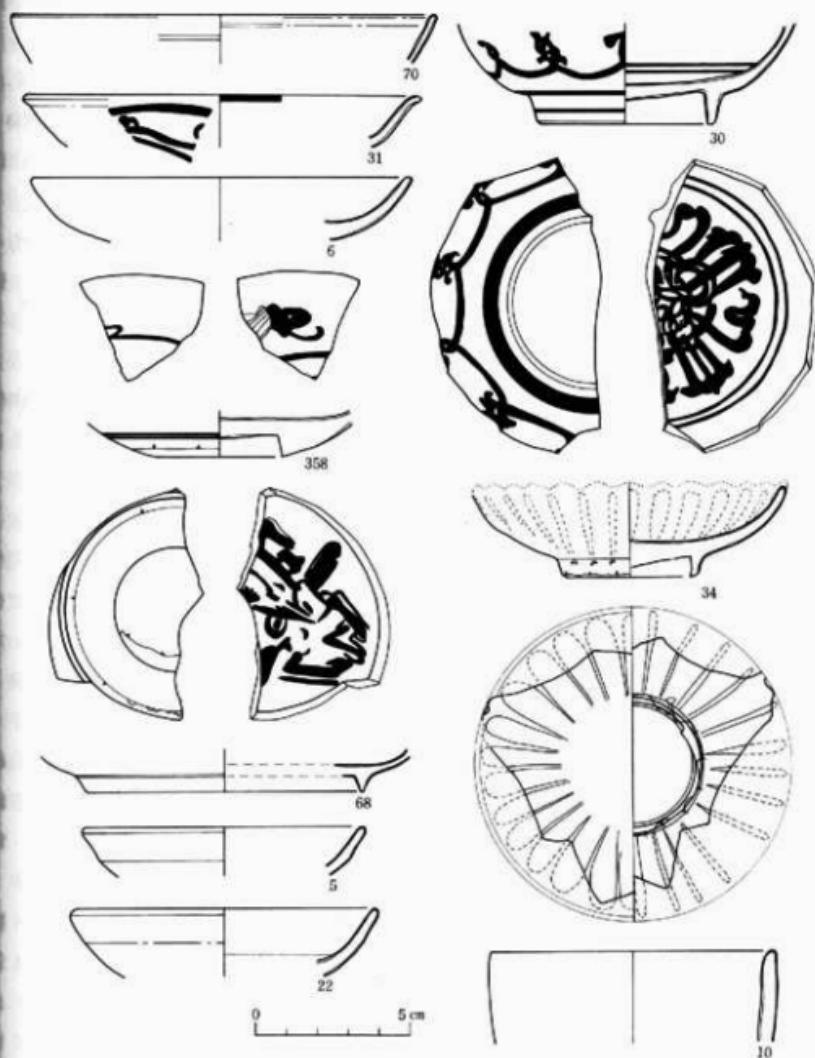
22 点の大部分は丸皿片とみられる。口縁部が端反り、または外反する 5 点、内彎気味に立ち上がる口縁部 8 点が認められる。底部は 3 点のうち 1 点が菊皿である。また、二次的な加熱によって変色するもの 4 点があり、既に釉薬が失なわれて灰白色化しているものが含まれる。

口縁部の内彎する丸皿は端反り皿に比してやや厚手のものが多く、(5)、(2) は体部外面に僅かな稜を有する。淡黄緑色釉は底部内面にやや厚く、貫入が著しい。胎土は共に淡褐色で吸水性に富む。推定口径はそれぞれ 9.2cm、10.0cm。(5) は削平地中央部 II 層、(2) は P 183 掘り方覆土出土である。

端反りする口縁部片には薄手の淡緑色釉の丸皿のほか、体部から口縁部にかけてやや強く外反する厚手の皿がある。口縁直下の内面には不規則な波状の沈線 2 条が平行して走るものである。後者の推定口径は 10.0cm、体部の器厚 0.6cm。削平地南東の II 層出土。

菊皿(4) は削平地中央部及び南東辺に体部片が出土し、これより東 27m をおいて III-8 削平地に出土する底部片に接合する。底部中央部がもっとも厚く、体部より口縁部にかけて薄くなる。高台は不均衡に削り出され、歪みもあってやや粗雑である。内外共に花弁は無雜作に削り取ら

れ、外面は高台に半截竹管状の工具痕を残す。高台内を除く施釉は淡黄緑色を呈し、高台脇に僅かに厚い。露胎は赤味のある明褐色をなし、胎土は淡褐色でやや密である。推定口径10.0cm、同高台径4.4cm、器高3.1cm。II～III層出土。



第81図 III-2 前平地出土遺物(I)

### 鉄軸陶器

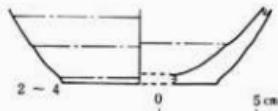
細片 3 点である。うち 2 点は碗の口縁部とみられ、柔い黒褐色を呈する。胎土は吸水性のある均質な淡褐色をなし、灰釉皿のそれに類似する。1 点は P264 挖り方覆土出土、他は削平地北端及び南東 I ~ II 層出土。

### その他の陶器（第81図）

碗の口縁部は南東盛土層および III - 3 削平地 I 層出土片に接合し、筒形に近い口縁である。内外一様の黄白色釉に微細な貫入が広がる。推定口径 9.2cm。そのほか、二次加熱をうける摺鉢の細片 1 点がある。極少の条痕は浅く 10 条まで認められる。西辺 I 層出土。

### 土師質土器（第82図 図版45）

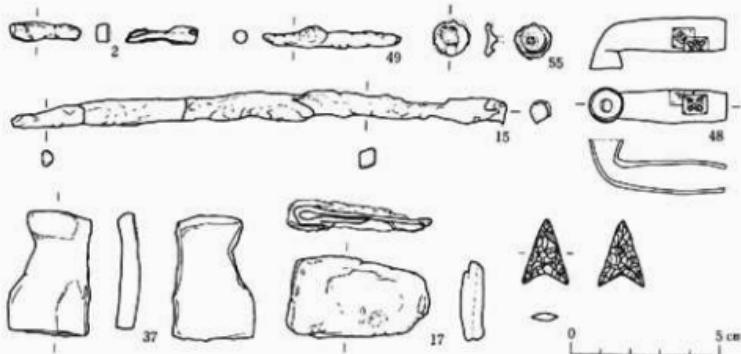
4 点共環形をなす小片で同一個体とみられる。底部より外傾して立ち上がり、次第に薄手となる。体部の器厚 1.3cm、底部では 0.5cm である。底部は糸切りとみられるが、摩耗して明らかでない。胎土は柔い細粒で明褐色を呈し、内面に僅かな煤の付着とみられる斑点を有する。P236 堀り方及び 14 号堀覆土上層に出土する。



第82図 III - 2 削平地出土遺物(3)

### 金属製品及び鉄滓（第83図 第121表 図版46）

鉄釘 1 点、鉛弾 2 点、銅製飾り針 1 点、煙管 1 点、その他用途不明の板棒状の鉄片が含まれる。鉄釘(2)は両端を折損して明確でない。現存長 2.4cm、断面は 0.5cm の方形に近い。(1)は現存長 13.6cm で中央を境に断面は一方が円形、他方は方形となり、火箸ともみられるが鏽化して明瞭でない。



第83図 III - 2 削平地出土遺物(2)

銅製品では飾り鉢(図)がある。径1.2cmの円形をなし、表面に径0.8cmの菊花をあしらった金箔が認められ、中央部に凹む。裏面の先尖部は二本となるが、共に根元で折損している。南東部Ⅲ層出土。煙管の雁首(図)は全長4.6cm、火皿の径1.15cmで保存がよく、羅字竹の一部が残る。表面に竹梅と見られる細工が刻まれる。同Ⅰ層出土。

そのほか火繩弾丸2点がある。Ⅰ層出土の青色化する1点は径1.5~1.20cmでやや歪みがあり、5.55gを計る。Ⅱ層の出土の鉛弾は白色化し、1.1cmの球形をなす。6.05gである。

鉄滓は101.8gを最大に6.9gの小滓まで4点である。盛土層出土の3点は鐵錆で褐色化する海綿状をなし、14号堀出土の1点は黒色で鉛状を呈する。

#### 古錢（第122表）

政和通寶、永樂通寶のほか不明錢1点である。共に遺存状態が悪く、細片、または一部を欠損している。P120覆土上層出土の永樂通寶1点のほかはⅢ-2-1削平地南Ⅱ層に出土する。

#### 石製品・石器（第83図）

砥石の破片1点であり、砥面は1面にのみ認められる。使用痕の細線が残り、断面は二次火薬によって赤色化している。淡緑色石質凝灰岩製で、P160掘り方覆土に出土する。その他石鎧1点があり長さ2.3cm、幅1.6cmを計る。

#### 炭類

Ⅲ-2-1削平地Ⅰ層に混入して少量の炭化米が認められるほか、同1~2削平地西辺の柱穴や焼土遺構の覆土に検出される。炭化穀は大部分種皮は認められないが、小豆を伴うP185掘り方覆土には、小塊状をなす焼穀が上層に混入している。炭化米1粒の大きさは長さ0.38~0.47cm、幅0.22~0.27cm、厚さ0.12~0.22cmであり、長幅比は1.62~1.91である。

#### 要約

Ⅱ-2削平地は13'前後の東斜面を切って形成され、6削平地の重複が認められるが、遺構の発出、分布状況によっては、更に削平地の重複が推定される。Ⅲ-2-1~2削平地にかかる推定される掘立柱建物には4棟が重複して平行方向を異にし、De6建物では同一2削平地より同一5削平地に及んでおり、削平地の造成、あるいは整地の重複が考えられるものである。

切土面によって確認される削平地は、共通して西方の切土、あるいは整地と平行する南東の盛土によって形成される。その規模はⅢ-2-1削平地の南北18mを最大にして9~6mと推定され、同一5削平地では4.5mを計る。それぞれ60、30、20、15尺となり、何らかの規則性を持つ削平地と解される。しかし、東西はⅢ-3削平地によって切土されるなど各削平地に対応する盛土を把握できないため推計するに至らないが、ほぼ長方形をなすとみられる。東西2'前後の勾配を有する殆ど平坦な削平地を形成している。

重複する6削平地はそれぞれ削平地方向を異にするものである。大別すればN2.8~4.5'Eの

III-2-5、6削平地、N4.0~4.8°Wの同一2、4削平地、N16.2~27.2°Wの西偏する同一1、3削平地となり、削平地相互の新旧関係を切土及び盛土の状況によってみるならば

III-2-2 ← III-2-1 ← III-2-5 ← III-2-3 ← III-2-4  
(N4.8°W) (N16.2°W) (N4.5°E) (N27.2°W) (N4.0°W)

となり、III-2-6削平地はその方向によって同一5削平地に近接する削平地とみられる。また、同一4削平地は同一2削平地と近似する方向にあって、共用または極めて短期間における移行も考えられる。削平地に伴う遺構は各々削平地に対応する遺構として特定できるに至らないが縄文時代の土塙を除く、大部分の遺構はいずれかの削平地、あるいは整地面に伴うものと解される。

掘立柱建物は南北方向のみで、東西方向は殆ど明確でない。柱列によって推定される建物は10棟で、削平地方向や規模によって、いずれも南北棟と推定される。

第32表 III-2削平地掘立柱建物柱列

No.	建物名	削平地	規格	南	北	南	北	柱間	方位
1	Ce103	1~2	5 × 3?間	7.80m(25.743尺)	2.28m(7.514尺)			1.02m(3.366尺)	N17.0°W
2	Cf106	"	4? × 2?	6.50 (21.482)	2.16 (7.118)				12.3°
3	Cg103	"	3? × 2?	4.60 (15.182)		1.53m(5.050尺)			18.5°
4	Cg106	"	5 × 2?	7.57 (24.983)	2.32 (7.657)			0.80 (2.640)	19.3°
5	Ci103-I	1	6 × 3?	10.22 (33.730)	2.27 (7.492)	1.67 (5.512)	0.94 (3.086)	11.2°	
6	Ci103-II	1	5? × 2?	9.85 (30.528)	2.16 (7.129)			0.60 (1.980)	13.2°
7	Cj106	1	2 × 2	4.86 (16.046)	3.20 (10.561)	1.56 (5.149)			15.5°
8	Cj112	1~5	5 × 1~	7.90 (26.073)	2.17 (7.173)			0.69 (2.261)	5.8°
9	Da109-I	5	5 × 1~	8.77 (28.944)	2.15 (7.096)			1.16 (3.828)	4.3°
10	Dd103	5	5 × 1~	10.07 (33.234)		1.68 (5.534)			1.1°

桁行方向は5~6間で南北間が狭く、庇の間とみれば母屋は3間とみられるものが多い。柱間は広い柱間で2.32(7.657)~2.15m(7.096尺)となり、狭い柱間では1.53(5.050)~1.68m(5.534尺)で、殆ど等間である。最小の柱間では0.60(1.980)~0.69m(2.261尺)より10.2(3.366)~1.16m(3.828尺)まで画一的な配置はみられない。しかし、庇を有する5~6間の建物の場合、1間を6.5尺とするならば、Ce103、Cg106、Cj112建物では4間、Da109建物では4.5間、Ci103-II建物では5間に相当している。Cg106建物の場合には3.84間となるが、庇の柱間を除く4間は6.5尺3間にあたり、ほぼ規則的な柱配置を見ることができる。即ち桁行方向では柱間を7尺、または7.5尺を1間とする柱配置を有するが、桁行全長では6.5尺をもってほぼ完数に近い計数値が得られ、規準柱間を推定せるものではある。

(2)、(3)、(7)、(10)建物を除く6棟では建物規模に相違があるが、ほぼ共通した柱配置をとつておらず、狭い柱間となる(10)建物は性格を異にするものと推定される。桁行方向では4.3~5.8°Eの2棟、N11.1°W1棟、N11.2~18.5°Wの7棟に大別される。建物相互の配置はIII-2-1~2、同1~6削平地において3~5棟の重複する状況にあり、いま桁行5~6間を有する建物についてのみ整理するならば次のようになる。

(A)

⑩ N1.1'W

(B)

(8) N5.8'E

(9) N4.3'E

(C)

(5) N11.2'W

(6) N13.2'W

(D)

(1) N17.0'W

(4) N19.3'W

III-2-6

(N2.8'W)

III-2-5

(N4.5'E)

( ? )

III-2-1

(N16.2'W)

その変遷過程は明確ではないが、(B)、(C)、(D)ではその建て替えによる建物とみられ、(A)～(D)は同時に存在する可能性は薄い。更にこれらの建物に付属するとみられる小規模建物では、(C)～(2)、(D)～(7)等が考えられる。また、削平地との関連をみると(B)、(D)では近似する方向にあってそれぞれIII-2-5、同一1削平地に伴う可能性が強い。(C)については同一方向のCg103溝が検出されており、対応する削平地が形成されているものと解され、(A)では削平地北辺よりIII-2-1削平地にかかる若干の相異があり、建物を配置する同様の削平地が推定される。

溝及び溝状遺構は大小11条に及ぶ。その多くは削平地に伴う溝とみられるが、全体を確認できるものは少ない。(3)、(4)の2溝は削平地形成に伴う溝であり、(1)(2)(6)(7)(8)⑩についても同様の溝とも解される。(5)のDe3溝については様相を異にしており、14号掘廃棄以後削平地造成の段階に開削されており、防備を兼ねる区画溝等が考えられ、建物施設や削平地の配置や使用に変化があるものとみられる。

第33表 III-2 削平地溝及び溝状遺構

番	溝名	削平地	長さ	幅	深さ	方位	番	溝名	削平地	長さ	幅	深さ	方位
1	Cf103	1-2	7.60m	0.60m	5cm	N 6.5'W	7	Df103	6	2.10m	0.35m	10cm	N 10.8'W
2	Cg103	"	8.00	0.30	10	N 11.4'W	8	Df109-I	南東	3.20	0.23	3	N 7.5'W
3	Ch115	4	7.36	0.35	15	N 4.0'W	9	Df109-II	"	1.75	0.30	4	N 33.6'W
4	Da109	5	9.40	0.42	25	N 4.5'W	10	Um112	"	2.95	0.30	12	N 6.3'W
5	De3	1-6	16.78	1.15	34	E 24.2'N	11	Dg112	"	3.70	0.30	60	N 16.6'W
6	Df100	6	2.80	0.30	10	N 22.7'W							

焼土及び焼土遺構は合せて16である。竈状をなす遺構のほか火災焼失に伴って形成されるものが含まれると推定される。竈状をなす遺構では遺物を伴わず、その用途は明確ではない。煙道を有する遺構は長軸方向をIII-2-2削平地における外土方向に直交してとり、やや北に位置することより、建物に伴う屋内施設の可能性が考えられる。炭化米の出土によれば煮炊用の竈の可能性もあげられる。

出土遺物は南東の盛土層に集中し、その大部分は削平地造成に伴って移動するものと解され、具体的に遺構との関連を把握できるものは少ない。遺物の約70%は陶磁器であり、舶載の青磁、白磁、染付、国内産では灰釉陶器がもっとも多く若干の鉄釉陶器、染付が含まれる。明代の舶載品である染付は全体の40%、次いで灰釉が35%を占め、青・白磁は少ない。いずれも碗・皿類と認められ、天目茶碗を含めてその比率は3:7である。

陶磁器をはじめとする遺物は殆ど小破片であり、二次的な加熱をうけて変化するものが含まれ、火災焼失による影響が考えられる。小塊状の焼米の出土もこれを証左するものではある。また、炭化米の出土は少量ながらIII-2-1～2及び6削平地に検出されるが、盛土層に認め

られていない点では大規模な削平地造成以後に位置付けられ、短期における所産とその後の整地に伴う散乱とみられる。更に北西の土塁出土する炭化米と同一視するならば掘り込みを有する建物は既に埋没しており、現状削平地に近い段階における散乱と考えられる。

### 3. III-3 削平地

III-2 削平地に東接する下段削平地であり、現状では東西15m、南北30mに及ぶ。北・東二辺は切土斜面及び3号堀に続き、南を通路に限られる。南西隅の通路沿いにはIII-2 削平地南東端に接して高さ0.20~0.35mの土壘状の盛土が認められ、小礫が散乱している。

調査区域は削平地の南西部で、東西1.5m、南北19mである。検出遺構は重複する4削平地に伴うとみられる溝2条と柱穴若干である。また、遺物は灰釉皿の小片2点である。

#### (1) 削平地の形成と溝遺構 (第72図 図版21)

III-3 削平地南西隅はIII-2 削平地南東盛土斜面の裾部分にあって盛土に被われ、南に位置する削平地は土壘状の盛土を除去して地山面に検出される。切土面は南北に延びて重複し、溝によって推定される2削平地を含む4削平地が形成される。

北端のIII-2-1削平地は6.30mに渡って切土され、西辺に僅かに溝状をなす。III-2 削平地切土面との比高は0.70~1.00mである。切土方向はN0.6°Wで同一2、3削平地よりやゝ東偏する。

III-3-2、3削平地は西辺の南北溝を伴って重複する。III-3-2削平地のDf115溝は南北7.50mで、南端で東に湾曲する。溝幅0.40m、深さ0.10m前後をなして東へ若干傾斜している。Df115溝によって切られるDh115溝は同様に南北より東へ湾曲し、確認される長さは1.15m、溝幅0.30~0.40m、深さは0.10m前後で東に低い。南北方向はそれぞれN6.3°W、N8.0°Wを計り、近似している。

III-3-4削平地はDh115溝南端に1.45mの切り込み面を認めるのみである。北は同一3削平地によって失なわれて全体は明らかでないが、削平地面は同一2~4削平地中もっとも高く、南端では通路に重複している。また、上部の盛土は削平地に広がる薄層の黒褐色土を被って小礫を多く伴う暗褐色土である。III-2削平地南西部の通路北辺における土壘状の盛土と同様であり、共に、III-3-3、4削平地を除くいずれかの削平地造成に伴う盛土と解され、遺存状況によってはもっとも新しい時期の削平地に対応するものとみられる。

#### (2) 柱穴 (第72図 図版21)

P274、277の柱穴はほぼ円形の掘り方を有し、径0.30m前後である。掘立柱建物西辺の一部と推定されるが明らかではない。P277-280は2.28m(7.525尺)を計り、切土面に平行してN0.7°W方向となる。

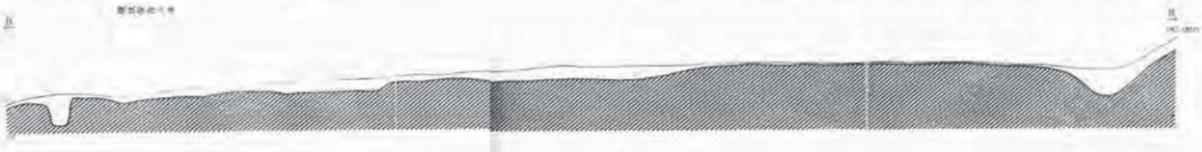
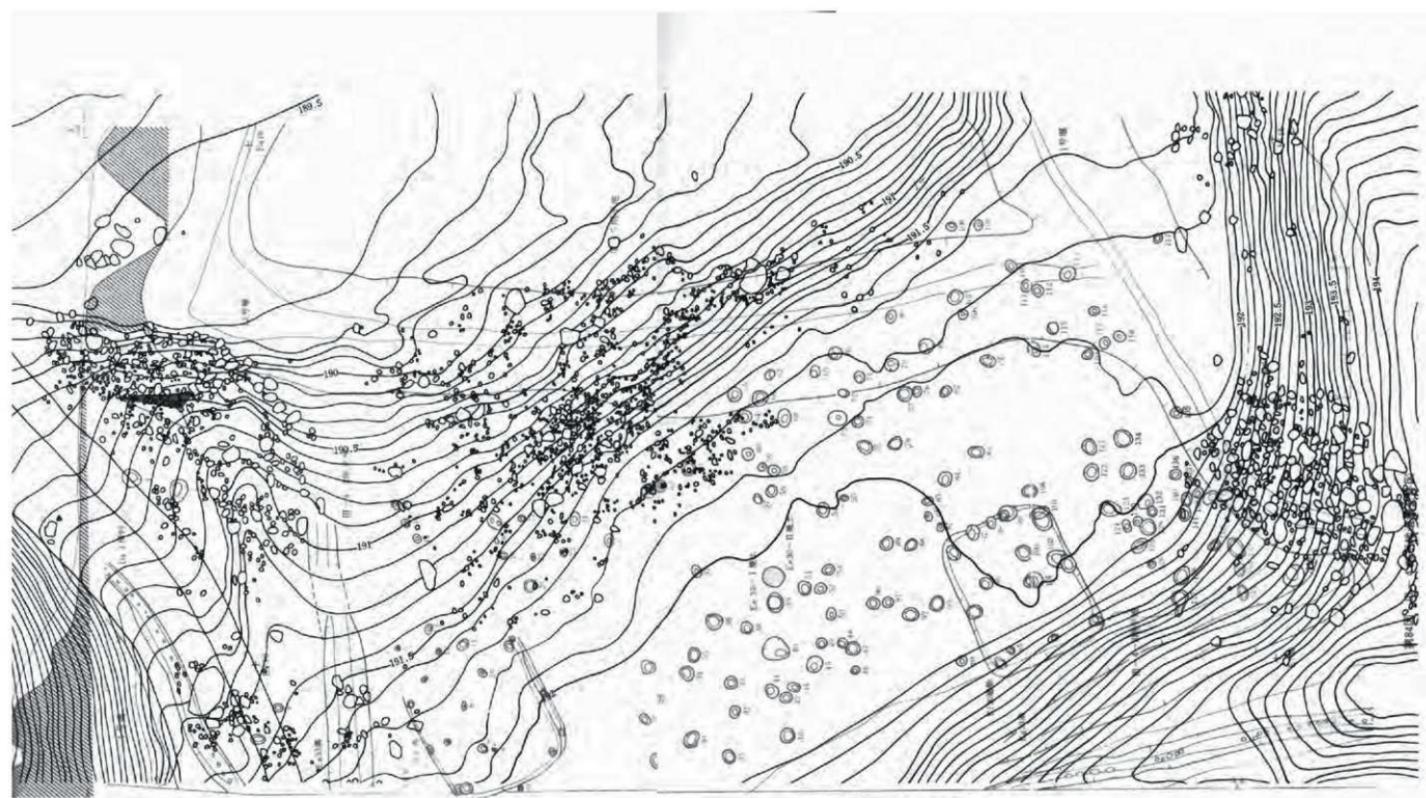
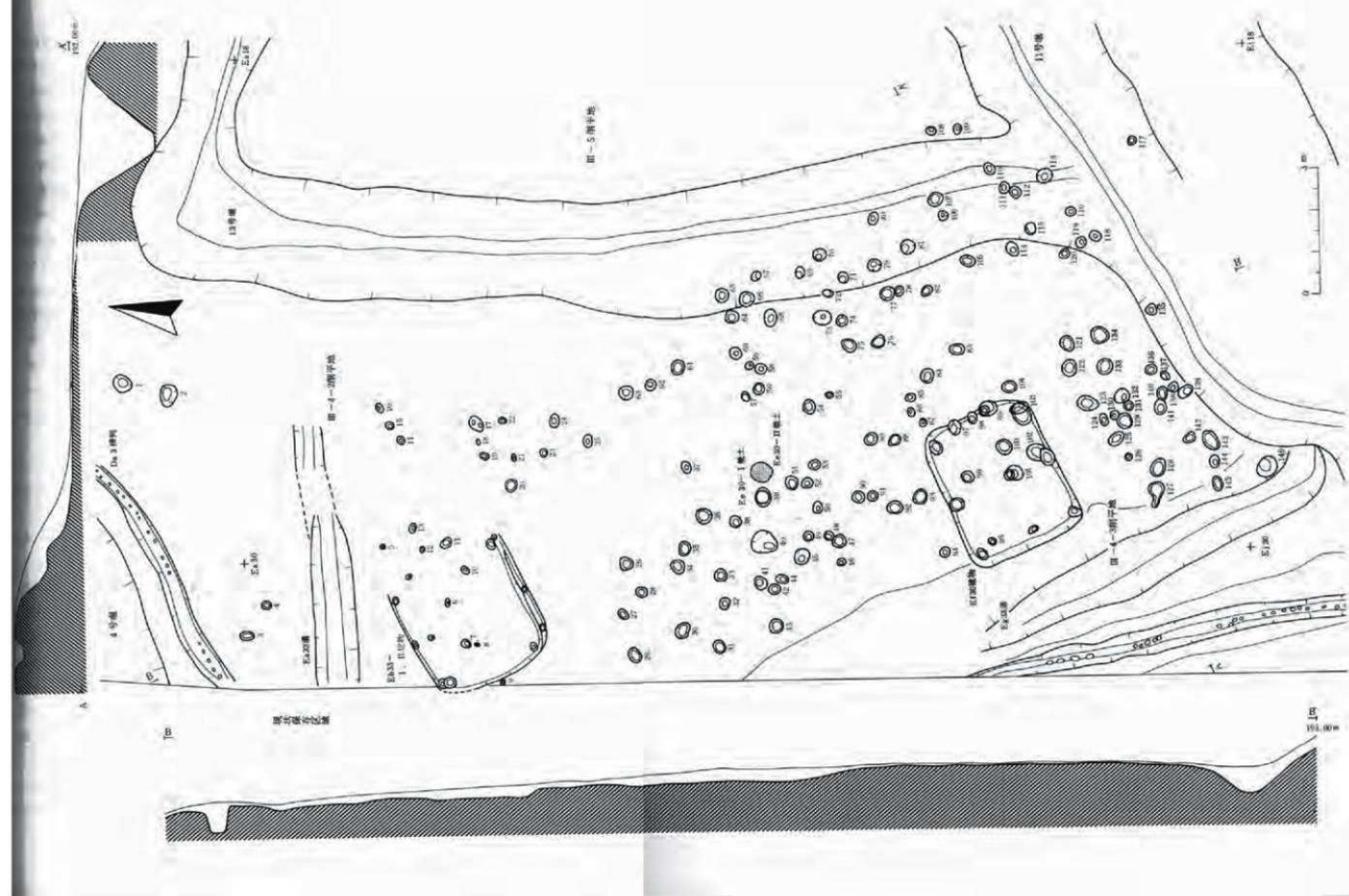


圖344 三-4 斜平窯總全體圖



#### 4. III-4 削平地

郭最上段にあたり東西9m、南北24mのほぼ長方形をなす削平地である。北西辺はIの郭IIの郭東辺の4、5号堀に面され、北辺では通路が東西に通じている。また、南・西辺は土塁及びIII-9削平地北斜面を切って2m前後低位となり、東辺はやや緩やかな斜面をなして1.7m下段のIII-5削平地に続く。削平地面は殆ど平坦をなすが、僅かに東へ傾斜し、北東辺には大小礫が散乱している。

当初の調査区域は5号堀に沿う土塁の延長を含む削平地全域であるが、北西は調査途上で現状保存区域となり、一部を表土除去段階で埋め戻し、更に盛土を行っている。

遺構は現状で確認される小削平地のほか、重複する3削平地が認められ、削平地には柱穴群、割込みを有する建物3棟、焼土遺構2、溝1条が検出される。更に南東には削平地に重複する11、13号堀が走行しているが、IIIの郭内の墨塗に既述している。

遺物は陶磁器、鉄製品等71点余りに及び、その大部分は盛土層に出土するものである。

##### II) 削平地の形成 (第84図 図版22、23)

削平地の旧地形は切土によって殆ど明らかでないが、西辺の削り出し土塁にその一部が残存する。III-10削平地に続く南西に高く、北東に低位となる。現状における比高は南西にそれぞれ1.3m、1.80mを計り、北半の旧表土を結ぶ南北勾配は9.0°以上と推計される。削平地の造成は主として南西の地山切土と共に北東方向への盛土によって形成され、切土斜面の勾配は30.0°～34.5°をなす。盛土は中央部より北東へかけて層厚0.40m前後となり、南東辺では13号堀を埋設して同一面を形成しているが、削平地に対応する盛土層は明瞭でない。

##### 1. III-4-1 削平地 (第84図 図版22、23)

南西斜面に続く東西9m、南北21mの長方形をなす現状削平地であり、南北方向はN42°Wである。北西は削り出し土塁が失なわれて平坦をなす現状保存区域となる。通路に沿う北辺ではやや高位となる盛土をなし、東辺の斜面と同様に大小礫が散乱する。南西の切土に伴う盛土とみなされるが、旧削平地の盛土層と識別できない。削平地面はほぼ東西に1.2～2.0°勾配をなす。

##### 2. III-4-2 削平地 (第84図 図版22、23)

削平地北東にあたり、東西に走るEa33溝を切る切土面によって認められる削平地である。北辺は通路に重複する柵列に沿って東へ湾曲し、南端では東に続くIII-5削平地切土斜面に達する。切土方向はN36°Wを計り、南北9mである。東西は3mまで確認されるが、旧表土を被う東側の盛土は薄く、以後の造成と重複し、13号堀西法面となって不明である。

##### 3. III-4-3、4 削平地 (第84図 図版22、23)

III-4-3削平地は南西の土塁東斜面に認められる南北の切土面及びこれに沿う東西0.30mの切土面によって推定される高位の削平地である。

切土面は南北9mに及び、南端で僅かに東へ湾曲する。III-4-1削平地との比高は南西隅で1.6mに達し、殆ど以後の削平をうけて明らかでない。重複する11号堀上層では西辺に続いて炭化物を含む黒褐色が溝状をなして認められ、11号堀埋没以後の削平地である。更にこれを切土斜面がほぼ平行して南北に続き、III-4-4削平地が推定されるが、削平地面は同一削平地に重複して明瞭でない。切土方向は共にN36°~37°Wである。

そのほか遺構の重複によっては前後する削平地の形成が推定される。

#### (2) 溝遺構 (第84図 図版22、23)

削平地北偏の東西に走るEa33溝である。地山削平面及び旧表土を切って検出される。西端は現状保存区域に続き、東進してIII-4-2削平地によって途絶えるが、再び旧表土に認められる。僅かに北へ湾曲し、東端はIII-5削平地切土面によって失なわれる。長さは6.20m、もともと遺存のよい西端においては上幅1.0m、底部幅0.45m、深さ0.21mを計る。断面は緩やかなU字状をなす。底部における東西の比高は0.75mで、地山面に沿って東へ傾斜し、東西の勾配は17.0'を計る。同一勾配の東延長線上にはIII-5削平地におけるEa21溝が認められ、同一側の可能性が強い。覆土は底部に薄い黄褐色砂質土が堆積し、上層は拳大以下の礫の多い褐色土で、炭化物・焼土粒を含む。流水による堆積層上に埋め戻されているとみられるが、その性質は明らかでない。遺物は上層より灰釉皿片1点(?)が出土するのみである。確認される削平地のいずれよりも古い溝と見做されるが、関連する遺構は明らかでない。

#### (3) 柱穴群及び建物遺構 (第84~87図 第34~36表 図版22、23、32、33)

地山削平地面のほか、旧表土及び盛土層で検出される柱穴は大小146に及び、削平地南半部に多く、北東部に少ない。大部分は削平地の形成に伴なって旧状を留める柱穴は少ないとみられる。柱穴の掘り方はほぼ円形をなし、径0.20~0.40m、深さ0.30m前後の柱穴がもっとも多い。柱痕は若干の柱穴に認められ、径0.12~0.15mの円形をなす。しかし、掘立柱建物を持てきる配置はみいだせず、南北方向の6柱列のみであり、他は掘り込みのある建物である。

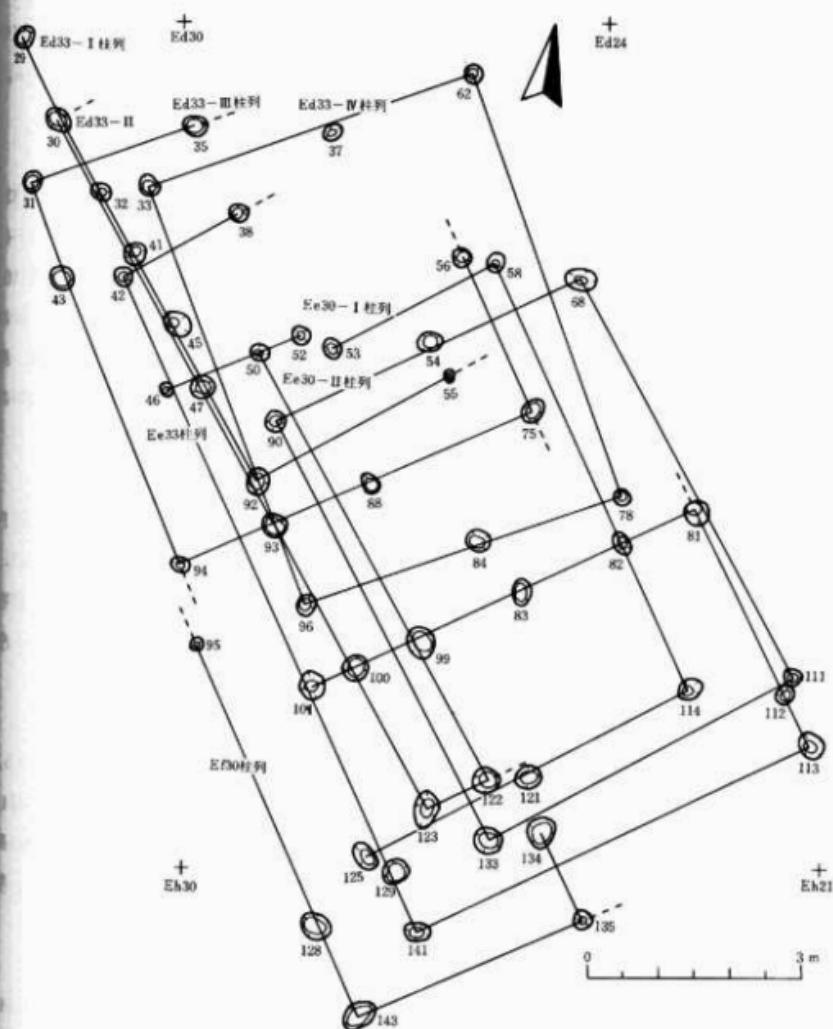
##### 1. Ed33-I柱列 (第84、85図 第34表 図版23)

現状削平地中央部の西辺にあって南北7.15m (23.597尺) 3間まで認められる。P29-32-45-92の柱間は2.48 (8.185) - 2.12 (6.997) - 2.53m (8.350尺) を計り、N38.6°W方向にある。東西にはP92-55-67の2間6.45m (21.287尺) があるが、明確ではない。P29-92の掘り方は径0.40mの梢円形をなし、P32を除いて深さ0.45~0.51mとほぼ一定している。柱痕は一様の暗褐色土で確認されていない。

##### 2. Ed33-II柱列 (第84、85図 第34表 図版23)

削平地中央部より南にかかる同一I柱列に重複する南北柱列である。西辺は11.09m (36.60尺) 5間であり、P30-41-47-93-100-123の柱間は2.18 (7.195) - 2.14 (7.063) - 2.20 (7.

261—2.32 (7.657)—2.22m (7.327尺) となる。柱間方向は N38.8°W となり、同一 I 柱列に近似する。これに平行して P47—123 の 3 間に 0.92 (3.036) ~ 1.01m (3.333 尺) をおいて P50—99—122 2 間が東に並列している。直交する東西には P50—60、南辺の P122—P108 があり、それぞれ 4.16m (13.729 尺)、6.55m (21.617 尺) を計る。また、延長線上には北東の P25、南端の P136 があるが、比高が大きく、同一建物に伴うかは疑しい。



第85図 III-4 前平地建物柱列

掘り方は径0.30～0.40m前後の円形をなし、深さ0.40～0.65mを有して安定している。柱痕は径0.12～0.15mの円形をなす。掘り方の覆土は地山の明褐色土を含む暗褐色土で小礫を伴い、炭化物粒・炭化米が微量混在している。

#### 3. Ed33—I柱列（第84、85図 第34表 図版23）

削平地中央部に認められる東西5.44m (17.954尺) 2間、南北5.83m (19.241尺) 2間である。P31—94の南延長線上にはP126—142があり、P31—142は12.26m (40.462尺) となるが、比高がやゝ大きくならかでない。東辺はP56—75…118が平行している。南北方向はN34.6'Wを計る。掘り方は径0.30m前後の円形であり、P94でやや浅いほかは深さ0.38～0.47mである。覆土に若干の炭化物を含むものがある。

#### 4. Ee33柱列（第85図 第34表 図版23）

南西の地山面より盛土層にかけて検出される。東西5.94m (19.604尺) 4間、南北10.18m (33.597尺) 2間であるが、やゝ不揃いである。西辺のP42—46—101—129—141は1.73 (5.710)—4.70 (15.512)—2.88 (9.505)—0.90m (2.970尺) で、直交する東西にはP101—83—81の3.22 (10.627)—2.71m (8.944尺)、南辺P141—113の6.14m (20.264尺)、北辺のP42—38、P46—52の1.85m (6.106尺) 等があるが、対応する東辺の柱列は明らかなでない。掘り方は径0.30前後、深さ0.50mを計り、浅いものがあって一定していない。柱痕はP81、83に認められ、径0.12mの円形をなす。掘り方覆土は暗褐色土で、炭化米を含むのがみられる。

#### 5. Ee30—I柱列（第85図 第34表 図版23）

削平地南の東西柱列 P125—121—114の5.10m (16.832尺) 2間を南辺とし、東辺P58—82—114の6.61m (21.815尺) 2間の柱列である。南辺は2.55m (8.416尺) の等間をなし、東辺では4.33 (14.290)—2.30m (7.591尺) を計る。南北の柱間方向はN34.2'Wである。建物南東隅にあるとみられるが他は不明である。掘り方は径0.30m前後のほぼ円形で南辺にやゝ深い。暗褐色の覆土であり、P53、58に炭化物・炭化米が微量混入している。

#### 6. Ef30柱列（第85図 第34表 図版23）

南西に認められる東西3.44m (11.353尺) 1間、南北5.75m (18.977尺) 2間の柱列である。建物南西隅とみられるが、これに続く柱穴は明らかなでない。南北の柱間P95—128—143は4.36 (14.389)—1.42m (4.686尺) となって南に狭い。掘り方はP95を除いて径0.40m前後の長円形をなし、柱穴中ではもっと大きい。P128、143に認められる柱痕は径0.12mの円形で、覆土下層に炭化物粒・炭化米が検出される。

#### 7. その他の柱列（第85図 第34表）

削平地中央部に重複する2柱列がある。東西4.74m (15.643尺) 2間、南北6.63m (21.881尺) 1間の(7)Ee30-II柱列と東西4.88m (16.089尺)、南北6.40m (21.122尺) 各2間の(8)Ed33

-IV柱列である。前者は東西P90-54-68とこれに平行するP133-111であり、他は東西P33-37-62と南に平行するP96-84-78である。柱配置に若干の広狭があるが、極めて類似する柱列である。

第34表 III-4 削平地柱穴計測表

No.	大きさ	深さ	検出面高	底面高	備考	No.	大きさ	深さ	検出面高	底面高	備考
1	44×42cm	5cm	190.24m	190.19m	木根?	51	32×31cm	57cm	192.01m	191.44m	青緑染付
2	53×43	12	190.42	190.30	木根?	52	25×30	10	192.01	191.91	
3	24×35	16	191.18	191.02		53	25×28	35	192.03	191.68	r.c.
4	20×26	26	191.07	190.81		54	34×29	44	192.02	191.58	r.
5	30×26	29	191.28	190.99		55	18×16	20	192.01	191.81	r.
6	18×10	7	191.45	191.38	木根?	56	29×27	46	191.92	191.46	r.
7	23×24	31	191.50	191.19	木根?	57	22×22	12	191.92	191.80	
8	10×14	5	191.50	191.45	木根?	58	26×29	79	191.85	191.06	r.c.
9	15×13	23	191.81	191.58		59	20×21	9	191.14	191.05	
10	17×19	9	191.42	191.33	木根?	60	32×36	65	191.85	191.20	
11	25×27	11	191.33	191.22		61	34×31	30	191.92	191.62	
12	12×10	15	191.42	191.27		62	26×28	24	191.94	191.70	
13	23×18	24	191.27	191.03		63	36×36	28	191.99	191.71	
14	21×20	25	190.94	190.69		64	29×33	15	191.78	191.63	c.r.
15	19×20	20	190.86	190.66		65	32×30	38	191.71	191.33	c.r.
16	21×18	22	190.73	190.51		66	38×37	35	191.73	191.38	r.
17	36×34	5	191.16	191.11	木根?	67	25×25	37	191.71	191.34	r.
18	16×10	8	191.15	191.07		68	44×32	36	192.26	191.90	
19	16×23	20	191.21	191.01		69	27×21	36	191.81	191.45	c.r.
20	30×28	8	191.39	191.31		70	26×32	40	191.79	191.39	(12) 鋼金具r.
21	18×12	10	191.33	191.23		71	26×24	49	191.92	191.43	r.
22	15×19	14	191.17	191.03		72	18×24	41	191.88	191.47	r.
23	20×18	15	191.30	191.15		73	37×45	65	191.90	191.25	(12) r.
24	33×25	60	191.36	190.76		74	30×28	47	191.91	191.44	(15) r.
25	30×22	59	191.50	190.91		75	33×35	38	192.19	191.81	
26	33×32	51	191.04	190.53	r.	76	30×36	62	192.11	191.49	r.
27	25×26	24	192.00	191.76		77	34×35	39	191.90	191.51	
28	27×32	63	192.43	191.80	r.	78	24×25	16	191.70	191.54	木根?
29	34×32	45	192.24	191.79		79	31×33	26	191.69	191.43	r.
30	38×35	54	192.35	191.81		80	30×26	37	191.49	191.12	
31	38×29	38	191.90	191.52	r.	81	37×36	52	192.02	191.50	(12) r.
32	28×28	9	192.62	191.93	r.	82	28×28	54	191.96	191.42	(12) c.
33	29×31	37	192.05	191.68		83	28×38	56	192.05	191.49	(12) r.
34	34×36	57	192.01	191.44		84	32×28	12	192.05	191.93	灰輪
35	32×28	16	191.96	191.80		85	22×27	22	192.03	191.81	
36	37×42	64	192.01	191.37		86	22×18	21	191.56	191.35	
37	28×24	34	191.89	191.55		87	22×17	25	191.57	191.32	
38	28×26	26	192.08	191.82	染付	88	28×36	47	191.67	191.20	
39	28×28	25	191.90	191.65	E30-I 墓土上引新	89	32×32	53	192.06	191.53	鋼板片
40	54×64	31	192.02	191.71	染付 r.	90	31×28	45	192.03	191.58	
41	31×33	63	192.01	191.38	r.	91	25×25	48	192.03	191.55	(15)
42	28×29	10	192.02	191.92		92	42×34	50	192.14	191.64	
43	32×33	50	192.08	191.58		93	38×35	40	192.04	191.64	(12) c.
44	20×31	10	192.02	191.92		94	26×25	18	191.71	191.53	
45	38×36	51	191.64	191.13	r.	95	19×21	27	191.80	191.53	
46	29×23	50	191.56	191.06		96	28×28	18	191.95	191.78	r.
47	34×38	58	192.06	191.48	(15)r.	97	35×29	20	191.99	191.79	r.
48	23×24	71	191.67	190.96		98	29×22	61	192.21	191.60	r.
49	25×23	66	191.62	190.96	染付	99	36×44	48	191.99	191.51	r.
50	29×24	24	191.62	191.38		100	41×34	46	191.95	191.49	(16)

101	38×40	18	191.87	191.69	木板?	124	28×21	10	191.64	191.54	(15)
102	41×43	17	191.80	191.63	r.	125	32×38	24	192.25	192.01	
103	28×41	40	191.96	191.56		126	20×18	27	192.24	191.97	
104	29×35	3	191.96	191.93	染付	127	61×39	24	192.32	192.08	
105	28×37	39	191.92	191.53	(12)r.	128	41×36	35	192.31	191.96	(12)s.
106	23×24	3	191.80	191.77		129	39×37	24	192.26	192.02	c.r.
107	37×36	21	191.70	191.49		130	23×22	40	191.64	191.24	
108	21×27	29	191.52	191.23		131	22×22	29	192.11	191.82	
109	27×19	39	191.48	191.09		132	36×38	17	192.10	191.93	
110	27×26	17	191.80	191.63		133	39×35	41	191.95	191.54	
111	29×26	56	191.70	191.14	c.r. 青磁	134	41×44	54	191.92	191.38	(12)r.
112	30×27	45	191.70	191.25		135	29×27	8	191.89	191.81	
113	35×38	17	191.83	191.66		136	24×26	9	192.10	192.01	
114	31×28	25	191.87	191.62	(12)灰無磁石	137	23×22	10	192.11	192.01	
115	34×27	46	191.86	191.40		138	26×28	5	192.11	192.06	b.c.r.
116	21×26	32	191.84	191.52	c.r.	139	31×35	60	192.15	191.55	
117	21×19	7	191.20	191.13		140	36×26	24	192.22	191.98	
118	27×28	52	191.78	191.26		141	39×31	22	192.15	191.93	
119	27×28	47	191.80	191.33		142	26×31	27	192.30	192.03	
120	26×31	60	192.04	191.44	r.	143	43×40	44	192.33	191.89	(12)c.r.
121	38×31	12	192.03	191.91		144	30×24	51	192.33	191.82	
122	48×49	15	191.93	191.78		145	33×24	68	192.50	191.82	
123	37×53	55	191.97	191.42		146	46×49	12	192.68	192.56	染付

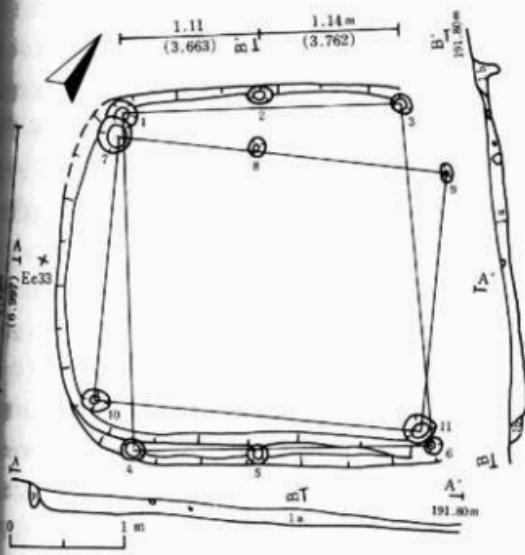
#### 8. Eb33—I建物 (第86図 第35表 図版32)

削平地北西の地山面に検出される竪穴をなす建物である。北西隅は現状保存区域に続き、掘り込みの東壁が失なわれているが、ほゞ3mの方形をなすとみられる。壁の立ち上がりがやや強く、上部の削平をうけて壁高は南辺の0.11mが最大である。床面の大部分をEb33-II建物のそれによって失なわれている。四隅及び南北辺中央の壁際には合せて6柱穴が認められる。柱穴は径0.20m以下の円形をなし、床面下の深さは0.16~0.31mと不均等である。柱間は東西方向の北辺P1-2-3は1.11(3.663)-1.14m(3.762尺)、南辺P4-5-6では1.03(3.400)-1.42m(4.686尺)とやや広狭がある。南北のP1-4、P3-6はそれぞれ2.67m(8.812尺)、2.76m(9.109尺)となり、N39.0°W方向にある。

#### 9. Eb33-II建物 (第86図 第35表 図版32)

Eb33—I建物の覆土を切る同様の建物である。東壁を失っているが、東西3m、南北2.70mで長方形をなす。壁はやや緩やかでもっとも遺存のよい西辺で壁高0.17mを計る。床面は平坦をなし、踏み固められたように堅く締まる。南東よりに僅かな凹地をなし、薄い灰の広がりに火熱をうけて赤色化する小礫が検出されるが、焼土の形成は認められていない。柱穴は四隅のほか、北辺中央の壁際には穿たれ、南辺では明らかでない。掘り方は径0.20m前後の円形をなし、床面下の深さは0.30m前後である。柱間は東西の北辺で1.14(3.762)-1.55m(5.116尺)、南辺で2.65m(8.746尺)を計り、南北は2.10(6.931)~2.12m(6.997尺)である。柱間方向はN37.2°Wである。

遺物は床面の凹地に二次加熱をうける青磁の体部細片一点があり、上層の一様な暗褐色土には一点も含まれていない。

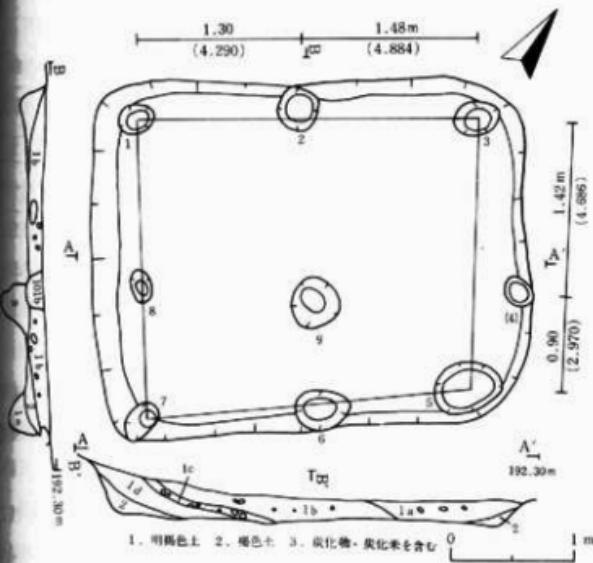


第86図 Eb33-I、II建物構造

1. 明褐色土 2. 棕色土 3. 成化物・炭化物を含む  
b. 砂質砂を含む

第35表 Eb33-I、II建物柱穴計測表

No.	A-A'	B-B'	C-C'	D-D'	E-E'	F-F'	G-G'	H-H'	I-I'
1	22×20cm	28cm	28cm	28cm	191.26m	191.26m	191.26m	191.26m	191.26m
2	20×14	21	191.55m						
3	15×15	20	191.48						
4	18×17	16	191.28						
5	15×15	21	191.53						
6	15×15	20	191.52						
7	27×28	33	191.51						
8	12×14	17	191.48						
9	10×13	19	191.38						
10	22×15	34	191.34						
11	21×21	22	191.51						



第87図 E130建物構造

第36表 E130建物柱穴計測表

No.	A-A'	B-B'	C-C'	D-D'	E-E'	F-F'	G-G'	H-H'	I-I'
1	22×20cm	24cm	191.89m	191.56m	(12)				
2	32×36	38	191.89	191.42					
3	32×26	40	191.87	191.47					
(4)					P-991.4.2.0-494				
5	55×52	49	191.85	191.36	P-1033-1-34				
6	42×31	36	191.80	191.44	(0.15)				
7	14×27	29	191.83	191.52					
8	22×22	39	191.83	191.44					
9	37×41	32	191.74	191.32	床板木合算L				

## 10. Ef30建物（第87図 第36表 図版33）

削平地南西の切土斜面の裾にあたり、地山面を切って東西3.60m、南北3.0mの長方形をなして掘り込まれる。壁高は西辺で0.40mを計る。柱穴は四隅と中央に認められるが後者は木根による擾乱の可能性が強い。柱穴の掘り方は径、深さ共に一定していない。柱痕は径0.12~0.15mを計る。柱配置はほぼ対称をなし、東西2間は2.78m (9.175尺)、2.65m (8.756尺) でそれぞれ2分される。南北2間は東辺では0.90 (2.970)~1.43m (4.719尺)、西辺で1.35 (4.455)~1.05m (3.465) の2.40m (7.921尺) となり、北にやや広い柱間をとる。

掘り込みの覆土は壁際に暗褐色土の流入が認められるほかは、いずれも西方より地山に類似する明褐色土が堆積する。遺物はP9に微量の炭化米が含まれるほか一点も出土していない。

### (4) 焼土遺構（第84図 図版23）

削平地中央部に東西近接して共に旧表土上に検出される焼土である。Ee30-I焼土は径0.48×0.38mの東西にやや長い円形をなす。大部分はP39によって失なわれ、環状に散見される。これに東接するEe30-II焼土は径0.50mの円形をなし、中央部にやや厚く縮まりが強い。炭化物を伴なわず、掘り込みの形跡は認められない。建物に伴う可能性もあるが明確でない。

### (5) 遺物（第88、89図 第37、122表 図版44~46）

削平地及び11、12号堀覆土上層に出土する遺物を含めて71点余りである。主に陶磁器片であり、染付・灰釉陶器が多い。大部分削平地中央部より南東辺に分布し、特に空堀上層にあたりII層の盛土層に密である。小破片が多く、完形品は殆ど含まれていない。

第37表 III-4 削平地出土遺物

( ) は空堀覆土中の遺物

層位	青磁	白磁	染付	灰釉陶器	鐵輪陶器	墳窓器	圓文土器	金屬製品	古銭	石製品	數量
I	2	2	3	3	1			2	1		米
II	2			5	13		1	1	3	9	1
III	(1)	(1)	3					2 (1)	(1)		米・重
遺構	3		4	3				2		1	米
計	8	3	15	19	1	1	1	10	11	2	

遺構出土の遺物は10点余りである。Eb33-II建物床面の青磁片1点のほかは、柱穴覆土中に含まれる青磁、染付、灰釉陶器片、炭化米等である。

### 青磁（第88図）

8点のうち碗5点、皿1点である。碗3点は同一個体の細片で暗緑色をなし、外面は口縁以下より簡略化される蓮弁の線刻を有する。内面には横方向の擦痕が認められる。胎土は赤褐色をなし、III-5 削平地出土の青磁碗と同一個体とみられる。I~II層出土。

5は高台を失う碗の底部片である。中央部にもっとも厚く、高台には削り出し成形痕を残す凹みがあって粗雑である。内外面共に灰緑色をなし、灰色の胎土には間隙が多い。底部の最大器厚1.8cm、推定高台径5.3cm。削平地中央部のII層出土である。共に舶載品である。

#### 白磁（第88図 図版44）

皿2点が含まれる。(74)は口縁部の外反する薄手の皿である。内外の白色釉は二次加熱によって光沢が弱く、口縁端は淡褐色を呈する。推定口径9.6cm、I層出土。他の1点はやや厚手で内青気味に立ち上がる口縁を有し、外面に僅かな稜を残す。色調は柔い白色をなし、胎土は(74)に比してやや緻密である。III-5削平地中央部出土片と同一個体とみられる。III層出土。

#### 染付（第88図 図版44）

15点のうち碗3点、皿5点が認められる。碗は体部片で図示できるものはない。外面に草花文が描かれ、淡青な発色をなす2点は光沢が強く、胎土は堅密な白色を呈する。3点共伊万里系とみられる。P146覆土及び南西II層出土。

皿5点中(141)、(145)は端反りする口縁部で、内面に帶状文、口縁直下の外面に細線を巡らし、(16)は二次加熱によって不鮮明であるが、更に唐草文が描かれる。口径はそれぞれ、12.0cm、13.6cmを計る。中央部のII-I層出土。

底部の3点(142)、(143)、(148)は共に薄い削り出し高台で、(143)には白砂の付着が残る。施釉は高台端を除いてやや青味がかる白色を呈する。内外に圓文が廻り、(143)では高台内に二重圓文を有する。胎土は緻密で白色をなす。推定高台径7.0~9.0cm。削平地中央部のP40、51覆土、(148)は南西部II層出土。共に舶載品である。

#### 灰釉陶器（第88図 図版45）

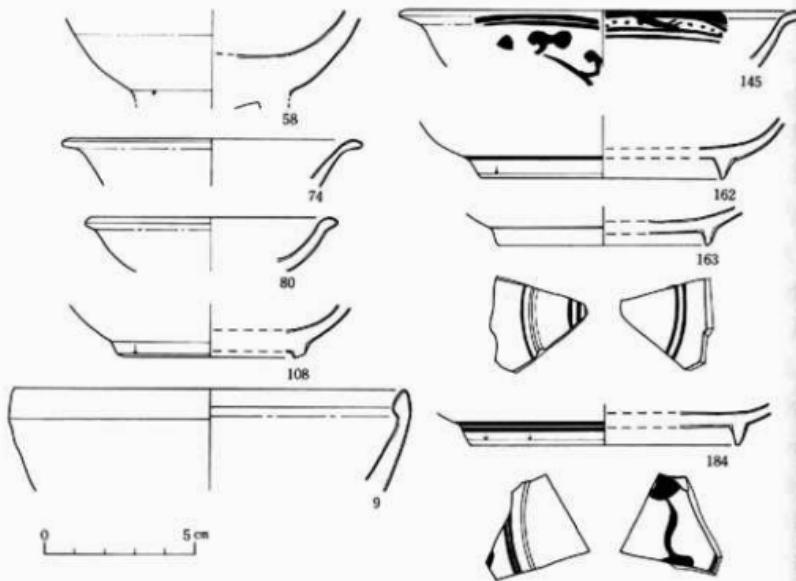
耳壺1点、皿15点、不明体部3点である。二次加熱をうけるもの6点があり、4点は殆ど釉薬がとんで白色化し、III-5削平地出土片と同一個体とみられるものである。耳壺の小片は厚手で外面に無難作に押圧した耳の貼付がみられる。内外黄緑色の施釉で胎土は堅密で灰白色をなし、吸水性が弱い。器厚1.2cm、外径は18.0cm前後と推計される。

皿は口縁部9点、体部1点、底部6点であり、細片が多い。口縁部には端反りするものとやや内彎して体部に僅かな稜を有するものがあり、共に強弱がある。側は端反りする小径の丸皿である。内外共にやや薄い黄緑色を呈し、内面の口縁直下より見込みにかけて赤色の付着物が斑点状に認められる。推定口径8.4cm、削平地南東の盛土III層出土。

底部は器厚に厚薄があり、削り出し高台も一定していない。黄緑色釉には微細な貫入が不規則に走り、(81)、(108)は共に高台脇に薬溜がある。(108)は二次加熱によって白色化している。胎土は白色をなし、吸水性が強い。推定高台径はそれぞれ5.8cm、6.2cmである。側は削平地北東II層、(108)は南東I層出土。

#### 鐵釉陶器（第88図）

天目茶碗(9)の口縁部1点である。体部より僅かに薄く引き出され、内彎して内面にくびれを有する。内外黒色をなすが、二次加熱によって光沢を失ない、滑らかさがない。胎土は固く黒



第88図 III-4 削平地出土遺物(I)

色化している。推定口径13.0cm、南西部I層出土。

#### 須恵器、縄文土器

須恵器1点は体部片であるが、全体は明らかでない。外面に縦方向に叩き目がかすかに残り、内外にロクロ成形痕が走る。灰白色をなし、胎土、焼成共に良好である。そのほか摩耗した器片1点がある。

#### 金属製品（第89図 図版46）

鉄製品8点、銅製品2点である。鉄製品では鉄錐1点、鉄弾1点、鉄釘2点、鉄蓋1点が認められる。

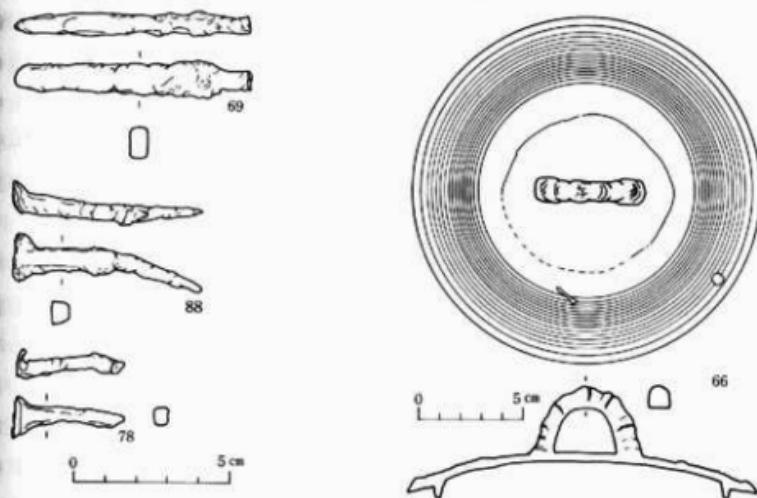
鉄錐は基部を折損し、現存長7.8cm、幅1.0cm、厚さ0.6cmを計り、断面長方形をなす。先端部は薄くやや丸い。中央部の北側盛土層出土。弾丸は径1.50×1.35cmで不整な球形をなし、64.4gを計る。錆化が進み、表面は剥落している。削平地南西斜面III層出土。

鉄釘77、88の2点は共に皆折形で、断面長方形をなす。完形の78は中央部でやや湾曲し、長さ6.2cmを計る。錆化が進行し、断面は台形をなす。77は中央部I層、88は南東部の盛土III層出土。

湯釜の蓋79は外径16.6cm、内径14.0cm、高さ5.4cmを計る。表面には中央部を除いて15条の横線で規則的な同心円を描いて外縁まで廻り、裏面はやや滑らかである。器厚は中央部でもっと

も薄く0.4cm、水平をなす身受部分は0.6cmであるが、外縁にやや歪みがある。把手は竹を模してくびれを有し、外径5.4cm、内径3.0cm、高さ3.2cmである。北辺I層出土。

銅製品2点は共に二次加熱をうける小片である。1点は長さ1.9cm、幅3.0cm、厚さ0.1mの屈曲する薄板状をなし、III-5削平地出土の金具(四)と同一個体とみられる。他は溶融して塊状をなし、明らかでない。それぞれP89、70掘り方覆土に出土する。



第89図 III-4削平地出土遺物(2)

#### 古錢 (第122表)

祥符通寶1点、元豐通寶1点、永樂通寶2点、洪武通寶1点、寛永通寶6点の計11点である。永樂通寶1点が半欠し、洪武通寶は薄く二次加熱をうけて損傷している。寛永通寶には鉄錢3枚が銹化密着して出土している。元豐通寶を除いてI～II層に含まれるが、渡来銭は削平地南西より東へかかる盛土層に検出されるのに対し、寛永通寶は中央部以北に限られる。

石製品  
2点のうち1点は石質凝灰岩の細片で、硯側とみられるが明らかでない。他は砾石の破片で2枚面が認められ、1面には二次的に使用された縦方向の細線が走る。現存の長さ9.1cm、幅2.9cm、厚さ2.1cmを計る。

#### 穀類

炭化米は削平地中央部以南のI～II層に広く分布するほか、南西辺に大麦が微量認められる。炭化米は幹米が多く、焼膨れするもの、芯を残すものが散見される。一粒の大きさは長さ0.50cm、幅0.30cm、厚さ0.20cmを最大として大小混在し、分布による変化は認められない。大麦は芒を失なっているが、種皮を有するものも認められる。大きさは長さ0.65cm、幅0.32cm、厚さ

0.26cmを最大として極めて不規則であり、炭化して破損するものが多い。

### 要約

削平地における旧地形は南西辺の土壠及びIII-9削平地に続く北東斜面をなしているとみられ、削平地はこれを切って形成される。確認される削平地は西辺をN37°~42°W方向に切土し、低位となる北東二方へ盛土をなし、11、13号堀を没して東西2'前後の勾配となる平坦面を形成している。西辺の切土面によって4削平地の重複が認められるが、盛土層にあっては削平地層が明瞭でない。現状削平地によっては東西6m、南北21m以下の長方形をなす削平地を形成するものとみられる。その移行については土壠東法面を切る高位のIII-4-3削平地がもっとも早く、これを切る同一4削平地、続いて同一2削平地を経て最終削平地となる。4、2削平地の関係については併設も考えられるほか、この間柱列等によっては更に前後する削平地も推定される。

重複する11、13号堀については推定されるIII-4-3削平地は11号堀覆土を切って形成されている点では埋没以後の削平地とみなされるが、13号堀覆土下層には遺物を伴い、中・上位層は西方に続く人為的な堆積層をなし、13号堀開削段階における削平地の形成が推定されるものである。

削平地の遺構は柱穴及び掘り込みを有する建物であり、削平地を画する溝遺構は認められていない。柱穴は全城に及んでいる。特に中央部以南に多く、数回に及ぶ掘立柱建物の重複が考えられる。建物を特定できるものは確認できないが、柱列によってみるとならばいずれも削平地方向に沿う南北棟とみられ、桁行5間を最大として南面、または西面に庇を有する建物が含まれる。柱間は2.12~2.32mの7尺間及び2.37~2.55mの8尺間を有する(1)、(3)、(4)、(6)~(8)の5柱列があり、(2)柱列では桁行、梁行共に7尺間となり、若干の相違が認められる。また、底間とみられる狭い柱間では0.90mの3尺間が(5)柱列にみられる。

第38表 III-4削平地建物柱列計測表

No.	柱列名	魔 機	單 行	軒 行	单 行	軒 行	柱 間	方 向			
1	Ed33-I	2' × 3'	6.45(22.287)	7.15(23.597)	3.22(10.627)	2.51(8.267)	2.12(6.997)	N38.6°W			
2	Ed33-II	2' × 5'	5.07(16.733)	11.09(36.691)	4.16(13.724)	0.97(3.185)	2.21(7.300)	N38.6°W			
3	Ed33-III	2' × 2'	5.44(17.954)	5.83(19.241)	2.91(9.604)	2.51(8.284)	4.39(14.489)	2.37(7.822)	1.44(4.752)	N34.6°W	
4	Ee33	2' × 1'	4.88(16.069)	6.46(21.122)	2.69(8.878)	2.10(6.931)			N30.0°W		
5	Ee33	2' × 4'	5.94(19.604)	10.18(33.597)	3.22(10.627)	2.71(8.944)	4.70(15.812)	2.88(9.595)	1.73(5.710)	0.90(3.070)	N34.6°W
6	Ee30-I	2' × 2'	5.10(18.832)	6.01(21.815)	2.56(8.416)		4.33(14.290)	2.30(7.591)		N34.2°W	
7	Ee30-II	2' × 1'	4.74(15.643)	6.63(21.881)	2.43(8.020)	2.30(7.261)			N30.0°W		
8	Ef30	1' × 2'	3.44(11.753)	5.75(18.977)	3.44(11.353)		4.36(14.289)	1.42(4.686)		N34.6°W	

掘り込みを有する3棟の建物は上部の削平をうけ、Ef30建物では南北柱列に重複している。共に3m前後の矩形、または方形をなし、壁際に6~8柱穴を有する。柱間は東西8尺、または9尺、南北は7、8、9尺と相違がみられ、建物方向を異にしている。Ed33-II→Ed33-I建物の新旧関係となるが、Ef30建物との関係は明らかでない。柱列との関連については北2柱

が柱列に重複せず、(1)、(2)、(4)、(7)柱列と近似する方向にある点では共存の可能性もあげられる。また、Ef30建物は覆土を切る(2)、(4)、(5)、(8)の4柱列に先行し、棟方向からは(3)、(6)柱列に類似し、掘立柱建物に付属する施設とも解される。

遺物は柱穴の掘り方覆土に散見されるほかは盛土層、特に南東の11、13号堀上層に集中している。供膳用陶磁器がもっとも多く、若干の茶器が含まれる。舶載磁器のほか、美濃・伊万里が含まれ、個体数による比率は舶載品が45%を占める。また、碗と皿の比率は2:5となる。その他の遺物を含めて二次加熱をうけるものが多く、火災焼失によることが推定される。また、III-5削平地盛土層に出土する青・白磁、灰釉皿等と同一個体の破片が含まれ、中央部以南に分布する炭化米と共に極めて共通する出土傾向が認められる。このことはIII-9、10削平地との関連やIII-4、5削平地の同時性を示唆するものであり、III-4削平地造成に続くIII-5削平地を形成する経過を示しているものと解される。その時期は現状削平地の原形が形成される段階にあって主として現状削平地形成以前の遺物とみられ、寛永通寶使用以前に求めることができる。

## 5. III-5削平地

III-4削平地東辺の緩やかな斜面に続く二段削平地にあたり、東西6m、南北24mの長方形に近い削平地である。北西ではIII-4削平地に続く盛土がやゝ張り出して狭くなり、北辺に通路、東辺はIII-6削平地境の斜面に画され、比高は2mである。削平地は南東に低いが、殆ど平坦をなし、北よりに礫が散乱している。

削平地の形成は現状で認められる小削平地を含む6削平地が重複し、柱穴群、溝遺構8条、壁土遺構2、土塁1が検出される。さらに2条の既述する空堀が確認されている。

遺物は主として陶磁器であり、大部分は盛土整地層に出土するものである。

### (1) 削平地の形成 (第84、90図 図版22、23)

現状における削平地の大部分は盛土層に被われ、西辺の切土斜面は南西辺に認められるのみである。旧表土の残存する東辺よりIII-4削平地を結ぶ勾配は8.5~11.0°を計り、旧地形は南西高位となり、北東へ傾斜している。これを切る南西辺はIII-5~6削平地境にみられる急斜面を形成せず、極めて緩やかな切土面をなす。盛土層は東辺に厚く、層厚は約1mに及んでいる。重複する13、14号堀は縦横に開削され、共に削平地によって埋没しているが盛土層と共に削平地に対応する層位的变化は識別できず、重複する小削平地の全体を確定するには至っていない。切土面及び溝遺構によって認められる削平地は6削平地である。

### 1. III-5-1削平地 (第84図 図版22)

現状で確認される削平地である。大小礫の散乱する盛土斜面に沿うEa24溝を西辺とし、東辺III-6削平地境をなす36°勾配の盛土斜面に限られる。南辺は20°勾配の11号堀を被うIII-10削

平地北斜面に続く。北辺では通路に続いている同一面をなすが、III-4削平地に続く盛土を切り、東西6m、南北15mと推計される。削平地面は北東に僅かに傾斜し、東西・南北共に2勾配である。

#### 2. III-5-2削平地（第90図 図版22、23）

もっとも北西に検出される地山切土面およびこれに沿うDh27溝によって推定される削平地である。北辺は柵列や通路が重複し、更に4号堀によって失われ、南西ではIII-5-3削平地のDi24溝によって不明となる。切土及び溝方向はN32°Wにあり、III-6-3削平地のDg18-II溝に平行し、その間東西9mを計る。

#### 3. III-5-3削平地（第90図 図版23）

III-5-2削平地を切るDi24溝及び以東の切土面によって認められる削平地である。東西7.2m、南北2.6mが確認され、III-5-1削平地及び13号堀に至って不明となる。北西で地山を切り、東辺は盛土をなすが、その後の削平にあって対応する盛土層は明らかでない。溝の南北方向はN23.0°Wを計り、III-6-4削平地におけるDg18-II溝のそれに近似している。

#### 4. III-5-4削平地（第90図 図版23）

西辺の地山切土面およびDj27溝によって認められる。切土斜面は南西で36°の傾斜をなし、北に緩やかとなって東への張り出し部分を残す。削平地面はIII-5-2削平地切土面によって不明となるほか、11号堀の開削によって殆どを失っている。南北7.5mを計る。

#### 5. その他の削平地（第90図 図版23）

III-5-3削平地を切る削平地面、III-5-4削平地西辺の地山切土面が認められ、それと同一5、6削平地が推定される。前者はIII-5-3削平地より続く礫を伴う盛土及び地山を切って西辺では0.20m低位となり、北東へ若干傾斜している。旧表土を被う盛土は0.20~0.3mに及び、東西6mである。後者はDj27溝が礫を伴う暗褐色土を切る点に符合している。

そのほか南西に緩やかな地山切土面及びこれに沿うEd21溝が検出され、これに伴う削平地も考えられるが、北西は11号堀によって不明となり、削平地境も明瞭でない。

#### (2) 溝造構（第90図 図版23）

##### 1. Dh27溝（第90図 図版23）

削平地北西の南北溝である。北端を4号堀及び柵列に断ち切られ、南端はDi24溝によって失われる。ほゞ直線状をなして掘り込まれ、N32°W方向を計る。長さ10.10m、溝幅0.30m、深さ0.14mで断面は緩やかなV字形をなす。底部は殆ど平坦をなし、北に0.06m傾斜している。覆土は底部に暗褐色砂質土、上層では炭化物・焼土粒を含み、礫を伴う褐色土である。

##### 2. Dh21溝（第90図 図版23）

北辺の通路に沿ってIII-6削平地北西に続く東西溝である。III-5削平地では旧表土、地山

圖 5 斜坡地盤全剖面

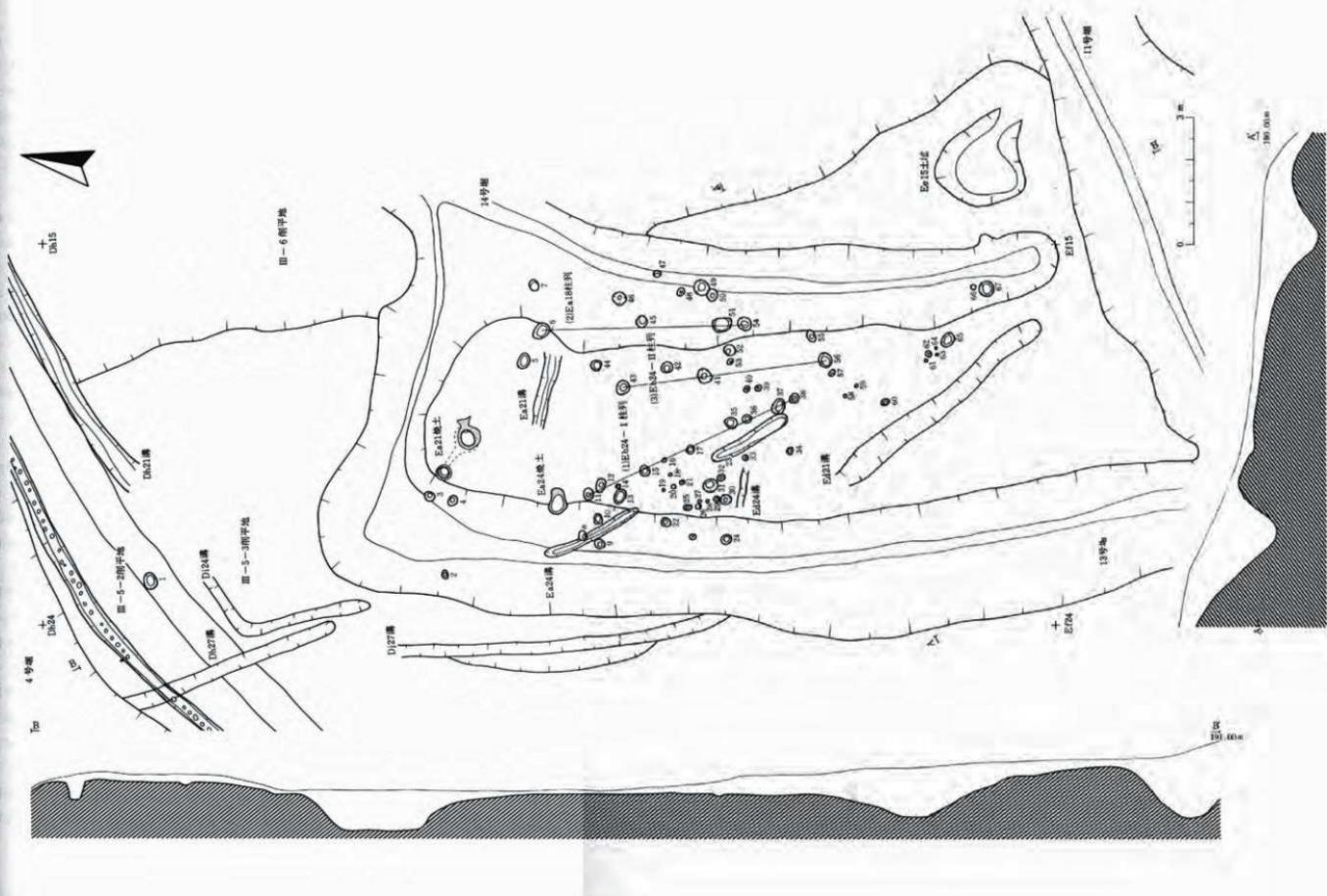


圖 5 斜坡地盤全剖面

を切ってやや南に湾曲する。両端共に削平によって失われている。長さ6.60m、幅0.62m、深さ0.25mを計り、断面はV字形に近いが、立ち上がりは弱い。底部の比高は東西0.20mに及び、地形に沿って東へ傾斜する。底部よりエンヂがかった細粒の褐色土に拳大の礫や黄褐色土の塊が混じる覆土で、上層には炭化物・焼土粒を含む暗褐色の盛土が被う。

複数の構造にはIII-6 削平地の Dg18-I ~ III溝があり、Dh21溝はこれら3溝を共に切り、III-6-2 ~ 4 削平地形成以後の開削である。

#### 3. Di24溝 (第90図 図版23)

Dh27溝を切って地山面で検出される。南はIII-5-1 削平地によって失われるが、東南より南北に延びて湾曲する。南北方向はN23.0°Wを計り、11.3°で北東に折れる。長さ4.54m、幅0.30m、深さ0.11mである。覆土は小礫を含む一様な褐色土である。

#### 4. Dj27溝 (第90図 図版23)

削平地西辺の地山切土面に沿う南北溝である。北はIII-5-2 削平地切土面によって不明となり、東へ僅かに湾曲する南端は13号堀によって以東を失っている。長さ7.70m、幅0.30m、深さ0.25mを計り、南北方向はN15.1°Wである。切土面にあたる中央部西壁は整地層とみられる褐色土を南北5mに渡って切り、その南北では地山を切る。覆土は炭化物粒を含み、小礫の多い暗褐色土であり、上層は黄褐色土である。

#### 5. Ea24溝 (第90図)

現状削平地中央部に表土を除去して盛土層に検出される。南北2条となり、それぞれ長さ2.66m、幅0.20mを確認する。共にN40.8°W方向にあって同一溝とみなされる。南北端を結ぶ長さ6.64m、幅0.20~0.25m、深さ0.09~0.12mで底部は北に若干傾斜している。覆土は礫を含む褐色土で、炭化米を微量混入している。

#### 6. Ea21溝 (第90図 図版23)

削平地中央部の旧表土および地山を切る東西溝である。東西端は共に削平によって失われる。長さ1.80m、幅0.40m、深さは東端で0.15mを計る。断面はU字形に近いが、壁の立ち上がりは弱い。覆土は柔い一様の黄褐色土であり、Ea33溝に伴う礫は認められない。

#### 7. Ec24溝 (第90図 図版23)

削平地中央部の地山面で検出される東西の溝である。西端は11号堀で切られ、上部は削平をうけて西端ほど狭く、浅い。長さ1.05m、幅0.25m、深さ0.05mを計る。覆土は褐色土で班点状に灰化化している。

#### 8. Ed21溝 (第90図 図版23)

削平地南西の地山切土斜面に沿って検出される。長さ6.04m、幅0.60m、深さ0.10mである。壁の立ち上がりは弱く、底部は平坦をなす。覆土は地山に比してやや柔い黄褐色土である。

(3) 柱穴群 (第90図 第39表 図版23)

大小の柱穴は合せて67に及ぶ。地山面で検出されるほか、一部は旧表土・盛土層に認められる。削平地中央部よりやや南にかけて分布し、径0.30m以上の柱穴は比較的少ない。掘り方は円形に近いものが多く、明らかに方形をなすものはない。深さ0.30~0.40mを有する柱穴は28%でこれ以下の浅いものが多い。柱痕は径0.12~0.18mの円形であるが、掘り方覆土と明瞭に識別できるものは少ない。

柱穴の配置については建物を特定できる柱列は確認できず、僅かに(1)P11-17-38、(2)P6-45-54、(3)P43-41-56等の南北柱列があげられる。(1)、(2)柱列の柱間はそれぞれ2.71m(8.944尺)、2.45m(8.086尺)の等間をなし、(3)柱列では北より0.93(3.069)-1.90m(6.271尺)を計る。掘り方は(3)柱列で径0.30~0.36mであり、深さ・底面高共に近似値を示す。P41、56における柱痕は径0.15mである。掘り方の覆土は暗褐色土で柱痕部ではやや柔い。そのほか(1)柱列西辺に分布する柱穴にはN35~45°W方向の柱列、西辺に分布する柱穴にはN35~40°W方向の柱列が推定される。

第39表 III-5 削平地柱穴計測表

No.	大きさ	深さ	検出面高	底面高	備考	No.	大きさ	深さ	検出面高	底面高	備考
1	41×30cm	7cm	189.64m	189.57m	木樁?	35	25×29cm	32cm	189.74m	189.42m	
2	19×15	15	189.23	189.08	13号塗装	36	20×23	12	189.85	189.73	b.c.
3	29×27	25	188.95	188.70	"	37	38×31	40	189.79	189.39	
4	28×26	7	189.55	189.48		38	22×22	39	189.83	189.44	
5	37×28	17	189.19	189.02		39	15×14	39	189.69	189.30	
6	39×41	11	189.08	188.97		40	17×13	48	189.70	189.22	
7	30×20	21	189.21	189.00		41	36×35	29	189.54	189.25	(15)
8	23×22	38	189.52	189.14		42	24×25	17	189.45	189.28	
9	22×24	30	189.49	189.19		43	33×32	24	189.48	189.24	
10	26×19	29	189.62	189.33	c.	44	26×26	4	189.30	189.26	
11	28×25	27	189.72	189.45	r.	45	28×24	28	188.96	188.68	(12)
12	35×22	28	189.71	189.43		46	37×34	15	189.35	189.20	
13	32×28	35	189.80	189.45	(15)	47	16×21	11	189.19	189.08	(18)
14	25×23	26	189.69	189.43	c.	48	21×20	5	189.22	189.17	
15	25×28	15	189.90	189.75		49	38×33	22	189.80	189.58	
16	12×13	20	189.85	189.65	c.	50	30×25	11	189.76	189.65	(18)
17	19×22	47	189.73	189.26		51	33×44	44	188.25	187.81	14号塗装より古い
18	10×10	10	189.73	189.63		52	29×29	49	189.65	189.16	b.c.r.
19	8×7	10	189.79	189.69		53	16×15	5	189.96	189.91	
20	10×13	7	189.89	189.82		54	30×31	37	188.94	189.57	
21	12×14	7	189.89	189.82		55	27×22	17	189.56	189.39	
22	21×22	51	189.90	189.39	c.	56	34×30	22	189.71	189.49	(15)
23	14×18	10	189.41	189.31		57	14×13	18	189.81	189.53	
24	22×24	39	189.50	189.11		58	10×8	6	189.94	189.88	
25	13×20	34	189.95	189.61		59	10×10	28	189.95	189.67	
26	12×15	16	189.95	189.79		60	9×15	42	190.13	189.71	
27	12×12	12	190.06	189.94		61	8×7	5	190.15	190.10	
28	10×10	9	190.06	189.97		62	17×15	15	190.14	189.99	
29	16×17	18	189.97	189.79		63	8×8	7	190.19	190.12	
30	24×24	17	189.96	189.79		64	9×6	6	190.17	190.11	
31	30×33	15	189.95	189.80		65	30×31	31	190.20	189.89	
32	17×18	12	189.92	189.80		66	14×14	11	190.18	190.07	
33	13×14	6	189.91	180.85		67	40×36	28	190.02	189.74	
34	16×17	45	189.94	189.49							

#### ④ 焼土遺構（第90、91図）

##### 1. Ea21焼土遺構（第91図）

表土を除去して削平地のやや北偏の盛土層に検出される。煙道を有する竈状の遺構である。燃烧部は内径 $0.35 \times 0.38$ mの環状をなして焼土が形成され、これより断面ハの字状をなす壁に張り、底部は中央部にやゝ凹む。焼上面よりの深さは0.37mを計る。壁は堅固な焼土を形成し、厚さ0.07mを計るが、東壁では $0.24 \times 0.30 \times 0.25$ mの玉石を伴い、その上下に形成される。更に北東方向に焼土が広がり、二次的な補修にかかるものともみられる。

煙道は燃烧部よりN64.2W方向に0.70mに渡って掘り抜かれ、断面は径0.16m前後の円形を呈す。焼土は上部で厚さ0.07m、下部では若干薄くなる。底部は燃烧部付近で平坦となるが、次第に緩やかに上昇して煙出しに達する。煙出しは径 $0.26 \times 0.28$ mの円形をなし、煙道より環状をなして焼土が形成される。

覆土は燃烧部底部より柔軟な炭化物が厚く堆積するが、形状の判明するものは認められない。

上2層は褐色土及び暗褐色土であり、特に上層は

小礫を伴う暗褐色土の盛土に類似する。煙道では

大部分もろい黒褐色土となり、燃烧部付近に炭化物・焼土が混入する。遺物は1点も出土せず、そ

の用途も明確でない。検出面によってはIII-5

-3削平地を切る同一5削平地に相当している。

しかし、関連する遺構は明らかでない。

##### 2. Ea24焼土（第90図）

削平地中央部の地山面及び14号堀覆土中にこれ

を切って検出される。東西0.67m、南北0.44mの

不整な長円形の掘り込みを有し、深さ0.15mである。

焼土は南東の壁に僅かに認められるほか、暗

褐色土の覆土に混入する。上部を削平によって失

なわれ、性格は明らかでない。

#### ⑤ 土塙（第92図 図版23）

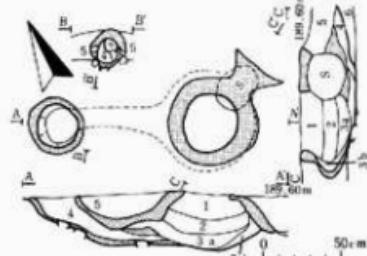
削平地南東の旧表土及び地山を切る浅いEe15

土塙である。平面は径2.12mの円形をなすが、南東

に開口して溝状をなし、斜面に至って不明となる。

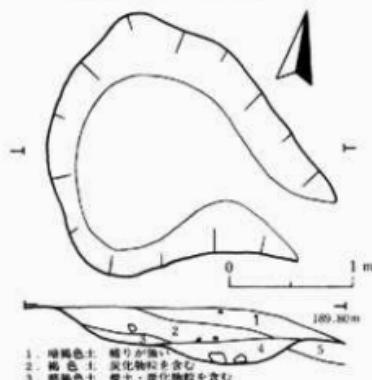
掘り込みは緩やかで、北西がもっとも低く、深さ

0.20mを計る。開口部では最深部より0.10m低く、



1. 増褐色土 炭化物・灰土を含む  
2. 褐色粘性土 炭化物を含む  
3. 黑褐色土 4. 黑褐色土・炭化物を含む  
5. 増褐色土 灰を含む 6. 黑褐色土

第91図 Ea21焼土遺構



第92図 Ee15土塙

若干南東へ傾斜している。覆土は底部より焼土や炭化物の微粒を含む黒褐色土であるが、焼土の形成や滲水の状況も認められず、性格は不明である。遺物は一点も出土していない。

#### (6) 遺物 (第93、94図 第40、122表 図版45~47)

削平地のほか、13号堀及び14号堀覆土中の遺物を含めて89点余りである。大部分は削平地の整地盛土層に含まれる陶磁器であり、南半部に特に多い。いずれも破片で、二次的な加熱を受けているものが含まれる。

第40表 III-5 削平地出土遺物

( ) は空堀覆土中の遺物

層位	青 磁	白 磁	染 付	灰陶器	赤陶器	その他の陶器	須恵器	土師器	金属製品	古 錢	石製品	獸 骨	炭化物
I	2	1	3	4	1			1	1		2		未
II	5	3	17	15	1	3	1	1	6	5	4		未
III			1	3	1						1		
IV	(1)		(2)							(1)	(1)		(未)
V													(2)
計	8	4	23	22	3	3	1	2	7	6	8	2	

遺構出土の遺物は Ea24溝に炭化米が少量含まれるのみである。その他は13号堀覆土に含まれる陶磁器、古銭、馬齒等である。

#### 青磁 (第93図)

7点のうち碗4点が認められる。底部細片2点を含む3点は二次加熱をうけて胎土の変色するものが含まれる。図示できる碗2点のうち(1)は口径の小さい内彎する口縁部である。内外の暗緑色釉は口縁端が剝離して一部は白色化し、縦方向の貫入が走る。外面には簡略化された蓮弁の線刻がある。胎土は堅緻な灰色を呈する。推定口径10.0cm。(5)はやや厚手となる口縁部があり、暗緑色の釉には細かい貫入が多く、内面には口縁直下より横方向の擦痕が走る。外面に0.4cm幅の波状の沈線及び縦の細線によって蓮弁文を刻する。胎土は赤褐色をなす。推定口径11.0cm、共にII層出土の舶載品である。

#### 白磁 (第93図 図版44)

器厚のやや厚い内彎気味の皿1点と口縁部の端反りする皿がある。そのほか、小杯とみられる器厚0.2cmの口縁部1点がある。皿(4)は体部より内彎して立ち上がり、口縁部で僅かに窓になって端反りする。光沢の弱いやや青白色を呈し、内外に著しい貫入が認められる。胎土は緻密で二次加熱によって褐色がかった白色をなす。推定口径11.0cm。北半II層出土。

#### 染付 (第93図 図版44)

碗2点、皿5点を含むが、細片が多く全体の不明なものが多い。碗2点のうち(15)は削平地の南北15mをおいて接合する口縁部である。体部より口縁部にかけて僅かに内彎して薄くなる。内外青白色を呈する白磁に淡青色の発色をなす。口縁直下の内面に2条、外面に帯状文の模様がある。胎土は堅く、均質で白色を呈する。推定口径14.0cm。(17)は二次加熱をうける碗の底盤である。体部より若干薄く、高台の削り出しが粗略で高台内にはロクロ成形痕を残す。高台

高台内を除く施釉は高台脇にやや厚く、光沢は失っていないが、内外に貫入が広がる。釉調は青白色で、施文は明瞭でない。粗粒を含み、亀裂も認められる胎土は白色である。無釉部分では黒色をなす。推定高台径5.0cm。(115)は北西、(147)は南端の共にII層出土。

(13)は口縁部で薄く引き出されて外反する。やや青味のある白磁に不鮮明な描画は口縁直下でやや褐色がかる青色を呈する。内外に貫入が認められ、光沢が弱い。白色の胎土には小さな亀裂が走る。推定口径11.0cm。(14)も同様であるが、施文は外面に1条、内面に帯状文がやや青色をなして鮮明である。推定口径12.0cm。(16)は二次加熱をうけて光沢を失い、小気泡が多い。(17)は体部より外反する口縁部である。やや青味のある白色に内面の線描は濃淡ある紺青色をなす。口縁部にのみ貫入が走り、胎土は緻密で白色をなす。推定口径12.5cm。いずれもII層出土で、(16)の伊万里を除いて舶載品である。

#### 灰釉陶器 (第93図 図版45)

22点共皿片とみられる。口縁部8点、底部8点であるが、図示できるものは少ない。淡黄緑色釉の丸皿で、やや内彎して立ち上がるものと口縁部で僅かに端反りするものがあり、大部分は後者である。二次加熱をうけるもの5点が含まれている。

14はやや内彎して立ち上がる口縁の小皿である。厚手で体部の器厚は0.8cmに及び、底部は基底状に僅かに削り出されてロクロ成形痕を残す。施釉は全面に及び、加熱をうけて光沢を失ない、滑らかさがない。淡黄緑色の釉薬を失った見込みには二次的に赤色の付着物が隔離している。推定口径10.0cm、同底径4.8cm、器高2.1cmである。II層出土。(13)は緩やかに端反りする口縁部である。二次加熱によって口縁部は光沢を失ってザラザラしている。推定口径12.0cm、中央部。II層出土。

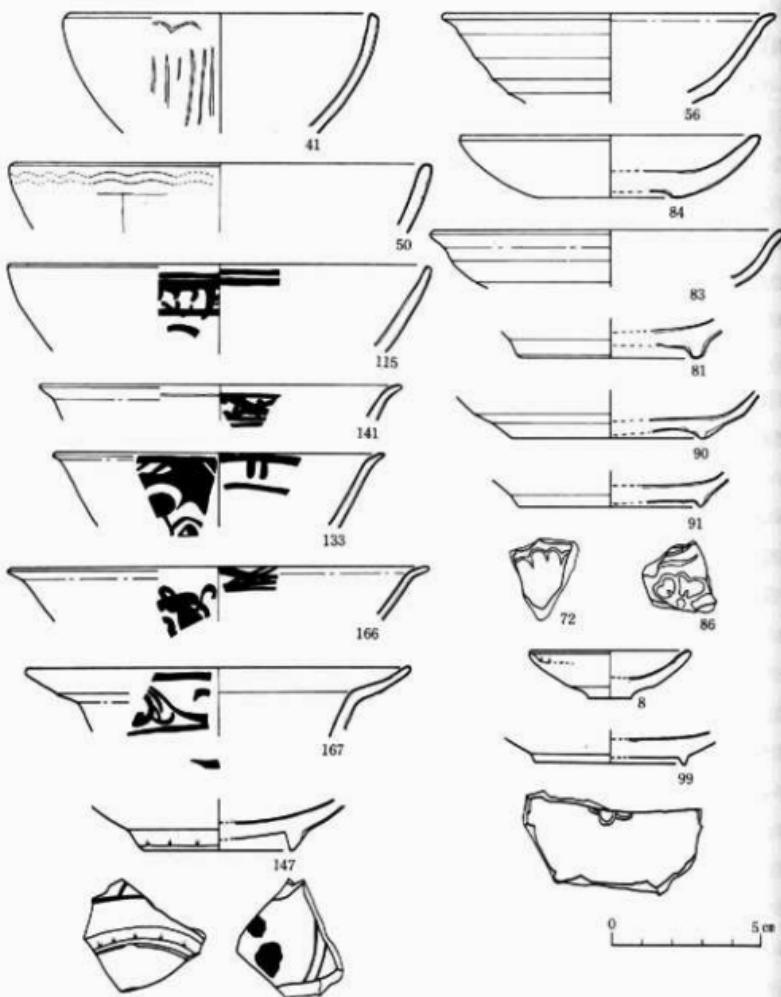
15～17は底部片である。高台は削り出しに若干の相違がある。器厚は0.4～0.7cmを計り、推定高台径は5.0～6.0cmである。(17)は厚手で見込み中央部に梅花とみられる印文が認められる。施釉は淡緑色、または黄緑色をなして高台脇に薬溜するが、(17)の外側は二次加熱によって殆ど失われ、淡褐色化している。胎土はいずれも淡白色を呈し、均質で吸水性がある。その他見込みに菊花、かたばみとみられる印花を有する破片2点(17)、(16)がある。共にII層出土。

#### 鐵釉陶器 (第93図 図版45)

碗1点、小杯2点である。碗は二次加熱をうけた体部小片で全体は明らかでない。内面黒色をなし、外側の露胎は灰色を呈する。小杯(8)は口縁部を殆ど欠いているが、僅かに薄く引き出される。体部外側にはロクロ成形痕のほか、粗砂を引いて内面に凹みを有する。底部は若干造り出し、糸切痕が残って全体に粗略である。施釉は内面より口縁部にかけて黒褐色釉が被い、内面底部には厚さ0.25cmの薬溜が認められる。胎土は白褐色をなし、堅く吸水性が弱い。推定口径5.4cm、同底部径1.4cm、器高1.4cmである。南半部のI、III層出土で接合する。

その他の陶磁器

碗の口縁部、体部片の小片各 1 点がある。口縁部片は薄い緑色釉に緑色の上絵が認められる。体部片は内外青灰色をなす。共に微細な貫入が走り、胎土は堅く吸水性は殆どない。その他場の口縁部と見られる破片がある。口縁部より内面にかけて赤色及び緑色の斑点や黒色の鉛物



第93図 III-5 削平地出土遺物(I)

が融着している。外面は暗緑色を呈し、灰褐色の胎土に亀裂がみられる。共に中央部以北のII層出土である。

#### 須恵器及び土師器

須恵器片は壺の体部片とみられる。内外面に平行する叩き目文があり、灰色を呈する。器厚1.2cm。土師器は胎土の良好な赤褐色の破片2点であるが、全体は不明である。共に北辺II層出土。

#### 金属製品（第94図 図版46）

鉄製品4点のうち2点は折損する小柄で、僅かに歪みがある。現存長6.2cm、刃径0.8cm、厚さ0.2cmを計る。先端部でやや薄くなる。北西II層出土。

その他用途不明な鐵板片(1)、鎌瘤の著しい鐵釘状をなすもの(2)がある。また、I層出土には鉗形をなす鉄製品が含まれる。

銅製品には両端を折損する鍍金とみられる(1)、用途の不明な針状をなすもの(2)の2点がある。1点は現存長2.3cm、幅2.9cm、棟方0.7cm、小口は2.6cmを計る。二次加熱によって地板は滑らかさを失い、綠青の付着が部分的に認められる。共に中央部南偏II層出土。

その他鉛製の弾丸1点がある。径1.2×1.5cmのほぼ球形をなし、重量7.40gを計る。

#### 古錢（第122表）

開元通寶1、洪武通寶3、永樂通寶1、不明銭1の合せて5点である。開元通寶及び不明銭は二次加熱をうけて薄くなり、銘は明瞭でない。特に不明銭は外径2.13cmでやや小さく、穿は径0.72×0.75cmで大きく不整である。

#### 石製品（第94図 図版47）

磁石2点、碁石5点、水晶1点である。磁石は共に小破片で、1点は5.4×2.2×3.2cmを計る。研磨面は1面で縦方向の細線2条が認められる。石質凝灰岩製である。他の1点は二次加熱をうけ、折損面は黒色を呈する。細粒凝灰岩製である。前者は北辺I層、他は北東III層出土。

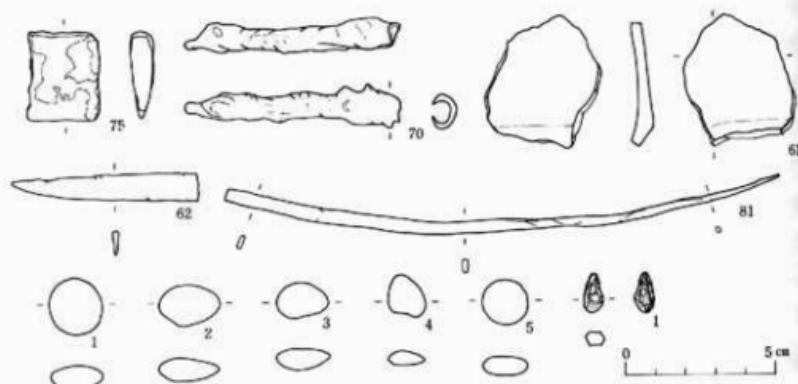
碁石は円形、または長円形をなす。(1)は白褐色をなし、径1.7cm、厚さ0.8cmの扁平な流紋岩である。(2)～(4)は黒色のチャート質粘板岩である。(5)はもっとも円形をなし、径1.5cm、厚さ0.55cmを計り、(2)は梢円形をなし、長径2.05cm、短径1.40cm、厚さ0.70cmで最大である。(1)を除いて加工の痕跡は認められない。共に中央部以南II～III層出土。

鑿状をなす水晶(1)は先端を欠いて、現存長1.3cm、最大径0.6cmである。加工の痕跡をとどめしており、装飾品とみられる。南辺のI層出土。

#### 穀類

I、II層に検出される炭化米である。稈殻を残すものは殆ど認められず、焼膨れするものや焦げ米が混入する。一粒の大きさは長さ0.45cm、幅0.30cm、厚さ0.20cm～長さ0.35cm、幅0.20cm、厚さ0.16cmを計り、長幅比は1.50～1.75である。Ea24溝覆土に出土する炭化米には長さ0.50cm、

幅0.29cm、厚さ0.23cmを計るやや大粒のものが混入している。



第94図 III-5 削平地出土遺物(2)

### 要約

削平地の大部分は重複する削平地の形成に伴う盛土によって被われ、急勾配をなす切土斜面は認められない。また、前後する13、14号堀の開削にあって小削平地の全体は明確でない。推定される旧地形は南西に高く、北東斜面をなす。削平地はこれを切って西辺に溝を配し、以東の切土及び東辺への盛土によって形成される。共に南北方向の削平地とみなされる。現状の削平地によっては東西9~6m、南北15m程度の規模となり、削平地面は同様に2°前後の勾配を有し、殆ど平坦をなして形成されるものとみられる。

削平地の形成は6削平地の重複が推定され、削平地境は切土、盛土によっても明瞭でないが、検出状況によってはIII-6~6削平地が高位にあって最も早く、以下同一4、2、3、5、1削平地となる。また、11号堀の開削については同一4、2削平地の形成段階に位置付けられ、14号堀では高位をなす削平地に併存するか、または削平地以前に求められる。しかしいずれも推定の域を出るものではない。

溝遺構は8条であり、共に全体を確認できるものはない。東西溝を除く(1)、(3)~(5)の4条は削平地西辺の地山切土方向に沿っており、削平地の西辺を画する溝と解される。断面は緩やかなU字状をなし、深さは0.25m前後である。

東西溝は旧表土及び地山面に検出され、上部の削平をうけている。(7)Ec24溝についてはIII-4削平地におけるEa33溝に類似し、もっとも初期の開削とみられるが性格を推定できるものはない。

削平地に伴う遺構は柱穴群と焼土遺構である。柱穴は盛土層にあって検出できない状況もあ

るが、切土方向に沿う傾向にあって南北の棟方向をとる小規模な建物が推定される。しかし、いずれも削平地中央部より南にかけて分布し、北辺には認められていない。また、電柱をなす遺構は層位的にはIII-5-5削平地に伴うとみられる。

遺物は大部分盛土層に含まれ、特に南半部の盛土層に集中している。主として陶磁器の細片であり、全体のほぼ50%を占める。磁器は殆ど舶載品であり、碗、皿のほか小杯が含まれる。陶器は美濃産の皿がもっとも多く、天目茶碗、杯が混在する。その他若干の武器、石製品、遊戯、装飾品等がある。共に二次加熱によって変質するものが多く、火災焼失によるものと推定され、削平地の造成に伴って移動している可能性が強い。III-10削平地北斜面出土の天目茶碗は14号廻覆土中の出土片に接合し、III-4削平地のそれと同一個体とみられる破片が出土する。尚では削平地南半部の盛土層がIII-4南東斜面及び9、10削平地北斜面の切土にかかわるものと推定される。

## 6. III-6 削平地

該部の三段削平地にあたる。上段のIII-5削平地とは2mの比高を有し、西辺の斜面はIII-5削平地と殆ど同一方向をとる。北辺は通路に限られ、南辺はIII-10、11削平地の北斜面に続く。また、東辺ではなだらかな斜面をなしてIII-7削平地切土面に接続されている。III-6削平地は東西20m、南北45mの区域であり、現状では西辺中央部に小削平地が認められるほかは大小礫の散乱する東斜面である。検出遺構は現状で認められる小削平地のほか8削平地が重複し、溝10条、柱穴群、焼土遺構が確認される。また、削平地に13、14号堀が重複しており、IIIの郭内の壁際に既述している。

遺物は大部分現状削平地以北の盛土層に含まれ、陶磁器片等16点余りである。

### (1) 削平地の形成（第95図 図版22、23）

現状削平地を含めて9削平地に及び、主として西辺の切土斜面のほか、これに沿って南北に續く溝遺構によって推定されるものである。

### 1. III-6-1 削平地（第95図 図版22）

西辺中央部の南北7m、東西6mのやや不整な長方形をなし、現状で確認される削平地である。礫の分布が比較的少なく、北辺で僅かに低位となる。南辺には大小礫の集積が認められ、1.0~1.2m幅で中央部に僅かに高い。東西は9mに渡り、その西方で削平地を画している。同様の礫は北東隅より南北3mに渡って続き、その間は部分的に土留石が配される。土留石は径1.50m以下の自然石で特に規則性は認められない。削平地は北西辺の明確な切土の形跡は認められず、小礫を含む一様な暗褐色の盛土層によって形成される。東南の土留石を境にして東斜面となり、東西の傾斜は約6°である。

## 2. III-6-2 削平地 (第95図 図版23)

Dg18-I溝によって認められるもと北西に位置する削平地である。III-5 削平地北東の盛土を除去して検出される。地山切土による削平地面であるが、大部分III-6-4 削平地の切土斜面にあたり、全体は明らかでない。

## 3. III-6-3 削平地 (第95図 図版23)

III-6-2 削平地を切り、北辺の通路に重複する。同一2 削平地と共に地山切土斜面及び削面に沿って検出される Dg18-II溝によって確認される。切土面は南北4.20mに渡って認められ、上段削平地との比高は0.5m、斜面勾配は28°を計る。しかし、南は同一4 削平地によって失なわれ、全体は不明である。

## 4. III-6-4 削平地 (第95図 図版23)

III-6-3 削平地に重複し、やや東偏する削平地である。西辺の地山切土面の一部及びDg18-I溝によって北半が確認される。中央部以南では同一5~7 削平地の造成によって失なわれて明瞭でない。南延長線上には Ea15-I溝が認められ、南北15m前後と推計される。地山切土面のみで盛土は認められない。切土面の一部及びこれに沿う Dg18-II溝壁面に露呈する小礫には赤色化するものが認められ、火災焼失によるものとみられる。削平地面は北半で南東に傾斜し、勾配は約8'を計る。III-6-2 削平地を切って0.20m低位となり、中央部では同一5~7 削平地に比して0.25m前後高位となる。また、重複する14号堀は既に埋没しており、削平地はその覆土を切って形成されている。

## 5. III-6-5 削平地 (第95図 図版23)

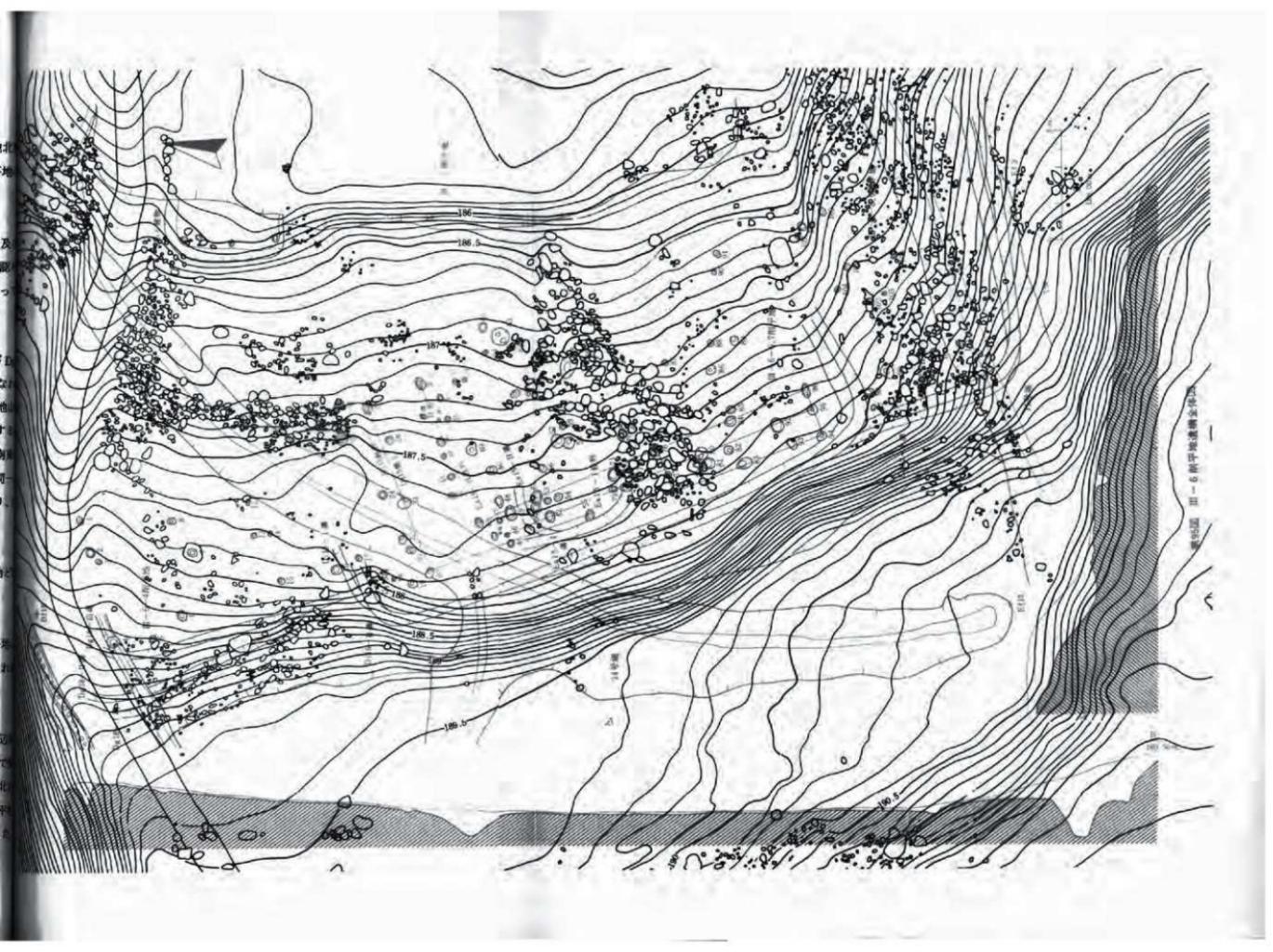
III-6-4 削平地中央部を東西に切る Di15-I溝によって推定される削平地である。殆どIII-6-6~7 削平地によって失なわれ、明らかでない。

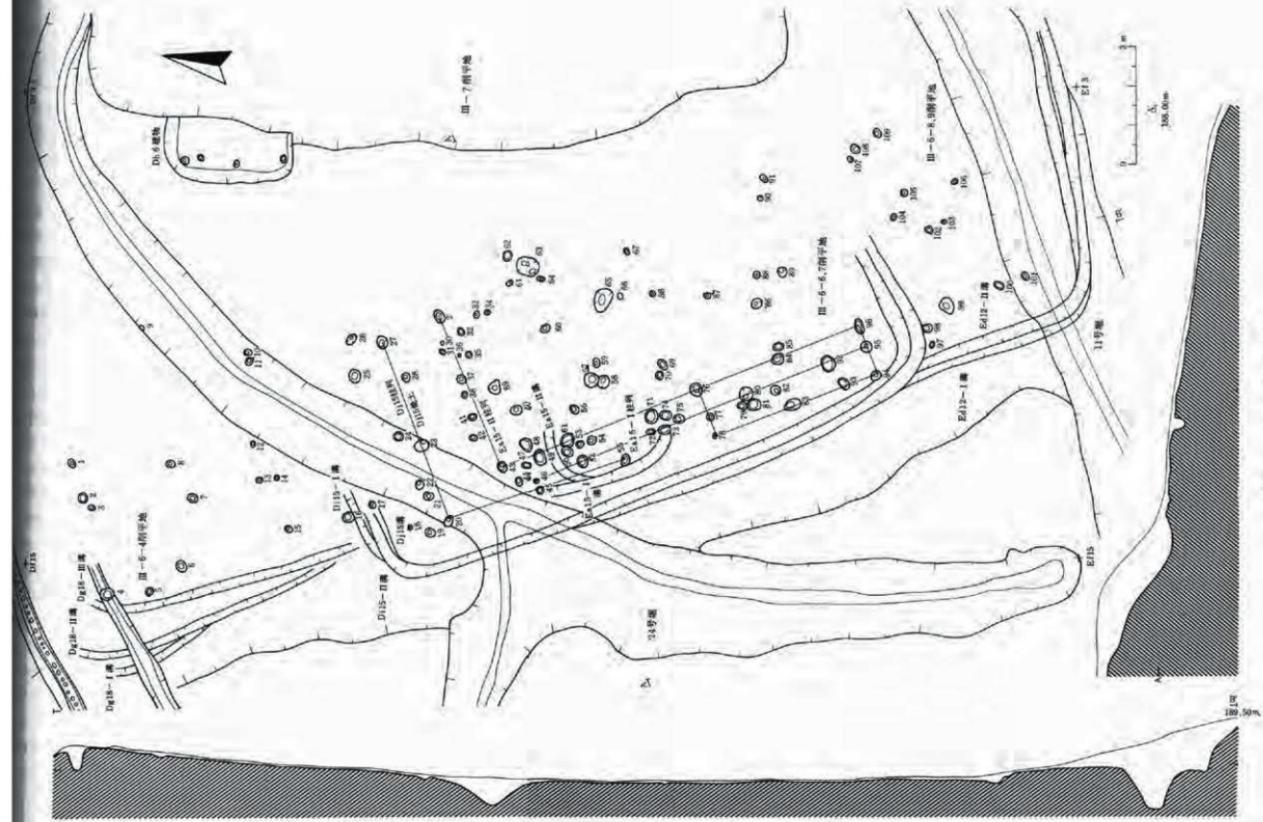
## 6. III-6-6 削平地 (第95図 図版23)

III-6 削平地のほぼ中央部に位置し、Dj15-II溝によって確認される。III-6-7 削平地に重複して同一面をなし、西辺の地山切土斜面及び削平地面は明瞭でない。Di15-II溝によれば南北14.5m、東西4 mを計る。

## 7. III-6-7 削平地 (第95図 図版23)

III-6-6 削平地に比して北辺で南により、中央部より南辺にかけて若干西偏する。西辺斜面の盛土を除去して地山切土面が認められ、南半では同一8 削平地斜面に続く。勾配10.5'で傾斜し、III-5 削平地より1.5mの低位となる。切土斜面裾に沿って Dj15溝が配され、南北15mに及び、両端で東へ湾曲する。溝に画される削平地は南北13.8m、東西4.3mを計る。削平地面は北西で13号堀覆土を切るほかは、地山の切土造成によって東へ10.5'勾配で傾斜する。また、南辺では同一8~9 削平地を切ってこれより若干低位である。





第95圖 三一六兩平地鐵道之平面

### 8. III-6-8、9削平地（第95図 図版23）

もっとも南辺に位置する2削平地である。北はIII-6-6~7削平地によって失なわれ、南北2辺では共に切土斜面を形成する。III-5削平地との比高は1.5~1.8mを計る。西辺の斜面は37~40°で切土するが、南辺では北斜面を殆ど垂直に切り、南西の壁高は0.54mに及ぶ。共に縦に配される溝は南北より東西方向に走る。III-6-8削平地に伴うEd12-II溝が新しく、III-9削平地の同一I溝に比して0.10~0.20m低い。また、北延長線上にほぼ同一底面高を計るEa15-II溝が認められ、これをその北辺とみるならば溝を含む南北は14.7mである。東西は共に8.70mまで確認される。削平地面は南西より東西に走る12号堀覆土を切り、他は地山切土面で穏やかに東へ傾斜する。

#### ② 溝遺構（第95図 図版23）

##### 1. Dg18-I溝（第95図 図版23）

北西端の旧表土及び地山を切って検出される。南北2.2mでN31.8°W方向にある。北端は通路に重複して不明となり、東へ湾曲する南端はDg18-II溝によって失なわれる。更に重複するDg21溝によって切られている。溝幅0.18m、深さ0.06mで南に僅かに傾斜する。覆土は黒褐色土で、上層には礫の多い褐色土の盛土が斜面をなして被っている。

##### 2. Dg18-II溝（第95図 図版23）

通路に重複するもっとも北端に位置し、旧表土の黒色土及び地山面で確認される。南北7.10mであるが、南端はDg18-III溝によって失なわれる。方向はN23.5°を計る。幅0.40m、深さ0.8m前後で南に低い。覆土は炭化物・焼土粒が混入する暗褐色土で上層の大小礫を含む褐色土に類似する。

重複する遺構にはDg18-I、同一III溝のほか、Dg21溝がある。切り合い関係によってDg18-I溝より新しく、Dg18-III、III-5削平地に続くDh21溝より古い。

##### 3. Dg18-III溝（第95図 図版23）

斜面を被う褐色土の盛土整地層を除去して地山面に検出され、Dg18-II溝を切ってやや東にいる。北端は東折して通路に重複し、南はDj15-I溝によって失われる。長さ8.20m、幅0.35m、深さ0.13m、南北方向はN25.0°Wを計る。壁は緩やかであるが、Dg18-II溝に比して立ち上がりがやや強い。南半部の壁面上部に露頭する礫は火熱をうけて赤色化しているものが認められる。底部は北西隅にもっとも高く、南へ傾斜して比高は0.30mである。覆土は黄褐色土を含む暗褐色土の混土で柔く、焼石のほか、炭化物・焼土粒が多い。また、炭化米が少量混入している。

##### 4. Di15-I溝（第95図 図版23）

Dg18-IIIを切って検出される。東西よりやや南西方向に湾曲するが、Di15-II溝及びIII-6

— 6 削平地の切土によって以南は明らかでない。長さ1.90m、幅0.20m、深さ0.10mを計る。覆土は締りの強い褐色砂質土で地山の褐色土に類似する。

#### 5. Di15-II溝（第95図 図版23）

地山切土斜面に沿って南北に長いコの字状の溝である。長さ18.85m、幅0.20~0.40m、深さは北西隅で盛土を切って0.30m、中央部以南の地山面で0.08mである。断面U字形をなし、東端に若干低い。覆土は底部に炭化物粒子を含む褐色の粘性土や地山類似の褐色砂質土の混土堆積があり、上層には小礫を含む暗褐色土がやや厚く被っている。

北端より重複する Di15-I、Dj15溝の2条を切って掘り込まれ、南西隅では Ed12-I、II溝を切り、重複する5溝中ではもっとも新しい。

#### 6. Dj15溝（第95図 図版23）

Di15-II溝に重複して北西隅を失っているが、同様のコの字状をなす。Di15-II溝より北で若干南偏し、南半部では切土斜面裾に沿う。南北方向はこれより3°東によってN31.0°Wを計る。長さ19.1m、幅0.30m、深さは北辺で0.14m、中央部以南では0.03~0.05mである。Di15-II溝に比して北辺で0.08m低く、南半部で若干高く共に東に傾斜する。覆土は炭化物の微粒を含む暗褐色土で上層は黄褐色土粒を含む暗褐色土の混土である。

#### 7. Ea15-I溝（第95図 図版23）

削平地中央部の地山面に認められる小溝である。南北方向より南端で東へ湾曲する。長さ70m、幅0.25m、深さ0.07m以下で東へ若干傾斜する。南北方向はN25.5°Wを計り、北延長線上の Dg18-II溝方向にはほぼ一致する。

#### 8. Ea15-II溝（第95図 図版23）

南端で Ea15-I 溝に重複し、南西より東へ湾曲する。長さ1.70m、幅0.25m、深さ0.05m以下で殆ど底部の痕跡を留めるのみである。南延長線の Ed12-I、または同一-II溝の北辺をなす溝とみられる。

#### 9. Ed12-I溝（第95図 図版23）

南端西辺の地山切土面に沿って南北し、南辺では北斜面を切って東西に延びる。北端は Dj15溝によつて切られて明らかでない。また、Ed12-II溝に重複し、南辺で若干北に偏る。長さ11.5m、溝幅0.30~0.40m、深さは南で削平地面下0.14mを計り、東へ僅かに傾斜する。重複する Ed12-II溝に比して東端で0.19m低位となる。覆土は西辺で底部より砂質土を含む暗褐色土を被い、南辺では明褐色土及び黒褐色土の流入がみられる。

#### 10. Ed12-II溝（第95図 図版23）

Ed12-I溝に殆ど重複する。西辺で Ed12-I 溝を切り、南辺では北斜面をほぼ垂直に切壁に沿つて南偏する。長さ11.40m、幅0.30m、深さは西辺で0.09m、南辺では0.38~0.25mを計る。

計。底部は東へ傾斜し、東西の比高は0.10mである。覆土は焼土や炭化物の微粒を含む暗褐色土で、南では底部に明褐色土の流入がみられ、上層では暗褐色土の厚層が被っている。

### (3) 柱穴群及び建物遺構 (第95、96図 第41表 図版22、23、33)

柱穴状の大小ピットはほぼ全域に分布し、特に削平地中央部に多い。合せて109に及び、その大部分は地山切土面で確認されるものである。柱穴の掘り方は径0.30m前後の円形をなすものが多く、深さは0.30~0.40mを計る。柱痕は0.12~0.15mの円形をなすものが若干認められる。柱穴の配置には西辺に6柱列が認められるものの掘立柱建物を確定できる配列は明確でない。やや規則的な配置の認められる柱列は主として南北方向の柱列である。他は掘り込みを伴う建物である。

#### 1. Dj15柱列 (第95図 第41表)

III-6-6~7削平地北西に位置するN30°W方向の柱列である。南北4.75m(15.677尺)2間、東西4.77m(15.743尺)2間まで確認される。南北では西辺のP20-45-55に対応してP23-40-58、P27-33が並列する。柱間は西辺で2.39(7.888)-2.35m(7.756尺)、内柱列及び東辺では2.34(7.723)~2.47m(8.152尺)で殆ど等間をなす。直交する東西は北よりP3-23-27、P45-40、P55-58がある。西方で2.07(6.832)~2.10m(6.931尺)、東方では1.69(8.878)~2.67m(8.812尺)を計る。

掘り方は径0.30m、深さ0.40m前後であり、東辺にやゝ浅い。P55における柱痕は径0.15mの円形をなす。覆土は暗褐色の混土で、柱痕部分ではやや柔い。P45掘り方覆土上層には鉄製品が出土している。

#### 2. Eal5-I柱列 (第95図 第41表)

III-6-6~7削平地中央部のDj15柱列に重複する南北柱列である。南北9.15m(30.198尺)5間、N31.5°W方向にある。P46-52-73-80-92-95の柱間は1.33(4.389)-2.26(7.459)-2.24(7.393)-2.26(2.459)-1.10m(3.630尺)で中3間は等間をなすが、南北の二間はやや狭く、それぞれP44、98が近接あるいは延長線上にあって両端は明確ではない。また、東西にはP46-33、P92-90があり、柱間は4.50(14.851)~4.58m(15.116尺)となる。検出面積で0.69m、底面高で0.40mそれぞれ低く、特定できない。

掘り方はP52-92がもっとも大きく、径0.30~0.40m、深さ0.33~0.50mを計る。柱痕はP80、92に認められ、径0.15mの円形をなす。暗褐色土の覆土には炭化物を含むほか、掘り方にP92の焼石やP80の焼米が混入しており、火災焼失後の建物柱列が推定される。

#### 3. Eal5-II柱列 (第95図 第41表)

Eal5-I柱列に重複する南北柱列で、僅かに東偏してN31°Wを計る。南北9.88m(32.607尺)4間で、南2間の更に西辺では4.44m(14.653尺)を計る。P43-51-76-84-96の柱間は1.

76 (5.809) — 3.58 (11.815) — 2.21 (7.294) — 2.23m (7.360尺)、P51—76はP43—51の2間分に相当する。P76—84—96には西辺に1.30m (4.290尺)をおいてP78—83—94が並列し、柱間は北より2.07 (6.832) — 2.32m (7.657尺)となる。また、直交する東西には北辺のP43—37—29があり、西より2.43 (8.020) — 1.63m (5.380尺)を計る。

掘り方は円形、または椭円形をなし、径0.30m前後、深さ0.26~0.46mである。柱痕はP43で径0.14mの円形をなす。覆土は暗褐色土でP43、51、76に炭化物粒が含まれ、P83、84の裏方には小礫が若干含まれている。

#### 4. その他の柱列 (第95図 第41表)

III—6—4削平地におけるP6—15—22—48のDh18柱列、P5—16—21—47のDg10柱列、同一6~7削平地にP50—72—81—93のEa15—III柱列南北3柱列がある。また、同一3~9削平地にはP99—100—101及びこれに直交するP99—105—109があげられ、南北棟西面の一部と推定されるが、延長線上の規則的な配列はみいだせない。

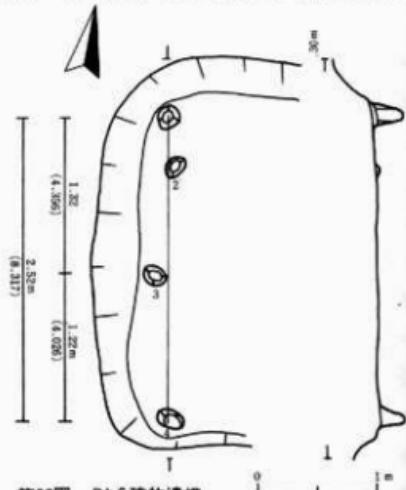
#### 5. Dh6建物 (第96図 図版33—2)

北東辺に位置し、III—7削平地によって西半を失う建物である。掘り込みは南北3.20mとなり、東西は1.72mまで確認される。壁高は0.30mでやや穂やかに立ち上がり、西壁に沿って柱穴が伴う。P1—3—4は1.32(4.

356) — 1.22m (4.026尺)で等間をなす。柱穴の掘り方は径0.17mの円形で、床面よりの深さは0.12~0.16mである。P1における柱痕は0.10mの円形をなし、黒褐色砂質土は締りが強い。柱痕部分では黒色をなして柔い。豊穴を被う覆土は一様の小礫を含む暗褐色土の混土で、削平地改変に伴って埋め戻されているとみられる。建物方向はN11.0°Wをなし、III—7削平地方向に近似している。

#### (4) 焼土 (第95図)

III—6—1削平地面に径0.40mの円形をなすDj15焼土を検出する。厚さ0.05mでほぼ平均した焼土層をなすが、締りが弱い。周辺の炭化物の散布や掘り込み面は認められず、その性格は明らかでない。



第96図 Dh6建物遺構

第41表 III-6 前平地柱穴計測表

大さき	深さ	検出面高	底面高	備考	No.	大さき	深さ	検出面高	底面高	備考
1 22×20cm	61cm	188.02	187.41	m	56	20×19 cm	32cm	187.54 m	187.22 m	(15)
2 29×25	65	188.08	187.43		57	38×35	15	187.42	187.27	
3 17×19	67	188.10	187.43		58	33×32	41	187.44	187.03	(12) s.
4 30×38	24	188.81	188.57		59	23×19	29	187.32	187.03	
5 22×20	23	188.30	188.07		60	24×24	21	187.10	186.89	
6 30×26	75	188.21	187.46		61	17×19	58	186.97	186.39	
7 26×27	29	187.87	187.58		62	30×22	32	186.81	186.49	
8 20×24	11	187.70	187.59		63	50×50	34	186.87	186.53	
9 15×14	15	187.20	187.05		64	14×21	33	186.89	186.56	
10 18×22	12	186.99	186.87		65	60×49	44	187.07	186.63	
11 22×21	18	186.92	186.74		66	20×16	35	187.06	186.71	
12 23×11	13	187.60	187.47		67	20×16	33	186.84	186.51	
13 14×19	25	187.80	187.55		68	20×14	39	187.08	186.69	
14 17×16	17	187.80	187.63		69	23×25	48	187.54	187.06	b.r.
15 20×21	31	188.02	187.71		70	24×22	49	187.58	187.09	
16 29×28	25	187.86	187.61		71	39×32	37	187.62	187.25	(14) s.
17 21×17	11	187.75	187.64		72	18×25	41	187.70	187.29	(14)
18 16×11	17	187.78	187.61		73	28×33	50	187.70	187.25	
19 22×25	24	187.79	187.55		74	28×30	37	187.65	187.28	
20 28×24	35	187.72	187.37	(13) b.c.	75	24×30	45	187.76	187.31	
21 22×26	21	187.48	187.27	(14) c.	76	36×33	45	187.71	187.26	c.
22 25×22	30	187.30	187.00	(15) b.c.	77	19×20	42	187.81	187.39	
23 33×37	30	187.63	187.33	c.s.	78	18×12	46	187.85	187.39	
24 24×25	34	187.59	187.25	(15) c.	79	21×15	21	187.79	187.58	c.s.
25 34×30	36	187.34	186.98	(12)	80	34×35	44	187.73	187.29	(15) c.r.
26 24×25	9	187.09	187.00		81	31×37	20	187.79	187.59	
27 33×27	25	187.19	186.94	(15) b.	82	24×27	22	187.80	187.58	(15) c.
28 27×22	20	187.43	187.23		83	32×44	39	187.87	187.48	s.
29 18×20	11	187.12	187.01	(12) c.	84	28×32	43	187.72	187.29	s.
30 13×11	10	187.25	187.15	木棺?	85	22×28	44	187.70	187.26	c.
31 14×22	28	187.29	187.01		86	30×27	36	187.39	187.03	
32 22×17	18	187.18	187.00		87	16×17	8	187.17	187.09	
33 19×17	7	187.06	187.01	(11)	88	22×17	20	187.21	187.01	
34 12×18	26	187.08	186.82	(12) b.c.	89	27×22	29	187.30	187.01	
35 19×18	27	187.30	187.03		90	15×15	20	186.84	186.64	
36 12×9	15	187.30	187.15		91	18×21	28	186.79	186.51	
37 26×25	20	187.42	187.22	(16)	92	46×37	33	187.81	187.48	(15) b.s.
38 19×15	22	187.50	187.28		93	30×30	25	187.84	187.59	(14) c.
39 37×32	23	187.46	187.23	(12)	94	29×30	25	187.88	187.63	(15)
40 25×28	24	187.49	187.25	(15) c.	95	31×30	26	187.80	187.54	(15)
41 20×26	13	187.56	187.43	(14) c.	96	42×23	26	187.70	187.44	
42 19×22	14	187.60	187.46	(15)	97	19×16	44	187.93	187.49	
43 30×24	36	187.69	187.33	(14) c.	98	21×30	34	187.90	187.56	
44 23×20	34	187.73	187.39		99	41×39	39	187.92	187.53	
45 22×20	40	187.78	187.38	鉄製品	100	23×27	27	187.94	187.67	
46 16×13	36	187.77	187.41		101	22×21	62	187.68	187.06	
47 16×22	33	187.70	187.37		102	18×21	24	187.63	187.39	
48 34×28	36	187.64	187.28	陶器	103	12×17	29	187.62	187.33	
49 41×33	39	187.68	187.29	(15) b.r.	104	18×20	29	187.47	187.18	
50 24×32	38	187.67	187.29	(12) b.c.	105	19×22	30	187.39	187.09	
51 37×37	33	187.62	187.29	P50±5% c.	106	17×22	17	187.49	187.32	
52 33×29	38	187.74	187.36	c.	107	18×17	9	186.89	186.80	
53 19×22	3	187.67	187.64		108	26×29	23	186.90	186.67	
54 22×23	38	187.67	187.29	(13)	109	26×25	28	187.05	186.77	
55 32×22	40	187.79	187.39	(15)						注 ( ) は柱の径 cm

### (5) 遺物 (第97図 第42、43表)

陶磁器13点のほか鉄製品、石製品、炭化米若干である。小破片が多く図示できるものは鉄器2点である。大部分は現状削平地以北の盛土整地層に集中し、南半部では施釉陶器の細片1点が出土するのみである。

遺構出土の遺物では柱穴及び溝の覆土に陶器のほか、少量の炭化米が含まれる。

#### 磁器

6点中皿3点が含まれるほか、白磁に脚を有する光沢の強い破片があるが、全体は明らかでない。二次加熱によって変色するものは青、白磁各1点である。白磁1点を除いては舶載品である。

#### 陶器

灰釉4点は、淡黄緑色の丸皿とみられ、底部2点のうち1点には輪トチンの痕跡が残る。白褐色釉をなす破片は碗の体部片で、二次加熱によって光沢を失い、胎土は灰白色をなす。

その他外面にのみ褐色釉を有する小片1点、素焼き香炉の体部片1点がある。P48覆土出土の香炉片は赤褐色をなし、III-7削平地出土片と同一個体とみられる。

#### 鉄製品 (第97図)

例は両端を折損する小柄とみられるが、錆化が著しく明瞭でない。現存長8.8cm、刃幅1.3cmを計る。III-6-1削平地I層出土。

⑩は長さ8.3cm、最大幅2.4cmで両端がやや丸味をもち、厚さ0.9cmでやや扁平をなす。錆瘤が著しく用途は不明である。P45掘り方覆土に出土する。

#### 石製品

観表の細片で全体は不明である。泥質凝灰岩製で表面は黒色をなし、滑めらかである。III-6-1削平地II層出土。

#### 穀類 (第43表)

Dg18-III溝覆土のほか、柱穴の掘り方覆土に混入する炭化米である。芒を有するものが含まれ、粹米、焼膨れするもの等が認められる。1粒の大きさは西辺中央部の斜面の出土米によつてみると次表の通りであり、長幅比の平均は1.81である。

第42表 III-6 削平地出土遺物

層位	青 磁	白 磁	染 付	灰釉陶器	鉄製陶器	その他の陶器	鉄 製 品	石 製 品	炭化穀類
I		2	1	3				1	
II	1	1	1	1	1	1		1	
遺構							1		米
計	1	3	2	4	1	2	2	1	

第97図 III-6 削平地出土遺物

第43表 III-6 削平地出土米計測表

長さ	幅	厚さ	長幅比	備考	No.	長さ	厚さ	幅	長幅比	備考
4.6m	2.7m	1.9m	1.70		7	4.7m	2.7m	1.7m	1.74	
4.6	2.4	1.7	1.92	有芒	8	4.7	2.2	1.7	2.14	
4.4	2.7	1.8	1.63		9	4.2	2.2	1.7	1.91	
4.7	2.6	1.7	1.81		10	4.2	2.4	1.9	1.75	
4.8	2.7	1.8	1.78		11	4.3	2.6	1.9	1.65	焼影れ
4.6	2.4	1.7	1.77		12	4.4	2.2	1.5	2.00	

## 要約

現状においては上段削平地の盛土斜面を西辺とする小削平地であるが、これに重複する削平地は共に西辺の地山を切って形成される。しかし、東辺の盛土層は殆ど認められず、緩やかな斜面に続いている。遺構の検出状況によっては削平の可能性もあげられ、南西を除く大部分は旧地形を残存させるものとみなされる。

重複する削平地は現状削平地を除いて西辺の溝及び以東の切土面によって推定されるものである。共に南北に長い矩形をなすとみられ、(4)、(6)溝によってIII-6-6 削平地は南北14.5~15m、同様に同一8、9 削平地では14.4mと近似値が得られる。東西では(9)、(10)溝によって7~7.2mとなる。ほど東西25尺、南北50尺と推計される。もっとも新しい削平地では東西20尺、南北5尺前後となり、前述の削平地はその2.5倍に相当している。

その移行については主として溝の切り合い関係によってみると、(9)→(10)=(8)、(1)→(2)→(3)=  
(7)→(4)→(5)→(6)となり、共に南北50尺の削平地と仮定するならば、併存する削平地は認められず、削平地は南偏のIII-6-8、9 削平地、これに前後して同一2、4 削平地、更に中央部のIII-5~7 削平地を経て現状削平地に続くものと推定される。重複する11、14号堀との関連については中央部及び南偏の削平地は覆土を切って形成しているが、北辺のそれについては明らかでない。

削平地に伴う遺構は溝を除いて掘立柱建物柱列と焼土である。柱穴はIII-6-1 削平地を除いて分布しているが、規則的な配置はみいだせない。柱列によってみると、棟方向は共に南北方向にあり、桁行5間前後と推定される。柱間は2.09~2.41mがもっと多く、7尺前後である。(1)~(3)柱列は共にIII-6-5~7 削平地方向に近似し、これに対応する建物の一部とも解される。

掘り込みを有する建物は東斜面の北東に位置し、III-7 削平地に接して平行する方向にあり、この点では同一7 削平地に伴うものとみなされる。

遺物は現状削平地を形成する盛土層に若干認められるほかは皆無に近い。特に南偏の削平地には一点も認められない。また、III-7 削平地東辺の盛土層に出土する同一個体の遺物が認められる点で削平による移動が考えられるものである。

## 7. III-7 削平地

III-7 削平地は鞍部三段の削平地に続く東斜面北西の削平地である。現状削平地は北辺を東西の通路によって限られ、南西二方は著しい小疊の散乱する斜面を切って段差をなし、東辺は大小疊の土留めによって画されている。東西6m、南北12mのほぼ長方形をなす小削平地である。この現状削平地に重複する削平地は更に南に検出され、削平地には柱穴群、溝5条、焼土遺構と若干の遺物を伴っている。東に続く斜面には、小ピットと溝2条が検出され、南辺には空堀2条が確認される。ここでは東斜面の遺構と遺物を含めて記し、空堀についてはIIIの郭内の塁壕に既述している。

### (1) 削平地の形成 (第95、98図 図版23)

現状削平地を含む削平地は西辺の切土面及び溝によって確認される削平地である。そのほか溝及び柱列の重複によっては更に削平地が推定される。

東斜面は約11°の勾配をなして殆ど地山面をなし、III-8 削平地に近い東辺では13号堀より東西通路に至る南北8.5m、通路以東の東西4.5mに渡って最大0.80mの盛土層によって被われ、緩やかな斜面をなす。また、削平地南辺では12号堀に沿って僅かな段差が認められるが、共に明確な削平地の形成は認められていない。

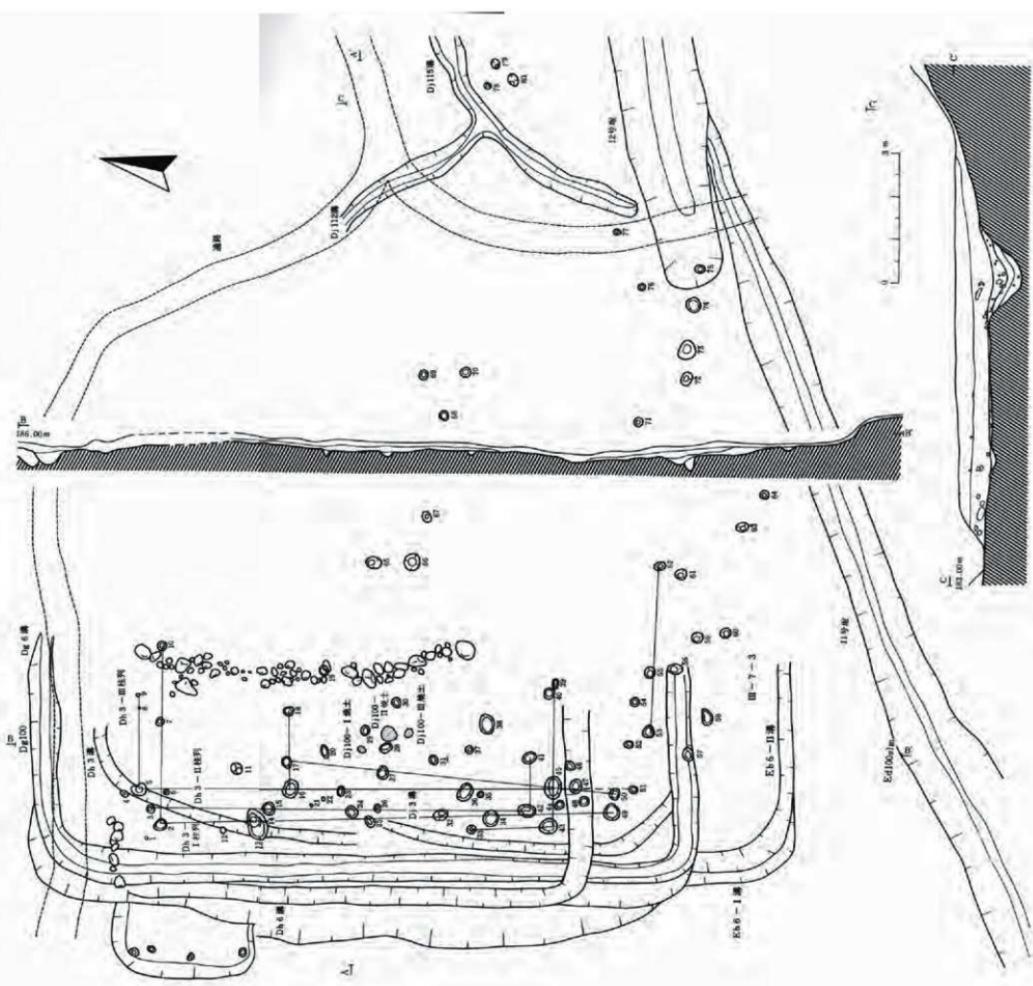
### 1. III-7-1 削平地 (第98図 図版23)

西辺の切土斜面及び東辺の土留めによって確認される現状削平地である。東西4.6m、南北12.8mを計る。西辺は東斜面を南北に切土し、29°勾配で0.70m下降する。切土斜面に沿ってDg6溝が南北し、北辺は不明であるが、南辺では東折して削平地を画している。東辺の土留めは削平地中央偏りに大小の自然石が並列してやや弓なりをなし、南北7.9m、幅0.5~0.6mに渡る。地山面より部分的に二段に積みあげ、その上面は整地層上に露頭する。また、北辺の通路南側には同様の自然石が東西1.5mに渡って並列し、削平地はこれを境にしてやや低位となる。削平地は平坦面をなし、上層は暗褐色土の整地層が被い、小疊は殆ど認められない。下層にはこれよりやや明るい褐色土層が地山面より0.20m前後を被い、共に炭化物・焼土粒が混入している。前後する2削平地を被うもっとも新しい形成である。

### 2. III-7-2 削平地 (第98図 図版23)

III-7-1 削平地に重複して、やや南偏する削平地である。現状削平地の整地層を除去し、Dg6溝によって確認される。地山を切土するもっとも低位の削平地であり、Dg6溝によって削平地は東西4.70m、南北14.1mを計る。

西辺の地山切土斜面はIII-7-1 削平地の延長にあって重複する部分では識別できず、同一1削平地西辺の切土面の大部分が同一2削平地による形成である可能性が強い。また、北辺では重複する14号堀の覆土を切って東折する Dg6溝が開削されている。



第98圖 Ⅲ-7 利平地道總平面圖

### 3. III-7-3 削平地 (第98図 図版23)

III-7-2 削平地南の小疊が散見される東斜面に検出され、西辺の切土面及び Eb6 溝によつて認められる南端の削平地である。III-7-2 削平地造成によって大半を失つており、東西4.7m、南北2.20m の地山切土面を残すのみである。Eb6溝が重複している点では前後する削平地であるが、削平地面及び西辺の切土斜面は前記の 2 削平地に比して明瞭に識別できず、西辺の緩やかな斜面に続く。

### 4. その他の削平地 (第98図 図版23)

III-7-2 削平地に重複する Dh3 及び Dj3溝によって推定される削平地のほか、同一 2 削平地を被う整地層によって推定される削平地がある。前者は同一 2 削平地によって識別できず、後者は焼土・炭化物粒を含む暗褐色土の整地層によって堅固な削平地面をなすが、共に削平地は明らかでない。

#### (2) 溝 (第98図 図版23)

##### 1. Dg6溝 (第98図 図版23)

盛土整地層を除去して地山面で検出される。全長23.80mで、南北に長く東折してコの字状をなす。南北14.50m、東西は5.0mまで確認される。南北方向はN11.4°Wである。溝の上幅0.60m、底部幅0.20~0.30m、深さは北西の最深部で0.36mを計る。断面は逆台形状である。底部はほぼ平坦で北に傾斜し、北東端でもっとも低い。南西隅との比高は0.64mである。覆土は底部より壁面下半にかけて砂質黄褐色土が薄く堆積し、上層は焼石をはじめ、焼土・炭化物粒の多い黒褐色土が一様に被っている。壁上面には地山黄褐色土に露頭する焼石や焼土を形成する部分が認められる。黒褐色土の覆土は焼失に伴つて一挙に埋め戻されているとみられる。遺物は含まれていない。また、重複する P56、57は共に溝に先行するものである。

##### 2. Dh6溝 (第98図 図版23)

西辺の地山切土面に沿つて溝状をなし、南西より東折する。北端は整地層で明らかでない。認められる長さは14.70m、溝幅0.60m、深さは南辺で0.12mを計るが、南北端では0.05m以下となってその痕跡を残すのみである。南北方向はN11.6°Wにある。底部は、南北方向ではほぼ平面をなし、東へ僅かに傾斜している。覆土は暗褐色土で北西に焼土・炭化物の微粒が認められる。

重複する Dj3溝、Dg6溝を切るほか、南西隅では Dg6溝に伴う切土面、またはこれに前後する西辺の切土斜面を切り、溝 5 条中ではもっとも新しい。また、P46~48は南辺で重複し、溝によって上部を失っている。

##### 3. Dh3溝及び Dj3溝 (第98図 図版23)

地山切土面に検出される小溝である。Dh3溝は南北7.15m、溝幅0.25mで北端でやや東へ湾曲

する。Dj3溝は Dh3溝の南にあって南北6.30m、溝幅0.25mを計る。南西より東折するが、Dh6溝によって失なわれ、全長は不明である。共に深さは0.05m前後で暗褐色土の覆土である。検出状況によればもっとも古い溝とみられ、南北方向は共にN2.5~3.0°Wにある。また、重複するP 4、5、13、14はこれよりいずれも新しい柱穴である。

#### 4. Eb6—I溝及びEb6—II溝 (第98図 図版23)

共に南西端の地山切土面に沿って認められる。南北方向より東へ湾曲するが、北はDg6溝によって失なわれて明らかでない。Eb6—I溝は確認される長さ3.66m、溝幅0.30m、深さ0.12mである。覆土は炭化物粒を含むやや堅い褐色土である。

Ed6—II溝は同一—I溝を切って開削され、長さ6.25mまで確認される。溝幅は西辺で0.50mを計り、東進して狭少となる。深さは0.18mで東へ緩やかに傾斜する。覆土は底部より炭化物の粒子や炭化する大麦を含む柔軟な黒色土が薄く被っている。

#### 5. Dj112溝及びDj115溝 (第98図)

III—8削平地に続く東斜面の盛土を除去して地山面に検出される。Dj112溝は南北3.96m、同115溝では6.40mで、共に不整である。溝幅0.50m、深さ0.10m以下で、南西端にやや深い。底部は平坦で地山に沿って東に傾斜する。覆土は一様な黒色土であり、同一溝の可能性が強い。

##### (3) 柱穴群 (第98図 第44表 図版22、23)

削平地の中央部より南西部にかけてやや密に分布しているが、北東では巨木の抜根によって明らかでない。また、東辺においても確認されるものは極めて少ない。削平地においては大小合せて60に及ぶ。径0.20~0.30m前後の円形で、検出面下の深さ0.30~0.50mのものが多く、最深は0.99mに達する。柱痕は15柱穴に認められ、径0.15m前後の円形をなす。しかし、規則的な配置を見いだせるものは少なく、僅かに南北柱列によって建物跡を推定できるものは5柱列である。また、東斜面では若干の柱穴状ピットが認められるものの、同様に建物については明らかでない。

#### 1. Dh3—I柱列 (第98図 図版23)

南北10.47m (34.554尺) 4間、東西は4.12m (13.597尺) 2間まで認められる。西辺P2—14—25—34—49の柱間は2.15 (7.096) —2.70 (8.911) —2.82 (9.307) —2.79m (9.208尺) で南北3間は等間をなす。東西P2—7—10では2.40 (7.921) —1.73m (5.710尺) を計り、P25—29及びP34—38ではそれぞれ2.12m (6.997尺) 、2.16m (7.129尺) となる。しかし、P29は極端に浅く不安定である。

掘り方はほぼ円形をなし、径0.30~0.40m前後で、深さは0.40~0.50mで一定している。南北P2—49には径0.14~0.16mの円形の柱痕が掘り方底部に達している。覆土は砂質の黄褐色土で炭化物の微粒がP14、25、34、49に認められる。

重複する遺構である Dh3溝を切っており、これより新しい柱列である。

## 2. Dh3-II 柱列 (第98図 図版23)

南北8.73m (28.812尺) 4間の柱列であり、南辺にはこれに直交する1.24m (4.092尺) 1間がある。南北の柱間 P 3—15—24—32—42は2.66 (8.779)—1.98 (6.535)—2.10 (6.931)—1.97m (6.502尺) でP 3—15が広い柱間となるほかは等間である。

掘り方は北端P 3がやや小さいほか、径0.30m前後の円形、または長円形をなし、深さ0.30~0.40mを計る。柱痕はP 32、42に認められ、径0.15mの円形をなす。覆土には褐色土が多く、炭化物粒は殆ど含まれていない。

第44表 III-7 前平地柱穴計測表

大さき	深さ	検出面高	底面高	備考	No.	大きさ	深さ	検出面高	底面高	備考
9×10cm	9cm	185.58m	185.49m		41	26×32cm	33cm	185.42m	185.09m	b. r.
30×30	50	185.58	185.08	0.9	42	28×41	37	185.53	185.16	0.9 b. r.
22×19	30	185.57	185.27	0.9 c.	43	34×46	92	185.50	185.08	0.9 b. r.
20×18	16	185.57	185.41	0.4	44	22×23	38	185.48	185.10	
32×35	58	185.49	184.91	0.2	45	59×37	99	185.48	184.49	0.9 b.
15×15	17	185.49	185.32		46	20×23	3	185.41	185.38	木根? b. r.
22×20	31	185.42	185.11		47	34×29	9	185.49	185.40	
7×7	15	185.38	185.23		48	22×23	36	185.49	185.13	
10×11	17	185.25	185.08		49	38×40	37	185.47	185.10	0.9 c.
22×23	14	185.15	185.01		50	28×26	10	185.47	185.37	木根?
27×26	17	185.47	185.30		51	19×24	40	185.47	185.07	
13×15	12	185.57	185.45		52	19×24	34	185.40	185.06	b. c. r.
42×46	20	185.53	185.33	r.	53	30×29	44	185.40	184.96	b.
31×25	51	185.53	184.02	0.9 s.	54	24×23	65	185.19	184.54	0.9 小柄
30×33	36	185.45	185.09	c.	55	28×24	20	185.12	184.92	s.
42×38	39	185.45	185.16	b. s.	56	23×34	16	185.18	185.02	s.
27×25	15	185.46	185.31	s.	57	32×24	35	185.45	185.10	
22×25	17	185.49	185.32	c. r. s.	58	41×28	4	185.35	185.31	0.9 b. r.
25×25	19	185.41	185.22		59	24×26	25	185.11	184.86	
32×18	20	185.51	185.31	木根? c.	60	24×26	15	185.20	185.05	b. c.
9×9	12	185.46	185.34	木根?	61	25×29	36	184.85	184.49	
8×9	10	185.46	185.36	木根?	62	20×29	24	184.72	184.48	
34×20	9	185.45	185.36	木根?	63	28×23	34	184.79	184.45	
29×27	43	185.53	185.10		64	22×23	20	184.61	184.41	
27×23	49	185.56	185.07	0.6 c.	65	31×36	36	184.70	184.34	
20×15	35	185.54	185.19	b.	66	38×37	18	184.67	184.49	
35×26	12	185.46	185.34	b. c.	67	27×24	23	184.36	184.13	
22×29	15	185.49	185.34		68	23×22	18	183.80	183.62	
25×22	11	185.42	185.31		69	24×20	18	183.61	183.43	
23×21	16	185.37	185.21		70	21×23	16	183.47	183.31	
22×23	12	185.45	185.33	c.	71	21×19	15	184.04	183.89	
17×30	45	185.54	185.09	0.9 s.	72	32×26	13	183.93	183.80	
19×20	16	185.56	185.40		73	44×42	15	183.86	183.71	
38×35	45	185.56	185.11	0.6	74	32×33	12	183.67	183.55	
17×15	13	185.49	185.36	c.	75	21×25	15	183.29	183.14	
41×35	71	185.50	184.79		76	16×15	11	183.47	183.36	
20×18	19	185.52	185.33	b. c.	77	13×15	11	183.02	182.91	
48×33	41	185.40	184.99		78	17×14	3	181.89	181.86	
25×14	18	185.07	184.89		79	26×19	9	181.82	181.73	
27×25	22	185.14	184.92		80	27×25	11	181.90	181.79	

### 3. Dh3—III柱列（第98図 図版23）

南北9.66m (31.881尺) 4間である。P 5—16—36—45の柱間は3.49 (11.518)—4.12 (13.597)—2.02m (6.667尺) となって不揃いではある。更に南北延長線にはP 45…51、東西にはP 16—18、P 45…40等があるが、いずれも浅く不確定である。

掘り方は長円形、または円形をなして深く、P 36、45ではそれぞれ0.70、0.99mに達する。柱痕はP 45に認められ、径0.15mの円形をなす。覆土は小礫を含む黄褐色土であり、底部は粘性が強い。

その他の柱列には南北P 17—27—47—50のDi3柱列、P 33—43—39、東西柱列P 53—55—57等があるが、共に同一建物に伴う柱列と特定できない。

#### (4) 焼土（第98図）

削平地中央部より東偏する地山に形成される3焼土である。Dj100—I～IIIのうち中央のIII—II焼土が最大で径0.38mの円形をなし、非常に固く焼き締っている。厚さ0.03m前後で上部を削平されているとみられる。建物に伴うものかは明らかでない。

#### (5) 遺物（第99図 第45、46、122表 図版44、45、47）

31点余りのうち削平地における出土は少なく、青磁1、染付3、陶器2、古銭1点の合せて8点と炭化穀類が若干である。東斜面では特にIII—8削平地に近い盛土層に集中しており、青磁器のほか、石製品、穀類等である。

第45表 III—7 削平地出土遺物

層位	青 磁	白 磁	染 付	灰 陶 器	その他の 陶器	須 恵 器	鐵 洋	金 屬 製 品	古 銭	石 製 品	植物遺 物
1	5	2	4	2		1		1		2	米・麦
2		1	5	2	2	1	1		1		
遺構								1			米
計	5	3	9	4	2	2	1	2	1	2	

遺構に伴う遺物ではP 54の掘り方底部の覆土に小柄1点が出土している。

#### 青磁（第99図 図版44）

碗1点、皿4点である。碗の体部片は二次加熱によって汚れた暗褐色をなす小片である。皿の口縁部2点のうち1点は輪花皿である。体部に棱を有し、外反して立ち上がる。一様の灰緑色を呈し、線描は明瞭でない。推定口径11.2cm。(1点は輪花皿とみられるが、(1)に比してやや細かに立ち上がり、器厚が僅かに厚い。暗緑色釉には貫入が走り、口縁直下にかすかな線刻が認められる。胎土は均質で灰色を呈する。推定口径11.2cm。共に東斜面1層出土。

#### 白磁（第99図）

3点共に皿である。口縁部1点は体部よりゆるやかに端反りし、僅かに厚くなる。施釉は外側に厚く、口縁直下で0.1cmである。二次加熱によってやや灰白色をなし、微細な貫入が内外面に広がる。胎土は灰白色で小さな亀裂がみられる。推定口径15.8cm。東斜面II層出土。

底部は小片であり、全体は不明であるが高台には砂粒の付着が著しい。施釉は高台内がやや褐色をなすほかは白色で胎土も均質緻密である。推定高台径6.0cm。東斜面I～II層出土で青磁と共に舶載品である。

#### 染付（第99図 図版44）

9点のうち碗1点、皿4点が含まれる。2点は二次加熱をうけている。碗の口縁部(12)はIII-9削平地出土地と接合し、体部よりやや内彷して立ち上がる。施釉はやや青味のある白色をなし、外面の草花文は薄い灰青色をなす。胎土は均質で淡褐色を呈する。推定口径9.0cm。削平地I層出土。皿(14)は口縁部にくびれを有し、僅かに端反りして厚くなり、口縁端内外に棱を有する。施釉は口縁部のくびれ及び高台脇にやや厚く、光沢が強い。青味がかった白磁に濃淡のある草花の描画は流れて不鮮明である。また、内外に縱方向の貫入が部分的に走る。推定口径12.0cm。東斜面盛土II層出土。碗・皿各1点が伊万里産とみられ、他は舶載品である。

#### 灰釉陶器（第99図 図版45）

底部3点と口縁部の細片1点で、共に淡黄緑色の皿片である。底部は分厚く、低い削り出し高台である。施釉は高台脇にやや厚くなるが、特に側では高台脇に薬瘤をつくり、内面では0.4cmの厚さに及ぶ。共に光沢が強く、内外に大小無数の貫入が認められる。推定高台径は側～側はそれぞれ6.0、5.8、5.4cmである。側の高台内には輪トチンの痕跡を有し、内径1.8cm、外径2.7cmを計る。側は削平地II層、他は東斜面盛土層出土。

#### その他の陶器及び須恵器（第99図 図版45）

施釉陶器30は器高の低い小皿片である。内面は口縁部にかけて光沢のある灰青色の施釉であるが、口縁端はやや褐色化している。外面は淡白色を呈し、胎土は均質で吸水性が弱い。推定口径11.2cm。東斜面盛土層出土。

その他、素焼きの香炉片がある。9弁を有する印花文が認められるが、細片で全体は明らかでない。内外赤味のある褐色を呈し、胎土は細粒で黒褐色をなす。

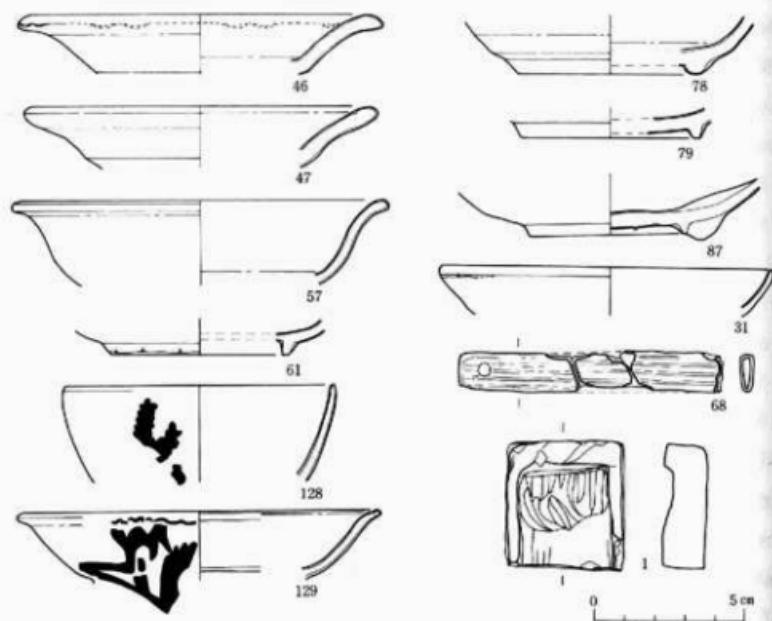
須恵器2点は口縁部と体部である。体部片は外面黒色をなし、胎土は暗赤褐色で粗砂が目立つ。削平地及び東斜面I層出土。

#### 金属製品及び鉄滓（第99図 第122表）

錫は緑青を帯びる小柄で一端を欠損する。現存長8.7cm、径1.2cm、小口径1.0cmを計る。棟方、小縁共に腐蝕が進み、やや丸くなる。地板には0.1cm幅の細線5条が平行して認められ、径0.4cmの穿孔を有する。P54掘り方覆土下層出土。

ほかに鉄板1片、二次加熱によって一部を欠損する永樂通寶1点がある。

鉄滓は細片化しているが同一個体とみられ、総量278gである。灰褐色の海綿状をなし、細砂の付着が多い。



第99図 III-7 削平地出土遺物

石製品（第99図 図版47）

小硯(1)は灰白色をなす石質凝灰岩製の長方硯であり、縦4.1cm、横3.7cm、厚さ1.3cmを計る。粗雑な成形で硯背は比較的滑らかである。硯唇は不整で墨池には右方向より乱雑に削りとる工具痕を残す。墨堂が僅かに磨滅している。

砥石(2)は断面方形の破片である。4 砥面共によく研磨され、1面には先鋭な研磨痕が認められる。二次加熱によって赤褐色、または灰褐色をなす。斜長石流紋岩製である。共に東斜面土層出土。

炭化穀類（第46表）

削平地II層に微量の炭化米が出土する。また、Eb6-II溝覆土の黒褐色土に混入して大半が出土している。麦は焼膨れして欠損しているものが多いが、芒を残すものが含まれる。大小種が混在して、20例による長幅比の平均は2.05である。

第46表 III-7 削平地出土麥計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考	No.	長さ	幅	厚さ	長幅比	備考
1	6.2mm	3.1mm	2.6mm	2.00	有芒	6	6.2mm	2.8mm	2.2mm	2.21	
2	6.6	3.1	2.4	2.13		7	5.9	2.8	2.4	2.11	有芒
3	6.2	2.6	2.8	2.38	焼膨れ	8	4.2	2.3	2.1	1.83	
4	5.7	3.1	2.3	1.84	有芒	9	6.2	2.7	2.4	2.30	
5	5.7	2.8	2.2	2.04		10	4.7	2.6	2.1	1.81	

III-6 削平地に続く緩斜面を切って形成される小削平地であり、南北方向の切土面によって重複する削平地と認められる。削平地西辺には南北溝が配され、共に両端は東折して削平地境をなす。切土に伴う東方への盛土は現状削平地を除いて確認されず、不明な点も多い。

重複する削平地は溝遺構によって推定されるものを含めて6削平地であり、切土面によって共に南北方向に長辺とする削平地とみられる。地山切土によって確認される規模は東西4.6~4.70m、南北12.8~15.20mを計り、東西15尺、南北50尺前後の削平地とみられる。これを上回る規模の造成は認められない点でDh3溝に伴う削平地はEb6溝の南西隅にあたり、2条のいずれかに対応する溝の可能性もあげられる。削平地の移行についてはDh3、Dj3溝に伴う推定される削平地を除いては殆ど同一方向にあって近接する段階の削平地とみられる。検出状況によつては南より北へ移行し、前者を含めて東方より西方への変遷を経て現状削平地に至り、その間火災焼失に伴う改変が進行しているものと解される。

削平地に伴う遺構は主として掘立柱建物遺構であるが、共に東辺が不明であり、確定できるものは認められない。確認される柱列は切土方向や溝遺構によって南北棟の西辺とみられ、桁行4~5間となり、総長35尺前後をなす。柱間では若干の広狭があり、3.49(11.518)~3.59m(11.848尺)、2.66(8.779)~2.77m(9.142尺)、1.97(6.502)~2.26m(7.459尺)とほぼ3分される。広い柱間の3.49~3.59mは1.75(5.776)~1.80m(5.941尺)2間にあたり、Dh3-III柱列における4.12m(13.597尺)は狭い柱間2.06m(6.797尺)2間に相当している。従つて柱間によってみるとDh3-Iと同一II柱列、Dh3-IIIとDi3柱列にはそれぞれ共通する柱配置を有しており、同様の建物における建て替えの可能性が推定される。柱列を南北方向によつてみると、(2)、(3)柱列のN11.0~11.3°W、(1)柱列のN13.0°Wに対してはN11.4~11.6°W方向のDg3、Dh6溝が近似し、柱配置によつてはIII-7-1削平地に(2)柱列、同一2削平地に(3)または(1)柱列の対応が考えられる。また、Dh8、Dj3溝についてDi3柱列のほか、東西柱列もあげられるが共に明確ではない。また、III-7削平地よつて東半を失うDh6建物についてはIII-7-1、2削平地形成以前の建物とみられる。

第47表 III-7 削平地建物柱列計測表

柱列名	規格	染	行	桁	行	桁	行	柱	間	方向
Dh3-I	2~X4脚	4.12m(13.597尺)	10.47m(34.554尺)	m	2.77m(9.142尺)	2.15m(7.096尺)	N13.0°W			
Dh3-II	1~X4(5)	1.34(4.092)	8.73(28.942)	2.66(8.779)	1.97(6.502)	N11.3°W				
Dh3-III	1~X4	2.43(8.020)	11.05(36.469)	4.12(13.597)	2.02(6.667)	N11.0°W				
Di3-	2~X3?	5.22(17.228)	8.05(26.568)	3.95(13.036)	2.26(7.459)	N6.8°W				

削平地に出土する遺物は著しく少ない。陶磁器にはIII-6点が認められる。二次加熱をうけるものが含まれ、溝の壁面に形成される焼土と相俟つて火災に伴う影響が推定される。

東斜面では小礫の散乱する地山面であり、通路以東では最大0.80mの盛土層が堆積し、南辺

の12号堀よりIII-8削平地に及んでいる。遺構は溝を除いては認められないが、遺物の大半が盛土層に集中している点では以西のIII-6、7削平地にかかる移動が考えられる。

北端では盛土を切って現状の東西通路が開かれ、これよりIIIの郭中央部削平地へ分岐する路が盛土境を南北しており、その時期は12号堀が埋没して大規模な削平地造成の行なわれた後以後に求められる。

### 8. III-8削平地

鞍部東辺にあってもっとも低位の小削平地である。北は通路に限られ、南はIII-12削平地斜面に画される。現状では東斜面を切る南北6m、東西5mまで確認される。

当初の調査区域は削平地西辺にあたる東西2mである。調査は東辺に東西0.3m、南北5.6mの試掘溝を設定し、合せて削平地の遺構検出を進めるが、調査途中で現状保存区域となり、削平地全域を埋め戻している。

遺構検出は盛土層を除去し、試掘溝ではほぼ地山面直上まで0.6m前後を掘り下げるが、これは認められていない。盛土層は黒褐色土、あるいは暗褐色土でIII-7削平地東斜面に続く盛土層に類似し、南辺に人頭大の礫が比較的多い。南辺に推定される空堀廃棄以後の盛土層と無関係である。

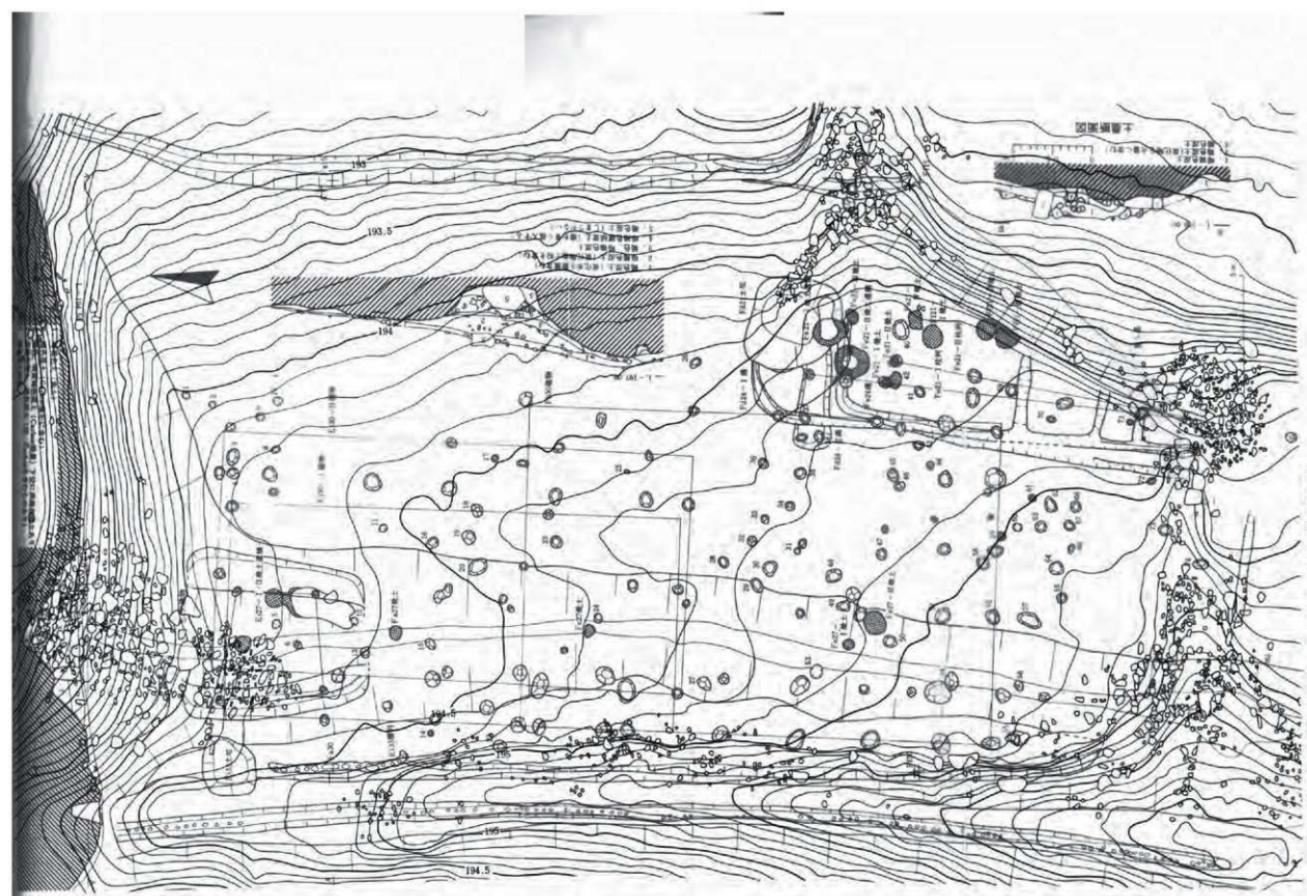
遺物は南削平地境の斜面より擂鉢の体部片1点が出土している。条痕は0.1cm幅で浅く、0.5cm間隔で5条まで確認される。内外淡褐色を呈し、胎土は均質で吸水性が弱い。

### 9. III-9削平地の遺構と遺物

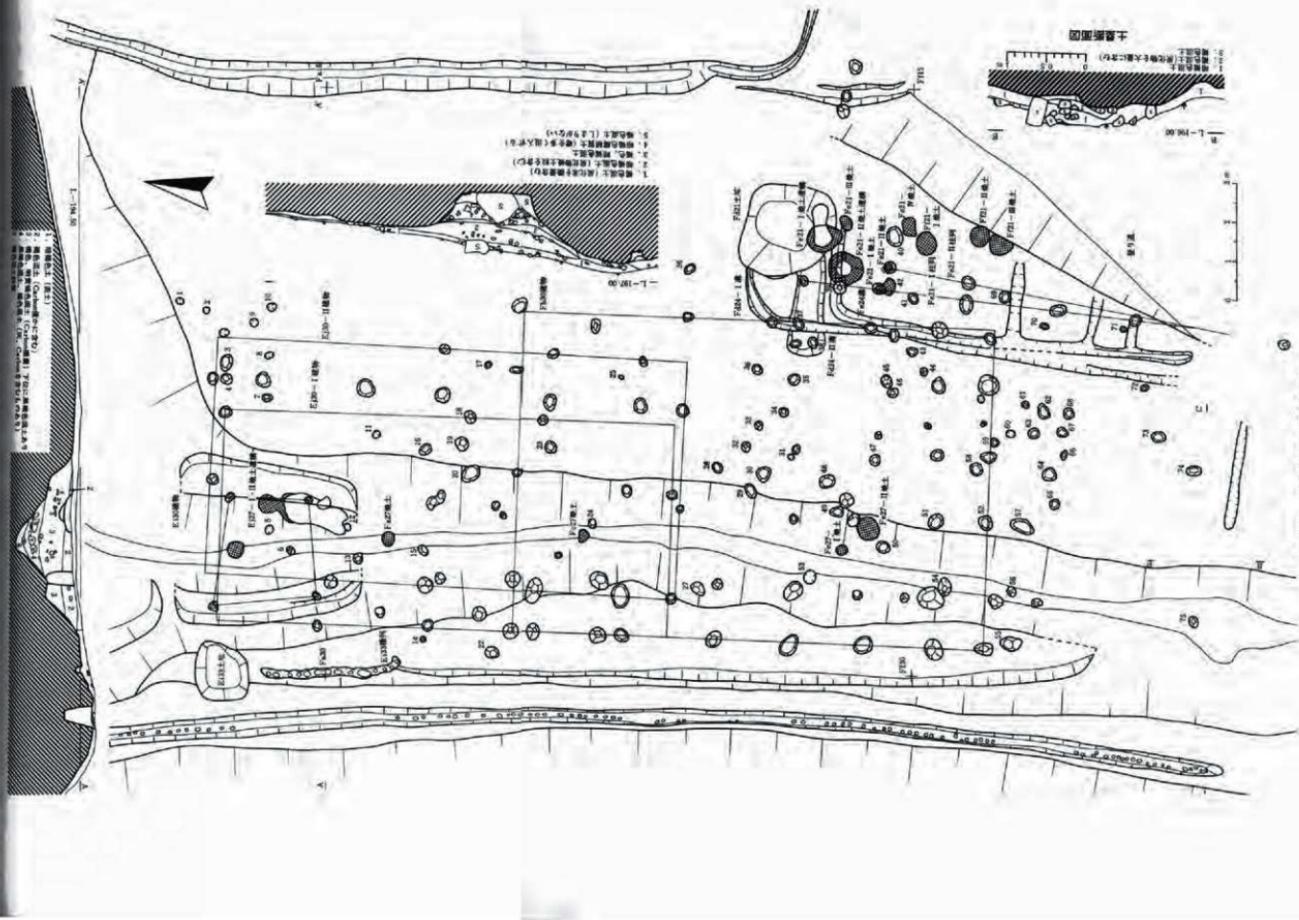
III-9削平地はIIIの郭の南西部最高位にあり、当郭西端の北に位置する。現状で観察される地形は次のとおりである。北は比高約2.5mの斜面で約30度の急勾配をなす。斜面西半では角礫が大量に認められ、礫の露出部分が僅かな窪地をなす。西には土壠状の高まりがある。内堀は平行して走る。南西部が一番高く、北に緩やかに傾斜し、北端では上面が比較的平坦である。南は最高位削平地の中央から分岐した土壠状の高まりによって区画され、その東端は中ごろで消滅する。延長部では大礫が認められる。また、高まり上面にも大小の角礫が多数看取られる。あたかも積石遺構の崩壊を想起させる。東は緩やかな斜面で続いており、その境界は不明確である。南東部外側には北東・南西方向の登り道が付いており、緩やかなスロープをなす。この北斜面では斜面中ほどに角礫が点在している。その東端部には礫が多数認められ、III-10削平地南端の土壠状の高まりに続く。

規模は南北約24.5m、東西約13.5mで、南東部を欠くが南北に長い方形をなす。その面積はおよそ300m<sup>2</sup>で、標高193.50~195.20mにある。削平地内の比高差は約1.7mで、北東方向は緩やかに傾斜する。西辺の方向はN12°Eである。なお、当削平地には埋没している削平地があり、現状地形に近いものをIII-9-1削平地とし、埋没しているものをIII-9-2削平地とし

新100号 斯計水電工程圖



新100图 三-9剖面地层全图



て記述する。

### III-9-1 削平地

#### (1) 削平地の形成

削平地は水平に近い平坦地であるが、西半が削平され、東半に盛土されている。この地域の自然地形は約10度の傾きをもつ斜面であり、高さが約1.5m、幅が約9.0mに渡って削平されたと見られる。また、削平地の下には11号堀、Ei 30建物、III-9-2 削平地等があり、これら古い遺構を埋没している。

古遺構の盛土を観察すると、11号堀では褐色混土、明黄褐色混土、茶褐色粘質土等の凝灰岩風化土が主体をなし、大量の角礫が投入されている。おおむね礫を含む層が中位にあり、炭化物等を含む黒褐色土層が下位に位置する。最下層には砂質に富む褐色混土が堆積しており、自然堆積土と見られる。Ei 30建物も黄褐色混土、褐色混土等の凝灰岩風化土が主体をなし、大量的礫が投入されている。礫は中位層に多く認められ、その上では層状に堆積している。なお、これらの埋土には馬、牛の歯等が混入していた。

III-9-2 削平地では黒褐色混土、褐色混土で、非常に堅く締っている。堀、建物同様凝灰岩風化土が主体をなすが、炭化物等を多く含み黒色を帯びる。礫はそれほど多くない。ただし、削平地東端では角礫を据えて土止め施設としている。登り道の北斜面に点在する礫がこれである。検出された遺構は土塁2、柵列2、柱穴及び建物4、焼土遺構10、土塹2である。なお、IIIの郭西辺に位置する南北の土塁と、その中央を平行して走る柵列についてはIの郭東辺の塁まで触れているのでここでは省略する。

#### (2) 土塁、Fg 33土塁（第100図）

西は南北土塁にT字状に接続し、東端は削平地中頃で消滅する。その延長線上では礫が露出するのみである。西半は現状でも高まりとして把握されるが、東半は低く幅狭くなっている。高まりの確認される範囲は南北土塁の中心から約5.0mである。高さは約1.4mを計測する。

当土塁はすべて盛土によって構築されたもので下位には11号堀、III-9-2 削平地がある。11号堀の埋土はFh 33からFh 24の断面によると、下位から中位にかけて礫を含む褐色混土が積し、その上に明黄褐色粘質土が薄層をなしている。その上には礫を大量に含む褐色混土、茶褐色混土が厚層をなしており、土塁積土と考えられる。III-9-2 削平地では、前述の如く茶褐色混土、褐色混土等で整地されているが、切土西端の土塁延長部には大礫が積まれたよう東西に並んでいる。土塁の芯としたものではないかと考えられる。

なお、土塁の上面は大小の礫で覆われており、その中には配列されたと見られるのもある。それは面を外側に向けて並べたもので、土塁の肩部にあたる。その幅は約1.6mで、確認できる長さは約5.5mである。方向は東で約8度南に偏しており土塁の方向と若干異なる。なお、土塁は盛土からなり石列は土塁上面に認められ、後補施設と考えられる。

(3) 檇列、Ej 35檇列 (第100図 図版31)

削平地の北西端に位置し、南北土塁中央檇列の東約1.2mにある。南端は Ej 30建物の南約1.1mでゆるく東折し、北半は Ej 33土塁に破壊されたと見られる。長さは3.5mで、15個の柱穴が確認された。方向は N7Wである。当遺構は少しが溝状をなすが、柱穴の連続した形をなし、間隙なく並べられた一本檇列と推測される。柱穴は直径0.2mほどの円形で、深さは検出面から0.2m前後である。柱穴の中には先端の尖るものがあり打ち込まれたものと考えられる。埋土は黒褐色混土でボソボソしている。

(4) 柱穴及び建物

検出された柱穴は126個である。この中にはIII-9-2 削平地の14個を含んでいる。それらは西半に多く、削平面に集中している。建物と確認されたものは4棟である。

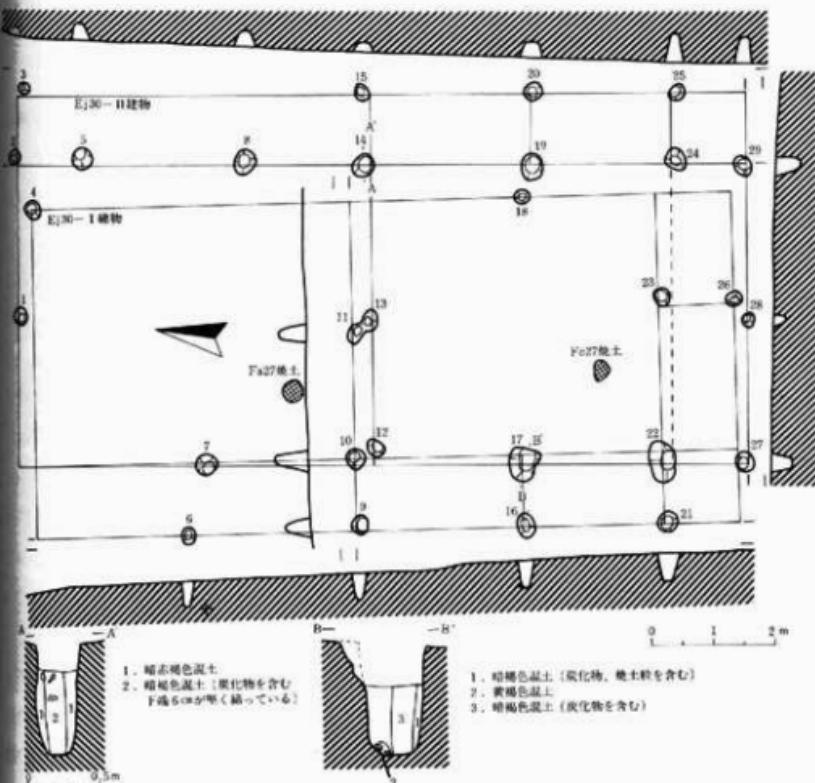
第48表 III-9 削平地検出柱穴一覧表

No.	大きさ cm	深さ cm	検出面 の高さ m	底面の 高さ m	備 考	No.	大きさ cm	深さ cm	検出面 の高さ m	底面の 高さ m	備 考
1	19×18	14	194.03	193.89		39	36×31	17	194.49	194.32	
2	18×17	15	194.06	193.91		40	51×39	17	194.49	194.32	
3	44×30	9	194.28	194.19		41	30×23	39	194.56	194.17	
4	30×27	19	194.28	194.09		42	36×26	41	194.63	194.22	
5	22×20					43	26×22	8	194.69	194.61	
6	22×15	32	194.34	194.02	染付201	44	22×19	35	194.85	194.50	
7	25×20	7	194.36	194.29		45	34×26	3	194.36	194.33	c.
8	21×18	14	194.26	194.12		46	28×25	21	194.85	194.64	
9	23×21	22	194.16	193.94		47	29×26	27	194.95	194.68	c.
10	24×21	14	194.03	193.89		48	38×34	19	194.85	194.66	
11	21×19	33	194.41	194.08		49	34×28	30	194.89	194.59	
12	20×20					50	40×36	25	194.92	194.67	
13	26×25	42	194.49	194.07		51	37×27	26	194.93	194.67	
14	15×14	16	194.58	194.39		52	36×32	27	194.62	194.35	
15	24×20	15	194.45	194.30	c. b	53	35×30	48	194.84	194.36	c.
16	34×26	13	194.52	194.39	c. r (20×18)	54	43×38	49	195.05	194.56	
17	19×17	9	194.37	194.28		55	54×37	32	194.99	194.67	
18	34×28	58	194.59	194.01		56	23×22	33	195.07	194.74	c.
19	36×34	42	194.52	194.10		57	64×36	6	195.06	195.06	染付254.c.
20	53×41	31	194.52	194.21	染付216.e.	58	34×32	3	195.00	194.97	
21	36×35	25	194.58	194.31	鉄107	59	24×22	11	195.00	194.89	c. (18×16)
22	36×30	1	194.77	194.76		60	22×19	3	195.02	194.99	
23	33×29	44	194.76	194.32		61	22×18	19	195.00	194.81	r. c.
24	24×22	29	194.61	194.32		62	40×28	28	195.07	194.79	r.
25	14×10	8	194.63	194.55		63	28×27	3	195.04	195.01	
26	32×23	18	194.46	194.28		64	36×33	6	195.07	195.01	r. c.
27	37×30	22	194.77	194.55		65	27×25	3	195.08	195.05	
28	31×25		194.81		漆.e.	66	25×17	8	195.05	194.97	
29	39×24	9	194.79	194.70		67	30×26	2	195.05	195.03	
30	39×35	20	194.87	194.67		68	29×26	33	195.02	194.69	c.
31	18×17	30	194.76	194.46		69	32×30	21	194.58	194.37	
32	26×25	21	194.85	194.64		70	24×16	25	194.57	194.32	
33	22×21	17	194.79	194.62		71	32×28	22	194.58	194.36	
34	25×24	25	194.76	194.51		72	24×16	10	194.58	194.48	
35	28×26	10	194.69	194.59		73	34×28	69	195.08	194.39	
36	28×26	14	194.51	194.37		74	40×26	13	195.17	195.04	
37	30×21	12	194.60	194.48		75	29×24	4	194.60	194.56	
38	29×25	16	194.63	194.47	(14×13)						

### 1. Ej 30—I 建物 (第101図 図版24)

都平地の北西部に偏在し、Ej 30-II建物とほぼ同位置にある。北半が Ej 30建物、南半が Fb 建物と重複している。前者より新しく後者より古いと見られる。Ej 30—I建物は同一II建物の西約1.3mに位置し、軸行方向が N8°W を示す。南北約11.5m (約38尺)、東西約5.5m (約18尺) の南北棟で5間×3間の建物と推測される。西・南に1.21m (約4尺) の庇が取り付く。廻の隅柱は十分吟味したにもかかわらず検出されていない。

軒行は西庇柱列が南から4尺 (1.21m)、7.5尺 (2.27m)、9.5尺 (2.87m)、9尺 (2.72m)、8.5尺 (2.57m) であり、南3間まで西側柱列と相対応している。東側柱列はP4とP18の2個のみである。梁間は南第2列が西から4尺 (1.21m)、8尺 (2.42m)、6尺 (1.81m) であり、南柱P26が対応関係にある。南第4列は4尺 (1.21m)、7尺 (2.12m) である。



第101図 Ej 30—I・II建物

第49表 Ej 30-I・II建物柱穴一覧表

No.	大きさ cm	深さ cm	検出面 の高さ m	底面の 高さ m	備考	No.	大きさ cm	深さ cm	検出面 の高さ m	底面の 高さ m	備考
29	29×28	7	193.45	193.38		16	43×34	45	194.75	194.28	c. (18×18)
2	30×26	10	194.28	194.18		17	69×40	25	194.26	194.01	c. (15×15)
3	25×21	24	194.20	193.96		18	26×24	8	194.25	194.17	鉄(108)
4	33×30	29	194.33	194.04	灰釉陶器129	19	41×35	11	194.62	194.51	r. c.
5	38×36	33	194.36	194.03	(18×16)	20	30×24	16	194.53	194.37	c.
6	28×21	24	194.30	194.06		21	39×32	38	194.85	194.47	c. (15×14)
7	32×32	37	194.38	194.01	c. (16×16)	22	62×45	53	194.73	194.20	c.
8	47×41	29	194.47	194.18	b. r. c. (16×16)	23	30×25	35	194.63	194.28	
9	31×27	15	194.52	194.37	c. (15×15)	24	39×33	12	194.73	194.61	c.
10	41×39	23	193.95	193.72	r. c.	25	26×20	10	194.59	194.49	c.
11	30×20		194.46		r. c.	26	24×22	6	194.64	194.58	c.
12	28×24	42	194.40	193.98	c.	27	29×29	29	194.75	194.46	c.
13	38×20	37	194.44	194.07	r. c.	28	22×18	15	194.68	194.53	c.
14	28×25	21	194.48	194.27	r. c. (15×14)	29	33×31	16	194.75	194.59	(18×15)
15	40×37	17	194.53	194.36	r. c.						

柱穴は直径30cm前後の円形で、深さが40~50cmほどである。P 17、22は69×40cm、62×45cmで重複している。埋土は茶褐色混土で、柱痕部が黒褐色混土で炭化物を含む。北東隅柱(P 4)から灰釉陶器の皿破片が出土し、P 18からは刀の一部と思われる鉄片(108)が出土している。

### 2. Ej 30-II建物 (第101図 図版24)

Ej 30-I建物とほぼ同位置にある。南北約12.1m(約40尺)、東西約6.0m(約20尺)の南北2棟で、桁行方向がN7°Wである。5間あるいは6間×3間の建物と推測され、東に1.21m(4尺)の庇が取り付く。桁行北端及び南端にも同様の短い柱間があり、北庇、南庇の可能性がある。Ej 30-I建物同様、南東隅柱は検出されていない。

桁行は東第2列が南から4尺(1.21m)、7.5尺(2.27m)、8.5尺(2.57m)、7尺(2.12m)、9尺(2.72m)、4尺(1.21m)であり、西側柱列は4尺(1.21m)、7.5尺(2.27m)、8.5尺(2.57m)、9尺(2.72m)、11尺(3.33m)である。南3間までが相対応し、北間の11尺は7尺、4尺からなると見られ、第4間、第5間が逆になった形と考えられる。東庇では3間までが対応関係にあるが、それ以北では柱穴が確認されていない。梁間は南庇列が西から7.5尺(2.27m)、8.5尺(2.57m)、4尺(1.21m)で、北妻柱列は第2間が8.5尺に近く同値を示すと見られる。

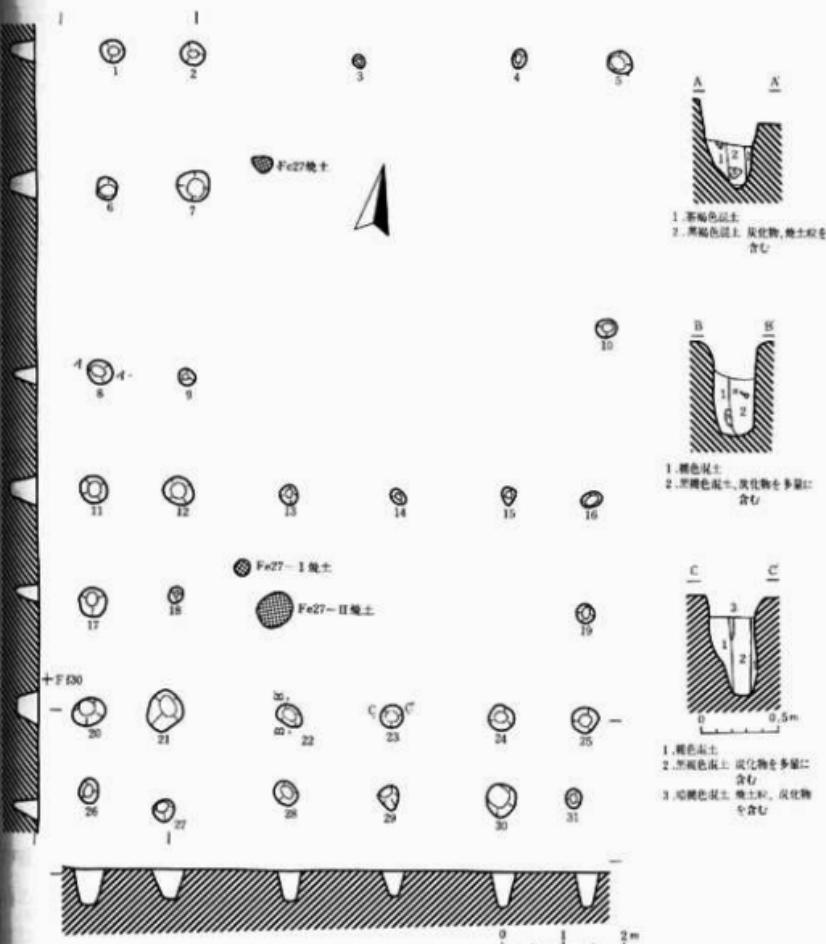
柱穴は直径0.3m前後の円形で、深さは約0.7mほどである。埋土は赤褐色混土で柱痕部が黒褐色を呈し明瞭に識別できる。柱穴の中には埋土に炭化物を含むものがあり、底部近くの6cm突き固めたものもある。P 12の上面からは寛永通寶が発見されている。

### 3. Fb 30建物 (第102図 図版24)

Fb 30建物は削平地西辺に近接しており、中央より僅か南に寄っている。北半がEj 30-I・IIの両建物と重複する。南北約12.1m(約40尺)、東西約8.2m(約27尺)の南北2棟で、その比率は3:2である。当削平地では最大の規模をもつ。桁行方向がN8°Wである。6間×5間の建物で西・南・東が1.36m(4.5尺)の庇となっている。ほぼ完全に近い形をなす。

桁行は西側柱列が南から4.5尺(1.36m)、6尺(1.81m)、6尺(1.81m)、10尺(3.03m)、

7.5尺 (2.27m) であり、東庇列では4.5尺 (1.36m)、6尺 (1.81m)、6尺 (1.81m)、9.5尺 (2.87m)、14尺 (4.24m) である。南3間までが相対応するが、それ以北では対応関係はない。西庇列では同値を示しすべて対応している。梁間は南側柱列が西から4.5尺 (1.36m)、6尺 (1.81m)、6尺 (1.81m)、6尺 (1.81m)、4.5尺 (1.36m) で、北妻列では4.5尺 (1.36m)、9尺 (2.72m)、9尺 (2.72m)、4.5尺 (1.36m) である。南側柱列では中央18尺が3間であり、北妻列では2間となっている。前者は3等分され、後者は2等分されたと見られる。南庇列及び南第4列はすべて南側柱列に相対応している。



第102図 Fb30建物

第50表 Fb30建物柱穴一覧表

No.	大きさ	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	備考	No.	大きさ	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	備考
	cm	cm	m	m			cm	cm	m	m	
1	38×38	52	194.74	194.22		17	49×43	38	195.05	194.67	
2	42×39	47	194.41	193.99		18	26×24	23	194.67	194.44	c.
3	22×20	11	194.50	194.39	r.c.	19	32×27	11	194.40	194.29	(16×15)
4	32×18	28	194.57	194.29	r.c.	20	49×45	18	195.04	194.86	(19×18)
5	34×34	13	194.40	194.27		21	63×59	16	194.18	194.02	古鉢57.鉄149.156
6	42×40	39	194.84	194.45	(16×16)	22	43×35	4	195.02	194.98	c. (16×1)
7	52×41	68	194.73	194.05	c.	23	34×29	20	194.96	194.76	r.c. (18×15)
8	44×37	34	194.91	194.57	(15×13)	24	40×37	21	194.88	194.67	r.c. (15×15)
9	29×26	23	194.51	194.28	灰陶器156.c.(18×18)	25	44×40	31	194.62	194.31	c. (18×15)
10	29×26	18	194.54	194.36		26	46×34	56	195.02	194.66	
11	60×42	31	194.98	194.67	c. (15× )	27	36×34	50	195.05	194.55	c.
12	55×41	20	194.25	194.05	白磁109.r.c.	28	39×35	4	195.02	194.98	c. (15×15)
13	24×22	43	194.86	194.43	鉄139	29	37×32	13	195.00	194.87	c.
14	25×20	6	194.77	194.71	c.	30	53×52	20	194.65	194.45	
15	31×28	15	194.78	194.63	r.c.	31	33×25	31	194.63	194.32	
16	34×25	12	194.50	194.38							

柱穴は0.22×0.2mから0.63×0.59mとバラツキが認められるが、直径0.3m前後が多い。深さは検出面から0.7~0.8mを計測し、深い。埋土は茶褐色混土で西方ほど汚れが少なく、凝灰岩風化土に近く、土壌に近接する西庇列の柱穴ではほとんど地山と区別できない。埋土には礫を含むものもあるが、特に設置したものはない。柱痕部は黒褐色混土で炭化物を大量に含み、炭化米が混入している。中には焼土粒を含むものもある。P 9から灰釉陶器の皿破片(156)が出土し、P 13では鉄釘(18)、P 21では鉄砲玉(14, 15)と不明鏡が発見されている。柱根は0.15~0.2m前後と推測される。

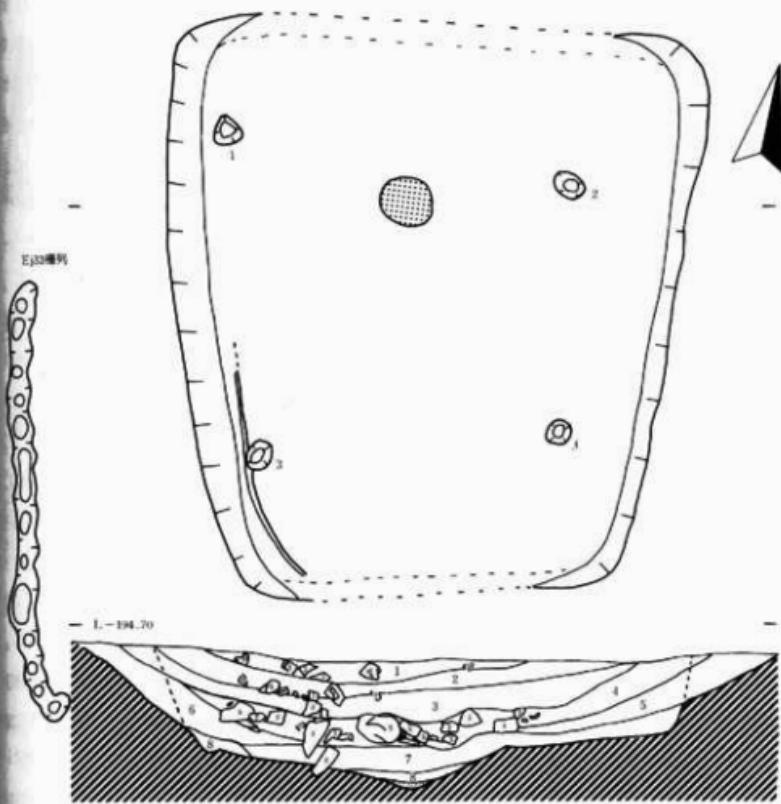
当建物は梁間南第4列がすべて南側柱列に対応しており、建物を2分する中央間仕切柱列と推測される。桁行方向でもこの部分(南3間)は対応関係があり、座敷が想定されよう。座敷は明確ではないが東西に連なると見られ、P 14とP 23によって2分されると考えられる。すると西半は2間(12尺)四方となり、東半は12×10.5尺で幾分狭くなる。西座敷中央にはFe II 燃土があり、東座敷は東庇を座敷内に取り込む形をなすと思われる。

#### 4. Ei 30建物 (第103図 図版33)

削平地の北西隅に位置する。ちょうど11号堀の上にあり、同堀を埋没して構築している。それは堀の東西両辺をそれぞれ1m前後拡張し、方形の豊穴に掘り廻めたものである。南北が4.2mで、東西は北辺が4.2m、南辺が3.1mで北に広い台形をなす。深さは検出面から60cmを計測する。壁は斜上方に立ち上がり、床面はほぼ平坦であるが、幾分中央部が窪んでいる。南西部の壁直下には幅0.2mの浅い溝が存在し、周溝の一部と見られる。深さは10cmで確認された長さは1.8mほどである。柱穴は対角線上に4個配され、その距離は2.8m、2.0m、2.4m、2.7mで

第51表 Ei30建物柱穴一覧表

No.	大きさ	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	備考	No.	大きさ	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	備考
	cm	cm	m	m			cm	cm	m	m	
1	24×25	7	193.45	193.38		3	25×19	28	193.67	193.39	
2	27×21	14	193.53	193.39		4	20×18	17	193.60	193.43	



1. 黒褐色土（炭化物、焼土粒を含む、全体的に礫が多い）
2. 黄褐色混土（下位に礫あり、炭化物微量含むする）
3. 褐色粘質土（砂質の強い部分がある）
4. 明黄褐色混土（礫を大量に含む、炭化物微量）
5. 赤褐色粘質土
6. 赤褐色粘質土
7. 黄褐色土
8. 黑褐色混土（炭化物、灰を混入する）

0 0.5 1m

第103図 EI 30建物

不整方形をなす。柱穴は直径0.2m前後の不整円形で、深さは約0.3mである。北辺柱穴のほぼ中央には焼土がある。直径0.4mの現地性焼土でレンズ状をなす。その厚さは約0.1mである。埋土は床面直上の炭化物を含む黒色土と、その上の礫を大量に含む褐色混土からなる。前者は非常に薄く後者が大半を占める。人為的に埋められたと推測され、馬の歯等が混入していた。

### (5) 焼土遺構

#### 1. Ej 27-I 焼土遺構

削平地の北西部にあり、11号堀、Ej 30建物の埋土上に位置する。南北に長い梢円形をなし、重複が認められる。Ej 27-II 焼土遺構約1.0m北に位置し、南半が破壊されている。平面形は南北約2.0m、東西約1.2mの長円形である。燃焼部はおよそ直径0.6mと推定され

る。北壁及び東壁はオーバーハングしており、焼面は内面全体に認められる。その厚さは0.1mほどで中には0.2mに達する部分もある。焚き口は然焼部の南に付き、中央部が若干下がっている。

#### 2. Ej 27-II 焼土遺構（第104図）

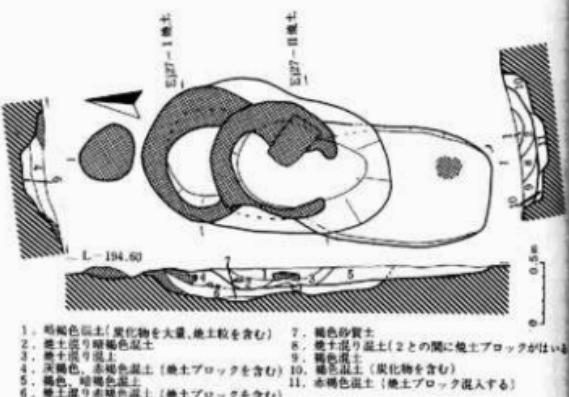
Ej 27-I 焼土遺構の南にあり、ほぼ同様の形をなす。南北約2.3mで東西は約1.0mである。燃焼部は約1.0mの円形をなし、一部扁平な川石を用いている。壁は石を用いた東壁が大きくオーバーハングし、焼土は上部の一部分に認められる。この南には1.3×0.95mほどの焚き口が取り付く。浅い皿状をなし、床面がほぼ平坦である。

#### 3. Fe 21-I 焼土遺構（第105図）

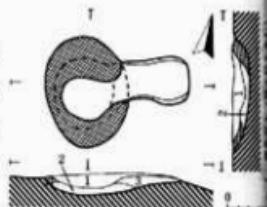
削平地の南東部にあり、Fd 21土塹、Fe 24溝の上にあたり、III-9-2 削平地の埋土上に構築されている。平面形は0.9×0.65mの梢円形の燃焼部と0.3×0.15mの方形の焚き口からなる。燃焼部の西壁、南壁は幾分オーバーハングするが、下方に下っている。北壁は完全に床面に接しており、上から押し潰された状態を呈す。焼土化は壁の上方が顕著で下半は少くなり、床面ではほとんど認められない。底部は堅く締った舟底状をなし、焚き口に向って高くなる。焚き口は燃焼部の東方にある。埋土は全体的に褐色焼土混土が覆い、その下には黒色炭化物層が層状をなす。

#### 4. Fe 21-II 焼土遺構（第106図）

削平地の南東部にあり、Fe 21-I 焼土遺構の南西に接する。III-9-2 削平地の埋土上に構



第104図 Ej 27-I・II 焼土遺構



第105図 Fe 21-I 焼土遺構

されたもので、Fe 21-I 焼土遺構の幾分上位に位置する。平面形は $0.9 \times 0.8$ m の円形である。焼土はドーナツ状をなすもので、上面が水平となっている。それは壁に相当すると考えられ、潰れた形と理解される。焼土化は壁の上半が顕著で、下半に及び、一部底面に達している。その厚さは 4~5 cm である。埋土は中央部の黄褐色混土とその下の黒色土からなり、前者は壁と思われる焼土の下には入っていない。

### 5. その他の焼土遺構

検出された焼土は 6 例である。いずれも埋土上、あるいは盛土上に形成されたものである。II 号掘埋土にあるものが 4 例で、III-9-2 削平地の盛土上に形成されたものが 2 例である。

第52表 III-9-1 削平地焼土一覧表

発土	大きさ(cm)	厚さ	検出面の高さ	備考
Fd2	35×30		194.40	11号掘埋土上 E130-I E130-II 建物の北側、南西部にあたる
Fd2	40×40		194.62	11号掘埋土上 E130-I E130-II 建物の南側、南西部にあたる
Fd2-I	30×28		194.89	11号掘埋土上 F130 建物の南側西側の北西部にあたる
Fd2-II	45×48	10cm	194.81	11号掘埋土上 F130 建物の南側西側の中央にあたる
Fd2-I	52×45		194.74	III-9-2 削平地の盛土上
Fd2-II	30×27		194.71	III-9-2 削平地の盛土上

## 6 土塁

### 1. E i 33 土塁 (第107図)

Ⅲの郭西辺の南北土塁上面で発見されたものである。平面形は $1.4 \times 1.5$ m の不正方形で、浅い皿状をなす。深さは検出面から 0.35m を計測する。埋土は褐色混土の単層で遺物等は含まれていない。

### 2. Fd 21 土塁 (第108図)

削平地中央のやや東に位置する。平面形は $2.4 \times 2.3$ m の不整円形で、深さが西壁で 0.57m を測る。埋土は黄褐色土が主体をなし、西壁から底部にかけて黒褐色土が薄く入っている。遺物は全く認められない。

## III-9-2 削平地

### (1) 削平地の形成

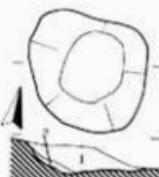
当削平地は同一 1 削平地の南東部にあり、一部 III-13 削平地に及ぶ。西半は F g 33 土塁、III-9-1 削平地の下位にあって埋没され、東半は III-10 削平地と北東から南西方向の登り道によって破壊されている。規模は南北約 14m、東西約 5 m で、その面積は約 50m<sup>2</sup> である。すべて削り出されたもので、切土の高さは南西部が 0.5m、北西部が 0.2m ほどで、北に向って低くなっている。検出された遺構は溝 3、柱穴及び柱列 2、焼土遺構 5 である。



第106図 Fe 27-II 焼土遺構



第107図 E i 33 土塁



第108図 Fd 21 土塁

## (2) 溝遺構

### 1. Fd 24—I溝 (第109図 図版24)

削平地の西端に偏在し、北西部で東折する。南北は約11.5mで、東西は1.3mの長さをもつ。南端はIII—13削平地に達して自然消滅し、東端はFd21土塙に乗り下明となる。幅は0.2~0.3mで深さは0.5~0.15mほどである。断面形は浅いU字状をなし、埋土は黒褐色混土、褐色混土で炭化物、焼土粒を含む。方向はN 4°Wで、Fe21—I柱列と同方向を示す。Fd24-II溝と直交し、Fe24溝と交叉している。いずれの場合も当溝が切っている。

### 2. Fd24-II溝 (第109図 図版24)

同一I溝の南約1mに位置する。幅が0.6m、深さが0.1mほどの浅い皿状の溝である。西は削平地西辺から初まり、東はFd21土塙の上に乗り下明となる。長さは2.5m、埋土は褐色混土で炭化物が少量混入する。

### 3. Fe24溝 (第109図 図版24)

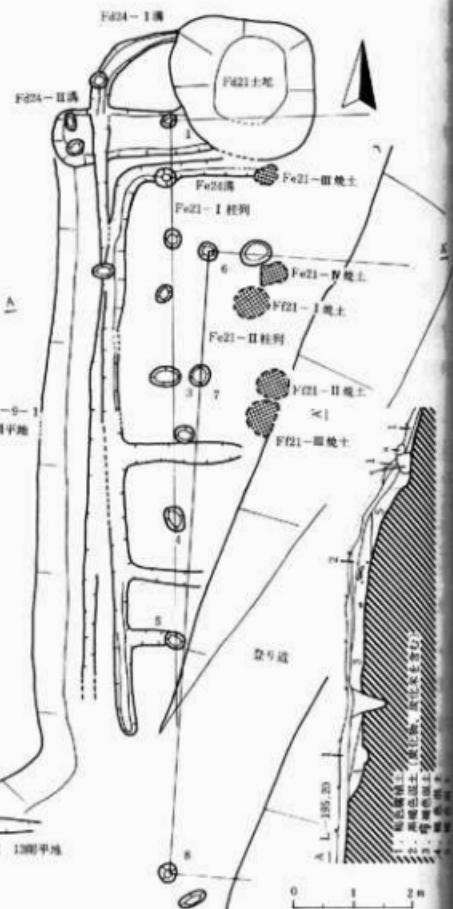
削平地の西端に偏在し、北西部で東折する。南北約8.3m、東西約2.0mで、南端は自然消滅する。幅は0.2~0.3mで深さが0.1~0.15mである。断面形はU字状をなし、埋土は褐色混土で明黄褐色粘質土がプロック状に混入する。方向はほぼ真北を指し、Fe21-II柱列と同方向を示す。

## (3) 柱穴及び柱列

III—9—2削平地の範囲内で発見された柱穴は24個である。このうちFd30建物に伴うものが4個である。柱列をなすものはFe21—I・IIの2例である。

### 1. Fe21—I柱列 (第109図 図版24)

削平地の西部に位置する。Fd24—I溝の東約1.2mにあり、東折溝の約1m南にあたる。柱穴



第109図 III—9—2 削平地遺構配置図

5個からなる1本柱列で、対応関係、直交関係にある柱穴は検証されていない。長さは8.63m(28.5尺)、柱間は北から6.5尺(1.96m)、7.5尺(2.27m)、7.5尺(2.27m)、7尺(2.12m)である。方向はN 4°Wで Fd21-I溝に平行する。柱穴は直径0.3mの円形で、深さが検出面から0.1~0.3mである。P 3、P 4、P 5は0.49×0.31mと大きく、重複している可能性がある。埋土は黒褐色混土で大量の炭化物と焼土粒を含む。

## 2. Fe21-II柱列(第109図 図版24)

削平地の西端部中央にあり、Fe24溝の東約1.5mに位置する。北端は東折溝の南1.2mにあたり。総延長10.3m(34尺)の1本柱列で、これに直交する柱穴は確認されなかった。柱穴は4個で、柱間は北から7尺(2.12m)、14.5尺(4.39m)、12.5尺(3.79m)である。方向はほぼ南北を指し、Fe24溝に平行している。柱穴は直径0.3mほどの円形で、深さは0.1~0.3mである。埋土は黒褐色混土で、炭化物、焼土粒を含むが量は少ない。

第53表 Fe21-I・II柱列柱穴一覧表

No.	大きさ	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	備考	No.	大きさ	深さ	検出面の高さ	底面の高さ	備考
	cm	cm	m	m			cm	cm	m	m	
1	25×21	41	194.45	194.16	c.b.	5	32×29	6	194.42	194.36	
2	34×28	41	194.57	194.16	c.b.	6	31×30	42	194.55	194.13	c.b.
3	49×33	41	194.57	194.16		7	37×37	44	194.57	194.13	
4	42×31	16	194.53	194.37		8	29×28	12	194.51	194.39	

## (4) 焼土遺構

検出された焼土遺構は5例である。削平地西辺の東約3.0mにあり、ほぼ南北に並ぶ。いずれも標高194.40m前後にあり、削平地面が赤色変化したものである。

第54表 III-9-2 削平地焼土一覧表

地土	大きさ	検出面の高さ	備考
Fe21-III 焼土	0.40×0.32m	194.36m	III-9-2 削平地面 Fe24溝の上
Fe21-IV 焼土	0.44×0.36	194.38	III-9-2 削平地面
FI21-I 焼土	0.58×0.50	194.46	III-9-2 削平地面
FI21-II 焼土	0.54×0.50	194.34	III-9-2 削平地面 登り道によって切られる
FI21-III 焼土	0.60×0.48	194.36	III-9-2 削平地面 登り道によって切られる

## (5) 出土遺物

III-9-1 削平地から発見された遺物は下表のとおりである。ただし、これは11号堀の埋土遺物、III-9-2 削平地遺物を含んでいる。

第55表 III-9 削平地出土遺物表

種類	白磁	染付	灰釉陶器	铁器	铁器	施釉陶器	須恵器	土師器	鐵文	銅製品	銅製品	吉鉢	石製品	その他
1	16	24	8	4	3	2	3	5	18 (1)	2	9	3	津屋1 植物遺 体41	

## 青磁・白磁(第110図 図版44)

側は青磁皿の口縁部で推定口径が11cmである。口縁部が「く」の字状に屈折する。口縁部はさらに内彎ぎみに立ち上がり、内面が弱い受口状の段をなす。釉調は薄い青白色で内外両面に

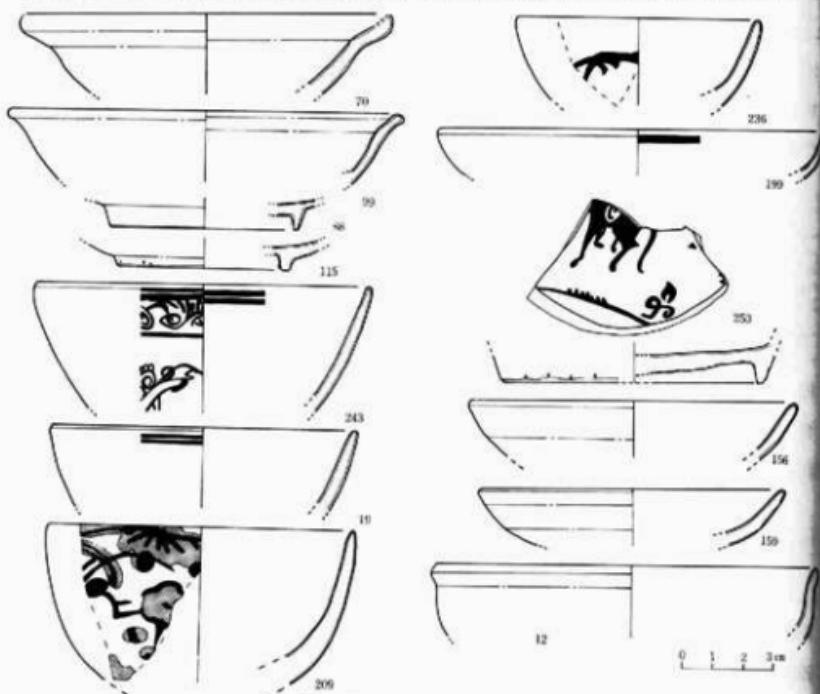
粗い貫入が見られる。第IV層出土で、他は第III層出土である。

(29)は白磁端反皿の口縁部で、口唇部が横に挽き出されている。釉調、胎土はともに白色で、ガラス質に富む。推定口径が12.8cmである。(30)、(115)は底部で推定高台径が6.1cm、5.6cmである。釉調、胎土とも白色である。この中には二次加熱を受けたものが1点含まれている。出土層位は6点が第I層で、7点が第II層であり、1点は柱穴内出土である。

#### 染付 (第110図 図版44)

(24)、(19)、(20)、(26)は碗の口縁部である。前2者は口縁部が直に立ち上がり体部がゆるやかに内彎し、後2者は腰部に丸味をもち肥厚しながら底部に続く器形をなす。器壁は薄いものが多いが、(20)、(26)のように肥厚するものもある。(24)は推定口径11cmで、内面が2条の平行線、外面が口縁部草花文と体部草花文からなる。(19)は推定口径10cmで、口縁部外側に2条の平行線がめぐる。釉調は白色で、文様は緑褐色に発色する。胎土は、黄色を帯びた白色で、他と趣を異にする。(20)は推定口径が10cmで、器面全体に松、梅が描かれている。(26)は推定口径8cmで、笠の葉文をもつ。

(19)、(23)は皿で前者が口縁部、後者が底部である。(19)は内彎皿で、推定口径が13cmである。



第110図 III-9 前平地出土遺物(I)

文様は口縁部内側をめぐる1条の線のみである。(25)は推定高台径8.4cmの皿の底部で、底部中央が若干下がりぎみである。底部一面に「馬」が描かれている。

胎土は(30)、(19)が白色で、(20)、(26)が青味がかった灰白色である。焼成は(25)を除き良好である。(25)は部分的に黄色あるいは赤褐色、青褐色等をなし、生焼きと見られる。釉調は(20)、(19)、(25)が澄んだ淡い青白色で、(20)、(26)が薄暗い青白色である。文様は前者が薄い青色で、後者が混濁した暗青色である。二次加熱を受けたものが3点含まれている。出土層位は7点が第I層、11点が第II層、2点が第III層である。そして、2点は南北土壙の第I、第II層で、3点が柱穴内出土である。

#### 灰釉・鉄釉陶器 (第110図 図版45)

(16)、(18)は灰釉陶器の内彎皿の口縁部で、推定口径は11cm、10cmである。二次加熱を受けたものが5点含まれる。出土層位は4点が第I層で、3点が第II層、1点が第IV層である。2点は柱穴内出土である。

図は天目茶碗の口縁部で、口唇部がひねり返されて外反する。釉調は黒色を基調とするが禾風に釉の薄くなっている部分があり、蕎麦色の素地を見せる。釉薬は断面では胎土近くが白色をなす。胎土は青褐色で堅緻である。推定口径は13cmである。出土層位は1点が第I層で、他は第II層である。

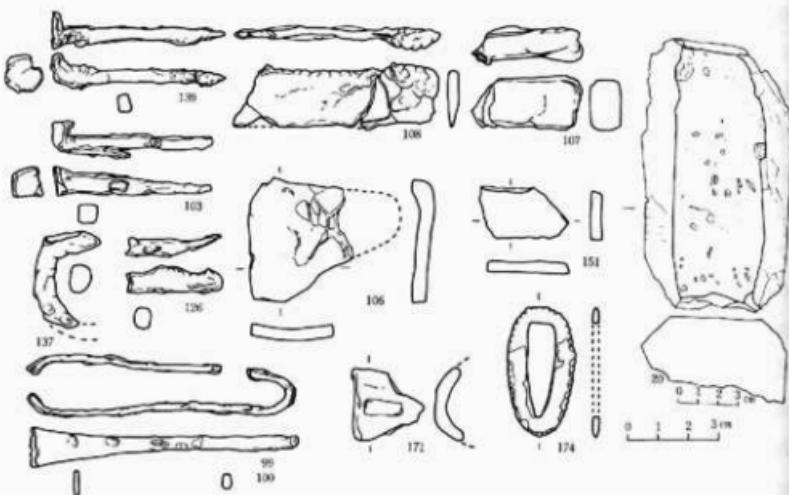
#### 施釉陶器・その他

磁器化の進んでいる施釉陶器が4点ある。出土層位は第I層及び第II層各2例である。このうちには土師質で脚の付く香炉の底部破片がある。底部は平底風で体部が内彎しながら立ち上がるようである。脚は底部末端からはみ出しがみに付いている。色調は褐色で底が黒色をなす。胎土は黒色で石英粒を含み、焼成は良好で硬質に焼き上がっている。第I層、第II層出土である。また、坩埚の口縁部と見られる細片がある。黒色の部分があり熱変化している。第I層出土である。須恵器は壺と思われる体部破片1点で内外両面に繩目の叩目文をもつ。色調は外面が墨褐色、内面が灰褐色である。胎土は暗赤褐色、灰白色でサンドイッチ状をなす。第II層出土である。繩文土器は、3点で接合すると2点となる。(14)は僅かに外反する2重口縁で、折返部に矢羽根状の刻目と指頭による凹みをもつ。南北土壙の第II層出土である。

#### 鉄製品 (第111図 図版46)

4点は鉄釘で(13)が完形品、(10)がほぼ原形を保つ。長さは5.7cm、5.3cmで、(10)は先端が破損している。頭部はL字状に折れ曲がり1.2cm、1.0cmほどの方形をなす。断面は方形で、他端に向かって細くなり先端が尖る。(13)は直径3.5cmの環状をなす。推定の長さが約4.5cmである。出土層位は2点が第II層で、1点が第III層である。(10)は柱穴内出土である。

6点が板状をなす。(12)、(18)、(17)は酸化が進むと板状に剝離するものである。(12)は3.0×



第111図 III-9 削平地出土遺物(2)

1.6cmの方形をなし、厚さが1cmである。(108)は幅が2.1cmで長さが6.7cmで両端が折損している。断面は上端の厚さが0.3cmで他端が尖る形をなす。(107)は3.6×1.8cmの方形で一方に突起が付く。厚さは約1cmである。出土層位は(107)が第III層で、他は柱穴内出土である。(106)、(125)、(126)は酸化すると上下にクラックの入るものである。(127)、(151)は厚さ0.4~0.5cmほどの板材である。(127)は南北土壁上から発見され、他の2点は第II層出土である。

(9)、(10)は直接接合しないが同一個体と見られる。長さ8.8cmの毛抜きで、使用部の幅が1.4cmである。全体的に酸化しているが、ほぼ原形を保つ。第I層出土である。(11)は直径約3cmほどの管状の鉄製品で、ほぼ3分の1にあたる。残存部の長さは2.4cmで、厚さが約0.4cmである。第I層出土である。(12)は直径1.5cmの鉄玉で、鐵砲の玉と思われる。重量は6.4kgで、出土層位は第III層である。

### 銅製品（第111図 図版46）

銅製品は4点である。(17)は縦4.3cm、横2.2cmの長円形をなす切羽で、下半が幾分細くなっている。中央に峰幅0.9cm、刀幅3cmの穴があいている。周縁には細かい刻目をもち装飾している。全体的に二次加熱を受けており、ほとんどの金箔が剥落している。厚さは約0.2cmで、第Ⅲ層出土である。(18)は1.9×1.1cmの方形の小破片で板状をなす。二次加熱を受けて変形している。出土層位は第Ⅱ層である。(19)、(20)は直径1.25cm、1.1cmの銅玉で、鉄砲の弾丸と考えられる。重さは7.5g、4.45gで、いずれも柱穴内出土である。

## 古銭

当削平地から発見された古銭は14点である。このうち(4)、(44)、(45)、(46)の9点は近接して第II層から出土したものである。(4)は元祐通寶、宣徳通寶、永樂通寶2枚の4点で、前3者が文字面と文字面、背面と背面が接合し、最後の永樂通寶は背面と文字面とが接合していた。(44)、(45)の4点はいずれも小型で、文字面、背面の識別が困難で全く判読できない。(46)の2点は接合していた。(46)は永樂通寶である。(47)は元豐通寶で一部破損している。(48)、(49)は寛永通寶(新寛永)で、(48)は二次加然を受け黒色をなす。(50)、(51)は文字面と背面の区別ができるが、摩滅していて判読できない。(52)は二次加熱を受けている。出土層位は(47)、(50)の2点が第I層、(48)が第III層で、(51)の2点が柱穴内出土である。他の9点は前述の如く第II層である。

## 石製品(第111図)

(4)は13.3×7.5cmの方形を基調する砥石であるが、下半が欠失している。両端は打ち欠きによる自然面をもつ。主な使用面は上面と右側面で、上面から左側面にかけて面取風の使用面をもつ。幅は約2cmである。残存部の厚さは約4cmを計測する。使用面は黒色をなし、斜長石流紋岩である。第III層出土である。他の1点は小破片である。石材は凝灰岩で第II層出土である。(52)は黒石で1.9×1.8cmのほぼ円形で、一方が僅かに突出する。厚さは0.8cmである。自然石そのものと思われるが良く整っている。石質はチャート質粘板岩で黒色をなす。第III層出土である。

## 骨類、その他

以上その他には削平地全域に散在する炭火灰・小豆と考えられるものがある。単体で存在する場合が多いが、塊状をなすものもある。二次加熱を受けたと推測される。また、漆の被膜と考えられる細片がある。表面が紅色をなし、厚い所で0.45cmを計測する。断面では樹脂状の黒色斑を有す。柱穴内出土である。また、ビーズ玉様のものがある。直径0.4cm、厚さが0.2cmで中央に0.1cmほどの穴があいている。透明な緑色をなす。11号堀の上層出土である。

## 要約

III-9削平地はIIIの郭南西部の最高位にあり、新旧の2削平地に大別される。III-9-1削平地は現状地形に近いもので、西、南が土壁によって閉まれ、北、東が急崖、斜面で囲まれる。ほとんど切土によって形成されるが、11号堀、III-9-2削平地は盛土による。11号堀では大量的土を投入して埋没し、削平地では東端に土止め石を用いて整地している。

削平地を囲む土壁は南北方向が削り出し土壁で、南辺のFg33土壁は盛土土壁で構築方法が異なる。また、前者は欄列を伴い、後者では配石遺構を伴う可能性があり、上部構造においても差異が指摘できる。しかし、III-9削平地からIII-13削平地に及ぶ遺構は確認されず両削平地に渡る先行する削平地は存在しなかったと推定され、両土壁は削平地造成と同時に構築さ

れたと推測される。なお、Fg33 土壙は、上面に方向の異なる配石が認められることから後補修と推定され、その後の修築と類推される。

土壙、柵列以外で検出された遺構は柱穴及び掘立柱建物 3 棟、竪穴を伴う建物 1 棟、竪穴を伴う焼土遺構 4、その他の焼土遺構 6、土塙 6 である。

柱穴はほぼ全域に及ぶが、特に西半の切土面に多く、建物が重複していると考えられる。建物の確認されたもの以外には 75 個を残し、中に柱痕をもつものがあって、3 棟以外にも建物が存在していたと推測される。

第56表 III-9-1 削平地建物

種 物	方 位	前 行 × 後 行	底	柱穴の大きさ	柱穴の深さ	埋 土	柱 痕	備 考
Ejz-1 建物	N 8°W	38 尺 × 18 尺	5 × 3	西・南 (4 尺)	30 cm	40~50cm	褐色混土	東の隅は焼出 EJZ
Ejz-2 建物	N 7°W	40 尺 × 20 尺	5×6×3	東 (4 尺) 北北東	30	70	赤褐色混土	東の隅は焼出 EJZ
Fb30 建物	N 8°W	40 尺 × 27 尺	6 × 5	西・南・東 (4.5 尺)	30~60	70~80	褐色混土	東の隅は焼出 EJZ

確認された建物 3 棟は、桁行 38 尺 (約 11.5m)、40 尺 (約 12.1m) で、梁行が 18 尺 (約 5.5m)、20 尺 (約 6.0m)、27 尺 (約 8.2m) であり、いずれも 2 面あるいは 3 面に庇を有する。3 棟とも同様な機能をもった建物と推察されるが、これら 3 棟はすべて重複関係にあり、同時存在はあり得ない。建て替えと考えられる。Ej30-I・II 建物では、P17 の柱位置によると、Ej30-I 建物が新しく、埋土も前者が褐色混土で汚れが混じり、後者が赤褐色混土で地山に近いことと符合している。Ej30-I・II 建物と Fb30 建物では直接切り合う柱穴がなく断定できないが、後者は柱穴が 1 棟分ほど完全な形で検出されており新しいと思われる。するとその変遷は Ejz-II 建物 — Ejz-1 建物 — Fb30 建物となる。

なお、削平地西辺北半では小さな段が認められ、建物の建て替えに伴う削平地の移動があったと考えられる。それは Fa30 付近で約 0.6m を計測し、小規模なものであったと見られる。西に位置する上段は Ejz-1・II 建物では前者が西にあり、それに伴う切土と類推され、同建物の柱穴の深さが他の 2 棟より約 20cm 浅いことに符合する。また、西辺には焼土化している部分が認められ、その焼土化が火災に起因するものであるならば、同建物が被災したことを示すと推定される。

Ej30 建物は竪穴を伴う建物で、ちょうど 11 号堀の上にあり、同堀の一部を破壊し埋没して建築されている。反面、建物の埋土上には Ejz-1・II 焼土遺構、あるいは Ej30-I・II 建物が存在しており、堀より新しく焼土遺構、建物より古い。III-9-1 削平地では主なる遺構が掘立柱建物で、建物との同時存在は有り得ず、当削平地より先行する遺構と考えられる。竪穴を伴う建物の性格は焼土遺構、周溝を伴っており、高櫓とは見られなく、むしろ竪穴住居跡にする施設と推測される。

竪穴を伴う焼土遺構は 4 例で、その構造は、Fe21-II 焼土遺構を除き、燃焼部と焚口からなる。いずれも煙出しは認められていない。Fe21-I・II で見るならば、燃焼部の壁は

きくオーバーパングし、中央に穴のあいている形をなすと推察される。焼き口は浅い皿状を呈す。これらは削平地の北端の Ej27-I・II 烧土遺構と、南東部の Fe21-I・II 烧土遺構の 2 群に大別される。前者は Ei30 建物の埋土上に構築されたもので、表土除去後に確認され、新しいものと見られる。後者は III-9-II 削平地の盛土上に構築されたもので、両者とも人為的に埋められ、押し潰されており先行すると推測される。これを掘立柱建物の変遷と比較して先行するもの、あるいは新しいものをまとめると

- ① Ej27-I・II 建物 —— Fe21-I・II 烧土遺構
- ② Fb30 建物 —— Ej27-I・II 烧土遺構

となる。すると①は北半に建物、南東部に竈を配し、②は逆に南半に建物、北端に竈という配置になる。なお、②の場合は焼土遺構が同位置の造り替えであり、建物では確認されていないが、同建物の柱穴平面形は、他より大きめであり、焼土遺構同様同位置の建て替えの可能性がないわけではない。いずれも建物と竈の距離はおおよそ 5 m である。

その他の焼土遺構はいずれも整地層上で確認されたもので、西半の 4 例は建物範囲内で検証された現地性焼土である。Fe27-II 烧土は Fb30 建物の南間西側座敷の中央に位置しておりそれに伴うと見られる。他のものについては不明であるが、建物に伴う施設と類推される。東半の 2 例は柱穴上に位置しボソボソしており混入と考えられる。

III-9-II 削平地は III-9-I 削平地の南東部にあり、一部 III-13 削平地に及ぶ。東半は III-10 削平地と登り道によって破壊され、西半約 5 m を残すのみである。すべて埋没していたもので、III-9-I 削平地に先行することは明らかである。確認された削平地は切土面のみで、遺構は溝 3、柱穴及び柱列 2、焼土遺構 5 である。

第57表 III-9-2 削平地溝、建物

溝	方位	建物との関係	埋、土	備考
Fd24-I 溝	N4°W	Fe21-I 柱列の西 1.2m、北 1m	黒褐色泥土、炭化物塊土を含む	Fe24 溝より新しい
Fd24 溝	E WO	Fe21-II 柱列の西 1.5m、北 1.2m	褐色泥土、明黄褐色粘質土がブロック状をなす	
建物	方位	柱 間	柱穴理土	備考
Fe21-I 柱列	N4°W	6.5 尺、7.5 尺、7.5 尺、7 尺	黒褐色泥土、大量の炭化物、堆土を含む	焼土遺構範囲に該当する
Fe21-II 柱列	E WO	7 尺、14.5 尺、12.5 尺	黒褐色泥土、炭化物塊土が少ない	

Fe21-I 柱列と Fd24-I 溝は N4°W で方向が一致し、相伴うものと見られる。柱列は溝の東約 1.2m にあり、P 1 が東西溝の南約 1m にあたる。柱間は北から 6.5 尺、7.5 尺、7.5 尺、7 尺で、7 尺等間の 4 間と推測される。対応関係、直交関係にある柱穴が検出されていないが、跡が東折することを考えると建物であった可能性がある。

Fe21-II 柱列と Fe24 溝はほぼ真北を指し平行関係にあり、同様に相伴うものと考えられる。柱列は溝の東約 1.5m、P 6 が同溝の南約 1.2m で、その間隔は近似した値を示す。柱間は北から 7 尺、14.5 尺、12.5 尺で、14.5 尺は 7 尺、7.5 尺と考えられ、12.5 尺は 8 尺、4.5 尺に分けられ

る。すると、7尺、7.5尺、8尺、4.5尺となり、4間+南庇と考えられる建物が想定できる。Fe24—I溝とFe24溝ではFd24—I溝が新しく、同溝に伴うと見られるFe24—I柱列が新しいことになる。

検出された焼土はいずれも削平面が熱変化を受けたもので、検出面の高さは194.40m前後である。もしこれらの焼土を、建物の焼失によって形成された現地性焼土とするならば、その分布がFe21-II柱列の北に及ぶことからFe21—I柱列に伴うと考えられ同建物が被災したと解される。同柱列の柱穴埋土には大量の炭化物、焼土が混入しており、また、伴うと見られるFe21—I溝の埋土にも同様に含入されており、このことを証明している。

なお、11号堀東端と削平地西端では約4mを計測し、ほぼ平行する。その値はHe109土星の3.5mに近似しており、削平地が堀に伴う可能性がある。両遺構ともIII—9—I削平地造成によって埋没されたものであり、あり得ないことではない。

遺物は柱穴内遺物を除いて遺構に伴うものを見出しえない。削平地全域に散在するが、特に11号堀の上層に集中している。日常雑器の陶磁器類が大多数を占め、鉄釘、武器、厨房具の金属製品、砥石等の石製品を加える。陶磁器には青・白磁、染付等の舶載磁器と伊万里系の染付、美濃産と思われる灰釉陶器等がある。また整地層に混入した須恵器、土師器、繩文土器が数点見られる。

## 10. III—10削平地

III—9削平地に続く二段削平地であり、削平地方向はこれより10°前後西偏している。東西15m、南北24mを計る。西辺中央部以南では比高1m前後を有して段差をなすが、以北ではIII—9削平地斜面に統いて明瞭な変換点は認め難い。また、南西隅には上段削平地に続く土壙状の盛土が認められ、東西9.0m、幅2.0~2.5mの緩やかな山なりをなし、径0.30m以上の大小礫が散乱している。これよりIII—10削平地へ続く東西通路によって南辺が画される。北・東二辺は共に急斜面であり、東辺のIII—11削平地には比高2m、44°勾配をなし、北辺では35°前後で傾斜してIII—5削平地に至る。北西隅のみは緩傾斜となってIII—4削平地に統いている。削平地面は東西に傾斜し、勾配5.5~6°、比高1.3mを計るが、更に中央部にやや低位となるほか、南西には3m四方の高位部分が認められる。

検出遺構は重複する削平地に溝7、柱穴群及び建物遺構、焼土遺構6、土葬墓5である。また、北斜面には既述する東西の11号堀が認められる。

遺物は陶磁器がもっとも多く、大部分は斜面を含む盛土層に検出されている。遺構出土の遺物は土葬墓に伴う69点があるほかは柱穴の覆土等に若干認められる。

### (1) 削平地の形成（第112図 図版25）

中央部より北東辺にかけて旧表土を僅かに残すほかは地山の削平をうけ、西辺の切土及び

图 10-109 中南半岛全图

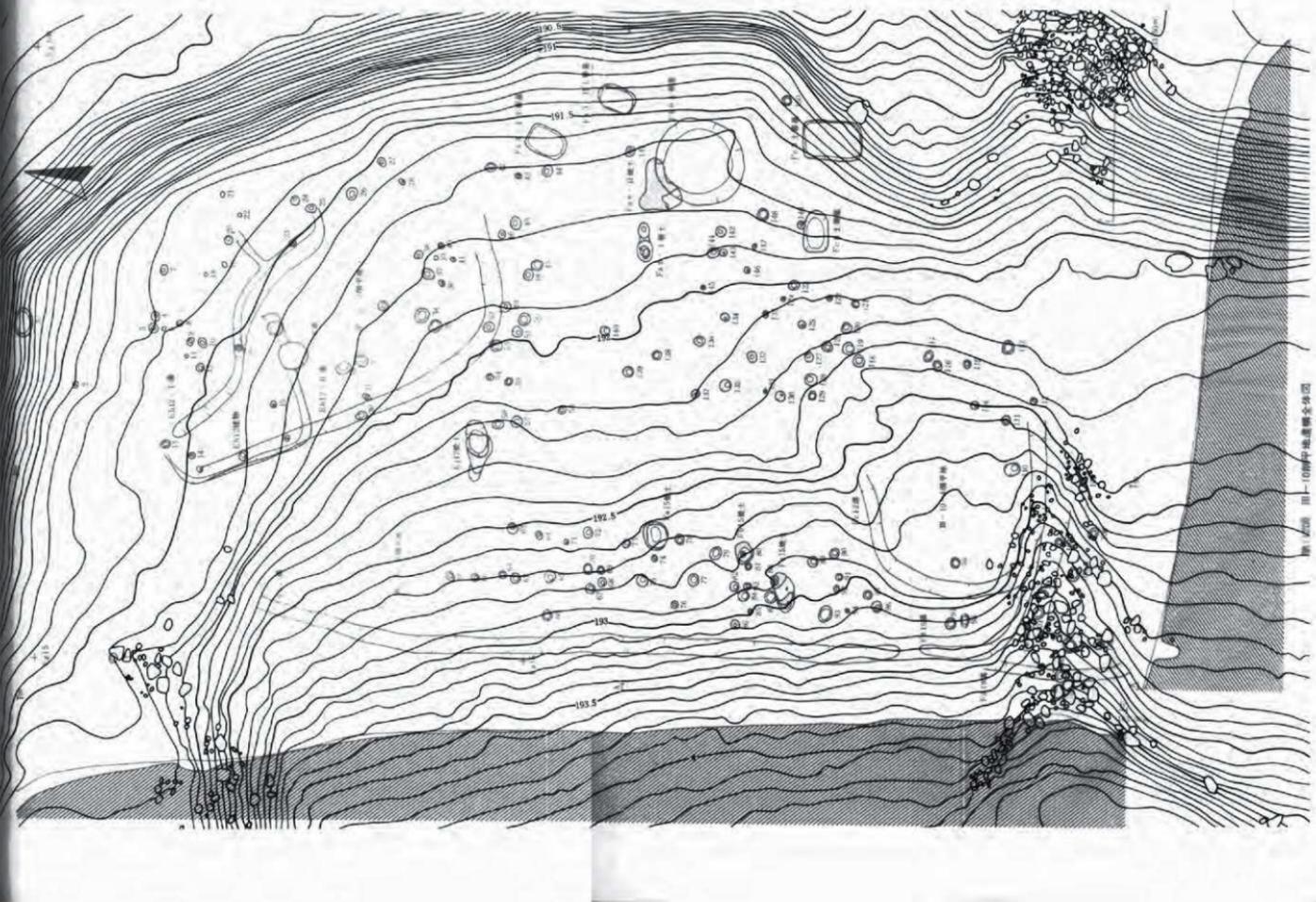
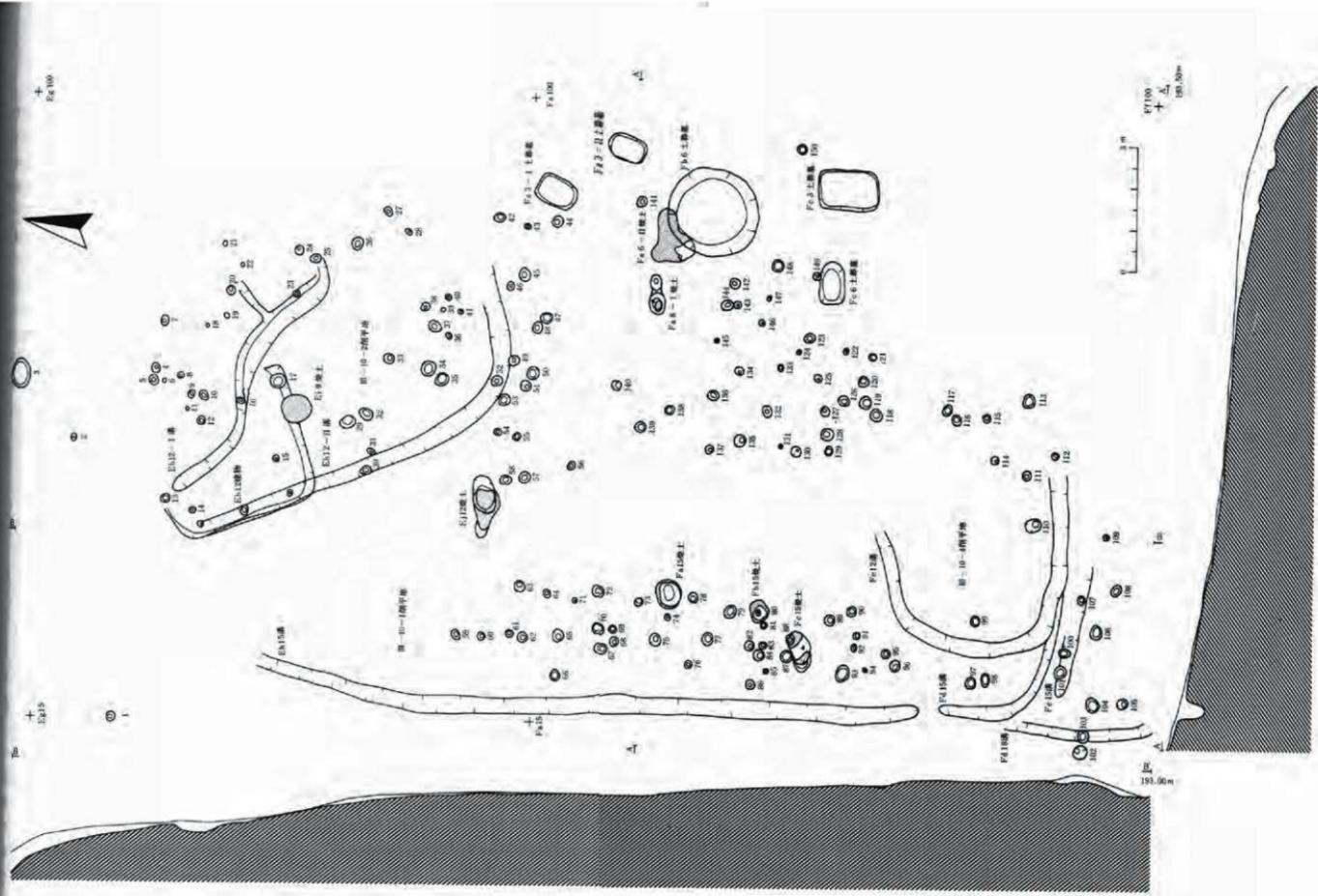


图1125 田-10井平面及断面图



辺の盛土によって形成される。北西辺はIII-9削平地東斜面と殆ど同一勾配をなして続くが、Eh 15溝を境に緩やかとなり、中央部では切土面となる。東西の傾斜は5.3~5.8°を計り、中央部以北に続いている。現状で観察される小削平地とこれに重複する削平地であるが共に全体は明確ではない。

#### 1. III-10-1 削平地 (第112図 図版25)

Eh 15溝及びこれに沿う西辺の地山切土面、南辺の東西に延びる土壘状の盛土によって画される削平地である。西辺の Eh 15溝によって南北16m、削平地方向は N10.4°W を計る。東西は重複する盛土層によって不明であるが、現状における東辺までは15mである。切土面は北辺ほど不明瞭となり、南辺では Fd 15溝及び Fd 18溝、同一4削平地によって明らかでない。南西に認められる切土斜面は20~21°で傾斜し、0.60m前後の比高を有する。また、中央部を同一3削平地によって切土され、5~6°の同一勾配をなす。東辺の盛土層は同一2削平地を含む北東に厚く、0.40mの暗褐色土層であり、切土面によってはその大部分を占めるものとみられる。

#### 2. III-10-2 削平地 (第112図 図版25)

北東部の盛土を除去して確認される削平地である。Eh 12-II溝を西辺として地山切土によって造成し、北西では Eh 12建物を被って平坦な削平地面を形成している。北東は斜面となつて明瞭でない。東西3.0m、南北9.0mまで認められ、長方形を呈する。削平地方向は Eh 12-II溝によって N33.0°W を計る。

#### 3. III-10-3 削平地 (第112図 図版25)

現状で認められる中央部の小削平地である。III-10-1削平地面を切つてこれより0.20m低位となり、東西4.5m、南北7.5mを計るが、西辺以外は明確ではない。西辺の切土方向は N21.5°W であり、下段削平地南西隅の切土斜面方向に類似する。

#### 4. III-10-4 削平地 (第112図 図版25)

削平地南西隅に現状で認められる小削平地である。東西3m、南北3mを計り、東辺を除いて Fc 12溝によって画され、東方でやや広くなる。削平地面は地山切土によってのみ形成され、同一1削平地より僅かに高く、東西の勾配は1.5°をなす。

#### 5. その他の削平地 (第112図 図版25)

Fd 15溝及び Fd 18溝によっては更に2削平地が推定される。前者はIII-9削平地に続く土壘状の盛土に沿つて東へ湾曲し、地山を切つて削平地南西隅に相当するとみられるが、III-10削平地に重複して不明となる。後者では南辺の通路及び Eh 15溝、Fd 15溝によって南北端を失っているものの、東西2.2m、南北4.4mに渡り、5°勾配の地山切土面が認められる。削平地面上に検出される Fe 15の東西溝に先行する削平地とみられる。そのほか Eh 12-I溝以北の地山切土面が認められている。